
廻る世界の錬金術師(元:面倒事が嫌いな錬金術師)

空想ブレンド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

廻る世界の錬金術師（元：面倒事が嫌いな錬金術師）

【Zコード】

Z4244M

【作者名】

空想ブレンド

【あらすじ】

神様だか悪魔だか分からない奴に手違いで殺されてしまった聰介は、せめてもの償いに・・・つと別の世界に送られてしまう。望んだ力は錬金術の使用と、使用時における法則の無視の2つ。そのうえ世界のシステムが生んだ思わぬ幸運も加わりちょっと強くなつた聰介だが、その心は未だ一般人のまま……。まだまだその力を振るうには覚悟が足りない。異世界の中で人々と接する内に成長することができるのか？その力を使いこなすことができるのか？この物語は『一般人』であつた聰介が成長しつつ、異世界で過ごしていく物

語です。

まだまだ最強じゃありませんし、成長していく過程なので弱いです
タイトル変更しました、内容と合わないためです。お手数をかけ
ます（^_^;）

· 0 0 0 · ます初めに · w · (前書き)

本文中に不適切な表現があつたので修正いたしました。御不快な
気分にさせてしまい、申し訳ありませんでした。

どうも皆様こんばんは、空想ブレンンドと申します。

この物語は元の世界で神様か悪魔かよくわからないモノに手違いで殺されてしまつて、可哀そだからと異世界に送つてあげるよ、A HAHAHAA～ つといつ非常にシンプルかつ分かりやすい、そしてありふれた異世界トリップものの物語です。

数ある良作の中で腐敗しないようにそつと見守つていただけたらなあと私は祈つております。

神は特に信じていませんが…。（不運続きで神なんてもう信じられないわ！）

しかし、なにぶん初心者な上に専門学校1年生といつ多忙な時期なので更新は不定期的になるとと思われます。

そんな、空想ブレンンド（空想が多分にブレンンドされてることです）ですがどうぞよろしく見守つてください m（— —メ）m

P・S 試作のために最初のほうは視点がぶれまくります。有る程度書いたら決めるのでご了承を

では、今回は説明だけのための回でしたので次回から始めます

001 死亡と世界の仕組み 文章一部改定(前書き)

文章一部改定しました！ 7月19日20:32

夜の道に流れれるヘッドライトの人工的な光が都会の中で放つ鋭さは、まるで夜闇にまぎれて獲物を狙つ眼光のようだ。

その鋭い眼光は、まっすぐに道をわたる自分のことを睨みつけると、レシプロコンジンの高こうなりをあげて猛然と駆けてきた。

なぜ。と思う間もなく鉄で形成された鎧をもつ無機質な猛獸が、自分の体をはるか上空へと吹き飛ばしていた。

もちろん、他人から恨みを買つよくなことは…あまりしてないはずだし、それもただの友人同士の喧嘩ぐらいで、殺されるほどの強烈な恨みを誰かに植え付けたわけではない。

意識が闇へと吸い込まれる寸前に見た、街頭の明るい光に照らされた緑の色をした金属のボディは、若者の自分も十分若者だが好きそうな色をしていた。

どうせ、酒でも飲んで気が大きくなつたどこのバカが改造した愛車をカツ飛ばしたのが原因なんだろうなあ。

そんなことを思うだけで、気持ちが恨みへとドス黒く変化していく前に自分の意識は更に深い黒い闇の中へと葬られていった。

・・・・・

・・・・・

ふと、目を開ければ死んで見えなくなつたはずの目に飛び込んできたのは、ただただ白い、距離という概念が存在しないような何も比べるものがないため、ホワイトアウトと同じようなもの 空間だった。

はて？自分は死んだはずではないのだろうか。死後の世界がこのようない何もない世界というのはなんとも味気なく、天国も地獄もへつたくれもありやしないじゃないか。

と思つたのが何も分からぬ今の自分が思つた最初の感想だった。

自分は確か、夜のコンビニにネットゲームをする合間にジュースを買ってこようと思い立つて、独り暮らしの自分の牙城から暗い夜の世界へと足を踏み出したのだった。

しばらくの間、コンビニで見かけた車や、ファッショソ、ミリタリーラン連の雑誌を取りとめもなく眺めて少しの暇をつぶした後スポーツドリンクとスナック菓子を買って店を出た自分は、青に変わった歩行者用の信号を見て横断歩道を渡つた。

青になつたのをしつかりと確認したはずだし左右も確認したが、それでも車はやつてきた。

曲がり角から白煙を巻きながらドリフトをしてきた車は、アクセル

を全開にして凶暴なまでのスピードでライトグリーンのボディを夜の闇に躍らせて、赤のままの交差点へとヘッドライトの光を向けた。

まったく減速をする様子もなく交差点へ侵入した車は、自分に逃げる余裕さえ与えずに体重62kgの21歳の翼も生えてない肉体を、軽々と上空へと吹き飛ばした。

衝撃でバキバキになつた骨はいくつもの鋭い刃となつて、柔らかな内臓を串刺しにした。

その時点で上空に吹き飛ばされた自分の意識はブラックアウトしていたのだが、実際は肉体は重力に従つて地上へと加速していき、鈍い音とともに着地すると同時に生命活動に完全にトドメをさした。

死んだところまで思い出した自分は、我に返つた途端に聞こえた声に動きが固まつた。

それもそのはず、自分にとつてここは死後の世界のはずで誰もいはいはずなのだから。

「ふむ…君は何もしゃべらないがこの空間に對して何も思わないのかね？私としてはつきり慌てふためいて喚き散らすのではないのだろうかと思っていたのだが…いや、君が落ち着いた子供であつて実に満足だ」

しかし、このまま何も行動しないままでは一向に事態は進展しないと思つた自分は、かけられた言葉に反応して自分の体へと停止解除

信号を送ったのだった。

後ろへと振り返る間に考えたことは、なんだかこの人偉そうだな。とか、この空間が不思議過ぎて言葉が出てこないだけだ、そもそも自分は子供ではない青少年だ、子供扱いするな「ノヤロー」とか、生産性のない言葉を考えただけだった。

はたして、自分はまたもや肉体へと停止信号をあくるハメになつたのだった。

それもそのはず、常識から考えて人語を話しているのだから人間なのだろうと、無意識のうちに決めつけていた自分の常識が打ち破られそうになつてゐるのだから。

後ろへと振り返つて目に飛び込んできた映像はとても奇妙なもので、もしや、自分の目は事故のせいで幻覚を映してゐるのじゃないだろうかと、思えるほどのものだった。

言葉を発したであろうと思われる人物は、その実『人間』ではなく白い世界に浮かぶ、闇よりも深い色の真っ黒い球体のようなものだった。

もちろん顔はないので表情も分からぬし、口が無いのでドコから言葉を発したのだろうか、という疑問もわいてきたがここにきて疑問を子供のように喚き散らすのも癪な気がしたのでそのままのみこんだ。

「いや、分からぬことが多いで何が何だかわからないんだけど

…

とりあえず、無難な受け答えが出来たと一応満足することとした。

「ふむ、まずは説明することにしようか。单刀直入にいうと君を連れてきたのは私だし、事故を装つて殺してしまったのも私だ「ちょっと」黙つていたまえ話しているのは私だ。さて……話の続きだが、これは私にとつても不本意なことでね。君を殺してしまったのはまつたくの勘違いによるものなのだ。ドッペルゲンガーといつのは君も聞いたことがあるだろう。その姿形どころか、同姓同名な上に年でも一緒にがいてね。その死期が来たので狩りうという話になつたのだが、世界までもが誤認してしまつてね。君のほうを殺してしまつたのだ」

衝撃的すぎる事実に待つたをかけよつとした瞬間に睨まれても何も無いので感覚的なものだが しまつた。

どうも、自分が中心的な考えの持ち主らしい……」いつときは黙つて聞くほかないのだ。

「流石にこれは理不尽な気がしたが、一度存在を消してしまつて存在することを拒否した時は流石に元には戻せん。まだ寿命も有り余つているからこのまま消してしまつと何かと不都合なことが起きたのだ。生き返すといつて元の世界には戻せないから君には別の世界へと行つてもらう。・・・元の世界には家族もいたりうし友人もいたりう。本当にすまないと思っている。生き返すのもこちらの都合な上に、頼れる人間が一人もいない世界に君を独りで生き返す

のだ。文明は君の世界より大幅に遅れている世界だから生活は厳しいだろう。そこで君には2つだけ特殊な能力をつけてやる。ああ不死や不老はやめてくれ。寿命の関係で送るのにソレでは意味がなくなってしまうからね。それ以外なら君が望むならなんでも叶えてやるわ

どうしよう……本当に死んでしまつたらしい。

そのうえ生き返れるが、そのかわりに愛すべき家族や友人を失つて、それに加えてたつた独りで見知らぬ土地 正確には世界だがに生きなればいけない。

何でもいいという特殊能力は破格なものだけど、何があるか分からぬ世界なら下手な能力の選択はそのまま死につながるだろうと思われる。

無敵能力なんて論外だ。

敵や生き物がまわりにいない場所にでたのなら無用の長物以外の何物でもない。

なにか生産性のある能力……それも生活に必要な色々なモノを生み出せる能力が必要だろう。

・・・『鍊金術』なんてどうだろ。

とマンガや、小説、ゲームと様々なことをしてきた自分の考えはそんな答えに行きついた。

熟考しても悪い考えではなれなかったので、とりあえずは「ノンを選択することにした。

次にもう一つの能力だが、ただの鍊金術では何かと制約があると考えたので、たとえば等価交換や、性質の把握など・・・ただ単に制約されることが面倒なだけとも言える。これらの『世界における法則からの脱却』を求めることにした。

「え~っと、色々言いたい」とはあるけど、もうメンドクサイからいいです。どうせ言つても変わらないんでしょうし。ただ・・・怨むぐらにはさせてください。・・・それから望む能力は、『鍊金術の使用』と、『ソレの使用におけるすべての法則の無視』。これら2つの能力でお願いします」

「分かった。希望のおりにかなえよ。他に質問があれば聞いづ」とつあえずは、『自分の住むことになるだらつ世界について』ある程度のことを聞かなければ話にならないだらつ。

まずは知識を手にいれなければ始まらない、情報の有無は時として生死にかかるのだから。

「僕が行く世界のことをついて教えてもらひますか?」

そう聞くと真っ黒な球体は満足げにその輪郭を微かに震わした。

ちょっと気持ち悪いと思ったが、言葉には出さないでおく。

「君が行く世界は、魔法や、ファンタジーあふれる下位世界だよ。君がいた世界ではそういうものにあこがれる人は数多くいただろうね。もちろん文化レベルは高くはない。機械はないし、銃もあるには有るが実用レベルではない。ああ大砲レベルはさすがに開発されているがね。基本的には剣や盾などの白兵戦が主流だ」

ひとつだけ、引っかかる言葉があった。

文化レベルうんぬんは有る程度予想はしていたが、予想外の単語の登場に少し違和感が生まれた。

「すいませんが……下位世界とはどういうことですか？魔法とかがあるなら、普通は神の加護とかが有るっていうことで、え～っと……上位世界になるんじゃないですか？」

そう尋ねると真っ黒な球体は少し考えるよつに会話に間が空いた。

「ああそういうことか。それは君の世界の勝手な解釈だよ。実際には未発達な下位世界だからこそ、神の加護が必要なのだ。この神の加護がなければ、たちまち人や動物は衰退するだろうね。文化レベルが高くなり、機械などを使えるようになつて、つまり、魔法がなくとも自立ができるようになつた世界は神の加護を必要とする世界

に対して上位の世界となるのだ。そのため神の加護をなくす代わりに下位世界に対して、上位世界の人間は神の加護がなくても生きていける強力な生命体として認識される。そういうえば君もまた上位世界の人間だったね。下位世界では、君もまた強力な生命体として認識されるから、ちょっとやそっとじゃ死なないし、そこらの生き物なら素手でも負けることはまずないだろう。……ああそれと神の加護は世界に住む全ての物に対して等しくかけられるから、君もおそらく魔法を使用できるだろう。まあ魔法については生まれついての機能が無いから、ちょっと力のある魔法師と変わらないぐらいだろうがね」

これで実際に『えられる能力は『肉体強化』と『魔法の使用 少しらしいが』、『鍊金術の使用』、『鍊金術使用時の法則の無視』の4つとなつたわけだ。

これぐらい有ればそう困ることはないだろ?。

これで生き抜くための術は揃つたはずだ。

「さて、他に質問がなければ、君をめぐるめくファンタジーの世界へと送り込みたいんだが? すこし時間がおしていてね。なに、私もそれなりに忙しいんだ」

初めてこの真っ黒な球体がおどけたような口調で話しかけてきた。

それは不思議と、人間味があるような仕草に思えた。

「いえ、これ以上はとく『あつません。いつでもいいですよ』

元の世界に決別をつけるため、記憶をずっと覚えていらっしゃるよう焼きつけるために田をつむる。

その閉じたまぶたを通しても明るく白い光が感じられた。

きっと、今自分は白い光の奔流の中に身を横たえて、新たな世界へ旅立とうとしているのだろう。

田をあけると眩しくて荒々しいが、どこか温かみのある光が全身を覆っていた。

「そういえば……あなたは神様ですか？それとも悪魔……なわけはないですよね？」

答えを期待せずに何気なく投げかけた言葉はそれでもしつかりと真っ黒な球体へと届いていたらしい。

「さあどうちかな？もしかしたら神様かもしれないし、悪魔かもしれない。はたまた、そのどちらもあるかもしないし、どちらでもないかもしない。眞実とは時に明確であり、時に曖昧なものなのだよ」

そうこわれて、なるほど確かにそうこのものなのかもしれない。

と、思い言葉を返そうとしたときには、既に自分の意識は温かい光の中に沈んでいった。

いやあそれにしても難しいですね@@；

全然話が進んでくれない。まあ第一話はこんなもんです。実際に異世界で動き始めるのは次話以降になると思われます。楽しみにしてくれているひとがいれば嬉しいです。感想なんか書いてくれちゃつたりすると期待されるんだな～って思つて尻尾ふつて喜んでますのでなにとぞ～。

002 出会いと親切 文章一部改定（前書き）

7月15日 質屋の店主が銅色一枚あればいい店が買えると言つていたのを5枚にしました。後の話で銅色一枚で買つていないのでその矛盾を埋めるためです。申し訳ありませんでした。
文章一部改定しました！7月19日21:11

002 出会いと親切

「うへん…… イタタタタ…… 背中が痛い……」

それもそのはずで、今聰介は固い地面の上に背中を下にした仰向けの恰好で倒れていた。

背中にわずかな痛みを感じながらも体を起こすと、最初に目に飛び込んできたのは深い緑色の木々。

都会に住んでいて、木々を見るといつても国立公園などしかなかつた聰介にとって、それは新鮮な光景であり、吸い込んだ澄んだ空気も加わってとても気持ちのいいものだった。

しばらく周りの生き生きとした木々を見渡していた聰介の耳の鼓膜を震わしたのは葉のすれ合つ音ではなく、女性特有の鋭い悲鳴。

「な、なにー?」

突然聞こえた悲鳴に飛び上がり、自身の心臓の音が聞こえてしまったんじゃないかというほど鼓動が速くなるのを感じながらも、刺激に餓えた現代人の体は野次馬根性丸出しで、悲鳴が聞こえた方へと走り出していた。

木々を避けながらも進み、開けた場所に出た時には、足元に転がっている西洋の片手剣と、倒れた女性の体、それよりも奥にいるゴリラを2周りほど大きくさせた生き物と、それを相手に戦う大柄の2人の男達が視界に入る。

倒れこんだ女性の髪は活発そうなショートヘアのオレンジ色で、着込んでいる軽鎧は動きやすさを重視しながらも女性らしさの感じられる防具だった。

普段ならば白くてキレイだらう肌には今では血が張り付きその輝きをいくらか失わせていましたが、なんとか生きているだらうと分かるくらいの浅い呼吸を、繰り返しているだけだった。

「おい！アンタも冒険者だろ！？手を貸してくれ！コイツは俺たちだけじゃ手におえん！剣ならあんたの足元にあるからそれを使え！もつとも切れ味は落ちてるがな！」

こちらに気づいたくすんだ茶色の短髪の男が視線だけは敵から外さずに怒声を張り上げた。

聰介には分からなかつたが、男はおそらく聰介の服装を見て判断したのだろう。

聰介の今の服装は、裾を折つたジーパンに、黒色に赤のワンポイントが入つたポロシャツ、服に合わせただらうブレスレットとネックレス、レザーのショルダーバッグといったシンプルな格好だったからだ。

男はジーパンやポロシャツを特殊な纖維を織り込んだ物で、アクセサリーは一種の魔術礼装だと判断したらしい。

聰介には知る由もなかつたが、この世界でただの一般人がアクセサリーをつけることは少なく、その理由として金属は大抵武具や防具に回されていて、アクセサリーには大抵体力の増強や、回復などといつた魔術がかけられるものだったからだ。

もちろん聰介には動物を殺した経験なんて無いし、ましてや命のやりとりをするような危険極まりない場面に出くわしたことなど全く無い。

とつさに何の変哲もない剣を地面から拾い上げたのはいいが、その行動のせいはどうやら敵にも聰介の存在がばれたらしい。

敵は、二人の相手を延々としてもう一人が合流するよりは先にコチラをつぶした方がいいと判断したのか、体をこちらに向けて猛然と突っ込んできた。

「クソツ！アンタ早く構えろ！死ぬぞ！－！」

やばい、殺される……。

と、思つても恐怖で動かない体に、何度も動くように電気信号を送り続け、ようやく動くようになった時には既に敵は目の前に来ていた。

恐怖でがむしゃらに剣を握った腕を振るつたが、剣筋も何も有つたものじゃない剣は、当然のことく敵に弾かれてしまう。

しかし、弾かれたことでバランスを崩した聰介は倒れこみ、結果として敵の突進をかろうじて避けることに成功した。

標的を失つた敵の体は、停止するよりもはやく後ろの巨木へと衝突し、木の幹に大きなくぼみをつけながらも停止することとなつた。即座に後ろから追いついた、くすんだ茶髪の男と深い青色をしたシヨートヘアの男が止まつた隙に後ろから飛び掛り、深々と、長い両手剣と片手剣を首筋に突き刺した途端、敵は鋭い悲鳴をあげ動かなくなつた。

「おい、アンタ大丈夫か？俺たちは早くコイツを運ばなきゃいけねえから先にいくぞ」

そういうやいなや、一人は聰介がきた方向とは逆の方に女性を抱えて走り去つていつた。

一人残された聰介は突然訪れた命の危機にしばらく茫然としていたが、我を取り戻すと急にこの場にいることが怖くなり、一人を追いかけようと走り出していた。

「おーい、まつてよー！」

聰介の声は再び静かになつた森に反響したが、声が返つてくる」とはなかつた。

不安だつたが、この場にいることのほうが危険な気がした聰介は、とりあえず一人が駆けて行つた方向に向かつて走り出していた。

「なあ、ジャック。さつきの奴なんだつたんだ？よく考えれば剣も持つてなかつたしここらで見るような格好でも無かつたよな？」

くすんだ茶髪の男は街道を女性を抱えて走りつつ、隣を走る深い青色をした男に話しかけた。

「さあ？でも、傭兵じゃないみたいだね。恰好はそれっぽい氣もしだけど、構えもしなかつたし、何より動きがまるつきり素人だつたしね。」

話しかけられた男ジャック・バルウズは肩をすくめながら、聰介をみたときの恰好と動きを思い出して言つた。

「まあジョージが気にしなくてもいいんじゃない？何も知らない奴が迷い込んで入つただけかもよ？」

と、くすんだ茶髪の持ち主のジョージ・アルフレッドに返す。

ジョージはそれもそうだな、と言つてそれから女性をしっかりと抱え直して走る速度を上げた。

「あの～すみません。この近くで町かなにかあつませんか？」

街道に出た聰介は、たまたま近くにいた職人気質なように見える壮年の男に話しかけてみていた。

「ん？ なんだ？ 兄ちゃん！」 じりで見るような顔じゃないな。 どうか遠くから出稼ぎか？」

壮年の男は聰介の服装を見て興味深そうにしていた。

「あ？ ええ……え～っと…… そりなんです。……えと…… 鍛冶をしよ
うかと……」

聰介は質問に質問で返されて、困ったようにこの世界に来る前に候補にあげていた職業の名前をとつさに挙げた。

「へえ……そこまで腕つ節が強そには見えねえが人はみかけによらねえなあ。……ああそつだ。近くの町だつかけか？それなら俺の住んでるガーランドがいい。近いし何より活氣がある。俺は今からガーランドに帰るとこなんだが、一緒にいくか？」

「お願いします。ここいら辺のコト全然詳しくなくて困つてたんです。助かります。」

「じゃあ自己紹介しないとな。俺の名前はエドガー・バーンスタイル、ガーランドの町で武器・防具を扱う職人だ。もし兄ちゃんの打つモノがよかつたら買わせてもらつぜ。」

「僕の名前は神尾聰介って言つます。…あつ、名字と名前が逆みたいなんで、合わせるならソウスケ・カミオになります。」

「ソウスケ・カミオか。変わつた名前だな。まあこれから大変だろうがよろしくな。」

聰介は人のよさをうなエドガーと一緒に町まで行動をともにすることになった。

真上にうかぶ強い日差しを放つ太陽はとても明るかった。

「なにいー？身分証明書もなにも持つてないだとーー。」

町についた聰介に待つてていたのは、この町で商売や就職するときには必要となる身分証明書が無くて何も出来ないといった事実だった。

「……困ったな。しかたねえ……商工ギルドに掛け合つてみるか。ソウスケ、ちょっと知り合いのギルドのとこに話してみるからしばらく待つて。……ああそうだ、近いうちに自分の店をひらくつもりならそれの申請もだしておぐが。」

「すいません。何から何までお世話になります。お店の申請もお願ひします。本当にすいません……。」

「まあ仕方ないしな……気にすんな。じゃあ一ひらくんで時間を潰していくれ。しばらくしたら戻る。」

そうこうとエドガーは町の中へと走つて行った。

来る途中に分かつたことだが、エドガーはこの町でもそこそこ有名な武器防具店を持つ職人らしく、田舎から出てきた右も左も分からぬ出稼ぎや弟子を指導したりする面倒見のいい職人らしい。

しかし、時間をつぶしているといわれたところでお金も何もない聰介は、どうしようかと悩んでいたが、目線を通りにめぐらすと、質

屋らしき店が目に入った。

当然売るものも何もない聰介だったが、自分に与えられた能力を試してみるいい機会だと思い、人目のかない通りの裏に回ってきた。

「よし、誰もいない。ちょっと試してみよっかな。えへっと、材料はないから地面の石や土を使うとして……壺や陶器をつくりてみようかな。」

そういうと聰介は、はて? どう練成するのだろうと考えたが地面に手を重ねて置き、とりあえず、創り上げる壺や彫刻をイメージした。

すると重ねた手から広がるようにして、青白い電気がバチバチと音を鳴らして現れ、それと同時に地面から適当な大きさの何の変哲もない壺と陶器の入れ物が出来た。

「うへん……これじゃあ売れそうに無いなあ……。もつと凝った物の方が売れそうだしち……ギリシャ文明のが価値が高そうかな……?」

そう言つて、陶器や壺を割つて、粉々にしたあと、もう一度練成しながらそいつと思い、また手を重ねて破片とかしたそれらの上に置く。

今度はイメージを変えて、美術的に価値の高そうな物をイメージしていく。

思いついたイメージは、勝利の女神ニケの彫像『サモトラケのニケ』

。その翼を広げた優美でダイナミックな姿を、頭の中で創り上げ、長い年月を経たであろう姿を想像して、頭の中にその全体像を完璧に写していく。

頭の中で創り上げられたサモトラケの二ヶは、本物よりもかなり小さいが、その優美さと迫力は寸分も変わらない。

掌から溢れる電光はまるで二ヶの生誕の喜びをあらわすように、バチバチを大きな音を鳴らしつづけ、二ヶの彫像を創り上げていく。

その様はとても神秘的で、目をつむっている聰介には分からぬが、第三者がこの光景をみれば言葉をあげることすら忘れて茫然と見続けることだろう。

創り終えた聰介が目を開けると、そこには大きさ以外なんら変わりの無いサモトラケの二ヶの彫像が悠然と立っていた。

自分自身ですらあまりの迫力に見惚れてしまつたが、次第に表の通りの喧騒が自分の耳の中へと再び入ってきて我に返る。

「すごいな……ここまで完璧にできるなんて……。……エドガーさん

が返つてくる前に早く換金しないと……。」

そう思い直した聰介は、ふだんなら重くて持てないだらう彫像を軽々と抱えて、質屋に行こうとして、ふとその異様さに気付いた。

普通小さことはいえ、石で出来た彫像を持つことなど一般人には確実に無理だ。

「こんなことが出来るのもやつぱり上位世界から来たからその補正によるものなんだからなあ……と驚きをおぼえつまた歩き始める。

質屋につづくと、『ドン』とこう大きな音とともに、表に向かつて大きな声を張り上げていた店主の前に置く。

「お、おこ……君……コレを『ドン』で見つけたんだ!」教えてくれ!

「え?え~つと、とある遺跡の奥の方に眠っていたのを持つてきたんですけど……」

しまつたなあ、言に訳も何も考えてなかつた……と心中で思いつつ、適当にそれらしことを言つておぐ。

「こんなモノがあるなんて……。君10000……いや20000ギル
払う!コレを買わせてくれ……」

「え?12000ギル?」

「ぐつ……。不満かも知れんがこれだけしか払えん……。頼む……。」

こちらとしては『ギル』という単価に疑問を思つて聞いたつもりが相手の方はどうやら値段に不満があるとおもつたらしく……単価は分

からないが、まあ円に換算してもそれだけもらえるなら儲け物かなあ、と思つた聰介は、それで頷くことにした。

「ありがとうー！」なんものがあるなんて驚きだ…。本当にありがとう君ー。」

「えつと、まあそれはいいんですが。1ギルって大体どれくらいの価値があるんですか？ちょっと田舎からでてきたばかりで分からないんで、教えてもらえるとありがたいのですが。」

「ああいいとも。君は出稼ぎか何かだったのか。なるほどな。コレは軍資金がわりというわけか。で、1ギルだが…そうだな、5ギルほどあればだいたい1食分になるな。それと硬貨だが1ギル、10ギル、50ギル、100ギル硬貨までが一般的な数字入りの硬貨で、10000ギルからとなると長方形の薄い札で、色がついて偽造防止がかかる、銅色札は10000ギルで、銀色札が100000ギル、金色札は1000000ギルだ。まあこれらは早々御目にかかることはないけどな。ああここらで店をかうなら、銅色5枚あればイイのが買えるぞ。」

つまり1ギルとはだいたい100円程度らしい。

そう考えると12000ギルとは120万円ぐらうことになりますのだろう。

質屋だから利益のことを考えるとだいぶ高い値段がついたのだろう、売るときには何百万円もの価値になるのではないかと聰介は驚きと共に思つていた。。

「ありがとうございます、助かりました。それと、もしよければ袋をもらいますか？」

「はあ…。しかたないね、コレをあげるよ。しかし君は全く何も持つてないんだね。君の未来が心配だよ。なんなら町をいろいろ紹介してあげようか？」

「いえ、Hドガーさんという人が色々お世話してくれるので大丈夫です、ありがとうございます。」

「おお、Hドガーさんか。なら心配ないな！がんばるんだぞ…。」

質屋の主の声援を受けつつ、お金のはじつた皮の袋をショルダーバッグの中へといれてしつかりと口を閉じると、ちょいぶりHドガーサンが帰ってきたところだった。

「質屋に何かようがあつたのか？まあいい、それよりも商工ギルドで証明カードと店舗開設許可書もらつてきたぞ。それと、古くて使われてない工房がウチの店の近くにあるんだ。そこなら俺も暇なときには面倒みてやれるし、手を加えれば店としても、工房としてもすぐ使えるからソコに店を構えるといい。」

「何から何まで…本当にありがとうございます。本当に…ありがとうございます。」

ちゃんと生きていけるかどうか不安で、そのうえ生命の危機にも直面したつた聰介は、ここまでしてくれるエドガーの優しさに触れてつい泣き出しそうになってしまった。

「お、おーー？泣くなつてーどうしたんだー？」

「いえ……エドガーさんがすごい優しくて……僕……すごく不安だつたから。本当にありがとうございます。」

「……ああ……いいから早く涙ふけつて……はたから見たら俺が悪者みたいじゃねえか……。」

そう言いながらもエドガーは、すこしずわくちゃになつたハンカチみたいなものを取り出して聰介に渡しながら、照れたよつに頭をかいていた。

聰介は、やつぱりこの人イイ人だなあと、心の内で思いながらも涙をぬぐつて、元の表情にもどしながら見ていた。

5665文字です。いやあ…大変ですね…。今回も下地作りの回で
ござります。次回からは鍛冶をしていくつもりですので、なにとぞ
…。
…見捨てないで（- - -）
貨幣価値については色々考えましたが、うまくいったと思えない（
泣）
それにもしてもエドガーさんがあつちゃイイ人や…。
キャラが勝手に動くとかないわ～とか他の方々のあとがきをみて思
つてた過去の自分を殴りにいきたいです。
プロットも何もない作品ですがこれからもヨロシクです…！

文章一部改定しました！7月19日21:34
2階の部屋が小さすぎたため直しました。.

003 工房と依頼

聰介は只今、エドガーの紹介により古びた といつても一階に店舗、その奥に工房と倉庫、一階部分に六畳の部屋が一つと、十畳の部屋が一つある立派な店である 店を、案内されている途中だった。

商工ギルドの不動産屋の話によると、このお店を銅色5枚で譲ってくれるという話だったのだが、実際問題そこまでのお金は無かつたので、分割払いをするという方向で話が決まった。

本当ならこのお店はだいぶ古くなっているとはい、土地もいい方で、銅色5枚ではなく8枚でよつやく買えるような場所だったらしい。

エドガーの新人の世話焼きは町でも有名で、そのエドガーが口利きをしてくれたからこそ、これくらいの値段になつたんだよ、とは案内をしてくれている不動産屋の話だ。

聰介がソレを聞いて店の奥を見に行っていたエドガーにお礼をいうと、照れたように頭をかきながら、出来上がつたばかりの商工ギルドカードを聰介に渡し、自分の店の方向を指さして、俺はそろそろ戻るからな！ と言い立ち去つて行つた。

それから不動産屋から説明を受けた聰介は、頭金として銅色1枚を渡して晴れて契約完了となつて、この世界で新たな自分の牙城を手に入れたのであつた。

古くなつているとほいえ、木造ではなかつたので腐食しているようなどころはなく、掃除を徹底的にすれば、汚れはすぐ落ちるようなものだつた。

しかし、そのまま放つておくわけにもいかず、聰介は、まずはお店の掃除をすることにした。

店の部分は棚や、剣を立て掛ける木の箱が、傷ついていたがまだ十分使えるようであつたのでそのまま使用し、鍊金術で汚れを分解して落とすことだけにした。

このとき鍊金術で新品同様に直さなかつたのは、ボロ屋が一夜で直つていれば不審がられる…と思つてのことである。

店の奥の階段をのぼり、2階の部分にいくと、上の2つの部屋はどちらも蜘蛛の巣が張つていて、なんだかよく分からぬ虫が何匹もわがもの顔で占領していた。

聰介は、早々に虫たちに「退場していただくために、窓を開け放ち、引っ掴んでは窓から放り投げていつた。

投げ捨てられた虫たちは不機嫌そうに羽音を立てたりしながら各自散つて行つたみたいだ。

またもや、鍊金術をつかつて瞬く間に汚れを落とした聰介は、次に、長い年月のせいで出来たのであらうひび割れを、これまた鍊金術で次々と修復していった。

新品のよくなつた2つの部屋を満足げに見渡した聰介は、最後に

の工房の方へと足を向ける。

階段を降り、店の奥の階段横の扉を開けて工房に入った聰介の目に
入ってきたのは、煤でよごれた溶鉱炉らしきものと、ハンマーや、
ふいごなどの工具が雑多に置かれた光景だった。

溶鉱炉は煤けたままで問題は無かつたが、前の主人が置いていった
のだろう工具類は、錆びて動かなくなったり、ふいごが破れていた
りして使い物にならなかつたので、錆を取つてしまえば、多少不自
然にはなると分かつていても鍊金術で直すほかなかつた。

キレイになつた工房を見渡すと、錆ついてはいるが頑丈そうな鍵が
掛けた扉を発見し、その扉の方へと近づく。

鍵は大型の物で、ハンマーなどで壊そつとした形跡があるも、未だ
にしつかりとその扉を己の役目通りに守つていた。

しかし、そんなものは聰介には一切関係が無かつたので、あつさり
と鍵を分解すると、鍵は工房の固い床へと落下し、甲高い悲鳴をあ
げて己の長い役目を終えた。

何があるのだろう?とワクワクしながら聰介が扉を開けると、その
先に広がる物はただの石くずのように見えた。

が、更に扉を開け放ち、もつと多くの光を中に引き入れると、ソコ
にあるのは光を受けて黒光りする大量の鉄鉱石と木炭であることが
分かつた。

しかし、鉄鉱石は精製しなければ固いだけのただの石なので、倉庫
から全て取り出して、鍊金術で鉄のインゴットと、石クズとに分離

していった。

鍛冶に必要不可欠な鉄を手にいれた聰介は、まずは何の変哲もない西洋剣を3本ほど練成してみて、創り方のイメージを掴むことにした。

出来上がったものをエドガーのもとに持つて「どうかと思つたが、工房を獲得したその日に3本も出来上がつてゐるのはさすがに不自然かと思い、持つていくのは明日にすることにした。

創り終えて外に出てみると、既に日は傾きすっかり暗くなり、まわりの人影は少なくなつていて今日のところはこれで終わろうと思ひ、晚ご飯調達のために食事が出来るところを探して通りにでた。

町は暗くなつていて、すこし遠くに明かりがついている店を見つけ、この時間にやつているということは宿屋か食事処だらうとあたりをつけ、その店の前まで歩いていくことにした。

店の前までいくと、看板にナイフとフォークが交差している板が目に見えたので、店の中へとはいつていく。

「おーい、ソウスケ！ 今から飯か？ ビツせなら一緒に食おつー！」

入った途端にどこか聞き覚えのある声を聞いて右手を見れば、数人

の男性と一緒に楽しそうに酒と肉を頬張るエドガーがコツチを見て手を挙げている姿があつた。

「あ、今そつちに行きます。」

そう言つた聰介は、周りの人たちは誰だらつと思いながら、エドガーの横の席に腰を下ろす。

「おう店の方の準備は順調か？まあまだ鉄鉱石やら木炭やら必要なものはたくさんあるだらうからしばらくは動けれないだらうがな。少しくらいならわけてやれるがいるか？」

エドガーがこう言つと、向かいに座つた男がエドガーは本当に世話を好きだなあワハハハハッ！と豪快に笑う。

「ああそのことなんですが工房の奥の扉を開けたら大量の鉄鉱石と木炭が置いてあつたんです。たぶん前の持ち主のなんでしょうけど、この際だからありがたく貰つておこうと思つんです。」

「なに！？あの扉をあけたのか！ワハハハハハ！ソウスケは本当に運がいいな！初日に大量の鉄鉱石と木炭をゲットできる奴なんてそうはいられないぞ！ワーッハッハッハッハ！…！」

酒も入つてゐるのだろうエドガーは、聰介の運の良さを聞いて、楽

しそうに、かつ豪快に笑い飛ばす。

「ソウスケ！今日は俺らのおじつだ、たくさん食え……」

「ブツ！ゲホッゲホ…おい、エドガー！？俺らってなんだよ、俺らつて！？」

聴介の反対側のエドガーの隣に座っていた男がのんびり酒を噴き出して、むせながらエドガーに聞き返す。

エドガーはと言つと、いいじゃねえか、新人の船出だ。こまけえこと気にすんな！と言い、酒をさらにおおむ…ビツヤウ完璧に出来上がつてゐるらしい。

その後、迷惑にならない程度食べた聴介は、明日もあるので……と言つて、その店から涼しくなつた夜の通りへと出た。

「エドガーさん、本当にいい人だな…。なんか第一の父親みたいな感じがする。」

と、異世界で出会つた面倒見のいいエドガーに感謝しつつ、そんなことを思つていた聴介だった。

翌朝早くおきた聰介は、怪しまれないようにと炉に火をいれて、ハンマーを打ち鳴らしておき、しばらくして火がおさまったのを確認してから、エドガーの店のもとへと3本の西洋剣を携えて歩いて行った。

ガーランドの町の朝は早く、開店準備をする人が既にちらほらと見てとれる。

「すいませーん。エドガーさんはおられますかー？」

エドガーの店へ着き、準備をしている少し年上に見える従業員の方にエドガーさんの場所を聞くと、店の奥で品物を並べているエドガーさんのもとへと案内される。

「おはようございます、エドガーさん。昨日さつそく剣を3本ほど打つてきたんですけど見てもらえませんか？」

「おう、…おはようソウスケ。ん…剣打つてきたつて?どれ、見せてみな…。」

エドガーはいくらか元気に欠ける声音だったが、昨日は飲んでいたし、それとも朝に弱いかだらうと思ふ氣に留めなかつた。

「ほう…。こいつはすげえな。鉄の純度がここら辺じやみないほど

に高いな。『レはソウスケが精製したのか？』

近くの棚から取り出した小さな金槌みたいなもので刀を軽く叩いて音を聞いていたエドガーが顔をあげ、驚きとともにソウスケを見る。

「ええ…ちょっと部外秘なので教えられないんですが、自分の住んでいた処に伝わる独自の精製法でして、高い純度で精製できるんです。」

聰介はとつせにつけた出まかせにしてはつじつまが合つよつこづまく誤魔化せたなあ、と感じながら笑顔を顔に浮かべて言った。

「ふむ…そつか、残念だが仕方ない…。いや、それにしてもコレはいい剣だな。俺も儲けは必要だし……そうだな、一本500ギルでどうだ？」

「分かりました。その値段でお願いします。」

そういうとエドガーはカウンターへしきとこひの裏にいき、手に1500ギルを持ってきて聰介の剣3本と交換した。

「ああそれと鞘と柄は、今回は俺がつくりて合わせておくが、今度から自分でやつてくれば、買い取りの値段をもう少し上げれるからな。じやあそろそろ店も忙しくなるから、悪いが俺はひっこむぞ。」

と周りの商品や、廃材をみていた聰介に告げて店の奥へと歩いていく。

「あのーもし捨てるならこの廃材もうつていいですかー!?」

奥へと去るエドガーに、大きくなり始めた町の喧騒に負けなつよう に、声を張り上げて言つ。

ああ、好きにもつていけーと適当な返事を返しつつ、エドガーは完全に店の奥へと姿を消した。

あとに残つた聰介が大量の鉄くずが入つた木箱を抱えようとすると、聰介よりも5歳ほど年上に見える従業員の一人がからかうように笑いながら、君じやおもくてもないぞーっと言つたが、聰介がムツとして黙つて持ち上げて帰るのを見ると、ソレを啞然とした顔で見ていた。

「おいおい…嘘だろ? 大の大人が3人でよつやく持ち上げて運ぶような重さだぞ…。」

聰介は意に介さず、黙つて自分の店へと木箱を抱えて歩いて帰つて行つた。

「さてと…、この世界がどれほどの治安か分からなければ、防犯に徹するに越したことはないよね…。それに練成をみられると色々と面倒な事になりそうだし…。」

もつて帰つてきた鉄クズと自分の目の前にある工房へと続く扉を交互に見て、聰介は一人呟いた。

目の前にある扉は、確かに鉄製ではあるが、何度も衝撃を加えてしまえば外れてしまいそうなぐらいの強度に見える。

盗人どころか強盗が来てしまえば、この扉はいつも簡単に破られてしまつだらうことが容易に想像できる。

嫌な想像をした聰介は、*「ぶるり！」*と体を震わせてから、鉄クズを扉の前に持つていき、そこで掌を重ねて練成を開始する。

バチバチと音を立てながら、扉が分厚い鉄の扉へと変わつていく光景を、何度見てもキレイな光だなあと想いつつ、イメージを保つていると、次第に光がおさまり、鉄製の分厚い扉が、工房への道を遮る重厚な文字通りの鉄壁となつて立ちふさがつていた。

「うん、これなら大丈夫かな？」

確認のためにタックルをかましてみても、扉はビクともせずに、逆に聰介の肩の方が鈍い痛みを発するだけで扉にはなんら変わりは見られなかつた。

「イタタタタ…ちょっと強くぶつけすぎたかな…」

鈍い痛みを発し続ける肩をさすりながら扉の出来栄えに満足するが、用心を重ねて鍵も練成して扉に取り付けられるようにしておぐ。

ひとまずやることがなくなつた聰介だが、そついえば材料の補給はこまめにしておかなければ…と思いつ立ち、冒険者ギルドへと材料の補給は冒険者ギルドに依頼すればいいとエドガーに言われていた 出かけた。

「依頼をしにきたのですが、手続きはどうすればいいんでしょうか？」

冒険者ギルドにやつてきた聰介は、受付で素晴らしい営業スマイルを浮かべるお姉さんに話しかけることにした。

「御仕事の依頼ですね。では、あちらの机の用紙に依頼内容

と、報酬、注意事項、依頼受諾場所を指定して書いてきてください。

「

お姉さんから、お姉さんが机の下から取り出した用紙を受け取り
この間も営業スマイルはぐずれない 言われたとおりに机の上
で内容を記入していく。

依頼内容： 鉄クズ・鉄鉱石の採集 採掘場所問わず

報酬： 50～100ギル

受諾場所： ガーランド4丁目鍛冶屋にて

注意事項： 量が多ければ上乗せしますが、質にもよります。

「このなんもんかな？ よし、お姉さんに見せに行こう。」

書き終えてペン インクを使うタイプだった を机に置き、紙
なんと羊皮紙だった をお姉さんへと手渡す。

「はい、たしかにお預かりしました。依頼内容は間違いありません
ね？…では商工ギルドカードの提示をお願いします。」

確認されてうなづくと、エドガーより渡されていた商工ギルドカードを、持ってきたショルダーバッグから取り出しお姉さんに渡すと、

しばらくして確認が済んだのかギルドカードを返されたので、ショルダーバッグの中に大切にしまい込んだ。

「御仕事の、」依頼たしかに承りました。それではまたの、」利用をお待ちしております。」

依頼が完了。最後まで営業スマイルは完璧だった。すると、冒険者ギルドにいても意味が無いので、カラッとした気持ちのいい田舎の中を歩いて帰る。

何事もなく店まで帰ると工房に入り、残りの鉄クズを集めて練成するため工房の片隅にまとめて置く。

いざ練成開始…とばかりに首を回して骨を口キ口キと鳴らし、手を重ねようとすると、店先から男のものだらう呼び声が聞こえてくる。

「うへん…出鼻をくじかれたやつだな…。まあいいや。今行きますーーー！」

表に聞こえるように口をひらき声を張り上げながら小走りで店先まで駆けていく。

「依頼を受けにきた方ですかー……つて、あれ！？あなた達は…。」

店の扉を開けながら言いつつ、田線を上へとあげるとソロにはこの世界に来てから初めて出会った冒険者らしき3人組が同じくビックリとした様子で立っていた。

5419文字で「ござります。それにしてもビックリしました…。既にお気に入り登録数が17件も…期待されてるようで嬉しいのですが、期待にそえるかどうか心配でござります。

総合評価も34PTと好評価？をしていただき恐縮しております。…次回は本格的に武器を創ります。名前付きなどの剣はまだ登場できませんが、架空上や、伝説上の金属といったものは数個ほどでできます。

次回もお楽しみにーー！

訂正…つていうかつけ加えました。

最後の『ベッドを2階まで運んでもらい』を『ベッドを2階の六畳の部屋まで運んでもらい』にしました。たびたび申し訳ないです…

004 再開と鍛冶

「アンタ確かに森の中で『ゴリィー』と戦つてたときに会つた奴か？」

「ねえジョージ？」の人誰？知り合いなの？」

聰介の目の前に立つ3人は確かにあの森の中で出会つた冒険者の3人組だった。

しかし、面識があるのは実際に顔を見た男3人同士だけで、そのとき重症を負つて地面に倒れ臥していた女性と聰介の面識がないのは無理からぬことだった。

「あのあと、君も無事に森から出ることができたんだね。でも、驚いたなあ。君は鍛冶屋だったんだね。あのときは焦つていたから気づかなかつたんだ、ゴメンね。」

「ちょっとジャック！アンタまで無視しないで…どういうことか説明してよ…」

女性はちょっと憤慨したように頬を膨らませながら、ジャックと呼ばれた青い髪の男のほうを向いて言った。

「ああ、そういうやエミリーはぶつ倒れていたからわからないよな。え～っと、いつの人はお前が倒れてたときに偶然出くわしたんだよ。いやあ、しかしながらも無事で良かつた！」

「へえ～、そうなんだ…。まあこれから依頼を受けるんだし自己紹介でもしておくわね。私の名前はエミリー・エリスよ。武器は片手剣を基本的に使うけど、ナイフとかも使えるわよ。ああそうそう、下級だけど魔法も一応使えるわ、ヨロシクね。」

「んじゃ、次は俺だな。俺の名はジョージ！ジョージ・アルフレッドだ。武器はだいたい大剣しか使わないな。小さい武器はリーチが短くて使いづらいからな。それと、魔法は使わん。小難しいのは苦手でな。」

「僕はジャック・バロウズ。武器は…ん…基本的には片手剣かな…まあ「コレと決まった武器しかつかわないわけじゃないから何でも使えるよー。ヨロシクね。」

最初に自己紹介したエミリーは、身長160cmぐらいの背丈で、活発そうな顔立ちにオレンジ色のショートヘアがとてもよく似合う女の子で、冒険者の割には肌の色は白いほうで、女の子らしさが感じられる。余談だが聰介はこのとき、肌の手入れしてるのかな?と思っていた。キレイな装飾が施されている軽そうな防具を着ていた。

その次に自己紹介したジョージ・アルフレッドは、190cmほどの高身長を持ち、くすんだ茶髪の短髪。先頭に邪魔にならないように考えてだろう。がよく似合う男で、肌は浅黒く日焼けしていくその肌についていくつもの傷が彼を冒険者なのだと物語っていた。

ジョージはエミリーとは違った実用性重視の無骨な防具を着込んでいたが彼にはソレがよく似合つていてカッコよく感じられた。

最後のジャック・バロウズは175cmほどの平均男性ぐらいの身長で、深い青色の髪を口の下あたりまで伸ばしていて、肌は滑らかな肌色だった。

ジャックの防具は動きやすさを重視したタイプのものなのだろうか、胸や急所をまもる以外は装甲の薄くなつたものを着用していた。

3人の自己紹介を聞きながら格好をみていた聰介は自分が自己紹介をする順番になつたことに気づき口を開く。

「えーっと、僕の名前はソウスケ・カミオです。遠くの田舎から出稼ぎにこの町にきました。名前がちょっと変わつてるのはそのせいです。しばらくしたらここのお店で商売するつもりなので何か御用があればその時はぜひ立ち寄つてくださいね。」

当たり障りのない自己紹介を返した聰介は、再度口を開く。

「それでも驚きました。エミリーさんはもう怪我は大丈夫なんですか？かなりの大怪我に見えた気がしたんですが…。」

「ええ大丈夫よ。あたつた範囲が広くて血が多く出ているように見えただけだから今は直してもらつたし…ほり、このとおり…。」

そう言ったエミリーは自分のわき腹の部分の服をまくらりあげて負傷箇所だった部分を見せて聰介に無事を確認させる。

無論女性経験が少ない聰介がいきなり素肌をみせられて赤面しないはずがなく、すぐにその赤くなつた顔を背ける。

しかし、そんなことを気にしなかつたエミリーはさつたと服を元に戻していく、タイミングを見計らつたジョージが聰介に話しかける。

「まあ話がひと段落ついたところで、この依頼の話にうつりたいんだがいいか？」

「あ、うん、依頼の話だよね。」

いい具合に話を教えてくれたジョージに心中で感謝しつつ表情を元に戻して返答する。

「依頼は鉄くずや、鉄鉱石の採取でよかつたよな？」

「うん、何か鍛冶に使えそうなものがあつたらそれも買い取るけど、とりあえずはそれらを持ってきて。」

依頼の確認を終えたジョージは荷物を抱えなおす。

「了解。んじゃいぐぞー、ジャック、ミリアー。」

「はーい、じゃあソウスケは待つてねー。」

「では、いってきます。」

と言いつつ、背を向けて町の外のほうへと歩き始める3人組を見送りながら聰介は、商売する…と自分で言つた店を見上げる。

「あつ…看板が無いや…。」

聰介は、店の片隅に放られていた剣とハンマーが交差した板を鍊金術でキレイにしてから持つてきて吊るし、店の扉に開店準備中と書いた木の板を引っ掛けた。

工房へと戻ってきた聰介は炉の中にある黒い木炭を見て、鍊金術で「コレをダイヤモンドに変えられないだろうかと考える。

どちらも同じ炭素から出来ているものなので無理ではないだろうが、簡単に出来るのだろうかと不安に思いながらも一欠けらの木炭を指で摘みあげる。

指を炭で黒くさせた木炭を3秒ほど見つめてから、目をつむり頭の

中でダイヤをイメージしながら指先に力をこめる。

「バチバチ」という音は直ぐに止み、その静けさが練成が終わったことを聰介へと伝える。

目を開けた聰介の前にあるのは、この世界に来る前に見た親が嵌めていた指輪のダイヤと同じ形、同じ輝き、同じ大きさで聰介の目に光を照り返していた。

握れば硬く、とがった先端部分が指にめり込み……少し痛い。

その痛みはもしかしたら、異世界に来て初めて家族のことを思い出した聰介の心の痛みと同じだったのかもしれない。

いつまでも感傷に浸っていてもしょうがないと気持ちを切り替えた聰介は目の前のダイヤから、その奥へと転がる木炭へと視線を移す。目に映つた木炭を数本つかんだ聰介は先ほどと同じようにして、先ほどよりもはるかに大きな光輝くダイヤの塊を作り出す。

出来上がつたダイヤの塊をつかむと再度練成するために力を込める。

バチバチという音と電気を発しながら姿を変えるダイヤはその姿を次第に細長く変えていく。

光が止むと、剣先から柄までもがすべてダイヤで作られた光り輝く透明なダイヤモンドの短剣が聰介の手に握られていた。

「よし！ダイヤの短剣ができたぞ！」

喜ぶ聰介がダイヤの短剣を試しに一度振つてみると、柄に何も巻かれていな短剣は聰介の手から滑り落ちて硬い工房の床へと一直線に落下する。

空中でつかみ直すこともできずに床へと勢いよくたたき付けられたダイヤの短剣は粉々に砕け散つてしまつた。

「ああ……しまつた……。そういうばダイヤは硬いけど衝撃には弱いんだつたつけ……。」

聰介は、そういうば中学の科学のときに先生がそんなことを言つていたという事を割つてしまつてから氣づいた。

それでも、このままダイヤの使用を諦めるというのは何故か悔しい氣がしたので今度からは剣の装飾用として使うことに決めた。

工房の中の片づけをしてから店に出てしばらく窓を開けて空氣の入れ替えをしていると大きな袋を背負つたジョージを見つけた。

遠くだと人が邪魔になつて見えなかつたが、ある程度まで近づくとジャックもエミリーも大きい袋を持って歩いて歩ることがわかる。

だがやはりジョージは力があるのだろう、ほかの一人とは確實に大きさの違う大きな袋を背負っていた。

だが、顔は笑ってはいるが汗をかいてるため多少は無理をしているのだろう。

そんなジョージは聰介の姿を見つけると足早にやってきて店内の力 ウンター前で荷物を降ろすと、疲れたーー!と言つて床に座り込んだ。 すぐにジャックもエミリーも入ってきて、手に持つていた荷物をジョージが置いた荷物の横にそれぞれ置いた。

「おつかれさま。ちょっと見るから待つてね。」

そういうと聰介は袋を一つずつ順番に開けていき、中の大量の黒光りする鉄鉱石や、穴が空いたりして使えなくなつたのだろう鎧や、剣、盾などの鉄くずの様子を見ていく。

「その鉄鉱石は町から少し行つたところの洞窟の中で当たりの場所を見つけて一気に大量に掘つてとつたんだ。んで、そつちの鉄クズはだいぶ前の遺跡の前に大量に投げ捨てられていたからもつてきたんだ。なんであんな所にこれだけの量の鎧や剣とかがあつたのかは分からんが呪いとかそんなのは無いみたいだから持つてきたぞ。」

と、床に座り込んで休憩をとつていたジョージが取つてきた話をした。

「へえ…。それにしても洞窟でそんなに取れるところがあったんだ。
鎧とかもわざわざありがとね。」

「いやいや、俺らも仕事だからな。仕事分はしていくわ。」

ジョージと軽く笑つてからしばらく無言で袋の中を覗き込んでいた聰介だが、3つ目の袋を見終わると顔を上げた。

「質もいいみたいだし、量も予想よりもだいぶあるから上限から50ギル上乗せしておくな。……はい、報酬の150ギルだよ。」

上乗せすることを告げた聰介はカウンターのところに置いてある鉄製の箱をあけて中から100ギル硬貨一枚と10ギル硬貨5枚を取り出して近くにいたエミリーに手渡す。

思つていたよりも多くの報酬を得られたことに満足した顔のエミリーは花のような笑顔 全くの無自覚である を浮かべた。

「こんなにもありがとう。実は私の復帰も兼ねていたから報酬が安くても楽な仕事にしてたの。ありがとね、ソウスケ！」

礼を言つと聰介は真っ赤 決して恋ではない になつたがエミリーは気にせずに、後ろを振り返ると、ジャックとジョージにお金を3分の1ずつ手渡した。

予想よりも多くの金額を受け取った2人はそれぞれに聰介へとお礼を言つと、今日はちよつと疲れたからと言い店を出て「こへ」とした。

「今日はありがとー！時間が空いていたらまたお願ひするねー！」

出ていく3人に手を振りながら見送った聰介は、気持ちのいい人達だったなあ、またお願ひできたらいいなあ、と思いながら店へと戻るのだった。

ジョージ達が帰つて行くのを見送つたあと、聰介は一人で工房へとゴツゴツとした大量の鉄鉱石と鉄クズを運び込んでいた。

ここでもやはり驚異的な力で持ち上げてすぐに運び終えてしまつたが、本来ならこの世界の人間、或いはこの世界にくるまえの聰介なら、先ほどかけた時間のさらに何倍もかかつっていたことだらう。

うへん、いくらなんでも補正がすごいすぎる…と思つ聰介だが不都合なことが起きるわけではないのでほうつておくことにした。

「よし、今日は自分専用の武器と防具を創つてみよう。」

そういう聴介が考え付いたのは元の世界のゲームや小説、漫画などの中に出でた架空の、または伝説上の金属で自分の装備を創るということだった。

存在がしているかどうかも分からぬものを創れるのか?という疑問はあつたが、魔法が存在していたぐらいなのだからそういうモノが有つてもおかしくはないと考えることにした。

「え~っと、なにが有つたかな……。オリハルコンは……語源が確か
o r o s c h a l k o s : : o r o s が山で、c h a l k o s が銅だから
訳すと山の銅のはずだから、材料は銅をなんとかすればいける
はず……有るかどうか分からぬけど今度エドガーさんのところに行
つてみるかな……。」

オリハルコンは様々な説が有り、真鍮、青銅、赤銅、黄銅鉱、青銅
鉱、あるいは銅そのものと解釈されることがあり真意は定かではな
い。

しかし、そのどれにも銅が関係することは間違ひ無いので銅を研究
すればたどり着くだろう、或いは魔法を組み合わせることで出来上
がるのかもしれない。

オリハルコンの武器が出来上がれば、物理的にも魔法的にも絶対に
傷つくことのない世界最強の武器となることは間違ひないだろうと
思われる。

「ん…あとは何があつたつけ…アダマンタイトならすぐに作れるかも…もし、盗まれてもオリハルコンなら壊せるし…うん、販売用としてはコレを最高級のモノにしよう。武器として量産しても問題ないのはダマスカス鋼ぐらいかな?アレって製法は失われてるけど一応作れるレベルのだしたぶん大丈夫だよね…。あ…でも、刀もつくれなくちゃ…日本人として生まれたからには刀は創るべきだよね…。んん…あとはまた思いついた時でいいかな。一気に作つてもつまらないし…。」

とりあえずの方針を決めた聰介は創り方が分かつてゐる日本刀をはじめて創ることにした。

運び込んだ鉄鉱石を2組に分けて置き、練成によつて、片方を不純物を無くした玉鋼にし、もう片方を炭素の含有量が少ない軟鋼との2つを精製する。

次に練成によつて玉鋼を軟鋼で挟み込み、出来上がつた日本刀をイメージしながら刀身を作り上げていく。

最後に刃の表面の摩擦抵抗を減らし、波紋をイメージしながら仕上げる。

この時に、安い価格で売るために僅かに切れ味をおとしておく。

これで切れ味を操作することにより、安い価格で大量に売れる普通の刀と、生産数は少ないが高い価格で売れる最高の刀とに分けることができる。

今回は試作なので、銘を入れない普通の刀と、銘を入れる最高の刀

の2本だけをつくる」とにしておく。

銘入りの刀の方には 小鳥丸 という名前をつけて黒い柄と黒い鐔、黒い鞘をつけて一種の美術品としても完成させる。

普通の刀のほうには適当に柄と鐔、鞘を合わせて完成させる。

見た目的にも値段の差を感じられる2つの刀を見てこれでお客も納得してくれるだろうと思つて、完成した2つの刀を工房の壁に立て掛ける。

まあ変な剣つて見られて最初は売れないだらうなあと聰介は思うが、良さがつたわつて人気商品になるといいなあと願う。

そして、工房の中央へと戻ってきた聰介は次にダマスカス鋼をつくるために大量の鉄を練成していく。

ダマスカス鋼は、古代インドで生み出されたもので、ソレはドロドロになるまでに溶けた鉄を長い時間をかけて、るつぼでゆっくりと冷やすことによって凝固するときに内部結晶作用で出来るものである。

しかし、そんな時間は聰介はないので鍊金術で強引に作用を起して、ダマスカス鋼の塊をつくりあげる。

出来上がったダマスカス鋼の模様を崩さないように慎重に鍊金術によって成形しながら10本ほどダマスカス鋼の剣をつくり上げる。

剣が出来上ると半分を売り物として並べるために5本を残して、残りを倉庫へとしまい込む。

剣を倉庫へとしまいこみ、重い鉄製の扉を閉めると、汗が額を流れてくるのを感じて腕をもちあげて服で流れてくる汗をぬぐつ。

「ちよつとやうすぎたかな…。今日はこの辺にしておひり…。アダメンタイトはまた今度でいいし…。」

そういうと聰介は疲れを感じる体をひっぱって、工房と店に施錠をし、2階の4畳の部屋へと入ると布団も何もないのを思い出したので、自分の服を練成して寝袋代わりにして死んだよつに眠りこけるのであつた。

「あ、あれ？ 動けない！ なんで！？」

朝起きた聰介はパニックになっていた。

というのも昨日自分の服で寝袋を作つて寝たのを忘れていて、身動きを取れない状態にあることに気付いたからだ。

騒いだからか脳が刺激され、だんだんと鮮明になつてくる記憶…聰介はようやく昨日自分が自分でこの状態にしたんだといつことに気づき安堵の息を吐きながら練成をして寝袋から脱出した。

「ああ～…ビックリした…。誰かに襲われたのかと思つた…。」

一人眩きながら1階におりると窓から眩しい太陽がサンサンと差し込んできていた。

太陽はすでに明るく、午前9時～10時ぐらいだらうと思われる位置に昇つていて、窓へと近づいた聰介の眠たそうな顔に眩しい光を当てた。

「う～ん、それにしても今日はベッドを作ろつ…。体の節々がいたいや…。」

裏庭に出て体を洗うために水浴びをして、服をバシャバシャと水で洗うと鍊金術で濡れた服の水分を水蒸気にして服を一瞬にして乾燥させた。

身支度を整えた聰介は布と、綿、木材を買うために市場へと温かい日差しの中、歩いて出かけて行つた。

市場は活氣があり、商品をうるための声が常に飛び交つている。

人でごった返す市場の中を歩いて行くとたくさんの布を天井から吊り下げる店が左手に見えてくる。

店の中へと入るとベージュとワインレッドのきれいな布があり、ど

ちらも気に行つたので購入することにした。

その布屋から出ると左隣りに様々な綿を扱う店があつたので、そのまま中へと入る。

名前もよくわからない動物や、植物の綿がたくさんあつたが、その中でも手触りがいいものを選んで買つとかなり荷物が膨れてしまつた。

一旦帰るかなあ…と考えたが重さは特に感じられなかつたので、そのまま木材を買つことにした。

市場から離れ、少し郊外に近づくと木材屋と家具屋が一緒になつたような大きな店へとたどりつぐ。

なかに入ると色々なイスや、机、棚があつたので聰介がみていると店主らしき人が声をかけてきた。

「やあこの店を経営してるマイルズだよ。それだけの大荷物を抱えてこらるところとは引つ越しか何かで最近ガーランドに来たクチかい?」

「ええ、そなんですよ。昨晩寝ようとしたらベッドがなくて床で寝たんですが体が痛くて…。ほかにも何かあれば買おうかとおもつているんですが。」

「そりが、それは災難だったね。ベッドなら型が古くなつたのが安くうれるけどそれにするかい?」

「それでおねがいします。あと、イスと机が小さいのが有れば欲しいのですが。」

「イスと机が。ちょっとまつていってくれないかな？奥を見てくるよ。」

聴介にそう言ったマイルズは店の奥へと走り去つて行つた。

しばらくして戻ってきたマイルズの手には何もなかつた。

「申し訳ない。あいにく売り切れだつたみたいだ。今度作つておくから時間が空いた時にでも又来てください。ベッドの方は重いので口チラで馬車で運びますよ。案内してもらつたために馬車に乗つてもらいますが大丈夫ですか？」

おもいがけず樂をできることになつた聴介は、このサービスをありがたく思いながら、馬車に揺られつつ店まで帰るのだった。

家に着いた聴介は、ベッドを2階の六畳の部屋まで運んでもらい組み立てもらつてから綿とシーツをかぶせ 今回のシーツの色はワインレッド ベッドを完成させた。

その日の聴介は、完成したベッドで異世界についてから初めてベッドのふかふかさに幸せを感じつつ寝るのであつた。

004 再会と鍛冶 講義修正（後書き）

7429文字です。ちょっと多くなりました@@；
調節も大変ですね。

今は一気に更新していますが有る程度話数掛けるとゆっくり更新に
かかるつもりです。
それまではなるべく早く更新していくので応援よろしくお願いしま
す。

005 魔鉱石と魔剣

朝になりふかふかのベッドの中で朝の柔らかな太陽の光を感じた聰介の意識は夢の世界から現実の世界へと戻つてくる。

ふあ～っと大きな欠伸をすると未だ温かさの残るベッドから体を起して1階へと降りていく。

1階へ降りた聰介は工房を通り抜け、裏庭へやつてくると水を浴びて身支度を整える。

水を浴びる」というぱりとし、意識もしつかりと覚醒した聰介は、本日は何をしようかと思案する。

とりあえず工房へと戻つた聰介が倉庫の中をみるとダマスカス鋼製の剣が10本と、刀が2本、だいぶ少なくなつた鉄のインゴットが置かれている光景が目に入つた。

昨日の練成で鉄を大量に消費したことに気付いた聰介は冒険者、ギルドへ行き採集の依頼をすることに決めた。

商工ギルドカードを鞄へと放り込み店の戸締りをしっかりと確認してから冒険者ギルドがある方へと歩いていく。

まわりには買い物や、商売の人で賑わっていて元の世界では感じられないなかつた、人々のいきいきとした様子がみてとれる。

そんな光景を見ながら歩いていた聰介に、まだ幼い女の子が走ってきて勢いよくぶつかってしまった。

「あっ、『めんね。大丈夫だつた？』

後ろへこけそうになる女の子の体を抱えて起こすと女の子は、おにいちゃんありがとー、今度から気をつけるねーと言つてさつきと同じように聰介がきた方向へとかけていく。

素直な子供に少し癒されながら歩く聰介の目の前に、だんだんと冒険者ギルドの建物が見えてくる。

冒険者ギルドへたどり着いた聰介は扉を開け、多くの冒険者がたむろするギルド内へと足を踏み入れる。

真っ直ぐに商工関係の窓口へといくと前の時に受付にいた完璧な営業スマイルが眩しいお姉さんが今口も受付に立つていた。

「おはよひびきます。依頼にきたのですが、いいでしょつか？」

「はい、大丈夫ですよ。前回と同じ内容の依頼でしたらすぐに発行することができますが、内容が前回と異なる場合にはもう一度用紙に記入していただくことになります。いかがいたしますか？」

「前回と変わりはないので、お願ひします。」

「承りました。では、張り出しありますね。ありがとうございます。」

した。」

そういうとお姉さんは席を立ち、冒険者が数人いる掲示板のところへいき依頼所を張り出した。

途中で席にすわっていた男の冒険者数人組が下品な冗談をお姉さんに投げかけていたがお姉さんが冒険スマイルを向けると男達は黙り込んでしまった。

完璧な営業スマイルだったが、氷のようなオーラが立ち上っていたのは幻覚か見間違ないと信じたい…、怒らせるようなことはしまないと心に誓った聰介であつた。

冒険者、ギルドから出た聰介は特にすることが無かつたので普段よりもゆっくりと店まで帰つたが、そつそつイベントが起じるにともなく無事に店へとたどり着いた。

帰つた聰介が店の扉をあけて中へと入り、今日の予定を考えていると袋を抱えた2人組の冒険者が入つてきた。

依頼にしてはまだ承諾もしてないのに袋を抱えた2人組を見て、やけに早いなあと不審に思つていると片方の男が口をひらいた。

「すいません、まだ依頼の確認もしてなくて悪いのですが鉄鉱石を

持つてきました。これにはちょっと理由があって、実は似たような依頼をしていましたのですが突然キャンセルになってしまってこれらの鉱石が余ってしまったんです。なので、依頼を見てきていい今まできたんですが、買い取つてもらえないませんか？」

そういうと冒険者一人組は袋を聰介の前へと差し出した。

「もうだつたんですか、それは大変でしたね。あの依頼はまだ誰もつていなかつたので買い取らせていただきます。」

一人の言い分になるほどそういうこともあるのか、と納得した聰介は袋の中を覗き込み鉄鉱石を確認していった。

2つ目の袋をあけた聰介の目に映つたのは、鉄鉱石の形をしているがボンヤリとした白い光を放つ謎の物体だった。

「あの～…こつのはなんでしょうか？鉄鉱石じゃないみたいなんですが…。」

「ああ、すいません。そつちのは魔鉱石です。もしよかつたら買い取つてもらえませんか？値段は普通より低くても構わないんで。」

「魔鉱石？店を準備し始めたばかりで初めて見るので、すいませんがどういうものか説明していただけませんか？」

聰介は魔鉱石ってなんだろう？魔法が何か関係しているのかなあ…
と思いながら困った顔をしている冒険者へたずねるのであつた。

「ああそなんですか、わかりました。魔鉱石といつのはですね。
文字どおりに魔力が籠つた鉱石なんです。基本的には魔力を抽出す
ると後に残るのはタダの石ころなんですが、抽出した魔力 자체はど
の属性にも属さないので、どんな武器にも付与することができ、魔
法武器をつくるときに必要とされるんです。ああもちろん魔力の属
性は何にでも変化させることが出来るのでどんな属性の武器もつく
ることができますよ。」

説明を聞いた聰介は自分に魔力を扱える能力が有つたことを思い出
し、それなら活用しない手はないと考えて買い取ることを決める。

「詳しい説明ありがとうございます。ぜひ買い取らせていただきま
す。それで、報酬なのですがこれぐらいでどうでしょうか？」

買い取りを決めるとカウンターの裏に回り、箱を開けて硬貨を取り
出し冒険者2人に150ギルを渡す。

2人組の冒険者は喜んで受け取るとそのまま上機嫌で帰つて行つた。

「よし！昨日はできなかつたから今日こそアダマンタイトを作らう！」

2人から魔鉱石を買い取つた聰介は昨日疲れて出来なかつたアダマンタイトの剣を創る、と意気込んでいた。

大量の鉄鉱石を田の前にもつてきて練成をするためにそれらの上に手を重ねて置く。

イメージは薄緑色の大剣で、不要な装飾をつけない実用重視の無骨でありながらも力強さを感じさせる剣。

イメージを保ちつつ練成を開始する聰介。

音は既に聞きなれてきたバチバチという音が工房の中に響き渡る。

しばらくして目を開くと、そこには何も変わらないただの鉄塊しかなく、アダマンタイトが精製された様子は微塵もない。

「あ、あれ！？……失敗…？なん…？……………そうか…アダマンタイトは鉄に見えるけどアレは確か单一元素で構成されるものだっけ…。だから鉄じゃ反応しないのか…。でも、これじゃあどうやって作るのか分から…いし…。困ったなあ…。」

この世界にない元素をどうしようかと困つた聰介が、顔をあげると田の前でぼんやりと白い光を放つ魔鉱石が目に入る。

その様はまるで自分を使えと言つてゐるよつて、聰介の手は自然と魔鉱石へと延びていた。

「うーん…ただ、分解して配列を変えても意味ないだろうし…この魔鉱石の魔力を加えてみたら新しい元素が創りだせるかも…。可能性は低いかもしけないけど、やつてみる価値はあるかも。」

魔鉱石を使うことに決めた聰介は魔鉱石を鉄鉱石の隣へと移動させる。

聰介は魔力を操るすべは知らないが、聰介の手が魔鉱石を直接掴むと掌から冷たい水が流れ込んでくるような感覚がした。

きっとコレが魔力なのだろうと思いつながら、魔鉱石を効率よく使うために魔鉱石の部分とただの石の部分とに分けて、魔鉱石を一つにまとめる。

一つにまとまり巨大になつた魔石へと手をふると先ほどとは比べ物にならないほどの魔力が一気に体の中へと流れ込んでくる。

体から溢れだす限界ギリギリまで魔力を取りこみ、素早く鉄鉱石へ手を重ねて置き練成を開始する。

頭の中では、鉄の原子の中に魔力をねじ込まれた薄緑色の傷つかず刃こぼれしない最硬の金属をイメージし、体から溢れだしてしまいそうな魔力を鉄鉱石の上に重ねた掌から鉄鉱石へと放出する。

聰介の体からは余剰魔力があふれ出しその全身を神秘的な白い光で染め上げる。

光を発し続ける聰介はまるで聖書に出てくる聖人のように光り輝き、聰介を見るものがいたならばあまりの神々しさに目を奪われるだろうほどである。

溢れる魔力を体に押しとどめる聰介は歯をくいしばり、集中力をさらにあげて練成し続ける。

バチバチといつ音は既に変化して高圧電流の「」とくバチンッバチンツと弾ける。

その音がようやく止み、練成がおわったことを感じると、聰介のひざがガクンと崩れて片膝をつくことになった。

76

「ハハハ……これは……疲れる……なあ……。もうちょっと……慣れなきゃ厳しいなあ……。」

荒くなつた息を徐々に整え、溢れる汗を袖をつかつてぬぐつと予想外の疲労に、聰介は魔力を制御する技を身につけることを固く誓つた。

「これで出来ていなかつたら……考えたくもないなあ……。」

そういうと膝に力を込めて立ち上がり出来てゐるであらう剣へと田

を動かす。

そこには薄緑色の輝きを放つ、刃渡り95cm全長125cmの巨
大な剣がその威容を誇っていた。

余計な装飾をつけないその剣は、使われる時を今や遅しと待ち構え
て牙を剥きだす猛獸の姿を彷彿とさせる。

本物の剣だけが放つ迫力に聰介は一瞬氣押されるが、その剣を両手
にもつとすぐにざわざわと心がざわついた。

今すぐ斬りつけたい。

ふと疑問に思い、何を？と思つた瞬間、聰介はあわててその剣を手
放した。

聰介は知らずのうちに剣の持つ暴力性という魅力に引き込まれかけ
ていたことを感じる。

剣としての本質までも完成させられた剣は人を魅了する魔剣となり
うることを聰介が身を持つて知つた瞬間だつた。

聰介はこの剣は扱う人によつてはあまりにも危険すぎると思い、普
段は飾るだけで、売る時にはその人の見極めをしなければならない
と心に刻み込むとその剣を倉庫へしまつのだつた。

「ふう…。ちょっと引き込まれそうだった…。剣を創る時は氣をつ
けなくちゃいけないな。…ちょっと休むことにしようかな。」

倉庫へ剣を片づけ、工房から出でてきた聰介はベッドへと戻り一休みするのだった。

1時間ほど休憩すると聰介はすっかり元気になっていた。

かといって、無理をするつもりはなかつた聰介はそれからしばらくしてから工房へと戻ることにするのだった。

工房へ戻ると聰介はそろそろ開店にむけて品数を増やすなければいけないことに気づく。

売り上げがないとローンも返せれないし、生活も出来なくなるとうのは実に切実な問題だった。

手持ちのお金にはまだいくらか余裕があるが永遠にそれが有るわけではない。

そう決めた聰介は一番数を売り上げることができるだらう普通の鉄剣 もちろん不純物が少ないので鉄剣としては一級品 と、一般的な鉄製の防具 これも耐久力はかなり高い を製造することに決めた。

「うーん、これだけ有れば十分かな?」

セツコセツコの本田となる鉄剣をつくり終わると聰介はふうっと一息ついた。

それらを含め全ての武器と防具を倉庫へと戻り、商品の配置を考えるために店舗部分に移動する。

「…やつぱつぱよつと少ないなあ…。」

店内の商品の配置を考えた聰介だが、どうしても一角が空いてしまうことに悩み、どうするべきか考え込んでいた。

「つーん…防具も武器も置く場所はきまつてゐし、このスペースじやああまり置けないし…。」

キヤツキヤと表の通りで話し合つ女の子たちの声に、ふと顔をあげた聰介の目に映つたのは斜向かいに店を構える雑貨屋だった。

雑貨屋の前には木でつくれたアクセサリーを見ている女の子たちがいて、それをなんとなく眺めていた聰介の頭にうかんだのはアクセサリーをつくるところだった。

アクセサリーにしようと決めた聰介は、店から出て もちろん鍵はしたいき、染料屋と布屋にいった。

様々な色の塗料と布を買った聰介は、店へともどり工房に入ると、

鉄を鍊金術で成形して様々なデザインをつくり、それに酸化しないように塗料をかぶせると、布から練成した紐にソレラを通して、ネットクレスを20点ほど作り上げた。

それだけではあと少しスペースを埋めるには多少たりなかつたので今度は鉄製のバングルを10点ほど作り、染料を上からかぶせて様々な色のバングルを作つていつた。

仕上げたネットクレス20点と、バングル10点を飾り付けると、悩んでいたスペースがきれいに無くなり聰介は満足した様子だった。

それから工房へ戻り、魔鉱石から魔術師のための魔力回復の魔石の玉を5個ほどつくるとカウンターの上に置いた。

ぼんやりとした白い光を放つ魔石の玉を見て、見た目的にもインテリアっぽくていいと思った聰介はこれまた満足そうに笑顔をうかべるのだった。

これでやっと開店準備が整つた聰介は商品を工房の倉庫の中へとしまいこみ、新装開店のために掃除を始めることにしようとホウキを手にした。

遮るもののが無い店内で練成を行えば光が外にもれて鍊金術をつかっているのがばれるため、大変だなあと汗を垂らして感じつつもホウキを手に掃除に集中する聰介であつた。

掃除が終わると日が落ちてすっかり暗くなっていたので、聰介は前にエドガー達と食べた酒場らしきところで本日の晩御飯をとることに決めた。

酒場へと向かっているとエドガーが店の片づけをしていたので、声をかけて食事に誘うとエドガーは快い返事を返した。

2人が酒場につづくと前回と同じ席へ どうやらココはエドガーの定位らしい と案内され、適当に食事をたのんだ。

「ソウスケは今日は機嫌がよさそうだな、何かあつたのか？」

「そりいえばまだ言つてなかつたと思つた聰介は明日新装開店することをエドガーへつげた。

「実は明日、やつと新装開店するんです。それで今日は気分がよくて…。これもエドガーさんが右も左もよく分からなかつた僕を色々御世話してくれたおかげです。」

「いや、人生の先輩として少し手伝つただけだ。ここまで来れたのはソウスケ自身の力だ。俺はなんもしてねえよ。…それにしても、ついに新装開店かあ…。良かつたな、ソウスケ！」

エドガーは頭をかきながらそつは言つたが照れていることは少し赤くなつた顔を見ればすぐに分かつた。

「おい、お前らあー聞いたか!? 明日ソウスケの店が新装開店だとよーせつかくの新装開店だ、今日は全員で祝いの宴会にしよー。」

「おお、その坊主がお前が話してた新人か! よかつたな、坊主!」

「ふふ、オープンおめでとう、ソウスケくん。お姉さん応援してるわよー。」

「ふあふあふあ、君がソウスケ君じゃったのか。わしも応援しとるからのう。」

「あらやだーかつこいいわねー、おばさんのお店きたら安くしてあげるからねえ!」

「経営しつかりしろよーー！」

「今日はせつかくのお祝いだ、金はいらねえから明日に備えてたらふく食つていきなあ！」

エドガーが突然声を張り上げるとソレに答えるようにして店内にいたほとんどの人が口ぐちにお祝いの言葉をかけてきた。

どうやらこの酒場にいるのはエドガーと深い仲の人ばかりらしく、エドガーとおなじように面倒見がよく温かみのある人ばかりだった。

色々な人から祝いの言葉をかけられないと再度エドガーに話しかけられた。

「ワハハハハハ…」こいら辺で商売する奴らはこんな奴らばっかりだから安心して営業すりやあいい！それにこいらの奴らは助け合つたりして商売してるからソウスケも困つたことがあつたら誰にでもいえ！きつとなんとかなる…だからガンバレ！」

エドガーさんの応援の言葉に胸が熱くなるがソレを抑え込み、周りの騒ぎに消えないように大声で返事をする。

「僕も！エドガーさんの店に負けないぐらいがんばるんで見ていてください…絶対追いつきますから…！」

「ワッハッハッハッハ…！その意氣だ…！今日は飲むぞ…！」

威勢のいい返事を返したソウスケに満足したエドガーは豪快に笑いながら酒を掲げて一気に飲み干した。

騒がしい晚餐はソウスケが明田のために…と書いて途中で帰つてからも続き、笑い声が絶えることはなかつた。

005 魔鉱石と魔剣（後書き）

6324字で「〆」です。ついでに累計PVが1万をこえました
書き手としてはこれほど嬉しいことはないです。

コ一ーク数ももつすぐ2000に到達しそうな感じなのでとても嬉しい
思います。

でも、その分期待にこたえなきやという重圧は強くなる一方で…。
これからも皆様に満足していただける作品がかけたらいいなと思
います。

次回から商売が始まります。お楽しみに！

006 開店と繁盛

新装開店当日の朝を迎えた聰介は、緊張のせいかいつもよりも少し早い目覚めをベッドの上で感じていた。

いつもよりも早い目覚めになってしまった聰介はいつもどおり裏庭へ行くと、いつもよりは丁寧に身支度を整える。

身支度を整えた聰介がふと空を見上げると、朝もやがかかった太陽がやわらかな光をガーランドの町へ投げかけながら空の低い位置で顔をだしていた。

眠気が微妙に抜けない聰介だが、頬を手で軽く叩いて気合を入れると眠気は吹っ飛んで行つた。

裏庭から工房へと戻つた聰介は倉庫の中から商品を取り出してならべていく。

アダマンタイトの剣は名前を「ルシフェリオン」として棚の中でも一番見栄えのする場所に置いて、頑丈に鍵をかけたケースの中に入れ勝手に取りだせないようにしておく。

ちなみに値段は付けずに、鍛冶屋としての技量を見せる飾り剣のように見せかけて、一般の人では価値が分からぬようにして価値が分かるか試すことを、この剣を人に売るための第一の条件にした。

黒尽くめの刀の「小鳥丸」は、頑丈に鍵をかけてケースに入れるが

今度はちゃんと、5000ギルと小さな紙に書いて売り物であることをわかるようにしておく。

そのまま下に「刀シリーズ」1本1000ギル 順次生産予定と書いた紙を置いて、無銘の刀を設置するが、これは鍵をかけずに誰でも自分で触って見られるようにしておく。

隣の棚には、倉庫から5本だけ取りだしたダマスカス鋼の剣「ヴィリフィエラ」を10000ギルと書いた紙を傍に置いて、鍵はかけずにガラスケースに収める。

残りの普通の鉄剣はだれでも手に取れるようにビール瓶を入れるケースのような箱に1本ずつ分けて入れていき、その箱に1本700ギルと書いた紙を張り付けておく。

防具類は窓際にまとめて置いて、胸当てなどの軽鎧を600ギル、フルプレートなどの重装備のものを、800ギルと書いた紙を置いておく。

残ったアクセサリー類は、一律15ギルと書いた紙を机の上に置いて、更に机にブレスレットを置き、壁にはネックレスをつるす。

一応開店するだけの準備が整った聰介は最後に店内の点検をしていく。

とくに問題がみつからなかつた聰介は少しの緊張と大きな期待感を持つて新装開店の札を店先にかけるのであった。

しかし、開店の札を掲げる前から客が列を成すどころか30分しても客が一人も来ないので、聰介は失望と落胆を感じ始めていた。

よく考えなくてもわかることだが、この町には既にエドガーリーという大手の武器防具屋が店を構えていて今まで多くの客に愛されていることをようやく思い出した。

そのため、人が店内を外を歩きながら覗くといひとは有つても店内まで入つてくる客はいなかつたのである。

カウンターに突つ伏して泣いてしまおつかと半ば本気で考えていた聰介は、唐突に響いた店の扉の開く音にバッと喜びを多分に混ぜた顔をあげた。

「なんだ、この店は新装開店というわりには少し汚れているじゃないか。ふん、あまり期待できそつにはないな。おい、小僧。店主を呼んできて案内をせろ。」

開口一番エラそうに言い放つた金持ち風な年上の男は、ずんずんと歩いてきて聰介の目の前で腕を組んで見下しながら立たちをした。

絵に描いたような嫌味な金持ち風な男の態度に田を白黒させる聰介だが、すぐに気を取り直して対応をする。

「あ、はい。僕……いえ、私が店主のソウスケ・カミオでござります。

本日はゞのよつたものをお探しでしょうか？」

まづまづの対応をできただれりと思ひ聰介だが、田の前の男はしかめつ面をしたまま口を開く。

「なに？ 小僧が店主だと……？ ふん、変な店だな。まあいいの店で一番の剣を出せ。」

一番の剣…と聞き、一瞬だけルシフュリオンにちらりと田線を送るが、すぐにヴィリフィエラの方へと歩いていき、手に持つと男の方へ向き直る。

「当店で最も品質が良いのはこのヴィリフィエラでござります。この剣の独特的な模様は、この剣に使用しているダマスカス鋼という金属が持つ独特的な模様で、見た目にもデザイン性の高い武器となつております。強度も切れ味も一級品で実際に戦うことになつても高い性能を発揮してくれるだらうとこつ自信があります。切れ味ですが……」

「おい、それよりもあそこにある剣はどうなんだ。値段すらついてないがあれは中々の業物だらう。」

気づいてしまつたかとルシフュリオンに視線を送るが、見る田は有るみたいだがこんな自己中心的な男には渡すわけにいかないと思いつつ誤魔化すことにする。

「いえ、あれは飾りのものでして売り物ではないのです。申し訳ありませんが、この剣を…」

「ふん…残念だがしかたあるまい。わざわざ、さつきの説明の続きをしる。」

話を再度遮った男はめんべくわざと説明の続きを促した。

「では…」この剣の切れ味ですが、ここに鉄の板がござります。これを今から切って見せるので少々お下がりいただけますか？」

そういながら近くの棚から鉄の板を取りだしてきた聰介を胡散臭そうに見ながら、それでも男は2歩、3歩と下がって腕を組んで仁王立ちをした。

それでは…と言い、鉄の板を空中へと放りなげと素早く、ヴィリフィエラを振り上げ鉄の板へと真っ直ぐに振り下ろす。

空中で、ギインッといつ金属の擦れる音と共に、ヴィリフィエラに切り裂かれた鉄の板は、店の床へと落とると、ガインッといつ鋭い音を立てて床を削りながら数度はねた。

「…ありえん。こんな飾りのよつた剣が鉄の板を切つただと…? 小僧、貴様何をした!」

「いえ、普通に斬つただけでござります。この通り鉄の板もしつかりと本物を使つています。」

と言いつつ、床を跳ねて足元に転がつてきついた鉄の板をもちあげるとコンコンと表面を叩き本物の鉄の板であることを確認させる。

「そうですね。納得できなつよいでしたらこの鉄の板で試し斬りをしてみますか？」

どうしても納得できないといった表情の男へヴィリフイエラと鉄の板を渡すと、男は本物であるかどうか確認するように鉄の板をさわり、次いで刀身をなでたり叩いたりしてから柄を握り締め、鉄の板を宙へ放り投げると聰介よりもきれいなフォームで軽々と鉄の板を斬り裂いた。

自分が斬つた鉄の板の拾い上げ、その切り口と手に握られているヴィリフイエラをしばしの間驚いたように凝視した男はやつと口を開く。

「小僧…貴様、どこでこんなものを…。まあいい、これを買つうぞ。いくりだ？」

「10000ギルでござります。」

「剣にしては高い方だが…確かにそれだけを払う価値はあるだろ?」

よし、銅色札一枚だな、受け取れ。」

一瞬渋つたが、すぐに支払うことを決めた男は懐から銅色札を一枚とりだすと聰介へと無造作に放り投げる。

あわてて銅色札を受け取った聰介は、10000ギルは流石に高すぎるかもと思っていた割にはあまりにあっさりと支払われたことにビックリするのであった。

受け取った銅色札から田線をすぐに上へとあげると既に男は扉を開けて出ていくところで、聰介はあわてて声をかけることになった。

「ありがとうございました！」

最後まで言う前に店外へと男はでてしまつたが、初めての商売が一人とはいえたことに興奮する聰介にはそんな些事はどうでもよく思えた。

「やつたー！まだ一人だけど主力商品が売れた！これならこれからも売れていきそうだ！」

思わず小躍りしてしまいそうな自分を自覚しながらカウンターへと戻った聰介は、イイ気分のままカウンターへ肘をつき鼻歌を歌うのであった。

しかし営業時間はまだまだ始まつたばかりだ。

その後も上機嫌でカウンターでお客を待つていた聰介だが、客が来ないのにその上機嫌が続くことは無く、男が去つてから1時間もするとまたも聰介の顔はくもつていった。

それから、さらに1時間過ぎたころに異変が起きた。

することもなくぼうつと外を眺めていた聰介の耳には、馬がカコッカコッと音を鳴らしながら近づいてくる音が聞こえていたが、どうせどこかの店にいくのだろうと気にもとめなかつた。

しかし、聰介の店の前で唐突に止まつた馬達から2人の男が下りてくると、足早に店の扉の前までくるとガランガランとベルをならしながら入ってきた。

馬を使ってまで来た2人に何の用事だろうといぶかしむ聰介の目の前まで、装飾のついた鎧をガシャガシャと鳴らしながらきた2人は、未だにぼうつとしている聰介に話しかける。

「君がこの店の店主かな？ 我らはカーテイス殿から君のところで買った剣の話を聞いてきたガーランド守備隊隊長のものだが、カーテイス殿に売った剣をみせてくれないか？」

「あの、カーテイス殿とは… 一体どなたなのでしょうか…？」

厳つい恰好をした2人へ恐る恐る質問を投げかける聰介。

「む、知らないのか?... カーテイス殿とは、このガーランドを治めるカーテイス・フォン・エルメロイ・アーチボルト殿のことだ。朝の早い時間に豪華な服装の人があがきたどう? その人がカーテイス殿だ。我らはカーテイス殿の部屋に警備の報告へと赴いたところ、その剣の話をカーテイス殿から聞いたのだ。」

「そうだったのですか。あの方が...。話に出てきていた剣を案内しますので少々お待ちください。」

金持ち風ではなく実際に金持ちだったんだ... と思いながらも、ヴィリフィエラを入れていてるケースの前まで行き、そこからヴィリフィエラを1本取りだすと2人の前に歩いていく。

「これが話に出てきていた剣... ヴィリフィエラドライゼーです。この剣は...。」

「いや、話は既に聞いている。その切れ味を見せてくれ。」

話を遮られて 本日三度目である 少し残念な聰介だが、気を取り直すと鉄の板をカウンター下から取り出して斬つて見せた。

「むう…話には聞いていたがこれほどの切れ味とは…。店主。その剣…ヴィリフィエラといったか…。我らに2本売つてくれ。」

「我らの武器は市販のものが切れ味が悪くて最近買い換えようとおもつっていたのだ。」

「承知いたしました。お買い上げ10000ギルになります。」

値段をつげると、カーティスから値段はきいていたのだろうか、2人は顔をしかめることもなく直ぐに懐から財布を出して開き、その中から銅色札1枚をそれぞれ聰介へと手渡した。

2人より合計銅色札2枚を受け取つた聰介は、再度ヴィリフィエラを取りにケースへいくと中からもう1本取り出し、2人の前まで行き、ヴィリフィエラをそれぞれに手渡す。

「店主。試しに表で打ち合つても構わぬか?いや…疑うわけではないが、もし不都合があつた場合に直してもらいたいのだ。」

「わかりました。ただし、通行人に被害が及ばないようにお気を付けを…。」

「その点は重々承知している。では…。」

そういうと2人は店から出て行つた。

受け取つた銅色札をしっかりと箱の中にしまい、打ち合いを見に外

にすると、既に2人は物珍しさに集まる見物人に円状に囲まれていた。

2人は、片方が今まで使っていた武器を身につけ、もう一方が、たつた今聰介が売ったヴィリフィエラを身に着けていた。

二人は短く声を掛け合つとお互いへと走り込み剣を打ち合つ。

上段からの斬り下ろし、斬り上げ…ギンッギンッと剣を打ち合つ音を通りに高らかに響かせながら、一合、一合、三合…と数を重ねていく。

六合目で、ガンッと一際鈍い音を立てて剣同士がぶつかると、ヴィリフィエラが普通の剣を半ばから叩き斬つてしまつた。

打ち合いが終わつた2人は折れた剣のかけらを拾いあげると聰介の目の前まで来る。

目の前まできた2人に聰介は感想をきかせてもらおうと口を開く。

「どうでしたか？何か問題点はあつたでしょ？」

「いや、とてもいい出来の武器だ。確かに10000ギルも払うだけの価値はある。問題点も見当たらないし、剣の模様も興味深い。気にいったよ。」

「ありがとうございます。今後ともよろしくお願いします。」

ベタ褒めされた聰介は2人が馬に乗つて去つて行くのを終始笑顔で見送ると、店へと戻つた聰介に待つていたものは店内へと押しかけてきた冒険者達の、俺もヴィリフィエラを売つてくれという合唱だった。

「いくらだ！？あの剣を俺にも売ってくれ！」

「あの剣は俺に」そふをわしい！

「ふざけんな、こんな奴らじやダメだ。俺に売れ！」

僕も買いたいのですが……。

私に売らなきしよ！」

「ねえ……お姉さん」「うつてくれなあい?」

冒険者達の言葉をまとめると、つまりは自分に売つてくれという自己アピールの嵐だつた。

「あの剣はヴィリフィエラと言って、値段は10000ギルです！」

いきなりの盛況ぶりに混乱しつつも最初の質問に答えようとした声を張り上げた聰介に返ってきたのは嵐は嵐でもブーリングの嵐だった。

「はあ！？ いくらなんでも高すぎるだろー。」

「 もうと安くしろー。」

「ふざけんな！ 剣にそれだけ払えるかー金の「者かよー。」

「高すぎると思こます…。」

「ちよつとーそんなに高くちゃ買えないじゃないー。」

「…安くしてくれるならお姉さん、抱かれてもいいわよおー。」

一人妙なことを口走っていたが、収集がつかなくなってきた店内の様子に聰介は辟易とした。

「 聰さん静かにしてくださいー！あの剣は性能が良すぎる代わりに大量には生産できませんし、安い値段で多く出回るのは危険なんです！だから多少高いとは分かっていますがあの値段にするしかないんですね！どうか理解くださいー。」

そつ店内にいる密達に言い放つとぶつぶつとは言いながらも納得してくれたのか静まってくれた。

ある人は外に出ていき、またある人はそのまま店内にとどまって他の品を眺め始める。

帰らずに口説いてくるお姉さんには丁重にお帰りいただいた。

興味が無いわけではないが、いくらなんでも理由が不純すぎる、そんなに安い男ではないのである。

「すいませーん。ここに置いてある剣もらえますかー？」

カウンターで店内の様子を見ていた聰介が、声の聞こえた方へと向くと、1本700ギルの鉄剣をそれぞれ1本ずつ持った4人組の冒険者達がカウンターにいる聰介の前に立っていた。

まともな冒険者達に安堵しつつ、営業用のスマイルを作りながら聰介は対応を取つていくのだった。

「一本700ギルになります。まとめてお支払いでしょうか？それとも別々の支払いでしょうか？」

「別々の支払いをお願いします。では…700ギルです。」

4人組からそれぞれ700ギルずつ受け取ると、聰介は店外へ出でいく4人組の冒険者へ、またのお越しをお待ちしておりますー、と声を投げかける。

「すいませーん。ちょっとといいでしょつかー？」

「はい、今行きます。」

息をつく暇もなく次の客の対応へと移る聰介は大変そつで額にしつらと汗をかいているが、心なしか喜んでいるようだ。

「いかがいたしましたか？」

「LJの防具をちょっとつけてみてもいいですか？」

「ええ大丈夫ですよ。会わなければ横の紐で調整できますので…。」

窓際に10個ほど並べている防具の中から鉄製の胸当てと籠手のセットを手に取る女性客が試着を申し出できたので許可を出すと服の上から付け始めた。

それを見ていると今度は後ろの方から男の声が聞こえる。

「ねえ、ちょっとといいかな？」の刀つていつのを見せてほしいんだけど…。」

「はい、少々お待ちください。」

そう言いつつ、女性客のもとを離れて刀を入れているケースの蓋を開けて刀を取りだすと刀身を引き出して説明を始める。

「この剣は刀といいまして、ここよりも東方の島国で使われているものです。これの使用方法は一風変わつておりまして、盾などの防具を手に持たずに両手で握つて、この反りを利用して引きながら斬るのであります。この反りのために、引きつけながら斬ることによって切れ味が格段に跳ね上がるのですが、防具を持たないスタイルになるので防御を刀でしなければなりません。かといってこの剣で受け止めると刀身の細さ故に叩き折られてしまうので、相手の攻撃は刀を使つて受け流さなければいけません。ですが、使いこなせるようになれば、とても素早い攻撃を仕掛けられるので素早さを重視する方にはオススメしています。」

「へえ、面白い剣だね。刀身部分に入ってる模様もクールでカッコイイね。」

「ありがとうございます。この模様は刃紋と言いまして、焼き入れと呼ばれる作業の過程で、温度の違いをつけることによって出来る独特の模様です。この作業は見た目そのためだけではなく、刀に柔らかさを出して折れにくくするという意味もあるのです。これのおかげで刀という武器に美術品的な美しさと実用品的な強さを加えられるんですよ。」

「確かにキレイだね。慣れるまで苦労しそうだけど、切れ味も良さそうだし使ってみるとするよ。」

自分の国が誇る刀を褒められて上機嫌になつた聰介が説明をつづけ

た甲斐も有つて、男が購入の意思を告げると聰介は更に上機嫌になつた。

「ありがとうございます。通常は1000ギルなのですが、今回は刀シリーズの初めての購入者ということで850ギルにて販売いたします。」

「もつとするのかと思つていたけど意外に安くて安心したよ。これで安心してこれからもこの刀を使えるよ。」

自分の腰の袋の中から100ギル硬貨8枚と10ギル硬貨5枚を取りだしながら言つた男性客に刀を渡すと男は去つて行つた。

ありがとうございましたー、といつてから先ほどの女性客のもとへと戻ると、試着し終わつたのか脱いでいるところだった。

「試着してみていかがでしたでしょうか？」

「うん、悪くはないわね。何より着けやすくて外しやすいのがきにいつたわ。これを一つお願ひ。」

「ありがとうござります。こちらはセットで600ギルになります。」

「わかつたわ。はい、600ギルよ。傷ついた時は直してもうえるのかしあり?」

「小さな傷なら無料で直しますが、大きな傷の場合にはそれに見合つた分の金額は請求させていただきます。」

「そう、わかったわ。ありがとう。」

「ありがとうございましたー」と見送った聰介は多少疲れていたが、そんなんに簡単に休むわけには行かないと思つて気合をいれる。

そんな気合をいれる聰介にかかる声は若い女性の声だつた。

「ねえお兄さん。」このアクセサリーってなんでこんなに安いわけ？普通は魔術が掛かっているからもっと値段するんじゃないの？」

アクセサリーに興味を持つてくれた！と思つた聰介は疲れを吹き飛ばして満面の笑みを浮かべて返事をする。

「そのアクセサリーは魔術が掛かって無いので安いんですよ。これは使用者をサポートする装備ではなく、誰もがオシャレを楽しめるようにと諂つて作ったものなんです。ですから誰もが気軽に買つことができるように値段を大幅に下げて販売しております。」

「へえー。確かに色々なデザインやカラーのものがあるしオシャレするのにちょうどいいかも…。このネックレスとバンダルをもらえる？」

そう言って握っている商品を見ると、その手の中にはクロスのネットクレスと白色のバンブルが握られていた。

「2つあわせて30、ギルになります。他にきいろいものが有れば声をおかけ下さい。」

支払いがすむとまた商品を長めに戻った女性客にそつ声をかけながら、ようやく落ち着いてきた店内に聰介は一安心するのだった。

それからカウンターへ座った聰介のもとに支払いをしきたのは、鉄剣を買うために6人ほど来ただけで、あとの客はちらほらとかえつていった。

客もいなくなつて広くなつた店内を見回すと、初めての接客で疲れた聰介は本日の営業を終えることを決めて店の扉に閉店の札を出したあと、鍵をかけた。

疲れた聰介が空気を吸いに裏庭へでると「ンン」と何か固い物があるような音が扉の向こうから響いてきた。

なんだろう、誰かいるのかな?と疑問に思った聰介が裏通りへと出る扉をゆっくりと押し開けて、音の聞こえた方へと顔を向けた先にいるのはボロボロになつた服とたくさんの傷を負つた男だった。

それは、赤くなり始めた空に太陽が沈みはじめた時のことであった。

今回も長めな7957文字です。眠気のあまり誤字があるかもです。次回はちょっとした事件が起きますが、その事件は重要な事件になるのでよく覚えていてほしく思います。いわゆる伏線ですとも、しばらく出る予定はないですが記憶の片隅に残してもらえば幸いです。それでは、次回もお楽しみに！

007 重傷者と盗賊

目に映った男はみるからに重傷で今にも死んでしまいそうだった。着ているマントはズタボロで、中に着ている服は所々破れていてそこから血がにじんでいる。

そのうえ、背中の右肩から左脇腹へと一際大きな切り傷が一筋走っている。

そこからにじみ出る血は中の服だけでは飽き足らず、マントさえも赤黒く染め上げていた。

このまま放つておけば間違いなく死ぬだらう男を見かけても、この世界の住人ならよくあることだと言つて係わりあいにならうとせずに放つておいただらう。

しかし、この世界の人間ではない聰介にはそんなことは関係無く、助けなければいけないという責任感に駆られて男に話しかけるのだった。

「大丈夫ですか！？今運びますのでちょっと我慢してください！」

「ゴホッゴホッ……まで、動かすな……」

「ですが、そのままでは…」

内臓にまで届くほど深い傷は見当たらなかつたが、口から血を吐いてせき込む様子からすると打撃が何かで内臓も多少傷ついているのだろう。

しかし、動かすな……と言つた男に対して聰介はつい声を大きくしてしまつた。

「ゴホッ……魔力さえ有れば回復できる……あんたここの鍛冶師だろ……魔鉱石か魔石がないか？」

「……今持つてきます！待つていて下さい！」

男の言葉を聞くや否や聰介はその場から走り出して工房を通り抜け店前のカウンター前まで行つた。

今聰介の目の前には白色の光を放つ魔石の玉があり、5個すべてを引っ掴むと裏庭へとかけだしていく。

男のもとへ戻つた聰介がみると男は先ほどよりも心なしか顔色が悪くなつてゐる。

「魔石を持つてきました！これです！」

聰介が魔術師の手へ押しつけるように渡すと、3つほど手から「ほ

れ落ちたが、男は残り2つを握り締めると皿をつむった。

魔石を握った男が目をつむって何やら小声で呟きだすと、傷を負っていた場所が傷を覆うように光り始める。

10数秒もすると次第に光が薄れていき、光がおさまった後の肌には血はついていたが傷はキレイに無くなっていた。

「すまん……助かった……」

そういうと男は立ち上がり、バランスを崩して堅い壁に肩をぶつけてしまった。

「なにしてるんですか！まだ治ったばかりじゃないですか！」

聰介は荒い息を吐く男に肩を貸しながら、ついつい男を家の中へとつれていく。

なんとか二階へと連れて行きベッドへと寝かせると男はよほほじ体力が落ちていたのかすぐに眠りこんでしまった。

とりあえずの山場をなんとか乗り切った聰介は売れ残った商品を片づけ始めるに至った。

ルシフェリオンとアクセサリー以外の全ての商品を倉庫へと片づけ終わったところで、二階から「トッ」という音が聞こえてきた。

まさか……と思つて急いで一階へ駆けあがり部屋の扉を開けると、男が立ち上がりながら歩いて「よつとしているところだつた。

ふらつく男をベッドへと押しつけると、男はなおも立ち上がりつとしたので聰介はまた押さえつけた。

「こんなにフラフラなのにどうして言つんですか！大人しくしていて下れ！」

「だが……俺がここにいると迷惑をかけちまつ……もう俺は大丈夫だ……」

「全然大丈夫じゃないですよ！今は体力が落ちているんですから、安静にしておかないといえ。怪我人なんですから迷惑をかけるなんて心配をせずに、体力の回復に努めて下さい」

聰介が言つと男はよつやく動きを止めた。

「すまない、世話になる……今晚だけ一休みしたらすぐに出ていく。それまで休ませてもらおう」

「困つた時はお互い様ですよ。それとこの魔石を握つていて下さい。あなたが使つた魔力が回復するとと思つので」

男が礼をいふと聰介は、ホッとした表情になつて言葉を返しながら、

裏庭から戻つてくるときには拾つておいた魔石の玉を一つ渡した。

男がその球を受け取つて寝はじめると、聰介も口中の疲れがたまつたのか眠くなってきた。

男が夜中苦しむかも……と思つた聰介は壁へよいかかると寝息を立て始めた。

外の太陽はほとんど沈み、空には深い群青色の空が東側から迫つていた。

日が完全に沈み、深い夜の帳が下りて数刻たつたころのことだった。

「お頭……あの野郎が連れ込まれたつて家がここらしいとのことです」

「ああ、あの野郎だけは生かしちゃおけねえ……情報がバラされる前に俺らが奴をバラすぞ。」

「へい、分かりやした」

不穏な言葉を漏らしたのは、全身を黒色の服で覆つた数人の男たちだった。

黒装束の男達の田の前には聰介の家の裏口があり、そこを開けようと一人の男が細い工具と共に近寄った。

しかし、裏口に鍵穴は無くてドアノブしかなかったので男は顔をしかめて戻ってきた。

「すいやせん、お頭……。鍵穴がないんですが……。」

「ぐそー！内鍵かよー！ わては古い家だな、ちくしょー表にまわるぞー！」

お頭と呼ばれた男は悪態をつきながら表の通りへと回るのだった。

表へと回った黒装束の男達が通りに田を光らせるなか、さきほどどの男が工具を持って店の部分の扉の前に立つた。

扉についた鍵穴を見かけると男は素早く工具を差し込み、慣れた手つきで工具を動かして鍵をあけた。

ガチャツという音と共に開いた扉はスウツと内側へ開いていく。

「お頭開きやした。」

「でかした。中に入るぞ。」

店の中へと入った男達が店内を見回すと、壁際に置いてあるアクセ

サリーが目に入った。

「なんだ、こりやあ？……魔力もねえし、ただのアクセサリーじゃねえか。こんなのが売れるのか？」

手にとつてみたお頭は魔力が籠つて無いバンブルとネックレスをみると不思議そうに頭をかしげた。

「お頭。なんか凄そうな剣がありやすぜ！」

小声でそう叫んだ男の前には薄緑色の剣がケースに入つたまま置いてあつた。

それは聰介がしまい忘れたままだつたルシフェリオンだつた。

「これは……なかなか……。おい、これの鍵外せ。こりやあ売れば結構な値段になりそうな業物だぜ」

「へい、今外しやす

そういうと扉を開けた男は、ケースに掛かった鍵の鍵穴に工具を差し込むと素早く鍵を開けた。

中からルシフェリオンを取りだした男は、ルシフェリオンを運ぶた

めに自分の背中に掛けた。

それを見届けたお頭が目をカウンターに向けたところで暗闇にまぎれて動く1人の男を見つけて。

それは口封じに殺そうとしていた男の姿だった。

「みつけたぜえ。」のネズミ野郎が……。大人しく俺らに殺されなー。」

お頭が見つけたその男は、聰介が助けたあの男だった。

ベッドで寝ていた男はガチャツという音に続いて階下から聞こえてきた微かな足音に耳をすませていた。

くそ、もう追手が来たのかと思った男は懐から短剣を取り出して右手に持つ。

暗くなつた部屋に慣れた目でまわりを見渡すと壁によりかかるようにして眠る聰介の姿が目に入った。

これ以上迷惑はかけられないと思つた男は足音を殺して部屋の外へとである。

階下の音を探りながらながら階段を下りていくと敵はまだ物色しているだけでこちらには気づいてはいなかつた。

「気づくなよ……」と思いつながら身をかがめてカウンターの下まで近づいていくが、まだ気付かれない。

しかし、カウンターから出でしまつたところで後ろを振り向いてきた男にみつかつてしまつた。

男はこちらを見て獰猛な笑みを浮かべると言葉を発した。

「みつけたぜえ。」のネズミ野郎が……。大人しく俺らに殺されな！」

「へへ、やつぱつお前らかーしつ！」さあやめやめー。」

見つかつたとなると、上に行けば聰介が……、出口に向かえば敵につかまると見た男は窓へと腕を交差させながら突っ込む。

ガシャーンッと音を立てて窓から飛び出した男はしばらく進むと、全員を聰介の店から引き離すために後ろへ振り返つて敵がついてきているか確認をした。

男は、男達も店から出てきて追いかけてくるのを確認すると再び通りを全力で疾走する。

引き離すために何度も姿を見せた後に、男は全力で走つて追手をまいた。

男はそのまま夜の街を走つて「ど」かへと消えていったのだった。

「おい、君！ 大丈夫か！ おい、起きろ！」

突如大声で起こされた聰介の目の前には、銀色の光を放つ鎧を着た守備隊の騎士がいた。

家の中にいる騎士に不思議に思つてなぜいるのかと尋ねると答えが返ってきた。

「覚えていないのか？……我々守備隊は早朝に君の店の窓が割れていふとの報告を聞いて駆けつけたのだ。どうやら賊がはいつたらしい。しかし、幸運だつたな。ひとつの中身が盗まれていたようだが、君は無事に眠つっていたんだからな！」

ケース？と思つた聰介は、昨日倉庫にしまった作業の途中で、男の看病をしてそのまま寝てしまつたことを思い出した。

嫌な予感を感じた聰介は、部屋を飛び出して階段を駆け下りていく。

階下に降りた聰介の目の前には何事かと集まつた人たちが見えたが、

それらを通り抜けて、蓋が開いているケースの場所を発見する。

そこはルシフェリオンが収められていたケースの場所で、そのケースには、昨日聰介がしまったのを忘れたルシフェリオンが入っていたはずだった。

しかし、今や空気が入っているだけで、薄緑色の輝きを放っていた剣は影も形もなくなっていた。

嫌な予感が当たり、ルシフェリオンが盗まれたという事実に気付いた聰介は茫然と立ち尽くした。

そこに二階から下りてきた騎士が声をかける。

「君、いきなり走って行くなんて驚くだらう……ん？そんな茫然と立ち尽くしてどうかしたのか？」

「剣が……ルシフェリオンが盗まれたんです……」

「ルシフェリオン？まあ商売には少々痛手かも知れんが命があつただけ良かつたじゃないか」

ルシフェリオンの危険性をただ一人知っている聰介は気が氣でなかつたが、昨日看病をしていた男のことをふと思い出した。

「あの……もう一人男の人がいたと思うんですが、その人は今どこにいるか分かりませんか？」

「男？いや、みて無いが……。それが犯人か？」

「いえ、昨日裏通りで倒れていたので助けたんです。それで、一階のベッドでやすませていたなんですが……」

聰介がそういうと騎士が、その男について聞かせてくれと言つてきたので、傷を負っていたことや迷惑がかかるといつていたことなどを全て話した。

「せうか、そんなことが……。我々でも調査はするが……」最近窃盗の被害が多発しているので犯人は捕まえられないかもしれません。君は家の戸締りをしつかりしとくんだ、いいね？」

そういうと騎士は馬に乗つてかけていつてしまつた。

「失礼。ソウスケ・カミオ様ですね？」領主さまがお呼びですのでお屋敷まで一緒にきてくださいますか？」

茫然とする聰介に後ろから声をかけたのは執事服を着て髪を生やした男性だった。

「え？あ、はい……」

茫然としていた聰介だが、返事をするとすぐに馬車へ乗せられてガタゴトと揺られながら道を進んでいった。

しばらくすると町の中でも一際大きくてキレイな屋敷へと連れてこられた。

朝焼けに輝く屋敷はとてもきれいで、町の中で一番美しい建物だった。

馬車から下ろされた聰介は屋敷の煌びやかな廊下を通されて応接間へと連れてこられる。

「今お呼びしてきますので少々お待ち下さい」

そう言つた執事服の男性は退出していき、豪華な部屋には聰介だけが残された。

部屋の隅には高級そうな壺や絵画などの調度品があつてあり、床には毛足の長い絨毯、ソファはとてもフカフカで、机は一切の汚れがないし傷も見当たらない。

高級すぎる物が多すぎる部屋に、聰介は微妙に居心地を悪く感じていた。

しばらくすると先ほどの執事服の男性が、2人の男を連れて戻ってきた。

2人のうち1人は見たことが無かつたが、見るからに高級そうな服を着ていたので恐らくはこの屋敷の主だるうとあたりをつけた。

もう一方の男の方はといつと、なんと昨晩聰介が助けたはずの男だつた。

しかし、昨晩とは違つて着ている服は、ボロボロだつた物から真新しいキレイな服になつていて、顔色は昨日よりはだいぶ良くなつていた。

聰介が2人を見ていると、2人は聰介の前の椅子に腰かけてから口を開いた。

「君がソウスケ・カミオくんだね？私はこの屋敷の主のアームストロング・エドウイン・ハワードだ。昨晩は私の息子が迷惑をかけてしまつたようだ、申し訳なかつた」

「俺が息子のダンテだ。昨日はおかげで命拾いをした。しかし、そのせいで君に迷惑をかけてしまつた。本当にすまなかつた。」

「いや、そんなに謝らないで下さい。あれは僕が勝手にお節介を焼いただけですし、命にかかるようなことは無かつたんですから」

「そつはいつてもそれではこちらの気が済まない。騎士に聞いたが剣が盗まれてしまつたのだろう？お詫びと言つてはなんだがこれを受けとつてもらいたい。」

そういうと執事服の男性をよんと、こちらに銀色札1枚を差し出し

てくる。

「いえ、そんなにもいただくわけには……」

聰介がそう返すが向こうはがんとして譲る気が無いみたいだ。

その様子を見ると結局聰介はそのお金を受け取ることに決めた。

「ところで、昨日何が起つたんですか？」

何も知らない聰介は昨日の夜起つたことについて聞くことにした。

2人は一瞬渋つた顔をしたが話すことにきめたようだつた。

「実は私たちは、街道を通る時に出没する盗賊について調べていてね。これが中々手強くて全く尻尾を見せない盗賊だつたんだ。一向に尻尾が掴めないことに業を煮やしたダンテがついに潜入することに決めてね。盗賊のアジトに数日間潜伏して情報集めと証拠集めをしていたんだ。しかし、脱出する時になつて見つかってしまつたらしくてね。多くの追手に追われながらもなんとか町へたどり着いたんだが、町に入る前に斬りつけられた傷が原因で、途中で力尽きてしまつたらしいんだ。そこが君の店の裏通りの場所だつたというわけだね。」

「それからは君のところで数時間ほど眠つていたんだが、深夜遅く

に階下から物音が聞こえてきたんだ。不審に思つて下に降りてみたんだが、予想通り盗賊の追手で、悪いとは思つたんだが窓を破つて逃げさせてもらつた。剣のことは暗闇で分からなかつたんだ、悪かつた。思い入れのある大事な剣だつたのか？」

「思い入れがあるつてわけじゃなかつたんですけど、あの剣は一番危険な剣だつたんです。切れ味も頑丈さもそうなんですが、一番危険なのがあの剣を持つと凶暴な性格になりやすいんです。それこそ殺人狂になりかねないほど……。ですから、早く取り戻さないと……」

途中で説明を変わつて引き受けたダンテが聰介に剣のことを聞くと、聰介は苦虫をかみつぶしたような顔になつて言葉をもらした。

そんな聰介の様子をみたダンテは一言、すまないと言つと言葉を切つた。

「旦那様……そろそろ……」

執事服の男性が、アームストロングにヒソヒソと小声で話しかけるとアームストロングは小さく首を縦に振る。

「すまない、ソウスケ君。そろそろ仕事を始めなければならないのでこれで失礼することにするよ。その剣のことは私達でも調査はするが、見つかる可能性は低いと思つ。もし、見つかったら届けさせるから待つ正在してくれ。では、失礼」

おもむろに立ち上がったアームストロングが聰介へそう告げると執事服の男性とともに豪華な絨毯を踏みしめながら足早に退出していった。

「俺も仕事があるから今日はこれにて失礼させてもらう。また今度いかせてもらうが、今度は密としていくからいい武器を用意してくれ。」

アームストロングを見送ったダンテも、ソファから立ち上がって扉を開けて外へ出て行ってしまった。

それからすぐにメイド服姿の 実用的なものなのでフリルは無駄についてない 女性が聰介を馬車まで案内して送つて行つた。

家へと送られた聰介は、御者に礼を言つと窓が割れた店内に戻つていいく。

店内へと戻るとそこには心配そうな顔をしたエドガーが立つていて。

帰ってきた聰介を見つけたエドガーは、心配そうな顔をしたままズンズンと近づいてくるのであった。

6424文字です。ずっと座っているので腰がいたいです。
話数も増えてきて7話となりました。

10話からは更新スピードをおとやつかと思っています。
さすがにこのスピードで更新し続けるのはきついです；；；
それでも、読んでくれるという方は今後もよろしくです。
それでは、次回もお楽しみに！

008 警護と装備作り

「おい、ソウスケ。聞いたぞ、賊に入られたんだってな。ここ最近たまに盗賊みたいな奴等がいるようなことがあるってのは聞いてたんだが、まさかよりもよつてソウスケのところに入るとは思つてなかつた。スマン、このことはソウスケにも伝えておくべきだつた。悪かつた。今後も現れない保障は無いから家の鍵を変えておいたほうがいいと思うぞ。時間が出来たら鍵屋に行つて変えてもらえ。ああそれと不安なようならギルドで警護依頼もできるからな。じゃあ店があるから俺は戻るぞ」

一気にそういうとエドガーは反対方向に走つていつた。

この時間に店の前で待つていてくれたということは、自分の店を抜け出して様子を見に来てくれていたのだろう。

ありがたく思いながらも店内を見回すと、割れた窓と、割れたガラスの破片が床に散らばっていた。

聰介は散乱したガラスの破片を片付けようと思つて、外に散らばったガラスを集め、次に店内に散らばったガラスを片付け始めた。

散らばったガラスを手で一つ一つ拾つていく聰介は、あと少しとうところで、右手の人差し指を浅く切つてしまつた。

「いたつ……」

薄く切れた傷口から血が滲み出してきて、すぐに大きな血の玉となって店内の床へと落ちていく。

なおも血が出てきやうになる人差し指を口に咥えて、舌で傷口を舐めて我慢をする。

こんなときに絆創膏があればなあと思いながら、残った破片を手早く片付けると工房の片隅にまとめて置いておく。

工房から出てきた聰介は、エドガーから言われたとおりに、鍵屋とガラス屋にいくことにした。

窓は割れているが、扉は一応施錠した聰介は、通りを北に向かって歩いていく。

しばらくするとガラス屋の工房が見えてきたので中へと入り、窓ガラスの修理を依頼する。

代金を渡すと今から行くと言つたので、行くところがあるから先にやつておいてほしいと返し、店をでた。

そこから数分ほど歩くと、さまざまな鍵を店先に置く店を見つけたので、狭い店内を進み店の主人のもとへとたどり着く。

「へい、らつしゃい。鍵のスペアかい?」

「いえ、昨晩盗みに入られたので扉の鍵を新しいのに変えてもらおうと思つてきました」

「へえ～、若いのにあんたも災難だつたねえ。まあ、安心しな。うちのこの最新の鍵、名づけて『安全守る君』にかかればバッチリさ！なんてつたつて、こじらで最新の技術を使った鍵だからな。鍵と番号式の二重ロックで安全をまもるぜ！」

「は、はあ……それは……す」「」ですね

聰介はネーミングセンスの無さに呆れながらも、とつあえず返事を返すのだった。

とはい、複雑な形をした鍵と5桁のダイヤル式の暗証番号で守られた鍵は、確かに開けるのは困難そうだった。

「んで、お客さん。今から換えにいけばいいのかい？」

「お願ひします。案内しますので一緒にこじらきて下を。」

聰介がそつ返して先に代金を渡すと、奥に引っ込んだ店主は数分後に工具と安全守る君を持って通りにでた。

通りを雑談しながら歩いていくと、聰介の店の窓ガラスの修理を終えた業者が聰介を発見し、声をかけてきた。

「窓ガラスの修理おわりましたよ。今後も「ひのガラス屋」をよろしくおねがいします。」

そういうと業者の方々はガラス屋のまつへと帰つていった。

店に着いた聰介は鍵の交換をしてもらつと、鍵屋の主人に別れを言って帰つてもらい一人になつた。

それから一息ついた聰介は10分ほどしてから、今度は冒険者ギルドへと出かけた。

時間は太陽が真上に昇つていて、ちょうどお昼時だ。

聰介が冒険者ギルドへと入ると、酒場を兼ねてているスペースで、例の3人組が昼食を食べているのが目に入つた。

知り合いを見かけた聰介が、挨拶をしようと思つて3人組に近づいていくと、こちらに気づいたジョージが声をかけてくる。

「はれ？ ほーふふえひゃん？ ほーひはんは？」

口にたくさんの食べ物を含んだままで。

「ちょっとジョージー！ 口に食べ物いたまましゃべらないの、行儀悪いでしょ！……あれ、ソウスケじゃない。こんなところでどうしたの？」

ジョージに注意をしたエミリーは、ジョージが向いて立っていると顔を向けたので、聰介に気が付いた。

「ちょっと警護依頼をしようかと思つて……。実は……」

事情を話すと3人組は黙つて真剣に聞いていたが、話終わるとジャックが口を開いた。

「それ最近噂されてる『暗闇の狩人』って盗賊団じゃない？ 日中は活動しないらしくて夜だけ活動するからそういう前からじよ。」

「ああそれがあ……。私もたまに聞くね、その名前。……ねえ、私たちでソウスケの警護依頼引き受けない？ 最近依頼受けてないし、警護依頼なら安定した収入になるしさ。」

「ああそうだな。ちょうどいいじゃないか。よし、その依頼俺たちが引き受けるぞ、ソウスケ！」

3人で話してすぐに決めると、ジョージが聰介に依頼を引き受ける

と言つてゐる。

「ありがとう……でも、危ないよ？大丈夫？」

「私たちは冒険者ギルドでも実力は高いほうなのよ？……そのせいで最近依頼受けてないんだけどね。ランクの低いのをうけちゃうと、実力がまだない冒険者が育たないからつて自肅するのが暗黙のルールなのよ。それにここら辺じやあランクが高い依頼も少なくなつてきたしね。」

心配をした聰介がたずねると、H//ローは笑顔で言つてから、その後に口を尖らせて愚痴るよつて言葉を続けた。

H//ロー達もそれなりに苦労はしているようだ。

「じゃあお願ひするね。今依頼書かいてくるから待つててね。」

そういつた聰介は、窓口で　今日は例のお姉さんではなかつた依頼書の作成をすますと、指名依頼でジョージ達に依頼すると、お姉さんに伝えた。

依頼書を持つてジョージ達のもとへと戻ると、昼食を食べ終えたジョージ達が立つて待つている。

「報酬は一晩200ギルなんだけどいいかな……？」

「ああそれでいい。俺たちは田中は別の依頼受けたりしてるからまた夜にな。」

そういうて酒場から出て行こうとするジョージ達に、聰介はそれなら鉱石の採掘を依頼しようと思いつつ、声をかける。

「あ、今日の依頼まだ決まってなかつたら鉱石の採掘をお願いしたいんだけどー！」

今日は先約があるからーと、言つて去つていったジョージ達を見送つた聰介は、とりあえずすぐに店にもどることにした。

冒険者ギルドの中はこわもての男ばかりで、騒がしくしていた聰介をジロリと睨んでいたからだ。

考え事をしていて、家を通り過ぎてエドガーの店の近くまで来てしまった聰介は、ついでにエドガーに銅があるかどうかを聞こうと思つて、店の中に入った。

エドガーの店の中には、両手剣・片手剣・双剣・短剣・ナイフ・槍・ハンマー・斧・棒・弓等の多種多様な武器が置いてある。

さすがに刀や銃などの飛び道具までは置いていないようだがそれでも聰介の店とは比べ物にならないほど品数をそろえている。

しかし、高額な商品はいまいち数が少なによつた。

魔法付きの武器や、呪いの武器、名剣などの特殊な武器は特に見当たらない。

防具のほうはと、盾・軽鎧・重鎧などといった一般的なものだけで、品数は多いが種類は少なめなようだつた。

エドガーを探すついでに店の中を見ていた聰介だが、エドガーの姿はまだ見当たらない。

しばらくエドガーを探してキヨロキヨロしていると、ついに従業員が話しかけてきた。

「お客様、何かお探しでしょうか？」

「いえ、エドガーさんに聞きたい」とが念つて来たのですが、今は居られませんか？」

「今は商談にいっているはずなので、しばらくは戻つてこないかと……。よひしければ用件をお聞きしますが？」

「いえ、用件つてほどのことじゃないんです。このお店で銅を扱つていれば、少し買わせていただきたくて」

「たしかエドガーさんは扱つてなかつたと思います。ですが、通り

を2本はさんだとこの金属取り扱い屋でしたら銅を置いてあつたはずですよ。」

「 わうですか、どうもありがとうございました。」

またのお越しをへと、後ろから声をかけてくる従業員はとても丁寧に教えてくれた。

教えられたように通りを2本はさんだとこのままで行くと、田の前に金属取り扱い屋と書かれた看板を掲げた店を発見した。

店内にはさまざま金属のインゴットが並べられて値札を貼られている。

名前もわからない金属がたくさんある中で、やっと銅を見つけると、大量に抱えてカウンターまで持つていく。

「 あつと、お密さん！ それらは地面においてくれ！ カウンターがつぶれちまう！」

カウンターに載せよ！ としたといひで、本を見ていた男性店主が顔を上げて焦った調子でいつので地面へとおひす。

「 ふう……。お密さん力持ちだねえ。それだけの金属を持ち上げられるなんて、その細腕のどこにそれだけの力がつまってるんだい？ まあいいや。それにしても大量の銅だね。こんなもんどうする

んだい？武器にもならんだらいいへ。」

「いえ、ちよつと研究するのに使いたいので……」

「へえ～研究ねえ。まあいいよ。なかなか売れなくて困るんだよ、ソレ。安くしとくからもつよつと買っていいでくれない？」

聰介が領いて返すと、更にこくらかの銅のインゴットを積んでくれた。

「こんだけありやいいだろ？……ん、そうせな……2000ギルでいいよ。研究がんばりな。」

店主から受け取つた銅はかなりの量で、聰介は落とさないようじんをつけながら家の工房の中まで運んで帰つた。

工房の中へと下ろすと、銅の山が工房でかなりスペースをとつてしまつたが気にしない。

「よし、今日はオリハルコンを作りつい。前回みたいに魔力を通したいけど、剣一本分であれだけ消耗してしまつたから気をつけないと……。そういうえば、魔石の玉がまだ3個ほどあつたはず。あれを使えば出来るだろ？けど……。まあ利益は考えなくともいいかな。今日は銀色札ももらつたし！」

おもわぬ収入を思い出して利益のことを頭の中から吹き飛ばした聰介は、思わず笑顔になつた。

「この世界でもお金が有るに越したことはないなあ」と思つ聰介だった。

氣合を入れて腕まくりをした聰介は、3つの魔石の玉をポケットにいれて銅の山の前に立つた。

手を重ねて、くすんだ色の銅の上におくと同時に練成が始まりだした。

そこに、ポケットから取り出した魔石から魔力を引き出して、練成中のイメージの中に魔力をねじ込む。

最初にバチバチとなつていた電気は、魔力が加わると途端にバチンツバチンツと雷のように強烈な勢いと光を持つて弾け始めた。

耳へと入つてくる音を無視しつつ、銅の原子に魔力を無理やり結びつけて、それをひとつのおもてにするためにつなぎ合わせていく。

それは無事に繋ぎ合わさり一つとなつたが、魔力を吸つて膨らんだそれらを小さく圧縮していく。

放出量の限界を超えてついには割れた魔石の玉を放り投げて、2個目の魔石の玉を握り締めてそこから更に魔力を榨り出し、オリハル

「ンの原石に滝のような勢いで魔力を注いでいく。

魔力を注がれたオリハルコンの原石は、まるで灼熱の太陽にさらされた砂漠のように貪欲に魔力をその身の内へと吸い込んでいく。

2個目の魔石さえ使い果たしても砂漠は一向に満たされず、新たに3個目の魔石を握り締めて魔力を搾り出す。

3個目の魔石すら使い果たそうかといつ時になると、オリハルコンの原石は灼熱の太陽のように真っ赤な光を放ち始めた。

全ての魔力を注ぎ込んだ魔石の玉が真っ二つに割れると同時に、それは田を焼き尽くさんばかりの光を放つて完成した。

思わず瞑ってしまった田を開くと、さきほどまで銅が山のように積まれていた場所には防具1つと、剣1本をつくるのがやっとというほどの量しか残っていなかつた。

しかし、先ほどまであった銅の山とは比べ物にならないほどの存在感を放つてしているのは確かだ。

地面に残るオリハルコンの表面は、まるでマグマのような紅蓮の色で、それは生きているかのよつにユラユラと揺らめいている。

その神秘的に揺らめく紅い金属を見ると、聰介は安心したのか、ドサツという音とともに膝を付いて工房の固い床へと崩れ落ちた。

「う、うーん……アイタタタ……頭をちょっと打ったみたいだ……。それに体が重くて……だるいなあ……」

オリハルコンを完成してから20分ほど気絶していた聰介は、ズキズキとする頭の痛みと共にやっと目を覚ました。

それでも聰介は不調を訴える体に檄を飛ばしながら、ゆっくりと立ち上がる。

立ち上がった聰介の前には、意識を失つ前に見た紅く揺らめくオリハルコンが変わることなく鎮座していた。

「これが……オリハルコン……。伝説の……金属……。」

紅く揺らめく表面は、ともすれば引きずり込まれそうになるほどの深さを持っている。

静かに威圧感をはなつオリハルコンに、聰介はただただ圧倒されていた。

どれくらいの時間が経つただろつか、よつやく聰介はハツと我を取り戻した。

「そうだ、早く作らないとあの3人組がくる……。」

例の3人組が夜の警護にくることを思い出した聰介は、防具の成型をするために練成を始める。

バランスを崩さないよう慎重に、ゆっくりと時間を掛けて成型していく作業はとても集中力を使つた。

やつして出来上がつた防具はプレートアーマーのよつなものだつた。ところのもプレートアーマーは全身をくまなく覆うものだが、聰介の作つたものはヘルメットと、肩の部分がないものだつたからだ。ヘルメットは熱中症を防ぎ、広い視界を確保するために取り外して、肩は腕部の稼動領域を広げ、腕を動かしやすくするために肘より上は無くしたものにしている。

微調整をするために一旦鎧を着てみると、脚部と腕部がもたつたので調整してフィットさせておく。

それ以外は特に問題が無かつたので、外して改めてみると、深紅の鎧はとても綺麗なのが目立ちすぎるるのでマントを後口買つてくることにした。

とりあえずは完成した防具を横に置いておき、今度は剣の作成に取り掛かる。

モデルとする武器は、ハイランダー達が好んで使用したと言われるクレイモア。

クレイモアは刃渡り100cm～180cmくらいのものが主流で、切れ味が鋭く、両手剣としてはツヴァイヘンダーやトゥーハンデッドソードよりも小ぶりで、素早い剣の動きが可能なために多くの人たちに恐れられた剣だ。

出来上がった剣は刃渡り110cmのクレイモア型の両手剣だが、オリハルコンで出来ているために重量は驚くほどに軽い。

聰介がその剣の切れ味を見ようと思い、鉄片を取り出すと、警護の依頼の時間になつたためかエミリーの声が外から聞こえてきた。

「ソウスケーきたわよー? ビニヒーリのー?」

「ちよつとまつてー!」

そう返すと大急ぎでオリハルコン製の剣と鎧を倉庫に押し込み、箱を練成してその中へいれてから厳重に鍵を掛けると、聰介は工房の扉を開けた。

工房の扉を開けた聰介の目に映つたのは、日が暮れ始めて赤い光に染まり始めた通りと、ちょうど店内へ入つてくる3人組の姿だった。

6049文字です。さて、今日は文章改定やら誤字修正もしました。
ですが、話自体の流れに変化は無いので、心配なく！
まだ、直しきれてない部分があるかもですが、順次修正していくの
でお許しを…。

…アナタ様の感想が作者のやる気に直結します。
やっぱり、誤字指摘だけじゃあ泣きそうになります！

誤字指摘自体はうれしいので感想も一緒に入れてください…。
あ、ただの誹謗中傷はやめてくださいね！作者のHPがふつとびま
すから！

009 警備と照明作り

「いらっしゃい。今日からしばらくの間お願ひします。」

店内に入ってきたジョージ達を招きながら、薄暗くなつてきた店内に明かりをつける。

つけると言つても、まさか電気が有るわけではないので、当然ロウソクに火を灯す。

ロウソクが放つ火の光に電気のような明るさは無いが、そのぶん柔らかく優しい光なので、その光につつまれていると癒されるようだ。最も、そう思うのは明るい電気の恩恵を受けた聰介だけであつて、ジョージ達は、癒されるなんてことは思つていないみたいだ。

「夜つてイヤよねえ……。こんなロウソク程度の光じゃ人影なんてそんなに見えないし、暗くて分かりづらいから『暗闇の狩人』なんてコソ泥がはびこるんだもの。」

「それに、夜行性の魔物もうつとおしいぜ。影からいきなり飛び出してくるし、獲物に気付かれないために足音とか消してるしな。夜行性の魔物の討伐依頼はきつついぜ……。」

「ミコーとジヨージが、ロウソクの僅かな灯りに照らされた店内を見回して愚痴る。

しかし、黙っていたジャックは意見が違つたようだ。

「やうかな？夜つて月の光がすべくキレイだし、満天の星空なんて最高じゃないか。月明かりのもとで一人飲むお酒は格別だよ。」

「…………」
ジャックはロマンチストらしいと聴介は思った。

「ジャックってロマンチストなんだね。……好きな人には月明かりの下で告白をする、とかって思つてやうだよね。」

「あ、確かにそんな感じするかも！ねえねえ、ジャックってどんな告白するの？気になるんだけどー！」

聴介が、ふと思つて口に出した言葉に、すぐさまミコーが食いついて言葉をつなげる。

「ミコーはすでに恋バナモードに入つてるのがジャックから聞く気満々だ。

やはり、古今東西……異世界であつても、女の子は恋バナが好きなんだ、ということを改めて実感した聴介だった。

「なー? なんで君達にそんなこと言わなくちゃいけないんだよー。」

焦つて顔を赤くしたジャックだが、それは、この場においては絶対にやつてはいけナイタブー。

なぜなら、それは好きな相手がいるといふこと、同じ意味に取られかねないからだ。

「え! ? いるの? 誰誰? もしかして、酒場の看板娘のシャーリーちゃん? それとも、この間 P.T.組んでたアンジェリカ? 」

エミリーが言った中で、フローレンスは分からなかつたが、酒場の看板娘のシャーリーちゃんとは、シャーリー・エリオットという19歳ほどの女性だ。

酒場のオーナーの娘さんで、よく店を手伝つてゐる上にカワイイといつことで、看板娘と呼ばれて親しまれている。

酒場のおじさん達のアイドルであり、冒險者の出入りが多いために、若い男性冒險者に一眼惚れされやすい人だ。

もちろん告白しようものなら、おじさん達が黙つちゃいないが、そつと知らない冒險者は後で裏に連れて行かれるらしい。

もしかしたら、ジャックも裏に連れて行かれるのかも知れない……。

「いやいや、もしかしたら冒険者ギルドの受付の『鉄壁のスマイル』のお姉さんかもしれんぞ！」

「んなー！そ、そんなわけないだろー！なんで、そつなるんだよー。」

突然会話に参加したジョージだが、その答えは的を得ていたらしい。ジョージの言葉に反応してゆでダコのように真っ赤になつてこむジャックをみればだれの田にも明らかだ。

ちなみに『鉄壁のスマイル』とは、いつも営業スマイルを崩さないことから、冒険者達の間で勝手に決められたらしい。

「えー？ジャックってばあのお姉さんがすきだつたの！？まあ確かにキレイはあるけど……壁は相当高いわよー。だって、あの『鉄壁のスマイル』さんだもの……。」

「あ～もうー！そうだよー！あの人が好きなんだー！そんなことよりジョージはどうなんだよー！」

からかわれ過ぎて諦めがついたのか、叫ぶよじこじて認めるといふ話を変えるためにジョージの方へと話をふつた。

「ん？俺か？……俺はH//ローの」とが、「こや」と「ひう」と……。

「

ジョージ号は、ミリーの大砲によつて穴を空けられて沈没した。

「私は……そうねえ……。秘密」

「人のことだけ根掘り葉掘り聞いといてずるいぞ！」

「うるさいわね、女の子に秘密はつきものなの。ソウスケもそう思うでしょ？」

傍観に徹していた聰介にここにきてのまさかのキラーパス、聰介はただ頷くことしかできなかつた。

「やつぱりそうよね~ ほら、ソウスケもああ言つてるんだから、ジャックもきにしないの！」

ジャックは、理不尽だ……と言つて崩れ落ちた。

その後聰介も加わり、4人はロウソクの光が満ちる店内でしばらく雑談に興じていた。

「そろそろ警備の準備をしつくか。」

夜も遅くなり、ジョージの一言で雑談もせずににして、部屋を割り当てることになった。

3人は、聰介に連れられて階段を上っていく。

2階へと先についた聰介は、まずはジョージとジャックの部屋を先に紹介することにした。

「えへっと、ジョージとジャックはこの大きい方の部屋だよ。表通りに面した窓が一つと、扉が2つ。扉が2つあるのは、もともとこの部屋は展示スペースに使つものだつたらしくからだよ。」

「ああ分かつた。……この間取りなら何か有つた時もすぐに逃げ道を確保できるな。」

「ううつて、部屋の中に入つて行つたジョージとジャックは、部屋の中に自分達の荷物をおろして寝る場所を確保した。

「ねえ、ソウスケ。私の部屋はこっちかしら？」

隣の部屋を指さしたエミリーは聰介に自分の部屋の場所を聞いてきたので、エミリーのもとへと歩いていく。

「IJKの部屋だよ。」

そこは、昨日まで聰介が寝ていた部屋だが、3人に警備の依頼をしたあと、ベッドは既に工房の中へと移しておいた。

今工房の中には、綿をシーツ ベッドを作る時に買つたベージュ色の方 でくるんだ簡易ベッドがあるだけだ。

「あれ? これってソウスケが用意してくれたの?」

簡易ベッドのIJKは歩いて、感触を確かめているHJKが聞いてくる。

「やっぱり、女の子だし……堅い床で寝るのは、ゆっくり休めるかなあと思つて……」

「ん~久しぶりに女の子扱いされたなあ……。冒険者なんてやってると、女の子だからって特別視してくれることなんてないからね。わざわざありがとね、ソウスケ!」

頬をうつすら赤く染めながら、はにかんだ笑顔を浮かべたHJKが聰介にお礼をいふと、聰介は自分の顔が赤くなつてこくのを自覚した。

「そういうえば、ソウスケはどこで寝るの？一階はこれ以上部屋無いみたいだし、一階も奥にあったのは工房でしょ？」

「僕は工房で寝るよ。工房の扉は分厚いから、破られることはまずないだろうしね。それに工房の中に倉庫がって、その中に商品や鉄鉱石を置いてるから盗まれないように監視することもできるからね」

「そつか……。一応言つとくけど、ソウスケが私達に遠慮する必要はないのよ？ソウスケが依頼人なんだからね」

「うん、わかつてゐよ。大丈夫。……じゃあ下に降りるね」

「あ、私も一緒に降りるわ。2時間ごとの当番制に決めてて、私が一番最初に警備することになつてゐから」

聰介が一階に降りることを伝えると、Hリーも一緒についてくると言つたので、火を掲げながら階段を下りていぐ。

その際に、ジョージとジャックに就寝の挨拶を掛けておくことは忘れない。

ジョージは既に寝たのか、グウとイビキを返しただけだったが、ジャックの方は、おやすみと短く返してきた。

ちなみに下の図は一階の間取りである。

▼ 19417 — 1401 ▼

「あ、僕はもう工房の中に入るけど、灯りいる？」

「今日は月明かりも結構あるし、いいわ。それに暗いのに皿を慣らしておかないと、いやとこづきに動けないもの」

そつこえは、エミリーの分の灯りが無かつたと気づき、灯りをエミリーの方へ渡そつとする。

しかし、エミリーは受け取らずにそつ言葉を返すと、店内の窓の方に歩いて行つた。

窓辺に腰かけたエミリーの鎧に、月の光が当たつて輝きを放てる。

外をじつと見つめるエミリーは、昼間の明るい印象の時には感じられない魅力を持つていて、それを見た聰介は一瞬目を奪われた。ぼうつとしている自分に気づき、いつまでもいるのは不自然だらうと思つて工房の方へと足を向けた。

工房の扉を開けた聰介は、エミリーに一言おやすみなさいと言つて中へと入つて行つた。

柔らかな月明かりが差し込んでくる店内に一人残されたエミリー。

「ここまで冒険者をやつしやられたのかしらね……」

憂いを帯びた表情のエミリーは、呟くと視線を店内にむけた。

「でも……もうしばらくな、縛られない自由な猫のほうがいいな……」

「…」

そう言って、顔を月へと向けたエミリーに月の光が当たって、神秘的な雰囲気を作り出していた。

空に浮かぶ月は、強い輝きを放つ満月だった……。

工房の中へと入った聰介が倉庫の中を覗いてみると、頑丈に鍵をかけた箱が田の前に鎮座している。

それは3人組が来たために急いで作ったものであり、鍵さえ壊されれば、呆気なく中の装備を取りだされかねない代物だった。

それを見ると、頑丈に鍵を掛けても盗まれてしまったルシフェリオンのことが頭によぎる。

あれを盗まだけでもかなり致命的なミスだったが、もしオリハ

ルコンの装備さえも盗まれてしまえば、いずれ確實に甚大な被害をもたらすことになるだろう。

剣を持つて暴れまわる賊の姿を想像した聰介は、背中に冷たい物が流れるのを感じた。

今度は確實に盗まれないようにする。

そのためには、この時代にない技術、または誰にも真似できない技術が必要になる。

それをしばしの間工房の中のベッドに腰かけて考えた聰介は、一つの考えを思いついた。

その考えとは、この二つものである。

まず、倉庫の中の全体を鉄の板で覆い、継ぎ目のない一つの大きな箱にする。

床には、これまた鉄製の箱で作った床下収納を、剣用と防具用、予備用、その他と、一つ一つに分けて作つて行く。

その床下収納の上に、継ぎ目の無い鉄の板が載つてゐるのだから、中の装備を取り出すときには、鍊金術を使って一枚の鉄板に穴をつくりあげてから取りだすほかない。

鉄の板を溶かすのは相当な温度が必要になるつえ、これほどの巨大な鉄の塊を溶かすのはまず無理だろう。

これは、確實に聰介にしか取りだせない特製の金庫のようなもので

ある。

そもそも、継ぎ田すらないのでから、ここの床下に伝説の金属を使った装備があるなどとは夢にも思わだらう。

とはいへ、倉庫の中の壁を見られたときに、全て金属では怪しまれかないので、木の板を上から被せてカモフラージュしておく。

そうして出来上がった倉庫という名の『金庫』は、聰介の目から見ても分からぬほどのものだった。

「よし、これで大丈夫……。あとは……ああそうだ、ランプを作ろう。ランプは灯油ランプでいいかな。……たしか石油や、天然ガスの主成分は鎖式飽和炭化水素で、中でも灯油は炭素数が9～15の化合物だったはず。つてことは、 $C_9H_{20} \sim C_{15}H_{32}$ を適当に組み合わせればできるはずだよね……。炭素は……木炭を使おう。水素は外の井戸から水を汲んでこようかな。」

そういうと聰介は裏庭へ繋がる扉を押し開けて、井戸から水を大量に組んでくると、木炭の前に置いた。

置いた聰介だが、大量の水素や酸素が精製されることを思い出した聰介は、それらを再び外へと運び出した。

「引火なんかしたら田も当てられないや……。」

外にでた聰介は田の前に置かれた水と、木炭の上に手を重ねておく。

練成を開始すると、まず木炭から炭素だけを切り取りつつ、水からは水素のみを、酸素から切り離す。

余つたものは空気中へと放しつつ、炭素と水素だけを結合させていく。

頭の中で考えた構造をいくつも「ペー」として、その一つ一つを繋げていいく。

練成がようやく止まって、最初に聰介が感じたのは、灯油独特の匂いだった。

水の入っていた入れ物には、既に無色透明の灯油がなみなみと入っている。

そのままでは、灯油が少しずつ揮発していくので、地面から大型の甕を練成して作りだす。

灯油を甕の中へと移し終わっても、まだまだ木炭は余っているし、甕の中も空いている。

灯油をつくる工程をなんども繰り返していくと、ついには甕いつぱいに灯油がたまつた。

工房へと戻り部屋の隅に田を向けると割れた窓ガラスの破片が、まだ大量に残っていた。

「そういえば、あのガラスを使えばランプのガラス部分が楽に作れる……。」

それらを手元に持ってきて練成し、キレイな形をした灯油ランプを数個ほど作り上げる。

作りあげたランプの一つを、甕のところまでもつていき、ランプの中に灯油を少量いれてから、芯糸もいれていく。

芯糸に灯油がしみ込むのを数分間まってから糸に火をつけると、口ウソクよりもかなり強い光をランプが発した。

「やった！これで明るい照明を確保できたぞー！これで夜に作業するときも楽になる。」

灯油ランプ作りが成功したのを確信すると、聰介は喜びの声をあげた。

しかし、練成をするために長い時間集中していたために、すぐに火を消して寝ることにした。

その寝顔は、とても幸せそうに微笑んでいるように見えたのだった。

5288字です。灯油の部分は大分調べたので、そこまで大きな間違いは無いはず…。

まあ間違っていたとしても、あまり気にしないで下さい（汗）
今回は夜だけのお話でした。

でも、この話は縁の下の力持ち的な感じで役立てていく予定なので、一応おぼえといてほしいかもです。

それでは、次回もお楽しみに！（感想待つてます！…誹謗中傷以外でね！

010 遺跡と王の証

朝早く目覚めた聰介が、商品を補充しようと思つて倉庫の扉を開けると、中にある鉄のインゴットの数はかなり減つていた。

これでは作ることが出来ない……と考える聰介は、この前ジョージ達が鉄クズを大量に拾つてきた遺跡のことを思い出した。

また何かが捨てられているかも知れないと考えた聰介は、この遺跡についてみようと考え付いた。

そこには、ただ単に鉄クズを拾いにいく……というだけでは無く、この世界の遺跡をいつものを見てみたいと思つたからでもある。しかし、いくら思つたところで、場所も道も分からぬのでは行きようがない。

そこで、聰介は鉄クズの採集をジョージ達に依頼することとした。

もちろん自分もついて行くのだからとこいつで、料金は上乗せずつむりではある。

その皿をジョージ達に伝えようと想つて、一階へと上がると、一階に降りてこなつとあるジャックと皿があった。

「あれ? ジャック君どこか行くの?」

「ん？ ああ適当に依頼を受けにいこうかなと思つてね。あの2人は面倒くさいからつて僕に押しつけたんだ。まったくぐうたらだよね。」

「あははは……それは大変だね……。」

ジャックの、パシリといつ悲しい理由に苦笑いを浮かべる聰介だった。

「ところでソウスケはどうかしたの？」

「ああそのことなんだけど、依頼をしようかなって思つてね。この前採取に行つてきてくれた時に、遺跡で大量に鉄クズを拾つたつて言つてたよね？ それで、その遺跡に採取と観光も兼ねて行こうかなつて思つて。報酬だけ……300ギルくらいでどうかな？」

「分かつた、いいよ。道案内と採取つてことだね。じゃあジョージ達に伝えてくるよ。これくらいの簡単な依頼ならお安い御用だよ！」

そう言つて、軽い足取りでジョージのいる部屋に戻つて行つたジャックだが、聰介はこのとき少し不安に思つていた。

なぜ、遺跡なんかに大量の鎧や、剣といった鉄クズがあつたのか

少し前に聞いたことだが、その遺跡の近くで戦場になるような戦いはここ数年無いらしく、遺跡 자체も簡単な構造ながらも雰囲気を楽しめるということことで、初心者レベルでも無理なく通える遺跡だったからだ。

そこに大量の鎧や、剣が捨てられていたのはおかしいと普通なら考えるだろ？。

このとき、そんなことよりも遺跡に行く準備をしなくてはいけないと思い直した聰介は、ジョージ達と同様に、誰かに捨てられたのだろうと、深く考えることなく結論を出した。

出してしまったのだ。

後に、聰介はこの不自然さに気付くべきだったと、とても後悔することになる。

しかし、準備に追われる今の聰介は未だ気付かぬままだった。

ジャックと別れて一階へと戻った聰介は、準備をするために倉庫の中へと戻っていた。

木で偽装された床板をはがして、冷たい光沢を放つ鉄の板を露出させる。

鉄の板に手を重ねて練成し、鉄の板に鉄の扉をつくると、その扉をゆっくりと開いた。

扉の先に見えてきたのは先日練成したオリハルコン製の鎧と、同じくオリハルコン製の刃渡り110cmのクレイモア。

工房の中に誰もいないことを一応確認し終えると、表面搖らめく深紅の鎧をとりだしてしっかりと体に装着していく。

鎧をつけ終えた聰介は工房の中を適当に歩き、または激しく体を動かしてみて不具合がないことを確認する。

特に問題無かつた聰介は倉庫の中へと戻り、クレイモアを取り出して腰に差す。

扉を閉じ、そのついでに再び練成して継ぎ目をなくすと擬装用の木の床板を張る。

再び工房の中へと戻った聰介は、クレイモアを鞘から抜いて一通り振り回すと、満足した顔で鞘へと剣を収める。

「よし、この防具と剣も問題はない。……流石に銘ぐりには付けといつかな……。何にしよう?」

剣にも防具にも銘ががないことにようやく気づき、いまいち締まら

ないなと思った聰介は、急遽銘を考えることにした。

しばらく考えていた聰介だが、オリハルコンの別名『オリキヤルク』を防具の名前にし、剣の銘を『クラウ・ソラス』にすることにした。

『オリキヤルク』は、オリハルコンそのままの名前だが、『クラウ・ソラス』の方は、その名の通りの伝説を持つている訳ではないので、完璧に聰介の趣味によるものだ。

名前を決めて満足した聰介は、未だに準備の途中であることを思い出して、あわてて準備を再開した。

工房の分厚い鉄の扉を押して現れた聰介の姿を、準備を終えて先に工房の前で待っていたジョージ達は見て驚いた。

なぜなら今の聰介の恰好は、深紅の鎧の上に、真っ白な外套を纏つた姿だったからだ。

たしかに、燃えるような深紅に真っ白な外套は良く似合っていたが、ただそれはかなり目立つ物だった。

この国周辺では、鎧に調金や、装飾をする以外に色をつけるという習慣が無かつたからだ。

結果として聰介の深紅の鎧は目立ちやすい物となってしまった。

「ソウスケのその鎧つて結構目立つね。鎧に色をつけるなんてことはこじら辺じやしないから、それはソウスケの住んでた地方特有の装飾法なのかしら?」

「ん~、そうじやなくて、この金属自体が色を持つてるんだ。ほら、この鎧見てくれたら分かるんだけど、表面が揺らいで見えるでしょ?」

不思議に思ったのか、エミリーが聞いてくると、聰介は外套から腕を出してガントレット部分をエミリーの目の前に出した。

すると、話を聞いていたのかジョージとジャックも、エミリーの横から覗くようにしてガントレットを見てきた。

3人が見ている間も、鎧の表面はゆらりと紅く揺らめいている。

「へえ……キレイだね……魔力でもかかるのかな?」

「実は結構強力な魔力が込められてて強度もす」「いんだよ?」

ジョージとジャックは少しの間みていただけだったが、エミリーは女の子だからだらうか、しばらくの間、揺らぐ鎧の表面を見つめていた。

「まあそれもいいが、さつさと遺跡に行つてしまおう。この時間ならまだ他の奴らは来て無いだろうからな」

ジョージがそう言ったので、ミリーも聰介の鎧を見るのをやめて自分の荷物をもった。

各々が荷物を持ったのを確認したあと、聰介が店の戸締りをして店の外へとれる。

遺跡はガーランドの街より北東に1時間ほど歩いた先にあるらしく、今回は馬をつかわずに歩いて行くことにした。

飲み物と食べ物を用意した一行は楽しそうに談笑しながら遺跡へと歩いていく。

そのとき太陽には少し雲がかかり、太陽の放つ光をいくらか遮っていた。

山の斜面に築かれた遺跡の入口が見え、入口まであと少しとなつたころ、雲行きが怪しくなつていて空から大粒の雨が落ちてきて、それは瞬く間に大量の雨となつていった。

遺跡の入口に飛び込んだ4人は、体に僅かに着いた水滴をはたいて落とし、外の光景に目をやつた。

外では強い雨がザアザアと降っていて、止むのはいつひどくなるか分からない。

そんな光景を面倒くさそうに見ていたジョージが、松明に火を灯しながら口を開いた。

「この雨の中鉄クズ探すのも面倒だし、先に遺跡の中みてまわるか……。遺跡の中の通路は多少薄暗いがまあこの松明で我慢するしかないだろ？」「

ジョージの言葉を聞いた聰介は、松明よりも明るくできる灯油ランプのことを思い出し、鞄の中へ手を突っ込んで灯油ランプを取りだすと、ジョージの松明から火をもらつて灯油ランプに灯りをつけた。

それを、先頭を行くジョージに渡すとジョージは驚いた顔をした。

「明るいな、松明なんか比べ物にならねえ……。これもソウスケのいた地方のものなのか？」

興味津津と言つた顔をして灯油ランプを見ていたジョージが、聰介に尋ねると、聰介は話を合わすことにして練成したことを誤魔化することにした。

その返事を聞いて満足したのか、ジョージは機嫌がよきやうにしながらランプを掲げ、ズンズンと奥へと進んでいく。

途中で大型の「ウモリ」や、狼らしき魔獸に出会つたが、3人にとつては敵では無いらしく、すぐさま切り捨てていったので実にスムーズに進むことが出来た。

途中にある彫像や壁画を説明してもうついていると、ついに最奥の部屋へとたどり着いた。

その部屋は、他の部屋や通路とちがつて天井が高く、広い聖堂のような場所だった。

更に特徴的なのが、山の中にも関わらず白い光が「」からか差し込んできていて室内を満たしていることだった。

部屋の奥には、黒いつるりとした大きな石壁があり、その左右を守るようにして大きな石像が立っている。

その光景はとても莊厳で神聖な空気を感じ取ることが出来た。

奥へと歩いていき、石壁の前までいくと、その石壁には文字が書いてあることが分かり、それを誰かに読んでもらおうと思つと、隣に来ていたエミリーが説明を始めてくれた。

「」の文字を訳すと『王の証持たざる者何人も入るべからず。……

「」は削れている は死の制裁を得るべし。王の証持つ者道を進み、精靈を従え、清淨なる光を持つて闇統べる腐敗の王を滅すべし。』つてなるのよ。これは古代文字でね、3000年前に滅んだ王国の文字だつて言われてるの。でもそれも不確かな物で、有るかどうかも分からぬ伝説の中の王国なのよ。それに王の証つていうのも、収める場所すら無いから形も分からぬし、大きさも分

からないの。だから、調べることを誰もが諦めた遺跡つてわけね。」

そう言つてコンコンと石壁を叩いたヒミツーは微妙に不機嫌そうな顔をしていた。

なぜだらりと思つてこるとヒミツーが口を開く。

「この煤……誰かがこの石壁を爆破しようとしたみたいね……」

ヒミツーが見ている場所を見ると、たしかにつつさうと煤がついていた。

自分も鍊金術でいつか壊してみよつと思い、材質をたしかめよつと考えた聰介も石壁に近づいていく。

ガントレットを嵌めたままの手で石壁を叩く聰介。

響いた音が甲高く、聖堂のような室内にひびきわたる。

そして

ビキッと何かがひび割れる音が大きく室内に響いた。

聰介達4人がギョつとして大きな音を立てた方向を見ると、石壁が縦に真っ直ぐに割れて内側に開いて行った。

石壁があつた空間の奥には地下へと続く階段が真っ黒な口を開けて待ち構えている。

聰介達4人はしばらく動けないでいた。

そして初めに口をひらいたのはジョージだった。

「ソウスケは王様だつたのか……？」

「いやいや、そんな訳ないから！」

ジョージの素のボケに全力で突っ込む聰介。

「……理由は分からんが開いたなら俺達が最初の発見者だ。どうする？ソウスケ。さっきの石壁を見る限り、なにかしら戦闘があるのは確かだと思う。行くなら俺たちも追加料金を貰う形にはなるが付いていくぞ」

「ん、ちょっと不安だけど自分が触つて開いたんだから行かなきやいけない気がする……。悪いけどお願ひするよ」

「ああ分かった。ただ、何があるか分からぬから細心の注意を払

つていくぞ。俺が先頭で次がジャック、ソウスケ、エミリーの順番だ。離れるなよ。」

ただならぬ雰囲気を階段より感じ取つたジョージは、氣を引き締めると隊列を整えた。

プロに従うしかない聰介は、不安半分期待半分という氣持ちでいた。

長く、暗い階段を下りていく聰介達。

異様な雰囲気は大きくなるばかりで、聰介達はだんだんと不安になつてくる。

長い階段が終わり、突如として開けた場所に出たと思うと、そこは真つ暗なドーム状と思われる広大な空間だった。

その空間の中心で、強い光を放つ円柱が一本だけポツンと立つている。

誘蛾灯に集まる虫達のように、強く明るい光に魅せられて引き寄せられていく聰介達。

しかし、聰介だけを残して他の3人は突如として進めなくなる。

まるでそこに見えない壁が存在するように、3人は行く手を阻まれた。

一人進んでいく聰介は3人がついてきていないと気づかない。

今の聰介の目には光り輝く円柱しかみえていないのかもしれない。

光に魅せられていたということに、ようやく気付いた3人は聰介をとめようと口ぐちに叫ぶ。

それすらも聞こえていないような聰介はどんどんと円柱へ歩みを進める。

円柱まで、あと3mとなつた時、変化は訪れた。

光り輝く円柱が暗闇の中で一際大きく光を放つと、円柱は消え去り、そこには光り輝く一人の美しい女性が立っていた。

4778文字です。ついに話数が2ケタになりましたよ！
自分……がんばります！

ただ……未熟なので表現しにくい部分もあるのは事実……。
気を引き締めていきたいと思います。

さて、今回は伏線回収しました。伏線はある話にありますよ！
……さて、次回はでかい山場です。時間がかかると思います。
でも、次の回はすこく重要なので楽しみにしてください！
私は感想がなくてもめげない！（嘘です、すいません
ではでは、次回をお楽しみに！

011 光と腐敗

暗闇をかき消すかのよつに、全身から眩い光を放つ女性は、この世のものとは思えないほどの整つた美貌の持ち主だった。

光の中で波打つように揺れる髪は輝き放つブロンド、鼻筋はスッと通り、開いた瞳は金色で、瞳の中は星を散らしたかのよつな輝きをはなつてゐる。

出るべさといふは出て、締まるべさといふは締まつた美しくきめ細やかな肌を持つ肢体。

その肌の上には、まつさらな白地に金糸で複雑な刺繡をあしらつた法衣の上に、キラキラと光を反射させる薄くサラサラとした布を何枚も纏つてゐる。

聰介があまりの神々しさに我を忘れていると、後ろから絞り出すようなエミリーの声が聞こえてきた。

「嘘……でしょ……？……大精霊レイルース……」こんな遺跡にいるなんて……。信じられない……。なんでこんなところに……

「……

呟いたエミリーは大精霊の姿に目をうばわれていた。

それもそのはずで、目の前にいる姿は世界創生の神話によく語られる光の大精靈レイルースの姿であつたからだ。

この世界パラノーシスは、6柱の大精靈によつて成り立つてゐると言われている。

光のレイルースは世界を照らし、生きとし生けるモノの目に光を与え、活力を与える。

闇のスキアノクスは世界を闇で覆い、生きとし生けるモノの活動を止ませ、安らぎを与える。

風のウェントウスは世界を駆け回り、生きとし生けるモノの背中を押し、勇氣を与える。

炎のプロクスは世界を燃やし尽くし、生きとし生けるモノの全てを滅し、再生を与える。

土のテトラスは世界を持ち上げ、生きとし生けるモノの足元を支え、誕生を与える

水のアクアスは世界を潤し、生きとし生けるモノの体内を廻り、成長を与える。

6柱の大精靈によつて世界が創生され、大精靈より分かたれた精靈達の加護により生き物は魔法を扱える。

今もどこかで世界を支え続けていと言われている大精靈達だが、発見出来たものはいなかつた。

そんな大精靈の1柱が、今や聰介の眼前に光を放ちながら立つているのだ。

聰介は、いつまでも眩いばかりの光を放つレイルースに目を奪われていた。

「私は光の精靈レイルース。ここには腐敗の王を封ずる処なり。汝、腐敗の王を越え、我が光を己が内に求むるならば、王の証たる神の加護を授けし聖銅を見せよ。」

レイルースの口から発せられた言葉に、聰介はぼうっとしながらも自分の腰に下げられている剣を見た。

聰介が持っている剣は、オリハルコンで創られた『クラウ・ソラス』だ。

オリハルコンは、『山の銅』とも言われる銅の頂点に存在する金属……いや、全ての金属の頂点に君臨する金属だ。

他に銅製の物を身につけて無い聰介だけが、聖銅と言られて分かつた。

聖なる銅……それはつまり、オリハルコンのことだったのだ。

視線を腰に差した剣へと向ける聰介は、鞘口から紅い光がうつすらと漏れ出していることに気がつく

否、それだけでは無く、全身に身に付けたオリハルコンの鎧すらも、

深紅の光を察していた。

オリハルコン達がレイルースの力に反応して共鳴しているのだ。

「ソウスケの全身が真っ赤に燃えあがっている……」

啖いたジャックが見た先の聰介の体は、燃えあがるように揺らめく紅い光の中についた。

遠くから見ることしか出来ないジャック達は、その姿に茫然としていた。

剣を鞘から抜き、両手で握った剣を何かに突き動かされるように体の前へと掲げた。

「王を継ぐ者。我是汝に、永久の光と守護を。汝は我に、不淨を打ち崩し光の導き手となることを。契約は光の精靈レイルースの名において。契約を交わすならば、我が試練を受けよ。打ち勝ちし時、我是汝に光を与えよう。」

レイルースは言い終わるとその体を光に変え、円柱の中へと吸い込まれていった。

完全に吸い込まれ、光を一際強く輝かせた後、円柱はひび割れる。

不吉な光景と感じた4人は知らずのうちに1歩後退した。

円柱のひび割れた個所からは、黒い霧が蛇の吐息のよつよシユーシューユーと立ち昇る。

黒い霧はゆっくつと、確実に広がつて行く。

ついに聰介のところまで迫つたが、聰介はゾクッとした悪寒を感じて3人の居る場所まで戻る。

「ねえ……あれって何だと思つ……？」

「知らん。……体に良いものとは到底思えないがな」

「あんなに黒い霧なんて見たことがないわ……」

聰介が冷や汗を流しながら尋ねるが、ジヨージヒリローから帰つてきた答えは期待したものではない。

「瘴氣……」

振り返り見たジャックの顔は青褪めていて、恐怖の感情が張り付いていた。

「……昔本で見たことがある……。あれはたぶん瘴氣だよ。死の空氣、魔界の空氣色々言われているけど、共通しているのは『死』つ

てこと。死んでからも動き続けるモノは、瘴気を出し続けて、生きて居るモノを皆殺そうとするらしいよ。瘴気を生物が吸い込みすぎると、衰弱して死ぬらしいから気をつけて。」

ジャックの注意に、3人は冷や汗を流しながらゆっくりと頷いた。広がる瘴気は濃度を増し、中心部分は真っ黒に染まり何も見えなくなつてくる。

そして、次第に意思を持ったかの様に流動し始めた瘴気は一つの形を作り上げる。

ある一定の形まで達した瘴気は、質量をもつた物質へと変化していく。

それを見続けるジョージは何かに気付いたようだ。

「オイオイオイ……。『凡談、じゃねえぞ……。なんでこんな遺跡に出てくんだよ。クソッ、ふざけんな！』

「ちょっとジョージ！？ 一体あれは何なのよー？』

一人気付いたジョージが悪態をついたが、すぐにエミリーが叫ぶようになつて、

その間も固まつていく瘴気は、とある生き物の形になつていった。

「クソッ！ありやあ、ドラゴンゾンビだ！耳ふさげーでかいのがくるだおーー！」

ジョージが叫んだ瞬間ジャックとエミリーは直ぐに耳を塞いだが、聰介はなんのことかわからず立ち尽くしているだけだった。

聰介がそうしている間に完全に形を成したドラゴンゾンビは、血のよう赤く輝く目を聰介たちへと向ける。

そして、獲物を視界に捕らえたドラゴンゾンビはわずかに首を反らし、巨大な顎^{アギテ}を開け放つと、黒い口腔の奥から腐った体液を撒き散らしながら咆哮をあげた。

オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

巨大な顎^{アギテ}から発せられた咆哮は地下の空気を震わせ、衝撃波の爆風となつて聰介たちを襲つた。

ドラゴンが獲物を見つけると獲物を怯ませるために咆哮を発すると知っていたジョージ達は、耳を塞ぐことでなんとか気絶をすることは免れたが、耳を塞がずに立つていた聰介は衝撃波の爆風をもろにうけた。

160デシベル以上の爆音　飛行機のエンジン近くで120デシベル　の衝撃波を受けた聰介は内耳の聴覚細胞を傷つけられ、平衡感覚を失つたことでついには気絶してしまつた。

氣絶する直前で聰介の目に映ったのは、腐液を流しながらも体中から黒い瘴気を立ち上らせ、まぶたを赤く輝く眼で睨みつけてくるドラゴンゾンビの姿だった。

なんて毒々しく、憎しみに彩られた目なんだろ?と思いつながら、聰介の意識は遠のいていった。

聰介が倒れてしまつてからしばらく、戦況はおよそ良いと言えるものではなかつた。

聰介を襲わないようにドラゴンゾンビを挑発したりしているジョージ達は十数分で疲弊し始めていた。

といつのも、ジョージ達の武器ではドラゴンゾンビに致命傷を打てるビームか、かすり傷を与える程度しかできなかつたからだ。

腐つてもドラゴン種……骨と腐つた肉体だけになつたといつても強靭な防御力は変わりはしていなかつたのだ。

そのうえにドラゴンゾンビの放つ一撃は、掠るだけでも致命傷になるほどに殺傷力を持つた巨大な爪の一振り。

完全に避けきるしかない一方的な戦い……そして相手は無死蔵の体力を持つドラゴンゾンビ。

ジョージ達が疲弊するのは仕方ないことだった。

そして、よけ続けられて痺れを切らしたのか、ドラゴンゾンビの次の一撃で状況は最悪の状態へと変化した。

今まではジョージ達3人を一掃するために、死神の鎌のように左右から振られていた一撃が縦へと振り下ろす一撃に変化したのだ。

これがただの魔獣の一撃なら避けるだけで事足りたが、ドラゴンゾンビの一撃は地下の空間を激しく揺らした。

よほど頑丈に作られているのか地下の天井が崩れ落ちてくるということは無かつたが、地面を揺らしたためにジャックの体勢が崩れた。

ほんの少し、それもヨロッとする程度のものだった。

それでも、一撃必殺をほこるドラゴンゾンビの一撃を辛うじて避けたいたジャックにとって、それは致命的過ぎるほど の隙だった。

当然、ドラゴンゾンビがそれを見逃すはずも無く、ジャックに向けて鋭く巨大な爪を振るつた。

体勢が崩れるのもかまわずにはくステップを踏んだジャックは、なんとか一撃をよけることが出来た。

そう……一撃は避けられたのだ。

無理を承知でバックステップを踏んだジャックは、さらに体勢を崩した。

ドラゴンゾンビが無情にも巨大な腕を振りかぶる。

体勢を崩したジャックは、まだよろけている。

そしてついに、ジャックを確実に死に至らしめる一撃が振るわれた。

「ジャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツク！－！－！－！」

ジャックを助けようとして、叫びながら走りこんでいったジョージは、眼前を通り過ぎた一撃が起こした突風によって吹き飛ばされた。

ジャックへと迫るデラゴンズンビの一撃を躊躇し、Hリーが悲痛な悲鳴を上げる。

そして

ドリゴンゾンビの一撃は狙いたがわざにジャックを吹き飛ばした。

まるで大砲で打ち出されたように猛烈なスピードで吹き飛ばされて
いつたジャックは、何度もバウンスして、地下の硬くゴシゴシとした地面に叩きつけられた。

ジャックは、すらりと伸びていた手足を不自然な方向に折り曲げ、
大量の血を流してピクリとも動かなかつた。

再度、エミリーの悲鳴が広大な地下空間に空しく響きわたつた。

聰介は、とてつもなく大きな揺れを感じて、ようやく目を覚ました。

いまだに耳鳴りがして、頭痛がするのをなんとか気合で押さえ込み、
状況を把握しようとする。

聰介が体を起こして最初に見た先にはジャックがよろめいて体勢を
崩したのが見えた。

その次に奥で鋭い爪を振り上げる巨大なドラゴンゾンビ。

助けなければ……そう思った聰介の体は動かない。

怖い……そんな感情が頭の中を支配していた。

意識を失う直前に見た、憎しみに彩られた血の様に赤く輝く眼が脳
裏に蘇る。

そうしている間にもジャックには鋭く巨大な爪が迫る。

それをなんとかバックステップをして避けたジャックを見て、聰介は安堵に胸を撫で下ろす。

やはり、自分が出て行かなくともジャック達はプロの冒険者だ、任せれば良いと思ってしまった。

目を上げた聰介の目の前では体勢を立て直そうとしているジャックがいる。

それをなんとなしに見ている聰介の目に、奥で爪を振りかぶるドラゴンゾンビが映った。

未だジャックは体勢を整えられていない。

今度こそ助けなければ……そう思つたが、やはり足がすくんでしまつた。

そして、ジャックを殺さうとする一撃がドラゴンゾンビによつて放たれた。

その一撃は助けに入らうとしたジョージを突風で吹き飛ばし、ついにはジャックを吹き飛ばした。

え？

そう思つ間も無く自分の数メートル横を吹き飛んでいつたジャック。

後ろを振り返ると、手足を不自然な方向に曲げて血を流して動かないジャックがいた。

ジョージは吹き飛ばされて遠くで動かないまま、ヒミリーは涙を流して膝を突いている。

短い間ながらも本当に仲良くしてくれた3人。

その瞬間に聰介の中で、なにかが弾け飛んだ気がした。

殺してやる

ふらりと立ち上がった聰介の目は、垂れ下がってきた髪で隠れて見えない。

腰に差したクラウ・ソラスをゆっくりとした動作で引き抜く聰介。

「殺してやるッ…………」

憎しみを込めて叫んだ聰介は、全力でドーラゴンゾンビのもとへと矢のように駆けていく。

聰介を迎え撃とうと再び爪を振り上げて、「ウウウウ」と風を巻き込みながらドラゴンゾンビは腕を振るつ。

「邪魔だ！……」

腕を振るおうとする聰介の手の先で、バチバチと練成が始まリだす。

そして、振り切る聰介の手の動きに合わせるかのように巨大な紅い槍が精製されて、ドラゴンゾンビの腕を串刺して動きを止めた。

初めて傷を負つたドラゴンゾンビが鋭く悲鳴を上げるが、それさえも途中でやめることになった。

まわりの空気」と瘴気を切り裂いて飛来した巨大な槍が、ドラゴンゾンビの喉を貫くことになったからだ。

自分を守るつとして残つた腕を我武者羅に振り回すドラゴンゾンビ。

しかし、それが聰介にあたることは無かつた。

聰介が走りを緩めることなくクラウ・ソラスを振り抜き、その腕を切り飛ばしたからだ。

手首」と斬り飛ばされた腕は一度空中を静かに舞つた後、ズズウンと音と粉塵を立てて地下の地面に落ちる。

再度腕をふるつて紅い槍を練成した聰介は、それを投げ飛ばして手首の無くなつた腕を地面に縫いとめる。

両腕と喉を串刺しにされたドリゴンゾンビは、その場から動くことも咆哮をあげることも出来ずにただ立っているだけだ。

しかし、いくら聰介の身体能力が強化されていようとドリゴンゾンビの頭まではジャンプしても届かない。

腕を振るつ聰介は再度練成をする。

そして、今度は地下空間の天井から真っ赤な太い柱が伸びてきてドリゴンゾンビの頭を地面へと押さえつけた。

それを確認した聰介は更に走るスピードを上げ、クラウ・ソラスを大上段に振りかぶった。

いまや聰介は戦場を駆け抜ける軍馬の如く速い。

ドリゴンゾンビは頭を押さえつけられたまま、巨大な顎アギを開くこと出来ずに動けずにはいる。

最後の一歩で地面を踏み切り空中から振り下ろされたクラウ・ソラスは、柱じとドリゴンゾンビの頭を一刀両断した。

そして、ドリゴンゾンビは悲鳴を上げることなく動かなくなり、灰になると消え去つていった。

いま、立っているのは聰介とジョージだけだ。

どうやらジョージはあれから直ぐに立ち上がってこの戦いをみていたらしい。

エミリーはとこつと、呆然とした面持ちでドリゴンゾンビの消えたあたりを見ている。

「終わったの……？」

エミリーがつぶやくと、聰介もジョージもやつと武器を下ろした。

やつと、終わった……

そう思つと聰介の膝から力が抜けそつになつたが、なんとか踏みとどまる。

すると、またもや田を焼くよつた眩いばかりの光が目の前を覆いつくす。

そして光が止み、目をよつやく開けると目の前には光の大精霊レイルースが再び姿を現していた。

「見事。私は契約を交わそう。我が光を汝に。光の加護を、光の導きを汝に。我が光は永久に汝と共に歩み、永久に汝の道を照らす。汝が望むならば、どんな障害であるうと切り裂き、道を示そつ。今ここに光の精霊レイルースが誓おう」

そういうとレイルースの体から真っ白な光の珠が生み出され、クラ

ウ・ソラスの中へと吸い込まれていった。

光の珠を吸い込んだクラウ・ソラスは次第に輝きを増していく。ついにオリハルコンの紅い刀身は眩く光り輝く刀身へと生まれ変わった。

それはレイルースと同じ光を発していて、まるで伝説の中に登場した本物のクラウ・ソラスと同じような神々しさだった。

ケルト神話の中でダーナ神族を率いていた王ヌアザが所持していた光の剣。

一度鞘から抜かれれば、その一撃から逃れられる者はいない不敗の剣。

誰一人逃れることも隠れることも出来ず、どんな敵も探し出して必ず打ち倒すヌアザの剣。

まさにその剣がここに出来上がっていた。

そして、それを見届けたレイルースは輝き始め、去ろうとしていた。

「待つてくださいー・ジャックを……ジャックを助けてください！」

そう叫んだ聰介の言葉に動きを止めてゆつくりと聰介のほうに向かうレイルース。

「契約を。汝は不死になり、永劫を生きることを。我はその者を生き返りせることを。契約を望むならば、誓いの言葉を述べよ」

生き返らせることが出来る。

その言葉に聰介はすぐさま飛びついた。

代償に永劫を生きることを条件に。

やつしてジャックは生き返り、聰介は不死を手にした。

このときの聰介は、永劫を生きるといつ意味を勘違いしていた。

そして、聰介の長い長い人生がこの時より始まったのだった。

011 光と腐敗（後書き）

6595文字です。

難産！すごい難産！死ぬほど難産！

もうね、皆さんが納得できるかどうか不安でござります……。

この話を読んで時間があるならば、この話の感想をもらえたと嬉しいです。

今回ばかりは誹謗中傷も覚悟しております。

では、この話を読んでも次を見てくれるのならば！

次回をお楽しみに！

ラスターは間違いでした
正しくはクラウです

012 帰還と覚悟

一向は生き返ったものの体力が戻らないジャックと、怪我を負ったジョージを支えながら遺跡から出て街へと戻っていた。

遺跡の地下空間につながる扉は、聰介たちが出ると独りでに閉じていつたので問題は特に無いだらうと思いつのままだ。

街へと戻ってきた聰介は、ジョージとジャックを回復させるために病院 治癒術師が魔法を掛けて直す場所 へと送り届けると言つたエミリーと別れ、一人店へと戻ってきた。

店へと帰つてきた聰介は『安全守る君』に暗証番号と鍵を入れ、店内へともどつてきた。

遺跡ではあんなことが起こつたのに、店内は朝店を出たときと何も変わつていない。

そのことに安堵すると急に力が抜けていく気がした。

おそらくは張つていた緊張の糸が、変わらない日常の風景を見ることがプリッソと切れたのだろう。

ふらふらとカウンターまで歩いた聰介はカウンター裏に置いてある椅子にドサツと座つた。

「疲れた……。……僕が行くなんて言わなかったら、皆が怪我することもなかつたのに……。生き返つたつて言つてもジャックは一度死んだんだ。明日、謝らなきや……。」

今日のことを思い出した聰介は、もじジャックがあのまま死んでいたらと思うと急に怖くなってきた。

椅子に座る聰介は、まるで自分を守るように体育座りをして身を縮ませた。

自分が殺した……。そんな自責の念にとらわれ始めた聰介を現実に引き戻したのは、腰に指していたクラウ・ソラスだった。

光り輝くクラウ・ソラスは、罪といつものを知らないかのように真っ白に輝いている。

罪を感じ暗く落ち込む自分と、罪を知らないように輝くクラウ・ソラス。

聰介は知らず知らずのうちに腰にさしたクラウ・ソラスを抜き、カウンターの上にゴトリという音と共に置いた。

カウンターの上へと置かれたクラウ・ソラスは相も変わらず光り輝いている。

そんなクラウ・ソラスを見つめていると罪が許されていくような気がして、聰介は見入つていた。

『こつまでも暗くしても何も始まりませんよ?』

突然頭の中に響いてきた声にビクッとして周りを見渡す聰介だが、店内にはもちろん誰もいない。

『私は、私の前の輝いてる剣ですよ』

爵になりすぎて幻聴まで聞こえてきたと頭を抱え始める聰介だが、そんなことは無視して剣は話しかけてくる。

『レイルース様に命じられてこの剣に住み着くことになりました。これから先アナタが悪の道にそれない限りは、私がアナタの力になります。ですが私の力が必要になさそうなほどイイモノは持つてゐたいですけどね~』

「え~っと……。光の精靈だつて? 本当に?..」

『本当ですよ、なんなら実体化してみせましょ~うか?』

聰介は一瞬で、光り輝く小さな裸の『女』の妖精を想像してしまい、顔が赤くなりそうだったので即座に断つた。

『『ずいぶん悩んでいたみたいですが、この世界で生きていくために
は植物も、動物も、人でさえも殺さなければいけないことがあります。慣れるとは言いませんが、それがこの世界の現実です』』

「でも！そんなのが殺してもいい理由になるわけがない！」

『『よく考えて下さい。アナタが考えるべきは、殺しても許される言
い訳ではありません。殺した後にアナタ自身がどうすべきかです。
殺したならばソレに感謝して、ソレを糧に成長すればいいですし、
今度は殺しをしないように気をつければいいのです。一番ダメなのは、
その『死』を無駄にすることです。』』

正論を言われて反論することが出来なくなつた聰介は、黙つている
間に言葉を何度も頭の中で繰り返す。

やがて、その通りだと思つことが出来るようになった聰介は重い口
を開いた。

「そうだよね。……間違つてたよ。ありがと……えへつと」

『『ああそういうえば自己紹介まだでしたね。私は光の精霊。名前自体
はありませんので、この剣の銘と同じでかまいませんので、クラウ
と呼んでください。これから先よろしくおねがいしますね。』』

「僕は神尾聰介。名前はソウスケだよ。これからよろしくね、クラ
ウ」

そうして、聰介はクラウと始めて出会い、そして、ジャックを殺してしまったという自責の念から抜け出すことができたのだった。

その後、特に何もする気が起きなくてカウンターに座つて寝ていた聰介が目を覚ますと既に外は暗くなっていた。

暗くなつた店内に明かりを付けようと思い、灯油ランプを取つてきて灯りをともす。

ランプの明るい光はすぐさま暗い店内を照らし、闇を蜘蛛の子を散らすように退治していく。

明るくなつた店内からは窓を通して灯りが通りにもれ出ていたのでカーテンを閉めておくことを忘れない。

明るくなつた店内では聰介が一人座つてているだけで、音は何もしない。

暇ではあるが昼寝をしたせいもあって寝ることが出来ない聰介は、何をしようかとしばし悩んでいたが、やはり何もすることが無かつたのでとりあえずクラウ・ソラスを抜いて見た。

相変わらずクラウ・ソラスの刀身は眩く光り輝いている。

『……あの、そんなに舐め回す様に見ないで下さい……恥ずかしい

です……』

「ちょっと待つたあああー僕はただ剣を見てただけで、そんな変な目で見てたわけじゃないよー！ていうか、そもそもクラウはそんなキャラだったの！？」

『アハハ、細かいことは気にしないで下さい。少しごりごはいりごうキャラの人がいたほうがいいんじゃないですか？』

ダメだコイツ、早くなんとかしなきゃ……と頭を抱える聰介は、ダメな部下を持つ中間管理職の人もこんな感じのかなと思っていた。しかし、そんなことはさておきといった感じでクラウは話しかけてくる。

『そういうえばソウスケは変な力もつてましたよね？あれはつまれつきの特殊な能力か何かなんですか？』

話すべきかどうか考えた聰介だが、話しても特に害はないだろうと判断して、この世界に来たいきさつも含め、全ての事情をクラウに話した。

『……けつこう、大変な人生送ってるんですね、ソウスケって。まあ私が全ての敵を一撃で倒してあげますので安心してくださいー！』

「……非常に不安です……」

『あらあら、私の力分かつてないようですね、待つていて下さい、今見せますので』

そういったクラウはクラウ・ソラスの刀身を真っ白に輝かすと、ゆっくりと宙に浮いた。

クラウ・ソラスの刀身には見たことも無い文字が刻まれていてそれが強く発光しているのが見て取れる。

独りでに浮かび上がったクラウ・ソラスは部屋の中を縦横無尽に飛び回っていた。

聰介がその光景に唖然としているがそれもそのはずで、『本物のクラウ・ソラス』はひとりでに動き、隠れた敵まで探し出して倒すという自動追尾機能までそなえた剣だったからだ。

聰介が作った『クラウ・ソラス』は形こそクレイモアだが、機能と輝きは本物のクラウ・ソラスと何一つ変わらない。

『見ましたか、ソウスケ。これが私の……ちか……ら……です……あれ?』

『見ましたか、ソウスケ。これが私の……ちか……ら……です……あれ度を落としてカウンターの上に転がった。』

落ちたさいに、カウンターの端っこがじつそり切り落とされたのを

さりげなく鍊金術で修復しておくれのを忘れない。

「あれ? どうしたの?」

そう聞いた聰介にクラウは悔しそうに呟いた。

『ああ……。魔力切れです、コレ。私出来たばかりの精靈だからまだ魔力少ないの忘れてました。……いえ、時間さえたてば魔力は増えますし魔術も使えるようになるのでそんな目で見ないで下さい!』

聰介の微妙そうな視線に気づいたクラウは、目も無いのにどうやつて気づいたかは不明。慌てて言葉を足したが、実際に自立行動ができるようになるのはもう少し先らしいということが分かった。

それからもしばらく楽しそうに会話をしていた聰介だが、ようやく眠くなつてきたので寝ることにした。

ランプを消し輝くクラウ・ソラスを掲げながら工房を押し開けてベッドを置いてある場所まで歩いていく。

このときクラウは、道を示すとは言つてましたけどこんな事に使うためじゃないです! と憤慨していたが聰介は華麗にスルーしていた。ベッドへと戻った聰介はクラウ・ソラスを鞘の中へと納めて枕元に置いておく。

枕元に置いたのは、クラウが倉庫なんかにいれないで下さいと言つたからであり、着ていた防具は既に外して倉庫の床の鉄板の下にしまつてある。

そしてクラウに、お休みと言つた聰介は眠りに付いたのだった。

長く大変だつた一日の終わりの夜空からは月が消え、その代わりにたくさんの星が労うかのように満天の星空が広がつていた。

太陽が山陰から顔を出し、町を朝焼けに染め始めたころ、聰介は目が覚めてしまつたので起きることにした。

外に出て顔を洗い、身支度を整えるとサッパリとした気がする。

工房に戻つた聰介は腰元にクラウ・ソラスを差し、冒険者ギルドで依頼を済ませた後にお見舞いにいくことにした。

冒険者ギルドについた聰介は受付のお姉さん 素晴らしい営業スマイルの持ち主の例の人 に鉄鉱石と鉄クズ、木炭の採取の依頼を出している。

朝早いためか周りには泊り込みの依頼を終わらせた冒険者の人達が仮眠を取つてゐるか、ご飯を食べているだけだ。

いつもの賑やかな鳴りを潜めてゐる冒険者ギルドといつもののはいく

らか新鮮な氣もある。

そんなことを思いながらも依頼を出し終えた聰介は、今度はお見舞いへいくために冒険者ギルドの扉を開けて病院へと向かう。

活氣が出てきた市場の前を通る途中でいくつかの果物を買つていくことは忘れない。

この世界ではどうかは知らないけれど、元の世界では見舞い時に果物を持つていくのは定番だよね、などと思いつつ買い物をするませて病院に行く。

病院へとついた聰介は受付らしき女性に声をかけようと近づいていく。

「あの～すいません。昨日ココにジョージとジャックっていう二人がきたと思うんですけど、どこでしょつか？」

聰介に話しかけられて振り向いた女性は、ブロンドの髪に銀色の目をした可愛らしい顔立ちの人だった。

白い修道服みたいなものを着ている彼女は背中に白い羽をつけたちょっととした天使に見えそうだ。

「あつ、その二人なら少し前に治つたって言つて出て行きましたよ？体力事態はもどったみたいですが、本当はもう少し休むべきなのに……もう……。アナタのお連れさんならもうちょっと休むよう

に言っておいてくださいね！」

そう言った天使ちゃん 適当に命名 は、他の人に呼ばれて忙しそうにパタパタと 羽ではなく足音である いわせて出ていった。

それはさておき、どうやらジョージとジャックは既に退院してどこかに行ってしまったらしい。

せっかく買ったんだけどなあ……と思いつつ袋の中を見ると、中ではリンゴとバナナ、それと桃の味でぶどうの形をしたフルーツがおいしそうに詰まっていた。

仕方なく店へと戻ることに決めた聰介は、通りを自分の店に向かってゆっくりと歩いていく。

角を曲がり、自分の店が見える通りに入ると、聰介は店の前にジョージやジャック、エミリーの3人の姿を視界にとらえた。

早めに退院してまだなんで店に来ているのだろう、と疑問に思いつつも3人のもとへと歩調を早めて歩いていく。

やがて、3人も気付くと寄りかかっていた堅い石壁から背中を離す。

そして、果物の詰まつた袋を抱えながら小走りになつて3人のもとに着いた聰介は、ジョージとジャックに話しかける。

「一人とももう体は大丈夫なの？病院の人まだ安静にしてなきゃ

ダメだつて言つてたよ？」

「ああ、俺たちなら大丈夫だ。それよりも聰介、話があるんだが……」

「……

「……まあ立ち話もなんだし、とりあえず中に入ろうつか。」

ジョージの表情から真面目な話をする雰囲気を感じ取つた聰介は、落ち着いて話をできるように店内へ案内する。

『安全守る君』を開けた聰介は店内を進み、カウンターの前に椅子を3つ並べると、自分はカウンター裏に回つて紅茶　日本茶は無い　を簡単に入れてカウンターの上に並べる。

紅茶を入れている間に席についていた3人は聰介に短くありがとうと言つと、聰介が席に座るのを待つていた。

聰介が果物の詰まつた袋を下ろして席に座ると、ジョージがしゃべり始めた。

「で、話なんだが……。ソウスケ。俺たちは今回の戦いで全く歯が立たなかつた……。剣技はともかく、俺達の武器なんかじや掠り傷を少しつけるだけしか出来なかつた……。悔しかつた……！俺はジャックがやられるのを見ているだけだつた！もう仲間は失わせない！タダ働きで『キ使つてくれてもいい！俺に最高の剣を打つてくれ！』

ジョージは悔しそうに表情を歪ませ、歯を食いしばり拳を握りしめていた。

仲間を大切にするジョージにとっては、一時的とはいえジャックを死なせたのが悔やんでも悔やみきれないものだつたのだろう。

「剣を打つてくれ！」と言つたジョージの目には、仲間を失わせないという固い決意の炎が静かに揺らめいていた。

「僕も今回のことでの力不足を悟つたよ。相手がドラゴンゾンビだつたとはいえ、防戦一方でやられるのを待つしかなかつた。……死ぬ瞬間は恐怖で泣きそうだつたよ。僕は誰にもあの恐怖を味あわせたくない。だから……僕にも剣を打つてくれ、ソウスケ！」

ジャックは実際に死ぬ瞬間に感じた恐怖を思い出したのだろうか、一瞬だけ体を震わせた。

しかし、顔をあげてソウスケへと頼んだジャックの顔からは恐怖の色は消えていて、その代わりに、覚悟を決めた戦士の顔が浮かんでいる。

「私なんて何も出来なかつたわ……。ただ……泣いていただけ……。ジョージとジャックが頑張つてくれなきや私なんて直ぐに死んでいた……。お願ひソウスケ……。私にも力を頂戴……！」

そういつたエミリーは泣きだしてしまいそうな表情で、今にも崩れ

てしまいそうだつた。

俯いて、拳を膝の上でキュッと握り閉めている様子は、年相応のか弱い女の子にしか見えない。

しかし、最後に呴くよつに口にした言葉には、確かに力が籠つていた。

それぞれに決意を固めた3人を見た聰介は、この3人になら強力な武器を作つてもいいかもしないと思い始める。

それはすぐに、自分が巻き込んだという負い目も重なり、3人に武器をつくるうという決意に変わった。

「うん、分かった。今僕が出来る範囲で最高の武器をつくるよ。」

そう告げた聰介の言葉を聞いた3人はありがとうと感謝の言葉を口にした。

「でも、鉄鉱石も魔鉱石も残りが少なすぎるんだ。このままじゃ3人分は作れない……。悪いんだけど、鉄鉱石と魔鉱石を取ってきてもらえないかな?」

「ああそれぐらいお安い御用だ! すぐに取つてくる。待つてくれ。」

「

聰介の言葉を聞いたジョージはすぐさま取りに行くことを決めてジヤックとエミリーを促して直ぐに店を出ていった。

3人が出ていった後、聰介は3人の武器をどうするのかという課題に頭を悩ませていた。

うへん……と悩んでいる聰介の横顔は、それでも少し楽しそうに見えた。

その腰元ではクラウ・ソラスが淡く輝いている。

眩しく照りつける太陽はそろそろ南中に至りつつとしている。

6067文字！疲れた…。

自分土田にバイトをいれることになつたので更新は今までよりも遅れます。

なるべく一週間に最低でも一回は更新したいなあとはおもつてしますのでなにござ…。

次回はジョージ、ジャック、ヒーリー達の武器作りと、御店再開のための商品作りです。

それでは、もうすでに恒例となつてきた閉め言葉ですが…
次回をお楽しみに！

013 アドルフと銀（前書き）

先に謝らせてもらいます……。

武器作り今回入りませんでした！

入れる予定なかつたアドルフさんいれちゃつたので……

楽しみにされてた方には申し訳ない。

では、ドゾドゾ……

013 アドルフと銀

『……ソウスケ？ ちょっと疑問に思っていたんですけど、法則が無視できるのなら鉄鉱石を持つてもらわなくてもいいんじゃないですか？』

3人がいなくなつたのを見計らつてだろう、腰元に差したままクラウが話しかけてきた。

通りを見ていた聰介はクラウ・ソラスへと視線を落とす。

「ん~、まだイメージが出来ないのもあるんだけど……。やつぱり一番大きいのは、周りの人に対する不信感を与えないためかな。いくらなんでも、材料を補充しないように見えるのにたくさんの武器をつくつてたら変に思うでしょ？だから、定期的に補充する必要があるんだ。……この力がバレで、誰かが利用しようとは思えないから……。」

『そうですか。そういうことなら納得です』

「まあこの店が大きくなつて、色々な材料を扱えるようになつて丈夫そうだったらするよ。それまでは、我慢するしかないなあ……。」

「

どうするかなあとボンヤリ考へていると、チリンチリンと来客を告げるドアチャイムの軽やかな音が店に響く。

ドアの所を見ると、そこには鎧を纏つた冒険者風の男が一人　片方は右目に眼帯を、もう一方は右頬に大きな切り傷がある　いた。

眼帯をした方の男は、ガシャガシャと鎧を揺らし、大股で聰介のいるカウンターまで歩いてくる。

「依頼を受けに来た。俺がニコラスで、アッチのがジェフリーだ。」

眼帯男は、ギルドから持つてきたのであろう依頼書を木のカウンターの上に置きつつ、聰介に簡潔に告げた。

一方、切り傷男のほうはと、話は眼帯男にまかせているのか店の中をうろついて　もっとも営業中では無いので商品はほとんど無く、直ぐにコチラに来た　こる。

「ああ、はい。ニコラスさんとジェフリーさんですね。では、採集お願いしますね。」

眼帯男改めニコラスは短く了承の返事をすると、ジェフリーを連れて店の外へと出でいった。

店内に一人となつた聰介は、とくにすることが無いのでひと眠りし

ようかとも思ったが、珍しい材料を探しに市場を散策することに決めた。

荷物を纏め、『安全守る君』でしつかりと鍵を掛けて外に出ると、外は曇るために結構人があふれていた。

市場に向かうために通りを歩いていこうと思つていた聰介は、その光景を見て行くのをやめようかと思い、首を回した先で少し狭い路地を見つけた。

暗すぎるわけでもなく、別段危険そうな雰囲気を醸し出しているわけでは無かつたので、現に何人かだが歩いている、その路地を通りていこうとした。

両脇の建物によつて影になつてゐる路地は涼しく、人もまばらなので意外に進みやすく聰介はこれ幸いとばかり歩いていく。

ふと横に田をやれば、建物脇に無造作に積まれてゐる木箱の上には子供の黒猫が3匹集まつてじやれあつてゐる。

ミヤアミヤアミュー、鳴く子猫達の愛らしい姿に癒しをもらい、和やかな気分になつてゐると、木箱の脇に小さな、人一人やつと通れるぐらいの小さわードアを見つる。

その小さなドアの上には乱雑な文字で『アドルフの店』とだけ書かれていて、どんな店かも分からない。

普段なら怪しんで入るとはしないだろう聰介も、この時は子猫の癒しで気分が良くなつていたために入つてみよつと思つた。

ドアを開けてみると地下に通じる階段があつたが、薄暗くはなく、火では無いだらう白い光が階段を明るく照らしていた。

その明るさに警戒感を一気にそがれた聰介はコツコツと足音を響かせて降りていく。

階段を降りきつたところで現れた黒塗りの扉を開けると、部屋の中は様々な物が棚に置かれた割と広い空間だった。

なにが置いてあるんだらうと思い、一歩足を踏み出したところで声が掛かる。

「んん？ お客かいな。……お前さん初めて見る顔じゃのう。なんかあ用かい？」

声が掛けた方を見ると、白髪で短髪の強面の老人を「チャ」、「チャ」したカウンターの奥に見つけた。

老人と言つても、ヤクザの親分のような雰囲気を出しているために真つ当な、いわゆる堅気ではなさうに見える。

声を掛けられた聰介は一瞬氣押されるが、何故か引いてはダメだと思つて言葉を返す。

「いえ、路地を歩いていたらまたまこのお店を見つけたので、寄らせていただきました。このお店は何を扱っているんですか？」

「なんでもじやあの、」口は何でも扱うナカの、まあ、とつあえず自己紹介ぐらいこしよつかい。儂はアドルフじやあ。お前さんの名前は？」

老いてなお鋭い視線は、嘘があれば直ぐに見つけ出されかかるようにはキラリと光る。

特に嘘を吐く必要性も感じられない聰介はそのままを離すことにして決めた。

「名前はソウスケ・カミオです。職業はこの町で鍛冶屋をしています。まだ、始めたばかりなので知らないかもしませんが……」

「おおーあの店の店主かい！たしかあ盜賊団に剣盗まれたんじやつたの、」

「あの剣について何か知ってるんですか！？」

「知つともむかとも、あの剣はまちで捌いたばっかりじやナカの、」

「ー？や、それでその剣は今どこにあるんですか！？」

店主のイキナリの告白によって、驚きながらも店主の方に近づくも続く店主の言葉で聰介は落ち込むことになる。

「まあの、盗品に關しちやあ詳しく述べるのはいい法度じやけえ。今

はどこにあるかは分からんの?」

「ナリですか……」

盗った訳でもなく、ただ商売しただけの店主を責めるわけにもいかず、聰介はただ落ち込むしかできない。

そんな聰介の様子を見て、少し氣の毒に思つたのか店主がまたも話しかけてくる。

「残念じゃつたの? 代わりと言ひやあ何じやが、鍛冶屋ならコレもつてけえ」

そう言って、乱雑に積んであつた場所から何かを取りだすと聰介の手を握つて、その何かを握らせた。

固く、ツルツルとした感触のソレに手をやると、ソレは灯りに照らされて銀色の光沢返している。

ソレはまぎれもなく『銀』のインゴットだった。

元の世界では一般的に、それも若者向けのアクセサリーなどとして使われるぐらいに身近な貴金属だったが、この世界ではポンと渡されるほど安価なものではない。

年数が経ち、空気中の硫黄と反応して硫化膜で黒ずんで見えるこれが俗に言ひ銀の鏽、実は空気中ではほとんど酸化しない と

はいえ、これさえ取れば立派な銀だ。

「い、こんな高価な物はいだけませんよ！」

「男ならあ黙つて受け取らんかい。所詮は偽善じやあ。罪滅ぼしじや思つて受け取つてくれえや」

視線を微妙に反らして聰介に話しかけるアドルフは、堅気には見えないが、それでも悪人には見えなかつた。

何も言わずに銀をショルダーバッグに仕舞い込み、バッグのボタンをとめる。

さよならと言いながら店をでていく聰介に、もう来るなよと、後ろから声が追つてくる。

店を出て階段を上り、路地に戻つてみると木箱の上に親猫に寄るようにして子猫達がいた。

親猫の耳がピクピクッと動き、伏せたまま片目を開けて口チラを見てきたので邪魔をしないようにサッサと離れる」とにする。

路地を抜けて市場にたどり着いた聰介だが、結局めぼしい物は見つからなかつた。

そして聰介は再度路地に戻り、自分の店に少し足早に戻つていつた。

戻つた路地には既に親猫と子猫達の姿は無かつた。

店へと帰った聰介が市場で買った果物 桃味のサクランボやイチジク味のあけびなど をおいしく頬張つていると依頼を終えたのだろうニコラスと、ジェフリーが店へと入ってきた。

「依頼の品だ、集めてきたぞ」

「今量りますので少々お待ち下さい」

2人の前に木で出来たイスを置き、自分は渡された袋の中から黒光りする鉄鉱石を取り出して 今回は鉄クズが無かった 計量していく。

鉄はある程度予想した量だったので、100ギル渡すことにして、木炭の方は量があるとはいえ簡単に手に入るものだったので50ギル渡すことにする。

「鉄と木炭合わせて150ギルになります。……はい、150ギルをどうぞ」

「……確かに受け取った。では」

100ギル硬貨と、50ギル硬貨を、御馴染となってきたカウンタ
ー裏の箱の中から取り出して渡す。

受け取つた二コラスが金額の確認をするとジエフリーと共に出て
つた。

木炭は倉庫の中の一角に運び込み、鉄鉱石は石と分けるために工房
で精製してから鉄のインゴットを倉庫の中に仕舞い込む。

ついでに、アドルフから貰つた銀も大切に倉庫にしまつておく」と
にする。

その前に表面が硫化してしまつてゐるために、外へ出て　外に出
たのは、室内に毒性を持つ硫化水素を発生させないため　から鍊
金術で銀と硫化水素に分解し、硫化水素は大気中に逃がして、銀は
ビニール袋　死ぬときにはコンビニの袋　で空氣に触れな
いようにピッヂリと密閉状態にして倉庫に仕舞い込む。

整理が終わつた聰介が店に戻ると、少し口が傾きかけている。

「そろそろ灯り付けようかな……。」

裏に灯油を取りに行くと影になつていて薄暗くなつていたので、クラウ・ソラスの光で辺りを照らしながらランプに灯油を入れて火をつけた。

店の中にランプを置いて灯りを確保した聰介は、通りに面したカーテンを閉め始める。

最後の一つを閉め終えるのと、ドアチャイムがチリンチリンと鳴るのは、ほぼ同時ぐらいいだつた。

カーテンから手を離して店のドアの方に振り向くと、そこには土埃などで汚れたジョージ達3人組がそれぞれ大きな袋を抱えて立つていた。

やはり、一番大きな袋を抱えたジョージはカウンターまで足早に歩いて行き、荷物を「ドッ」と下ろすと、疲れたーーと黙つて床に座り込んだ。

あれ、デジャブ……？と感じた聰介がカウンターまでいくと、ジャックもエミリーも荷物をジョージの袋横に下ろした。

「ハア……ハア……ソウスケ……取つてきたぞ。これで頼む……」

「一回でこれだけ採つたのは初めてだよ……。キツイ……」

「もうダメ……重くて死ぬかと思つたわ……」

既に床に座り込んでいるジョージは別にして、ジャックとエミリーには木の椅子をすすめて座らせておく。

一瞬ジョージに、俺の分は？と黙つて見られたが、見なかつたことにして袋の方に顔を向ける。

「大丈夫だと思つけど、鉄鉱石の確認をするね」

鉄鉱石の計量と質の確認をし終えた聰介は、思い思いに休んでいる3人組に声を掛ける。

「これなら作れるよ、ありがとう。仕上がるまでには多少時間がかかるから、待つていてね。その間は工房から出ないから、警備とかは頼むね。」

「おう、楽しみにまつてるぞ！ その間は任せろ！」

「あまり無理しないでね？ ソウスケの体調が崩れたら元も子も無いんだし……」

エミリーの忠告に適当に返事を返しつつ、聰介はテキパキと鉄鉱石を工房へ運び込んでいく。

全ての鉄鉱石を工房へと運び込んだ聰介は、ジャックに鍵を渡し、しばらく好きに使つててと言い渡して工房の中へと引っ込んだ。

引っ込んだ聰介だが、もちろん鍊金術で直ぐに作れるだらうもののために夜更かしすることはせず、しばらく構想を練つた末にベッドに潜り込んで寝てしまった。

店舗部分にいた3人も疲れていたのだろうか、今日はすぐに寝ることに決めた。

ジョージとジャックは疲れたなあと雑談しつつ自分たちにあてがわ
れた一階の部屋へと上がりついたが、エミリーだけは一階で警備
のために起きて無ければならない。

エミリーが疲れた体を休められることになったのは、それから2時
間後にジャックが交代に来てからだった。

013 アドルフと銀（後書き）

4581字です。はあ、武器作りまで行かなかつた。
申し訳ない。

それと、これからは更新が遅れます……。
ラーメン屋でバイト始めました。
まだ、研修中なので大変……。
これからはがんばらなきや！

次回をお楽しみに！ 武器作り的な意味で（泣

014 錬金術と魔法

朝起きた聰介は未だ覚醒しない頭を左右に振るが、それでも頭の中に靄がかかつたままのよつたな気がして冷水で顔を洗うことにする。

裏の井戸からくみ上げたばかりの水はとても冷たく、顔を洗うとすっかりと意識は覚醒した。

昨日、工房にこもると言つたので外に出ることも出来ないので、当初の予定通りに3人の武器を作り上げることにする。

「まずはジョージの分の剣から創ろうかな。」

1900?近くの高身長を持ち、冒険者生活で引き締まつたガッシュリとした体格のジョージには大剣を創ることにする。

元の時代での使用方法は、主に『槍を構えた敵の隊列を攻撃するために使う』ものであり、斬るといつよりは、重量でもつて叩き斬る、または押し潰すといったものだ。

大剣と言えば、その重量のために長時間の戦闘をするのに相当な体力が必要とされ、剣自体の長さによって発生する遠心力で振り回されやすいというのが欠点に挙げられる。

そのために接近戦を主とするこの時代の決闘には用いられないが、

魔物を狩る時などには一定の距離を取りつつ戦うので力に自信がある人には好まれている。

その点ではジョージは問題無いだろ？。

しかし、かといって欠点である重量の問題を残したままでは、最高の武器とはいがたいのではないだろうか？

重量の問題を克服するためには、重さを持たない魔力と金属とを結合させることで重さはかなり軽減されるだろ？。

斬り方についてはそのままでも良い気がするが、防御力の高い相手の場合に備えて、刃こぼれしない金属で鋭い刃先を創つておくほうがいいかもしない。

刃こぼれしない金属は『ルシフェリオン』を創つた時に使つたアダマンタイトでいいだろうが、今回はあの時以上に魔力を結合させる必要がある。

何回か練成して慣れたとはいえ、多くの魔力が必要なのは変わり無い。

魔力の伝導効率が上がつた今では、体の中にある魔力と少量の魔鉱石でなんとかできるだろう。

倉庫から鉄のインゴット数個と魔鉱石を取りだしてくると、それらを纏めた上に手を繕す。

そして鉄を分解して行きつつ、魔力が体内を通るための路をイメージして、そこに魔力を通していく。

聞きなれて来たバチンバチンと弾ける練成音は既にBGMのようさえ感じられる。

前回アーダマンタイトを創った時のイメージよりも多めの魔力を鉄の周りに展開し、結合させると、前回よりの濃い目の色の金属に仕上がった。

前回の『ルシフェリオン』を翡翠色とするならば、今回のはエメラルドグリーンと言つたところだろうか。

出来上がった金属を大剣の形に成型し、鍔とグリップを取りつけてから鞘に納めると完成なのだが、大剣を入れるような鞘は無いため、自分で皮を巻きつけるなどをしてもらおう。

とりあえずは出来上がったジョージの剣の重さは1・4・1・7kgだろうか。

通常のツーハンドソードほどの大剣の重さは2・5・3・0kg程度なのでこれで重さに關しては問題無さそうだ。

切れ味は既に分かっているので問題無い。

今回の剣は持つても引き込まれるようなことも無く、少し気分が高揚するぐらいなので大丈夫だろう。

完成したジョージの剣は工房の隅に立て掛け置き、次はジャックの剣に取り掛かる。

ジャックは特に扱う武器も決まっていなかったため、1mの長さのロン

グソートと、ダガーを渡すこととした。

ジャックの剣の素材については、ジョージの大剣の時に使ったアダマンタイトをそのまま流用してロングソードとダガーを仕上げる。

ロングソードは普通に鐔とグリップを付けて仕上げたが、ダガーの方は握りやすいようにグリップ部分に窪みをつけておく。

ジョージの時と違い、考えるほどのこと無くあつたりとジャックの剣が出来てしまい、寂しい感じもするが、それは仕方が無いことだと割り切るしかない。

剣としては一流だし、まあいいかな……と考え直した聰介は、次にエミリーの武器を考えることにした。

エミリーの武器の形自体はジャックのと同じく、1コほどのロングソードで構わないのだが、エミリーは魔法を使うので魔法の術式を補助する機能を付けたい。

アダマンタイトは確かに魔力も込められていて、刃こぼれもしない金属だが、魔法的な補助機能は無いからエミリーの武器には合わない。

となると、新しく金属を考えなければならないのだが、聰介は既にアドルフから貰った銀を使うことに決めていた。

銀と魔力と考へて聰介の頭の中で閃く金属は一つしかなく、その金属とは聖銀と名高く、元の世界でも様々なゲームに登場してきた『聖なる銀ミスリル』だ。

特徴としては、とても軽く、不浄 アンデッド系の魔物や汚染された地域など を退ける神聖な力が宿ると言われる。

神聖な力と言つても聰介にそのような力はないので、そこはクラウに光系統の加護か何かを入れてももうしかないと云つた。

しかし、銀と魔力で『ミスリル』を創ると云つても、銀といつもの性質はとても柔らかく、圧縮したとしても時間が経つと『自然軟化』といつ変化を起こして元の柔らかさに戻つてしまつ。

この性質があるため、銀の高度を上げるために別の金属を入れて硬さを調節しなくてはならない。

元の世界では、この調節に銅を用いるのが常識となつてゐる。

例えば、ジュエリーやアクセサリーに使つには、ある程度の柔らかさを残すために銀95.0%銅5.0%の割合 ロレを950銀というで、銀食器などには硬さを出すために銀92.5%銅7.5%の割合 ロレは925銀というで銅を混ぜる。

しかし、ミスリルでは銀の輝きを残すためにはロレ以上銅を混ぜるわけにはいかないし、銅を7%以上加えても硬度にあまり変化は見られないらしいので銅は無理だ。

それならば別の金属を混ぜるしかない。

通常の金属の中で硬いとされ、手元に有る金属から精製できるのは銅ぐらいしかない。

銅ならば通常の剣として使つても問題はないぐらいだし、硬さは出

せるだね。

しかし、鋼にくわえ魔力までも混ぜるので切れ味・耐久力共に一級品では有るだろうが、刃こぼれしないとまでは行かないかもしない。

それだけ銀と言つ金属は柔らかく、本来は戦闘用の武器に使用するものではないのだ。

それでも、Hミワーの武器にする材料の中で思いつく最高の材料は『ミスリル』しかないというのも事実。

聰介は「ゴチャゴチャと考えるのをやめ、『ミスリル』を創つてみることにした。

思い立つて倉庫から銀を取り出してきた聰介だが、銀はあまりにも量が少なかつた。

魔力や鋼を混ぜるにしても1mのロングソードを創るには圧倒的に量が足りない。

また貰いに行くといつも出来ないので、工房の中のベッドに腰かけて手の中で銀塊を転がしつつ思案する。

しばらく考えても中々名案が思い浮かばない聰介だったが、それは腰元で光を放つクラウが話しかけたことによつて解決することになつた。

『あの……『法則の無視』って能力を使って無理やり量を増やせば

いいんじゃないでしょうか？聞かれても合金だからって答えるべきでしょ！」……』

「それだよ、クラウ！」

あまりにつかって無くて、直ぐに思いつかなかつた聰介だが、聰介には『鍊金術の使用に関する全ての法則の無視』という能力があつたのだ。

合金という、言い逃れるための嘘の情報を手に入れた聰介はさつそく銀を練成して量を増やすことにした。

手に握つてゐる銀塊を増やすイメージが湧かないため、今回ばかりは無理を承知で『練成後に大きくなつた銀塊』をイメージするだけだ。

どのようにして大きくなるかの過程はすつ飛ばして、つまりは質量保存の法則を無視して練成するわけだ。

難しいイメージは無く、ただ完成した大きい銀塊を想像するだけ。

バチバチという練成音を、出来るかどうかの幾ばくかの不安と緊張を持つて聞いていたが、終わつてみるとあつさりと、大きくなつた銀塊が手の上に乗つていた。

あまりにもあつさりと出来たので一瞬聰介は拍子抜けするが、まあ出来たならいいかと思つたのか次の工程にとりかかる。

腰元ではクラウが、本当に出来ちゃつた……みたいな雰囲気をだし

ていたが気にしない。

まずは量が増えた銀塊に対しても8%の鋼を混ぜて、均一に仕上げていぐ。

スチールグレーが混ざるとこよりて銀色の輝きは少し薄れてしまつたが、ミスリルの色は銀灰色らしいのでちょうどいいだろう。

出来上がった『ミスリルの原石』は鈍い輝きを放つて出来上がるのを今や遅しとまつていいようだ。

聰介は意を決すると、手を重ねて、自分の内から湧きでてくる魔力を自身の体の中の路にゅつくりと通していく。

路を介して湧きでた魔力はどうぞんと『ミスリルの原石』に纏わりつき、結合していく。

ドンドンと吸い込まれ、結合していくことにキラキラと宝石を散らした様に細かな光を放つ光景は、妖精たちが剣に祝福を授けている儀式のようだ。

次第にキラキラとした光はおさまっていき、代わりにボンヤリとした光を纏つたのを見ると練成は成功したようだ。

出来上がった『ミスリル』を成形し、1cmほどのロングソードに仕上げて鐔と握りを付けて振る様にする。

試しに振つてみると、ボンヤリとした光が軌跡をなぞる様に後を追つたが、いまいち締まらない。

「うーん……まだ完成じゃないから何とも言えないけど、ちゃんと出来るかな……？」

今のところいまいちな仕上がりのままの『ミスリル』の剣を見ながら一人呟いた聰介は、腰元に差したクラウ・ソラスを引き抜いた。

金属が擦れる音すら発さずに引き抜かれたクラウ・ソラスは、相変わらず神々しいまでの光を放っている。

『そろそろ私の出番ですか?』

自分の出番がよつやく回ってきたクラウは、口調こそ普通だが心なしか嬉しそうな雰囲気だ。

「うん、お願いするよ。自分で出来る範囲のことは精いっぱいしたから、あとはお願いするよ、クラウ」

『分かりました。掛ける魔法は、術式補助と身体強化の魔法の2つだけでいいですか?』

「そうだね。あまり強力過ぎても変だしね。その2つで大丈夫だよ

『では、今から始めます』

そう言つとクラウは刀身から発する光を強めていき、やがて大気に存在する魔力さえも渦巻く光の中に取り込んでいく。

魔力が光の渦に飲み込まれていく過程で、魔力 자체が白銀の光を發し始め、工房の中は渦巻く白銀の光で溢れていた。

光の渦の中心で言葉を紡ぐ　　言語は違つらしく理解できない
クラウの声は、工房の中で反響することも無く頭の中に染み込んでくるようだ。

五月蠅くなく、心地いいとすら感じられる言葉の旋律は心の奥まで入り込んできて、心を震わせる。

そして、クラウの声が止むと、白銀に渦巻いていた光もおさまっていく。

やつと正視できるほど光量になり、目の前に置いていた剣を見ると、刀身に白銀の輝きを持つ『ミスリル』の剣が在った。

聰介がクラウ・ソラスを鞘に收め、その剣を手に取つて軽く縦、横と2回振ると剣の軌跡を追つようにキラキラと白銀の粒子が舞つた。

「ありがと、クラウー・クラウのおかげだよ！」

会心の出来に満足した聰介は剣を手に持つたまま、クラウの方へ向いて感謝の言葉を述べた。

『え？ ああいえ……こちらこそどういたしまして……？ そ、それよりもこの剣の名前を早く決めましょうよー』

何故か戸惑つたような返事を返し、その次に焦つたような感じで声を発したクラウに、可愛いなあとほんわり癒されつつも 恋愛的な感情では無い クラウの言葉通りに剣の銘を付けることにする。

「うーん、何にしようかな……？ そうだ！ クラウがしてくれなきや完成しなかつたわけだし、クラウに決めてもらおうかな～」

『わ、私ですか！？ うう……そうですね……『オートクレール』でどうでしようか？』

「……うん、分かった。『オートクレール』だね」

確かに『高潔』『高く清らか』という意味を持つオリヴィエ卿の愛剣だつける……と思いだす一方で、なんでクラウが元の世界の剣の名前を知っているんだろうかと思つたが、声に出して聞くまではしなかつた。

ちなみにオリヴィエ卿とは、カール大帝ことシャルルマーニュの家臣で十二臣将の一人オリヴィエ卿のことで、聖剣デュランダルを持つローランの一の親友だった人物である。

完成した3つの剣達の銘は、ジョージの大剣『デュランダル』、ジャックの片手剣『ジュワイヤーズ』、ミリーの片手剣『オートクレール』。

『デュランダル』と『ジュワイコーズ』と『オートクレール』は、オリジナルと同じほどの効果などが備わっている訳ではないが、3人の結びつきを考えて付けたものだ。

とは言つても、『デュランダル』のローランと『オートクレール』のオリヴィエの様に、『ジュワコーズ』の持ち主のシャルルマニーに仕えるように……ということでは無く、あくまでもこの3つの剣が一つの伝承に出てきていて関係が深いというところから考えて名付けたものだ。

ちなみに、ジャックのダガーも業物ではあるけれど、気軽に使えるように銘は付けないことにした。

何故銘をつけないかというと、銘が入った物を気にいつてしまつて、いざというときに使い捨てられなかつたり、サバイバル用の汎用道具として使うのを躊躇つたりするのを避けるためだ。

ダガーという武器は汎用性が高く、戦闘以外でも使用することが多いので、こうする方がいいだろ?と聰介は考えたのだ。

聰介は出来上がった3本の剣とダガーを、壁際に置いてある長方形の木の箱に纏めていれると、体の筋肉を伸ばすために大きく伸びをした。

体を伸ばすことで一つの工程の終了として集中力を切ると、自分の体がうつすらと汗ばんでいることに気がつく。

「む……少し水を浴びてこよ?……」

裏に出て、手早く水を浴びて汗を落としてスッキリして工房の中に戻った聰介は、時間が余りすぎていることに気が付いて、何をしようか悩むことになる。

工房から出て行つてどこかで時間を潰すのは、ジョージ達に『籠る』といった手前するわけにはいかない。

かといって、工房の中することは限られている。

しばらく悩んだが結局名案が浮かばなかつた聰介は、ベッドにダイブして昼寝を敢行することにした。

集中力を使ってほどよく疲れた聰介の頭は、ベッドにうつ伏せになつて目を閉じていると次第にまどりみの中に沈んでいき、ついには完全に意識を手放した。

工房の中でくうくうと眠りこける聰介は知る由も無かつたのだが、工房の外では3人がそれぞれどんな武器ができるのだろうと期待していた。

ジョージは待ち時間潰すために酒場でお酒を軽く飲みながら期待している。

ジャックは古書店で様々な本を見ながらも頭の片隅では常に考えている。

エミリーは喫茶店で紅茶やスイーツを楽しみつつ、聰介が無理しないか心配しながらも待つていてる。

そんな中で眠りこけている聰介は夢の中についた。

「…………キキ…………シンのパイ盗み食いしきゃダメ…………」

5954文字です。

バイトが楽しいです！疲れるけど！

最後の寝ごとにに関しては某ジブリ監督の某宅急便少女の物語のーションです。

……笑つていただけたなら嬉しいです。

笑つてもらえなかつたのであれば、感想にて何かネタを振つて下さいればいつか使用させていただきますので！

ではでは！

次回もお楽しみに！

015 受付渡しが試し切り（前書き）

向ひの作者様とも話し合ひをし、無事解決することが出来ました。
詳しいことは後書きにて。

015 受け渡しと試し切り

015 受け渡しと試し切り

雲一つない青い空に日が高く上ったころようやく聰介は夢から覚めた。

よく寝たことでスッキリと日が覚めた聰介は、ベッドから身を起してストレッチをするとそのまま工房から出るに決めた。

壁際に立て掛けているそれぞののために創った剣を腕に抱えると、工房の分厚い扉の内鍵を開け、扉を開け放った。

店内にはエミリーが一人だけカウンターで肘を付きながら足をプログラさせていた。

工房の扉を開けるギイという音に反応したのか、エミリーは足を止め、工房の扉の方へ顔を向けた。

「ソウスケ！ 今終わつたの？」

「うん、待たせたかな？」

実はさつさと終わらせてずっと寝てたなんて言えないと思いつつ、笑顔を向けてくるエミリーに返事を返した。

「待つてて、今ジョージ達を呼んでくるからー。」

そう言って一階へ駆けあがつていったエミリーを見送り、剣をカウンターに置くと聰介はカウンターの椅子に座った。

カウンターに座ると同時にジョージ達が降りてくる。

「ソウスケ！ 剣が出来たってホントかー？」

そして、階段から顔を覗かせたジョージは聰介を見つけるなり声を掛けた。

「出来たよ。今渡すから皆来てくれる？」

カウンターの上で剣をキレイに並べ直しながら返事をする聰介。

その様子を見つづ近づいてきたジョージ達に椅子をすすめて座らせる。

3人が席についたことを横眼で確認すると、こほんと息を吐いてからジョージの大剣を持ち上げて渡す。

「この剣が新しい剣か……。だいぶ軽いな、これで威力でるのか？」

「確かに重量がないから遠心力で威力を上げる」とは難しいけど、この剣は切れ味が高いから、今まで重い大剣を振っていた速度と併せると切れ味は最高だよ。それは補償するよ。でも、軽いから今までに重さで叩き潰すような斬り方をしていたなら、今度からはちゃんと斬る方に重点を置くようにしてね」

「分かった。気を付けておくことにする。ところでこの剣の名前を教えてくれないか？自分の剣の名前ぐらい覚えとかなきやかつこわるいからな」

「そうだね。この剣の名前は『デュランダル』。意味は『不滅の刃』。大切に使つてあげてね」

「不滅の刃『デュランダル』か……。よし、大切に使わしてもうつぞ！」

と言つたジョージはソレを背負い、聰介に礼を述べた。

それを嬉しそうに笑いながら受け取つた聰介は、次にジャックの分の剣を渡すためにカウンターの上から一振りの剣を持ち上げた。

「ジャックは決まつた武器が無いって前に言つてたよね？だから、今回は一般的なロングソードの形状にしたよ。材質はジョージの剣と一緒にモノを使用していいるから、もちろん通常の剣よりも軽いから扱いやすいと思うし、切れ味も頑丈さも併せ持つ剣だよ。それとコツチのダガーは武器のサブとしても、サバイバルでも使えるように創つておいたから自由に使ってね」

ジャックにロングソードを渡してから説明をし、説明の終わりに手元に置いていたダガーを取り出してジャックに渡した。

「うん、軽いし扱いやすそうだね。切れ味は実際に試し切りしなきや分からぬけど聰介が創つてくれたのなら心配し無くても大丈夫だね」

「でも一応試し切りはしてどれほどのものかは把握しておいてね。あ、それとその剣の名前は『ジユワイコード』で、『喜びに溢れた』っていう意味だよ」

「『喜びに溢れた』かあ。良い名前だね。大切にするよ。……それでコッチのダガーはなんていう名前なんだい？」

『ジユワイコード』を腰元に差したジャックは、渡されたダガーを観察しながら聰介に聞いた。

「うーん、そっちのダガーには名前は無いんだ」

「へえ……。これも業物に見えるけどな……。何でなのか理由を聞いてもいい？」

ダガーの刀身を見ていたジャックが顔をあげて聰介に理由を求める。

「なんで名前をつけないかは、名前が入った物を気に入つて、いざ
といつときには使い捨てられなかつたり、サバイバル用の汎用道具と
して使うのを躊躇つたりするのを避けるためだよ。戦闘以外でも使
用することが多いと思つたから名前を付けなかつたんだ」

「……なるほど。確かに名前が有つたら愛着が湧いてそななるかも
……。使用者のことよく考へてるね、全然気付かなかつたよ」

一度立つてダガーと剣を腰に差したジャックは、最後に置かれていた
白銀の剣を見た。

そして、ジャックのその横では、エミリーが自分の番を今や遅しと
いつたふうに待つてゐるのだった。

それにしてエミリーは最初からこの白銀の剣しか見ていない。

やはり女の子だから綺麗な輝きを放つこの剣を見つめていたのだろうか。

いくら冒険者をしていても、こういう女の子らしい一面はもとの世
界の女性たちとあまり変わらないなあと、聰介は思うのだった。

そんなことはさておき、自分の番を待つてゐるエミリーを待たずの
も悪いので考へるのを止めて白銀の剣『オートクレール』を左手に
握る。

左手に握つた剣を水平にし、右手の上に刀身を寝かせて置いてエミ
リーの方へゆっくり差し出す。

「はい、これがエミリーの分の剣『オートクレール』だよ。この剣は、二人の剣とは材質が違つて『ミスリル』っていう金属を使ってるんだ。この金属は魔法と相性が良くて、魔法を付『』することができるのが特徴だよ。……ああそれと、エミリーは魔法を使うって言つてたから術式補助と身体強化の魔法を掛けておいたよ。」

「魔法剣！？…………どうつでこれだけキレイに輝いてるわけね。最初は磨いて輝かせるのかと思つたけど……。でも、本当にいいの？魔法剣なんて超高級品よ？」

「うん、そのかわり大切に使ってあげてね。あ、注意点を言つておきたいんだけどいいかな？」

魔法剣という言葉に反応したジョージとジャックも加わって、共に『オートクレール』を観察しているエミリーに声を掛ける。

「あ、『メン』『メン』。何かな？」

「この剣を扱う時の注意なんだけど、この剣は切れ味は確かにいいんだけど、ジョージ達の剣みたいに刃こぼれしないってことはないし、普通の剣よりは頑丈だけど無茶な使い方をしたら壊れちゃうから気を付けてね。もし、刃こぼれしたり切れ味が悪くなつたら修理するから持つてきてね」

「分かつたわ。その時はお願ひするね」

返事を返したエミリーは『オートクレール』を鞘に収めると腰元に差した。

カウンターの上を見て、3人の武器を全て渡し終えたのを確認した聰介は、御茶を入れてくると言つて奥に引っ込んだ。

棚から小さな手鍋を引き出し、鍊金術で火を出して熱湯を作り、火を止めてから4人分の茶葉を入れて蓋をし、蒸らしたら茶漉しを通してそれおれのカップに注ぎ分けていく。

本当ならティーポットを使いたいところだが、今回はお茶をするわけでもないので時間短縮のために手鍋で入れる方法を探つた。

入れるときは、プロを意識して少し高めの位置から注いだが、最初のカップは周りに少しこぼしてしまつたし、結構跳ねてしまつた。

その次からのカップは、さきほどよりも位置を下げて、飛び散らなりようにきれいに入れた。

跳ねて少し汚れたカップは自分用のモノとして、のこりの3つのカップはジョージ達のなでお盆に載せて溢さないように運んでいく。カウンターに戻つてくると3人は顔を上げ 話をしていたらしく、礼を言いつつ聰介から紅茶を受け取つた。

ミルクや砂糖といった気がきいた物はもちろん存在しないのでストレートティーだ。

旨味と表裏一体の渋味が口の中に広がり、紅茶から立ち昇るダージリンの香りが鼻の中をスッと通り抜けていく。

会心の出来に満足しながらカップをソーサラーに置き、3人を見る
とジョージは早々と飲みきってしまったようだが、ジャックとエミ
リーは紅茶をゆっくりと味わって飲んでいた。

ジョージはしなかつたようだが、あの一人の味わって飲んでもら
えている様子に聰介は多少嬉しくなった。

やがてお茶も飲みきり、今日はこれで終わりかな?と思つた時、3
人は試し切りをしてくると言つて出でていってしまった。

一人残つた聰介は、長い間放置していた店内の掃除にとりかかるこ
とにしたのだった。

「それにしても不思議だな。これほど腕前がいいならどんな田舎に
いても名前は噂に乗つて広がるだらうにな。今までソウスケの鍛
冶の腕前の噂が無かつたのが不思議だ」

聰介が紅茶を入れに奥へと入ると、自分の剣の感触を確かめていた
ジョージが唐突に口を開いた。

「たしかに不思議だよね。いくら田舎つていつても外界と完全に交
流を立つてゐる村なんてそういうはずだし、これだけの一流の腕前を

持つてゐるなら風の噂に乗つて誰かの耳に入るとおもつんだけどねえ。どの冒険者も騎士もいい武器を求めてるからそういう情報には敏感なはずだし……」

「うーん……確かに何か隠しているのかも知れないけど、それでも私たちにここまでしてくれるソウスケを疑うのは失礼よ。もうこんな話はやめましょー!」

「やうだな、悪かつたからそう頬を膨らますなつて」

難しい顔をして考え込もうとするジョージに、エミリーがちょっとと憤慨したように声を発し、それを口さめるようにしてジョージがおどけてエミリーに向かひ。

そのあとにちよつとした小話をして話に一区切りつくと、まるでタイミングを見計らつていたかのように聰介が紅茶を持つてきた。

3人は聰介から紅茶を受け取り、ジョージは喉を潤すかのようにさつさと飲み、ジャックとエミリーは香りを楽しみながら飲んでいた。

さつさと飲み終え、2人が飲み終えるのを待つジョージはするじとが無くてヒマそうだ。

元の世界ならいつこう時は音楽を聴いて時間をつぶしていたなあと思いだした聰介はクスッと軽く笑つてゐる。

「ソウスケ、俺らは今からこの武器を使って試し切りしていくから

しばりへの間出でいくぞ

そして、全員が紅茶を飲み終え一息をついたところでジョージが口を開き、外出する皿を聰介に伝えると席を立った。

続くようにエミリーとジャックも席を立ち、それに自分の新しい得物を携えて店の外へと出していく。

店のドアをカラんカラんと鳴らして外に出たジョージ達は、冒険者ギルドの近くの演習場まで歩いていく。

演習場につくと、既に何組かの冒険者達がいて、それぞれに得物を使って鍛錬をしているようだった。

中には安全面に配慮して木剣を使って、子供達に技を教えている人たちもいる。

そうした中で3人は演習場の丸太で試し切りが出来るスペースに歩を進め、各々が案山子『かかし』に似せた丸太の前で武器を取り出して構える。

ジョージは大剣使い用の太い丸太の案山子の前へ、ジャックとエミリーはロングソードクラス用の少し細めの丸太の案山子の前へと剣を構えて立つ。

演習場の至る所から聞こえる気合の声に負けぬように声を発しつつ、丸太を一刀両断にせんと大剣を大上段から勢いよく振るうジョージ。

大上段から勢いよく振られたデュランダルは、ジョージが思つてい

たほどの抵抗感を感じさせること無く丸太を真つ一つにし、それでも勢いが弱まらなかつたデュランダルは更に地面も僅かに切り裂いた。

普通の大剣の切れ味を参考にしてデュランダルの切れ味を予想していたジョージは、予想以上の切れ味に内心驚きつつも剣を背中に収めた。

真つ二つになつた丸太へと近づいて切断面を見ると、潰れたような個所は見受けられず、スッパリとキレイに斬られていることが見て取れる。

今までと少々使い勝手が変わるかも知れないと思いつつも、ジョージは剣の仕上がりぐあいに満足した。

ジャックの方はといふと丸太に対して数回斬りつけて、振るうスピードを確かめた後にジュワヴィーズを真一文字に素早く振るい、案山子の頭にあたる丸太部分のテッペンを輪切りにした。

振るう時のスピードを考えてから再度一通りの技の確認をしたあと、ジャックはようやくジュワヴィーズを收めた。

エミリーはジャックと同様に一通り技を型どおりにこなすと、次に丸太の2歩前まで歩いていき、そこで立ち止まつた。

オートクレールを正眼に構えたまま詠唱を始めると、剣の周囲にはヒュンヒュンと風が空氣を切り裂きながら渦巻いている。

短めな詠唱を唱え終えたエミリーが、両手でオートクレールを軽く握り、左足で一步踏み出しつつオートクレールを右肩に担ぐようにな

して振り上げる。

一瞬体を『』なりに反らせ、その反動で力強く右足を踏み出し、足から得た力を腰を回しながら増幅させつつ剣を振り、直撃の瞬間にグリップをグッと握り締めて一息に振り切る。

流れるような一連の動作によつて力を無駄にすること無く綺麗に振り切られた一撃は、案山子を袈裟斬りにするだけにとどまらず、オートクレールに纏わせていた風の刃が案山子の右腕を斬り落とし、胴体をズタズタに切り裂いた。

普段であればありえないほど案山子の惨状にエミリーが啞然とすると、その様子を見ていたジャックとジョージが近寄ってきて声を掛けた。

「すげえな……。エミリーの間にそんなバカチカ『』ゴフッ……」

「ち、違つわよ！失礼なこといわないで……」

口よりも先に手が　綺麗なストレート　出でしまったエミリーがジョージに対して怒つている。

「まあまあ……。それよりもどうしたのさ？普通は付『』魔法つてこんなに威力が出るような魔法じゃないでしょ？」

「それなんだけど、たぶんソウスケの言つてた術式補助と身体強化の効果だと思う……。それに付与したときもやり安かつたし……。

うへん、感覚で言つと普段は無理やり押し込んでる感じだけ、今回のはこの武器から吸い込んだような感じかなあ……。」

「へえ。あ、ちょっとこの武器にもその付与魔法してみてよー。」

そう言つたジャックのジュワイコーズに付与をして、ジャックがエミリーと同じように丸太に切りつけたが、綺麗に斬れたのは袈裟斬りにした部分だけで他の部分は風が丸太に深く傷をつけただけだった。

「うへん、前よりは威力上がってるけど、さっきエミリーがしたほどじゃないなあ。やっぱりその剣だからなのかもね」

結果に少しだけ不満そうにしながら戻つてきたジャックはエミリーにそういった。

その後、攻撃魔法や防御魔法、回復魔法、付与魔法を練習して全体的な力の向上を感じることが出来たエミリーは上機嫌だった。

もちろん、ジャックやジョージも満足はしていたわけだが、魔法を使っているとは言えあれほどエミリーの力を見せられてはそれもかすむというわけだ。

それでも3人全員は武器の出来栄えに上機嫌になつて演習場から帰つていつたのだった。

5848字です！長い間のブランク申し訳ありませんでした。
盗作疑惑とのことで向こうの作者様と話し合ひを設け、話してきました。

向こうの作者様からもこれから展開に期待するとのことで事なきを得ました。

とはいえ、このままいいといつわけではないので少しずつ流れを修正して行こうと思います。

いきなり変えて皆様の期待を裏切るといつとはしないつもりなでご安心を！

これからもどうぞよろしくお願いします。

さて、話が変わりますが……作者初めて救急車乗りましたヨ！
熱中症ということでしたよ……。

今夏は死者も多数いたようで自分は本当に運が良かつた方なのでしょうね。

熱中症の恐ろしさを身を持つて知った次第であります。
だんだんと涼しくなってきてるとはいえ、皆様もお気を付け下さいませ！

さてさて、またまた話は変わりますが、何か出してほしい物とかはあるでしょうか？

鍊金術を使った何か、魔法を使った何か、私たちが住む現代での知識を利用した何か（なるべく便利な物で、構造が複雑で無い物）すぐに出せるかどつかは物にもりますが、なるべく早く出せれるよつにしますので、案があれば何でもお寄せ下さい。

それでは、大変長い後書きとなりましたが！

次回をお楽しみに！

016 音楽と脅迫

聴介は今朝買って来たばかりの石灰とコーカスの前に立つている。

とこつのも、昨日のジョージが暇そうにしていた時のことを見つ出したのがことの発端だった。

この世界でも何とか手軽に音楽を楽しめることはできないだらうかと、と考えると、まず最初にMP3プレーヤーが浮かび、CD、MD、カセットテープと浮かんできたが、それら全てが電気を使つといつ点で不可能だった。

そして、しづらりと聞んでもいると、昔近所のおじいさんがレコードを聞かせてくれた時のことを思い出した。

「これほのうへ、ぱりえんかーびーるひかうのド出来とるうじ
「や

当時、そのおじいさんは血漫がにわいつてこたが、十中八九『ポリ塩化ビニル』のことだらう。

そつ判断した聴介はわざと市場へと買い出しじに立かけたが、当然そなものがこの時代の市場に置いているはずは無く、原料の原料であるカーバイドを生成することにした。

そして帰つてきて今に至るところわけだ。

通常カーバイドの合成には、普通では容易に達することができない2000度もの高温を必要とし、もとの世界ならば電気炉を使用して合成するのが一般的だ

それらの過程を鍊金術という便利な術で一息にふり飛ばし、空色を少し濁らせたような色のカーバイドを創る。

ここからはカーバイドからアセチレンを生成する過程に入るわけだが、アセチレンの製法は実に簡単な物で、水を作用させるカーバイド法を用いて行つ。

反応させる前に急造のミニガスタンクもじきをつゝ、傍に置いておくことを忘れない。

それからカーバイドと水を反応させて出来たアセチレンをミニガスタンクに貯めていく。

次の過程は毒を伴う危険な作業になるために細心の注意を払いつつ、水から精製した水素と食塩から精製した塩素を結合させて塩化水素を得ると、これもまたミニガスタンクに移してアセチレンと反応させてポリ塩化ビニルを得る。

そうして出来たポリ塩化ビニルを加工し、直径30cmほどの円盤型レコードを創ると、その表面に細い音溝を施す。

やつと出来た自作レコードは多少脆いが、昔見せてもらつたレコードと同じように見えた。

そして、次はレコードを再生するために蓄音機創りに取り掛かる工程に入ることになる。

再生をするにはレコードの表面に施された音溝をたどり、それで得た振動を空気中に振動として発してやる必要がある。

その仕組みは単純な物で、録音時に蛇行して刻まれた溝を針で辿り、その針の振動を増幅し、スピーカーに相当する振動板に伝えて音を再生するといつものだ。

しかし、ここで再生された音はまだまだ綺麗な音では無いので、パイプで出来たトーンアームといつ場所を通してホーンへと導く必要がある。

聰介はそのホーンを、落ち着いた柔らかい音を出すために金属製のホーンでは無く、木製の長めのホーンをそこらに置いてあった薪で創つた。

そして、最後にゼンマイ式のモーターを取りつけると、よひやく蓄音機は完成した。

聰介が早速録音をしみじみとレコードを一枚セッティし、ゼンマイを巻いてレコードが回りだすのを確認してから福山雅の歌を歌つ。

とりあえずサビだけを歌いきつた聰介はレコードをセッティし直してからハンドルを回し、再生を始める。

再生が始まるところとまた違つ深みのある、そしてどこか温かみのある声になつた福山治の歌 正確には聰介が歌つた福山雅

の歌 が流れてきた。

それに満足し、これからはどんな歌を録音していくつかと思いを馳せる聴介はあることに気がついた。

どこのその録音できる歌があるかということだ。

自分の歌を録音すると言つてもレパートリーに限界がある上に、やんな恥ずかしいことは論外である。

といつて酒場などに行つてもさうそう歌が上手い子がいるわけじゃない。

ああ言つのはその場のノリといつか、酒の勢いや、または相手の服装によつて場が盛り上がつてゐるだけだ。

ガーランドの街には音楽家と自称している者もいるにはいるが片手で数えるほどしかない上に楽器またはその本人 자체がお粗末だつたりすることのほうが多い。

そんな理由から聴介はせつかく作った蓄音機とレコードを泣く泣く店内の片隅で埃をかぶせることになつたのだった。

しかし、コレが数年後にある貴族の田にとまり、音楽の録音という目的だけでなく、スパイの情報伝達手段としても使用されることになるとは聴介でさえ思いもよらなかつた。 蓄音機が広まるとこの方法は廃止された

「オラアー・店主いるかあー店主うー！」

蓄音機を部屋の片隅に片づけ、聰介がカウンターの上で意氣消沈としているときにその男はやつてきた。

ドアをバンッと乱暴に蹴り開けて入ってきた男はズカズカと大股でカウンターの前まで歩いていき、イスに右足を上げ、その膝に腕を乗せると身を乗り出して威嚇するよじ声を発した。

「テメエがこここの店主か？ああ？」

「えと、やつですが……。どうかしましたか？」

イキナリのその態度に気圧され、タジタジとしながらなんとか言葉を返す聰介。

「最近段々と調子に乗ってきてるみてえじゃねえか？ああ？ウチの頭『かしら』の繩張りで好き勝手してんじゃねえよ。まだ常連もついてねえみてえだし、いてえ田見る前にとつととこの街から出でいけ。いいか？コレは注意じやねえ警告だ。一日だ。一日で出でいくか、どうか決める。出でいかねえならどうなるかは分かるよなあ？」

「ちよ、ちよっと待つて下せーーいきなりそんなこと言われても…

……」

「ああ？ 事前に言つとけば出て行くとでもいつつか、テメエは？ 明日日が落ちてからまた来るぜ。よく考えろよお？」

そうじつた男は足を乗つけていたイスを蹴倒し、店の武器陳列台を蹴飛ばしながら進み、扉をまたも蹴破る様にして出ていった。

「一体なんなんだ……。……せつかく、ジョージやジャック、Hミリー達とも仲良くなつてこれから営業をしつかりやつていくつて時に……。」

突然現れて退去勧告を一方的に告げて去つていつた男のことを思い出しながら、聰介は腹立たしくも思いながらどうするかといつひとを考え始めた。

部屋の中の雰囲気は一気に悪くなり、聰介自身も暗い気持ちになってしまった。

しかしそんな聰介とは対照的に、店の外では何事も無かつたのようないつも通りの活気のある屋下がりの光景が広がつていた。

「はあ！？何よその男…ふざけんじゃなにわよ…」

男が去つてから数時間後、依頼から帰つてきて 聰介にお金を払うためにしている 、事の顛末を聞いたエミリーが最初に声を張り上げた。

「まあまあ、エミリー……。落ち着きなつて、今憤慨しても仕方ないでしょ。」

「いいえ！落ち付いてられないわよ…ソウスケは一生懸命やつてるので…許せないわよ…」

「おい、落ち着けつて。今大事なのは憤慨する」とじやなくして、これからどうするかつていうことだん？」

珍しくジョージによつてたしなめられたエミリーは不承不承といった感じで用意されたイスに腰を下ろしたが、その頬はまだ膨れている。

「で、ソウスケはどうあるつなんだ？」

「どつもひつも……何が何やら分かんないよ……。出て行きたくはない。だけど……えつとうもなこと……」

「あんな奴らなんてバシッととつちめいやればここのおのアーヴィングと戦つたソウスケならそんなの簡単よ…」

「無理だよ……。あの時は自分でも無我夢中だったし、何より今度のは相手が人間なんだよ? いくら相手が悪くてもそんなのできるわけないじゃないか……。」

聰介がこれまで生きてきたのは日本という法治国家で、一部の例外を除きどのようなものであれ『人を傷つけること』が法によって大きな罪とされてきた社会だ。

『人を傷つけてはいけない』 そう言われて長年をかけて培われた倫理観といつものば、いくら異世界にきてそこまで法にしばられないと言つてもそう簡単に変わるものではない。

そんなに気が強くない聰介の心の内から『自分が犯罪者になる』といつ意識が拭えないのは仕方のないことと言えるだろう。

「ソウスケがやりたくないといつのならやる意味はないだろ? 」「ソウスケがやりたくないといつのならやる意味はないだろ? 」

「でもそれじゃあ! 」

「エミリー! そこまでにしどけ。ソウスケだって悩んでるんだ。俺達が口を出す問題じゃない」

ジョージの言葉に反応して思わず声を上げたエミリーだが、先の言葉は続くことはなく、ジョージに遮られてしまった。

正論ゆえにこれ以上こうことが出来ないエミリーは、仕方なく黙つ

て口をへの手に結ぶ。

「『メン。 今日は色々考えたいから……』

聰介はそう言葉を残すと、ガタッと椅子を引いて立ち上がり工房のほうへと暗い雰囲気のまま去つていく。

「ソウスケ！ 手が必要な時は言つてよー僕達も手伝つかりー。」

工房の扉を開けたソウスケにジャックが声をかけると、こちらを振り返り「ありがとう」と言つて工房の中に入り、扉を閉めた。

バタンとこう音と共に締まつた鉄の扉は、まるで今の聰介の拒絶の意思をしめすようだつた。

「さて……ソウスケにはああ言つたが、納得できるわけがねえ……。ソウスケには恩義もある。」

「うん、俺も許せないよ」

「私だつて許せないわ。ソイツを見つけたらギタギタにしてやるん

だから…」

ソウスケが工房に籠つたあと、戸締りをして酒場で早めの晩御飯をとつていたジョージ達は酒場の隅のテーブルで話し合ひをしていた。

酒場の隅は他人に聞かれるとまづい話をしやすく、他の客も店員もそれとなく距離を話すのが暗黙の了解となつてゐるので、早い時間帯も手伝つてか周りには人が少ない。

「たぶん今晚ぐらいに本気ということを示すために嫌がらせか何かをしてくる可能性が高い。見つけ次第潰すのが定石だが、生憎俺たちは相手のボスが誰か分からぬ。何をするかは分からないが、工作が終わつて油断して帰るところを尾行するぞ。今回ばかりは何があつても我慢だ、いいな？」

「うん、それがいいと思つ。それで、ボスを見つけた後はどうする？」

「潰す……つと言いたいところだが、相手の組織の規模にもよる。まあ戻つてソウスケに報告するのがいいだろうな」

「わかつたわ。じゃあ早く準備しなきゃ……」

そういうやになやエミリーは自分が頼んでいた料理を急いで戻づけた。

が、ジョージとジャックがそれほど急いで食べようとはしなかつたた

め結局エミリーは待たされるハメになり、待てなくなつたエミリーによつてジョージとジャックの料理はだいぶ食べられてしまつ。

ジョージとジャックは恨みがましい目でエミリーを見たがエミリー自身はどこ吹く風と言つた感じで、諦めた2人は会計を済ませて酒場の外に出ていった。

4256文字です。

今回はちょっと短めですねえ。

話をつなげようと思ったのですが予想以上に長くなりそだつたので短く切らせていただきました。

前話でアイデアの募集をしたところ予想以上に多くのアイデアを頂き、とても驚いております。

まさかこれほど反応していただけるとは思わなかつたゝゝ；なるべく出すようにはしますが、無理なモノはこちらの判断で除外させていただきます、申し訳ない。

出来そうなモノは出す予定ですが、だいぶ後になるかも知れないのでソノはまじで承を……。

さて、気づけばPVが446・951アクセス・ユニークが66,573人となつていてこれもまた驚いております。

これからも精進していきますのでよろしくお願いします＝（――メ）m

それでは、

次回もお楽しみに！（次は結構重要な展開がツ！

017 話し合いと黒幕

酒場から戻り、防具と武器を身に付けた3人はほのかに輝く月明かりのもとそれが『敵』にそなえて隠れていた。

エミリーは裏庭隅の木箱横の影に小柄な体を屈めて隠れている、さきまで息巻いていたのがウソのように静かに無感情に隠れているのは、あふれ出る気配によつて見つからぬにするためだ。

ジャックはとつと屋根の上に上がり伏せた体勢で、夜になつて人気が無くなつた通りと路地を監視する。

最後に表通りの斜向かいの店横の路地の暗がりに身を隠すのはジョージだが、普段の明るく豪快なジョージはなりを潜め、真剣な表情で静かに『敵』が現れるのを待つていた。

夜の闇にまぎれて隠れること数十分、聰介の店の2軒隣りの路地からそいつは姿を現した。

服装はいかにも街のチンピラですと言わんばかりに着崩した服装に、赤いペンキと大きなハケを携えている。

しかし、それ以上に不可解だったのはその隙の無さと気配の無さだつた。

恰好こそありふれた街のチンピラではあるが、その身のこなしを見れる者が見れば一目でプロの道のものだと分かるだらう。

服装をありふれたチンピラの恰好にすることと、たとえ一般人が目にしたとしても「ああ、チンピラがいるなあ」程度に抑え、プロの犯行ということを悟らせないための措置だろ？。

プロが動くということはただの寄せ集めの組織と言つことは無く、洗練された、強力な組織ということでもある。

斜向かいの路地に隠れながら様子を見ていたジョージはこめかみから顎にかけて冷や汗が一筋流れるのを感じた。

裏庭にいるエミリーはもちろん、ジャックさえ眼下の建物が死角となつてこのチンピラ風の男のこと把握できとはいひないだろ？。

そのチンピラ風な男は聰介の店の前まで来るとハケを赤いペンキにどつぶりとつけ、過剰に着いたペンキを落とすことなく辺りにペンキを巻き散らせながら大きくなんらかの文字を書き始めた。

出来あがつたその文字は何かは良く分らないが、おそらく嫌がらせのための落書きということは間違ひない。

チンピラ風の男は書き終えるとハケをペンキを入れている缶の中に放り込み、その場を去り始める。

有る程度距離が離れたのを確認したジャックは路地の暗がりから出てその男を追いかける。

薄暗い裏路地を通り抜け、いくつもの角を曲がり、その後ろ姿を見失わぬよう懸命に追いかける。

裏路地を抜け、ついに郊外へと飛び出した男はそのまま森近くの小屋へと駆けていく。

障害物が少ないため、男が小屋の中へと消えるのを確認してから小屋の方へと走つていく。

小屋 자체は放置されている風に汚れ、壊れているところがあるのに対し、中に入つてみると柱はしつかりと立てられ、要所要所はしつかりと補強されている。

デュラーランドルを引き抜き、小屋の中を一通り見てまわるが男の姿は無く、裏口なども無かつたため小屋から出でていったとは考えにくい。隠し部屋に注意しながら小屋の中を見ていると、床の板が少し盛り上がりついているところが一か所だけあつた。

デュランダルの剣先を板の切れ目に差し込み、てこの要領で跳ねあげると地下へと通じる階段が現れる。

階段を下りていが、所々に薄暗い灯りが設けられ、ひつそりとだが使われていることが分かる。

通路は狭く、ジョージの大剣では振り回せずに苦戦する」とは必ずしも、リーチを活かした突きの構えで通路をソロソロと足音を立てずに進んでいく。

通路の横にドアは無く、強襲されると「う」とは無いが、その分前後で挟み撃ちを受けた場合は逃げる場所が無くあつという間に殺されてしまつ。

嫌な予感を頭の中から振り払って進んで角を曲がるとよつやく通路の終わりにたどり着く。

田の前の鉄製の扉に耳を押しあて、そこから伝わる声の振動をキヤッサする。

最初は何か話し声がすると思つぐらいいだが、さらに集中して耳を澄ますとようやく聞こえるぐらこまでになつた。

「……ボス……を……して……した……」

「……つた。……明日……だろ?。もし……今……いるかも……な」

心臓を驚掴みにされるような嫌な予感を感じ取り、即座に扉から離れて反転し、足音を立てない中で最速のスピードを出して角を曲がる。

「いや、やつぱぱつ誰もこませんよ」

角を曲がり切つたといひでガチャッと扉が開く音がし、そんな男の声が聞こえた。

扉は直ぐにガチャリといつ音と共に締まり、静寂が通路に戻つてくるが、ジョージの心臓は周りに聞こえるんじやないかと思つほどにドクドクと鼓動を強めていた。

（あつぶねえ～……。むつ少しで見つかるとひだりだつたぜ……）

一先ず危機を脱したジョージはここに留まるのは下策と思い、通路を元来た方向へと取つて返す。

そして、小屋まで戻つて安全を確認したジョージは尾行されてないか注意しながら聰介の店へと戻つていった。

聰介の店へとジョージが戻ると、ジャックとエミリーがペンキが乾かないことに洗い流している途中だった。

木材の奥へと染み込んだペンキの赤色は落ちておらず、いつすらと赤色が残つていたが、幸い早く対処したおかげでそこまで畳立つほど後にはなつていなかつた。

ジョージが戻つてきたことに気付いたジャックはエミリーを呼び、ジョージのところに歩いていく。

「どうだつた？」

「ああ、奴は郊外のボロ小屋に入つていつたよ。一見ただのボロ小屋だつたんだが、上手く隠されてたが床に扉があつてそこから地下に入れるよつになつてた。通路の奥に扉があつてその中で誰かが話

してたんだが、うまく聞き取れ無かつたよ。そのあとは見つかりそうになつたんでもここまで戻ってきたつてわけだ

「なるほど……。他には何かなかつた？」

ジャックがさらなる情報を求めてジョージに質問をすると、ジョージは腕を組んで苦々しい表情をしながら相手のこと思い出した。

「それを書いてた奴の事だ。街のチンピラ風の恰好をしていたがあれは間違いなくプロだな。気配も足音もそこらにいるチンピラが消せるレベルじゃなかつた。もしかしたら相手は大規模な組織かもしけんな」

「……うーん、困つたね。流石に僕たちじゃどうしようもないかも。

」

「ちよつと厳しそうね……。」

2人に報告し終えたジョージは片づけを手伝い、その後は店内に戻り、二階に上がつて休息をとる。

短い時間だつたとはいえ、極度の緊張状態に晒されたジャックの体はすぐにその意識を夢の中へといざなつていった。

翌日田中が覚めてジョージ達から昨晩の出来」とを聞くと、しばらく悩んだ末にそこへ行くことに決めた。

今はそこへ行くための準備の最中だ。

と言つても、聰介自身は話し合いの席に武装して立つのは相手に警戒心を与えて纏まる話も纏まらなくなると考えたため非武装で行くことに決めたので、今実際に準備をしているのはジョージ達3人だ。

3人が武装したら元も子も無いじやないかと聰介は訴えたが、丸腰で向かつて脅されでは目も当てられないといつジョージの言い分も正しかつたので、渋々承諾したというわけだ。

3人の武器はそれぞれ『デュランダル』『ジュワイコーズ』『オートクレール』だが、防具はと言つと極めて一般的な物を使用している。

ジョージはその大柄な体格を生かし、重量があるが防御力の高い鉄製のアーマーを着こんでいるために普段よりも迫力がある。

ジャックは細身の体を生かして速度を出すために革製のアーマーの上に要所要所を守る様に鉄板を付けられたモノを。

エミリーは女性なので重いアーマーを着こんで動くのは難しいために、全て革で（といつても強度は高い）出来たアーマーを着こんでいるが、その表面には幾らか幾何学模様が描かれていたり、文字が書かれている。

恐らくは魔術的な補助を組み込んだタイプの防具だろうが、その効

果までは魔術を良く知らない聰介は分からぬ。

3人の装備の点検が终わり、さあこれから行くぞ！と言つ時になる
と、店の扉がバンッと开き、昨日のチンピラが入ってきた。

「……へえ今こりで俺とやるつてか？ああん？」

聰介の後ろの3人の武装している姿を見て判断したのかチンピラは
睨みをきかせてくる。

それがあわてた聰介は直ぐに誤解を解くために声をあげた。

「ち、違います！自分は話し合ひをしたいだけです！待つて下さい
！」

「……それにしては随分な武装じやねえか。本当に話す氣があるの
かてめえらは。…………まあいい。話をするつてえなりつてこい。
ただし、向こうについたら武器は預からせてもらつぜ」

途端にスッと目が細まり、嘘を見抜くように眼光鋭くこちらを見て
くるのに対しても聰介が真つ直ぐに視線を返すと、少しの沈黙のあと
チンピラは条件付きで許可を出した。

「ちよつとーそんなの……」

「エミリー。いいから……。分かりました。案内お願ひします」

反論をあげかけたエミリーを手で制し、聰介がチンピラに頭を下げるとチンピラは店の外へと歩き出した。

店を出るとさきに『安全守る君』でしつかりと鍵をし、安全を確認するとチンピラの後ろをついて歩き、裏路地を通り郊外へと抜ける。

チンピラに促されるままに小屋に入り、地下へと通じる階段を下りていいく。

薄暗い明りの灯つた通路を抜け、角を曲がると鉄製の扉が目の前に現れる。

見かけによらず意外に分厚い鉄の扉をくぐると応接室のよつにテーブルとソファーが備え付けられた部屋が視界に広がった。

「ちょっと待つて、今呼んでくる」

そうこうと男は部屋の奥へと通じる扉を開けて向こうに入つていつた。

どんな奴が出てくるんだろうと緊張していると、入ってきた扉がガチャリという音と共に開いた。

あれ?と思い後ろを振り向くと、そこには何度もお世話になつているエドガーの姿があつた。

「あれ？もしかしてエドガーさんも嫌がらせを受けてきたんですか？」

不思議に思いつつ、エドガーに尋ねても否定するように横に首を振るだけだ。

その様子を変に思つていると、よつやくエドガーが口を開いた。

「……まだ分からぬいか？しゃーねえから教えてやる、俺がここのボスだ」

言い終わるや否や、影に潜んでいたのだろう男達3人が聰介以外の3人の背後に回り込みあつと言つ間に拘束すると同時にその首元に短いナイフを突きつける。

気が緩んだ一瞬のすきを突いて飛び出してきた男達になす術も無く拘束されてしまった3人はもう動くことは出来ない。

「安心しろ。後ろの奴らは暴れられたら困るから動きを封じただけだ。害を加えるつもりは無い」

「え、そんな……。エドガーさんが……なんで？」

突然の事態にいまだ頭が混乱している聰介はショックを受けたまま

だ。

「あの店は隠れ蓑だ。普通に成功している店なら、裏でこんな商売をしているとは思われないからな。経営自体は何も黒いところは無いから怪しまれることはねえ。こことは全く別物だからな。ああそれと素人に手を貸しているあれもそうだ。周りからの評判は上がるし、多少怪しまれるようなことがあつてもそれが覆い隠してくれるからな。仕事もしやすくなるつてもんだ」

「……それじゃあ、あれは演技……？」

「ああそうだ」

その言葉を聞いた途端急に力が抜けたように聰介は柔らかいソファへと沈みこんだ。

それも当然で、今まで親しくしていた人にいきなり裏切られれば誰だって茫然とするだらうことは想像に難くない。

「わかつたか？さて、本題だが話は聞いているな？今ならまだ何もしない。早くでていくんだ」

「何故ですか……？」

「予想以上にお前が売り上げを伸ばしているつてことだ。これ以上成長しないうちに芽は摘んでおくに限る。これ以上成長すると表の店の経営に影響が出るからな。幸いまだ常連とかもついてないだろ

う。分かつたか？」

消え入る様に声を発した聰介に対しエドガーは無表情のままに言葉を並べる。

「でも……！」

「ぐどいぞ、ソウスケ。これは最後通告だ。俺だつてお前を憎んで殺したいわけじゃない。引くんだ」

言葉の刃と共に、喉元に鈍い光を放つ鉄の刃を突きつけられた聰介は黙つて引き下がるほかない。

しばらくボウツとしていた聰介だが、今まで色々してもらつたことは事実だ、たとえ利用するためだつたとしてもつと自分に言い聞かせるついに聰介は口を開いた。

「分かりました。エドガーさんには色々教えてもらつたりお世話になつたので出ていきます」

「それでいい。1日待つ、明日までに荷物を纏めて出ていくのよつにしろ。移動用の馬車は俺が話を通しておく」

ジョージは声を上げよつと動いたが、喉にヒヤリとした鉄の刃を無言で押しあてられ、生温かい血が流れるのを意識すると動きを止め

た。

隣のヒミコーやジャックは血に流れとはいひないが、先ほどよつも刃と喉の距離は近い。

どちらにしても動くのは愚か、声を発することもできないだひつ。

そういうのに聰介とエドガーの話は終わってしまった。

ジョージ達はドランゾンビ戦の時に加え、またもや自分達の実力の低さを痛感し、苦汁を舐めることとなるのだつた。

5200字です。

今回もちょっと更新に時間が……へへへ、
学校も始まってしまい、親にPCする時間も制限されてしまったの
で申し訳ない！

イイ訳ですね！本当に申し訳ない！

皆さんが読んでいて「まさか…」と思つていればいいなあと思いつ
つ書きました。

そう思つていただけだでしょか？もしかして予想済み；w；？
予想済みなら自分はもう本格的に落ち込みますがね！

……さて、活動報告でも書いてあつたとは思いますが、タイトルを
変更しようと思いつています。

ちょっと内容と合わなくなつてしまつたので……。

これは自分の見通しが甘かつたとしか言えません。

弁明の余地なしです、頭が上がりません。

まだ新タイトルを決めたわけではないので、変更が確定事項ではあ
りません。

なので、感想と共にタイトル変更の是非を問いたいと思います。
なにとぞご協力お願ひいたしますm（――メ）m

それでは！

次回もお楽しみにー（次は出発ですよー

018 馬車旅と盗賊達

翌日、聰介の店の中では慌ただしく4人が動きまわっていた。

ジョージ達3人は自分達の防具や生活用品などの荷物をまとめるだけで済むのだが、聰介はそうにも行かない。

この前創つたレコードや蓄音機、ランプ、灯油、食糧、道中の水に武器・防具、アクセサリーに更にはその他もろもろの生活必需品をまとめなければならないのだ。

当然旅をするつもりで揃えたものではないのかさ張る上に重いものばかりだ。

それらの雑多な物を聰介が工房の扉前に置き、ジャックとエミリーが店の扉前の通りへ置き、最後にジョージが商人用の大型の馬車へと積み込む。

金庫兼倉庫の中で鍊金術を使って取りだすのを見られないようにするため、全力で全ての荷物を運び終えた聰介は今倉庫の中に佇んでいる。

とりあえずさつさと自分用の防具などを取り出した聰介だが、部屋の中の鉄板を置いて行くのももつたない気がして、全ての鉄板を鉄のインゴットに変えている。

インゴットに変え終えた聰介は、次に床に敷いてあつた擬装用の木

の板を使って、インゴットを入れる木箱と木の纖維を利用した袋を練成した。

木箱にはもちろん鉄のインゴットを次々と放り込んでいき、袋の中には自分用の防具を丁寧に入れていく。

「おーい、ソウスケー！工房の前にあったのは全部積み終えたよー！他には無いかー？」

「待つてー。今持つていく」

工房の扉の隙間から聞こえてきたジャックの声に返事をしながら木箱を抱えて持つていく。

ゴンッと鈍い音を響かせて床に置かれた木箱に背を向けて工房の中に戻っていく聰介。

「ー？重ツ！」

重そうな音がしたが聰介が持てていたのだから大丈夫だろうと高をくくっていたジャックは、自身が全力を込めてもなかなか持ち上がらず、持ちあがつてもフラフラとするとこにショックをつけていた。

(俺そんなに力なかつたつ……?)

しかし、そんなショックもジョージに木箱を渡した時点で震んでいた。

ジョージでさえも受け取った瞬間に一瞬バランスを崩しかけたほどだつたからだ。

とはいって、そこは怪力の持ち主のジョージで、すぐに持ち直して馬車の中に積み込んでいった。

自分用の防具を取りに戻った聰介もすぐにヒーリーと共に店から出ていき、ジャックやエミリーを先に馬車に乗せると店の扉に付けてあつた『安全守る君』を取り外してから最後に馬車に乗り込んだ。

「じゃあ首都までおねがいします!」

馬車の先頭の御者台にのつっていた御者の方に指示を出すと、4人を乗せた馬車はどんどんと『元』聰介の店から離れていった。

滅多に訪れない裏路地を横目に見ながら通い慣れた表通りを通り過ぎ、色々な材料を買った市場を横切つて馬車は街の南門へと向かう。見送られるほど親しくなった人も居らず、馬車はただただ通りを進んでいく。

門を通り抜ける寸前、聰介達が乗る幌をかぶせた荷台の中にパサツ

とこう音と共にカードが放り込まれた。

荷台から体を乗り出して周りを確認するも門の近くでじつた返す人ごみに紛れてしまつたのか相手は分からぬ。

この人込みでは見つかりそうにないと判断した聰介はカードに書かれている内容を見る。

『餞別代りつてわけじゃねえが、一つ忠告をしておいてやる。王と宰相には気を付ける。あとは自分で考えろ。

P.S. 誰にもバラすなよ』

差出人も名前も無かつたがこれを書いたのは恐らくエドガーなのだろ？。

どういう意図かは不明だが、王と宰相に気をつけると言つことでエドガーに益があるとは思えないので心の片隅に留めておくぐらいはしてもいいかもしね。

追伸の方は一見『王と宰相に気をつけると書いたことに対する不敬罪を黙れ』とも取れるが、本当のところは『エドガーが率いていた組織のことについて黙れ』ということなのだろう。

一般の人気が見ても組織のことが分からぬようによく考えて書かれているなあなどと場違いなことを思いつつ、聰介はそれを懐に仕舞うのであつた

馬車による旅路は荷台に惹かれていた商人用の質の高いクッションのおかげでそれほど苦にならず とはいえ振動はそれなりにあつたが 、一行は予定の行程通りに進んで1日目の野営場所でしつかりと一泊した後、2日目の行程を消化している最中だった。

時々用を足したり、昼食をとるために停まることはあつたが、それ以外は何事も無くガタゴトと揺られながら進んでいた。

かつぽかつぽと蹄で地面を叩く音が軽快なリズムを生み、その上に車輪の地面を転がるガラガラと言つ音が重なるのを聞くと、自分は今馬車に揺られているんだなあと感慨深く感じてしまう。

元の世界では馬車はおろか、乗馬さえしたことのない聰介にとつては新鮮に感じるのは当然のことだらう。

舗装されてない道を走る馬車は凹凸に引っかかって揺れることもしばしば有るがそれさえ気にならない。

ときおり風に乗つて運ばれてくる土や草の匂いでさえもとても芳しい天然の香水の様に感じられてくる。

体を反らし深呼吸して胸一杯にその香りを吸い込むと今度は雲一つない真っ青な空が目の前一面に広がる。

ギラギラと照りつける太陽は現代にいたじりであれば、建物の陰に隠れクーラーで涼をとつていたが今は全く気にならない。

風景といつものぞこれほどまでに影響を与えるものだとこゝに驚きであった。

そして、夕暮れ時に峠に差し掛かり、予定の場所まで達していないこともあり、峠を進むことを決めた4人は幾分か遅くなつたペースで進む馬車の中で雑談に興じている。

しかし、その楽しい雑談も突然夕焼けにそまつた空に響く馬のいななきで中断させられてしまつた。

それだけでは無く、周りからドドドドドドと音つ複数の馬が地面を踏みならじて駆ける音が馬車を取り囲むように響いてくる。

「と、盗賊だあ！？」

御者の悲鳴に近い叫び声が聞こえた。

そう……つまりは盗賊の集団に囲まれてしまつたのだった。

「よおう！商人様あ！哀れな我ら盗賊団に身包み全てめぐんでくれよおー！」

その言葉のどこがおもしろかったのか仲間の奴らはギャハハハワヒヤヒヤヒヤ笑いまくつている。

「……オラア！無視してんじゃねえ…やつをひょいこやハカラ…」
この状況わかつてんのかてめえらー…あー…。」

馬車の中でキヨトンと顔を見合わせていくとそれが無視されたのかと思つたのかボスらしき男が怒鳴つてくれる。

「あ、どうしようかと思つて始めたといふジヨージが無事立ち上がり荷台から下りていった。

それに続くよつてジヤックも口を畳みましたまま降つる。

「ひよつとまつててね」

エリコーだけがそう短く言葉を残して、これまた荷台から下りていった。

今や荷台の中には大量の荷物と聰介だけだ。

「エヨーッ！」「つや活きの良さうな女じやねえかーあとでたっつ
ふつ可愛がつてやるからなー」

下卑た視線があるでヌメヌメとした触手のよう無遠慮にエリコーの体をなで回していくが対してエリコーは涼しい顔のままだ。

女性冒険者として過いじてこると少なからずやつこつた田で見られ

る」とあるために耐性はできているのだね。

と、そこへ後ろから拘束でもしようと思ったのか近づいた男の首から上が鮮血を撒き散らしながら宙を舞つた。

近寄られるのを察知したエミリーが剣を抜く勢いのままに体を半回転させて首を真一文字に切り裂いたのだ。

耐性はできてはいるが、不快感はどうしようもないためにイライラとした感情も合わさっていたのだから、その様は流麗なというよりは荒々しさが勝っていた。

心臓から送り出される血液がドクンドクンという鼓動のリズムに合せて間欠泉のように断続的に首から噴き出していたが、次第に首なしの体はスローモーションで見る様に後ろへと倒れていった。

ドサッ と こゝ音 と 共に 地面に 赤黒い 血だまり が 出来始めた こゝに や
つと 時間は 元の 速さを 取り戻した。

そして、最初に叫んだのは盜賊達のボスだった。

仲間が殺され一気に殺氣付いた盜賊達は鎌や斧、剣、ナイフなどの統一性の無い武器をそれぞれ取り出して構える。

相手の人数は14人
エミリーが殺したのを入れるなら15人

で、だいたい1人が4人を殺せばいい計算だ。

相手もそれがわかっているのかバラバラに攻撃していくことは無く、1人に対して4人が取り囲んで一斉に攻撃してくる。

前後左右から同時に襲い来る刃の1つだけに集中すれば他の3つの刃がその無防備な体を切り裂くことになる。

かといって、同時に対処すると言つのもかなり厳しい話だ。

ジョージは4人がどうしたと言わんばかりに背中に携えていたデュランダルを取り出し、その場で体ごと一回転させる形でデュランダルを振りぬき取り囲んできた全ての敵の胴体を上下に分断した。

ジャックはと言えば、右斜め前方へ体を投げ出し前転しつつ刃の交錯点から抜け出した次の瞬間、起き上がるついでに体を右回りに回転させて右手に持ったジュワイヤコーズで右手にいた敵の左脇腹を深々と切り裂く。

その後も切り裂いた勢いを利用して初めに正面にいた敵に素早く斬りかかると、対処しきれなかつた盗賊は自前の斧を振り上げる間もなく逆袈裟に切り裂かれた。

それからはあと二人の獲物である鎌と斧の木製の持ち手を斬り飛ばすと軽くジュワイヤコーズを振るいトドメを指した。

エミリーの方は、前方で相手が斧を振り上げた瞬間にそのガラ空きの胴体へ体ごと突撃する形で相手をオートクレールの剣先で貫き、勢いのままに相手ごとたおれこむことで残りの3つの刃を回避する。

運よく心臓を突き刺さつたオートクレールを引き抜き、後ろを振り返つて構えると、敵はあわてて構えなおした所で追撃などは来ていない。

3人の中で最も弱いのか、お前が行けよとばかりに押し出された相手はバランスを崩してこけかけた隙を狙つて無防備な背中にオートクレールを突き立る。

背中を刺された相手は、あまりの痛みに持つていたナイフを空中に放つてしまい、それを空中で見事にキャッチしたエミリーが狙いを付けて次の相手の顔面に投げつける。

仲間の眼球に深々と突き刺さつたソレを見て恐怖の色を浮かべ始めた盗賊は、近寄ってきて剣を振るつたエミリーに殺された。

「クソがッ！－撤退だ、奪えるもんだけ奪つていけ－！」

盗賊達のボスがやけくそ氣味に叫ぶのを聞き、ジョージは何を言っているのか意味が分からなかつた。

相手は4人ずつ倒せば住むぐらいの計算で、自分もジャックもエミリーも自分の周りの敵は倒して、残りは目の前のボス一人だけだと思つたからだ。

しかし、冷静になつて考えてみると何が間違つたのかようやく気がつく。

相手は何人で攻めてきていたか

答えは15人

エミリーが最初に殺したのが1人と、その後にエミリーとジャックと自分が倒したのが4人ずつ、目の前で逃走を始めるボスを入れても14人だ。

では、残りの1人はどこにいる？

ハツとして振り返った馬車から聰介の叫び声が響いてきて

ザシユ

と、剣が肉を切り裂く音が時間がとまつたように静まり返るこの場に響き、次いで「ト」と何か重い物が馬車の硬い床に落ちる音が聞こえた。

「ソウスケ――――ツ！！！」

そんなジョージの叫び声は、血で真っ赤に染まぬ床の上に広がる深

い夕暮れの空に吸い込まれていった。

4566文字です。

ん～なんか微妙にしつくりこない出来ながらもあげてしまつた気がする。

これでよかつたのだろ？@_@。いいか。

それでは

次回をお楽しみに～（モチベあがらない……）

注意！！

作者の性格上、グロイ所が書かれています！
読んでいて気分が悪くなつた方は飛ばしてください。
それでも気にならなければ、飛ばしても問題あり
ません。

本格的にグロく書いたつもりはないのでそこまで気にしなくても
いいかも知れませんが……。

……十分グロいって！って言つ方は感想で愚痴つてください。
直しませんが……。

019 殺人と殺人

ポチヤンと、夜の暗闇の中で月の光を反射してキラキラと光る川面に小さな石が投げ込まれた。

それを投げ込んだのはいささか暗い雰囲気を放つ聰介だった。

今、聰介達はあの戦闘があつた峠からさらに進み、峠を下った先の河原で野営している。

さきほどまではジョージ、ジャック、エミリーの3人は盗賊達を切ることによってついた血脂を川の水で綺麗に洗い流していたが、今はその3人も明日のことを考えて早めに睡眠をとるらしく、川べりに座り込んでいるのは聰介ただ一人だ。

そうは言つたが、実際のところは聰介を一人にさせてやろうと考えてのことだろう。

聰介は傍らにクラウ・ソラスを置いて川べりの一際大きな岩に腰かけて川の流れをじつと見つめているだけで身じろぎ一つしていない。

なぜ、聰介がこのような状態になつているのか。

それは少し時間をさかのぼらなければいけないだろう、数時間前までの盗賊達との戦闘の場面へと。

聰介は荷台の奥の荷物の片隅に隠れる様にしてじつと動かずには潜んでいた。

荷台の入口の方では、こつそりと近づいてきていた盗賊の一人が荷台の入口付近の荷物を物色している最中だった。

ガタンと言ひ音と共に盗賊の一人が乗り込んで来た時はヒヤリとしたものだが、盗賊は目の前に積まれている荷物　剣や、鉄板などに目がいつてゐるのかこぢらへ近づいてくる気配は無い。

できればコチラにきませんようにと、なるべく息を殺し、身を固くして一切の動きを止めていた聰介だがその願いも叶つことは無かつた。

「クソがッ！　撤退だ、奪えるもんだけ奪つていけ！　」

といつ言葉に反応して盗賊が顔をあげたからだ。

じつくりと見るのを止めた盗賊は手元に置いてあつた数本の剣を左で纏めて掴みとり、そして奥の方へ何かをとりに来た。

「あん？」

と、盗賊が声を出したことで何だろうと思つた聰介が少し視線をはずすと物陰から少しだけ飛び出した衣服の端っこが見えた。

やばい……顔を青くした聰介だがもう遅い。

ハツとして顔をあげた聰介の目の前には既に上から覗きこんできた盜賊の無精髭の生えた顔が映る。

「テツメエ……！」

盗賊が声を上げ、右手を腰に差した剣へと持つていった瞬間、聰介の脳裏にはそれで斬られる自分の姿が幻視された。

いくら契約によつて死ぬことがないとえども、死と言つ純粹な本能的恐怖を叩きつけられた聰介は半分パニックに陥つた。

一応……と剣の柄へと手を触れさせていた聰介の右手は、それを握り締めると恐怖自体を振り払おうかとする様に剣を振るつた。

相手も見ずく無造作に振るわれた剣は、空きになつた胴体を逆袈裟に斬り上げ、心臓へと達するほどに深々と切り裂いた。

と剣が肉を切り裂く音が耳に入り、ついで「ゴトリ」という音が床と空氣を通してつたわってしばらくしてようやく聰介は目を開けた。

目を開けると目の前には胴体を深々と切り裂かれ斬り口から血を溢れさせ始める斬死体。

映画などのグロテスクなシーンではこういう物も見たことはあるが、それはスクリーンを通しての単なる映像でしかない。

実物は違う、目の前でピクピクと痙攣する筋肉に、むせ返るほどに濃厚な血の匂いと生々しく光を照り返す血液。

それら全てを含めた情報は聰介の脳を激しく揺さぶる。

「ソウスケ！ 大丈夫か！！」

そう言って飛び込んできたジョージの横を通り過ぎ、一刻も早くここから離れようと外に飛び出すと外にも凄惨な死体がいくつも転がっていた。

心臓を突き刺されて胴体に血の滝を流す死体、頭と胴体を切り離されて夥しい量の血の海を広げる死体、眼球にナイフが突き刺さって絶命している死体、極めつけは胴体を真つ二つにされたことで血にまみれた小腸や大腸などの臓物がボトリと地面へと散乱している死体。

始めて実物の惨殺された死体を見てしまった聰介は思わずその場に両膝をついて胃の中のものを吐いた。

地面へと吐きだされた吐瀉物からはすっぱい匂いが立ち上ってきてそれが更に吐き気を増していく。

全て吐きだした聰介はその現場から田を反らし、山の向こうへと沈みゆく太陽へと田を向けた。

後ろでは凄惨な光景が広がっているのに、眼前には山に沈みゆく美しい太陽があるのがひどく奇妙に思える。

これほど見るも絶えないことが起じたのに、世界は何事も無かつたかのように回り続ける。

それは当たり前のことだが、今の聰介にはとても奇妙なことのように思えた。

日常となんら変わらぬ太陽を見る事で段々と落ち着きを取り戻してきた聰介は深呼吸を一度する。

「ソウスケ……わりい、また守れなかつた……。警護なら一番に護衛対象者を優先しなけりやいけねえのに倒すことに集中しちまつた。すまん……」

馬車の中の死体を片づけていたジャック達のところから歩いてきたジョージは聰介の後に立ち、頭を下げる。

「うん……いいよ。ジヨージ達は精いっぱいやつてくれたんだから……。」ハチ公を取り乱して「ゴメン。……もういいつか」

死体を見ないようにジョージに話しかけた聰介の顔には作り笑いが張り付けられていた。

それを見たジヨージは無理しているとすぐに感づいたが自分がそれを言へるはずも無く、ああ……とだけ短く答えるだけにどぎまつた。

やはり馬車の中に戻るのは出来なかつた聰介は、御者台の空いているスペースのところへ座らせてもらつてゐる。

御者は多少氣の毒そうな目で聰介を見ていたが、何も言わない方がいいと思ったのかすぐに前を向いた。

キレイに有る程度血を拭き取つたジョージ達が馬車の荷台に乗り込むのを確認すると馬車はそろそろとゆっくり動き始める。

当初の目的地である河原までは誰一人としてしゃべらなかつた。

それゆえに葉が風に揺りわれてわざわざつまづまだけがこむに耳につけられた。

『ソウスケ……あれは仕方が無いというものです。抜かなければソウスケ、あなたが切られていたのですよ?』

「そうはいつも……殺し……ちゃつたんだよね。初めての人殺し……」

『確かに人殺しではありますが、正当な理由による殺人ですよ。今このぐらいのことで凹んでいてはこの先が大変ですよ?』

「…………うん。…………」めん、ちょっと一人で考えるよ

そういうた聰介は、夜空というスクリーンに爛々と輝く星々の瞬きを見上げる様に岩の上で仰向けになり、頭の下で腕を組むとゆっくりと目を閉じた。

そして、何かを考えているのか数分間険しい表情で目をつむつていたが、しだいに力が抜けていくように表情が柔らかなものとなってきた。

どうやら目をつむつて考えている内にねむつてしまつたらしい。

『…………しかたないですね……。風邪を引かないように暖かい空気の膜で包んでおきますか……』

一人?残されたクラウはソウスケに向かつて優しく魔法をかけたのだった。

「ああ久しぶりだね。どうだい？初めての人殺しをしてみた感触は？」

目を開けると、そこにはいつぞやの真っ黒い球体がホワイトアウトのように距離感が分らなくなるほどにどうでも真っ白な空間に浮かんでいた。

あつと『コレ』が出てくると、夢ではない場所なのだわ。

「お久しぶりです。そうですね……やつぱり怖いですよ。殺したことでその罪が生きしていく中ですと付いて回って、新しく出来た関係でさえ、殺人をしたことが知られたらそこから周りの全てが崩れていいく気がして……」

「なるほど……。実に平凡かつ解決しやすい悩みだな。この世界は殺人が当たり前の世界な上に、そのような小さなことで追及してくれる人間などいない。ここは君のいた世界ではないのだからな、君の心配は杞憂というものだ」

バッサリと斬つて捨てる『コレ』は確かに正しいが、それでも积淀としないのは仕方のないことではある。

「……それでも、相手に怨まれているなんて思つと……。重圧で押しつぶされそつで……」

「……君は存外に面倒くさいな。それならば直接会つて話すといい

「ちよ、ちよと待つて下わー。そんなの出来るわけが!」

「私が出来るところだら出来るのだ。君の悩みを解決できるし、これからもこの世界で生きていこうで死者からの話を聞くのは良い経験になるだらう。そり、話してみる」

そういうて『ソレ』の手前が一瞬真っ黒なインクで塗りつぶされたかと思うと、田の前には自分が殺したはずの盗賊団の男が立つっていた。

殺した時の違いといえば、バッサリと切つたはずの傷が無くなつていただけで、それ以外はあの時と全く同じ格好だった。

「……よお。久しぶりだな……」

「……あの……久しぶりと云つても半日ぶりなんですが……」

「ああ?……くせつそつか、こじじやあ時間の流れが違うんだったな、くせつ。俺はもうじいじで10年過ぎしてんだ!」

「ううこじじだらう?と思つてみるとその説明を『ソレ』がした。

「まあこの男が住むのは別の部屋ではあるが……」¹ これは私の管理する空間でな。一般には天国や地獄などとよばれるところだ、いわば魂の行きつく先だよ。私はここで様々な世界を監視・管理しなければならんのだ。そのためには膨大な時間が必要だ。たとえ1日といつても、1つの世界でも情報は膨大で、その世界自体がいくつもあるのだから、とてもじやないが同じ時間の進み方では追いつかないのではな。半日に対してのこちら側の時間の進み方が10年と言うわけだ。分かったか？分かったなら話を続けたまえ」

あいかわらず傍若無人な態度で一方的に話す人だな……と思うが、そちらにばかり気を取られるわけにはいかない。

「あ……話がそれたな、どこまで話したつけな……。……ああ、思い出した。どうやらお前は俺がお前のこと恨んでるんじゃないかと思っているらしいな。……まあ殺されたばかりの時は、そりやあ腹は立つたし、お前を殺して復讐してやりたいと思ったが。それも最初だけだ、今はもう何も考えてねえよ。よくよく考えてみりや、俺だつて盗賊で何人も殺してきたんだからな。お前を責めることなんて出来ねえよな。……それにこの方がよかつたのかも知れねえ。盗賊続けて人殺しまくつて人から獸に墮ちるよりはな。……だから、俺はお前を恨んじやいねえ。そもそもこの世界……いや、あの世界か、あの世界じや人殺しなんて日常茶飯事にされてることだ。生きるために殺し、楽しむために殺し、命令されて嫌々殺すことだってある。だから、俺を殺したこと執着するな。殺した相手の全てを自分の力にしていくぐらいの気概をもて。そうしなければ……お前もまた無残に殺されるだけだ」

途中で口を挟もうとする聰介を手で制し、そして名前も知らない盜賊は言ひきつた。

それは全て背負つていくという、救いのない残酷な事実であるが、真実的を射ていてこともある。

死人を思つてうじうじと悩むことは結局は現実逃避であり、自己満足でしかないのである。

厳しい現実を叩きつけられた21歳の聰介にとって、その言葉はとても重く受け止めがたいものだったが、同時に受け止めねばこの先生きていけないものだった。

「……殺した本人からこう言われるなんてなんだか不思議な感じですね。想像していませんでした。……でも、ありがとうございます。少し楽になつた気がします。あなたの人生の分もこの世界でしっかりと生きぬいていきます。本当にありがとうございました。」

スッと腰を折り曲げ、頭を下げる聰介。

「……どうやら話は終わつたようだな。もう戻すぞ、いつも見えて私は忙しいのだ。もうこれ以上手間をかけさせんなよ」

「……では、どうして呼んだんですか？」

「…………。無責任に異世界に送つて人殺しきときで潰させては私が納得せんだら。…………勘違いするなよ、お前の為などでは無い」

最後のそれを言つのは逆効果、むしろシン『テレ』つて思われるだけなんだけどなあ…………と思いつつも聰介はそちらにも頭を下げる。

『ソレ』も本当にこれで終わりのつもりなのだら、聰介の足元からこりこりや光が渦を巻いて湧きあがつてきていた。

あの時と同じ、眩しくて荒々しい光だが、ビロか温かみのある光がゆっくりと聰介の全身を覆つていた。

ただ違うのは聰介が『異世界に行く』ではなく、『異世界に戻る』という事実だけだ。

「あの！最後にあなたの名前を教えてもらひますか？」

光に包まれつつあるなかで聰介は叫んだが、それに返つてきたのは簡単な答えだつた。

「今更知つてびひすんだ。お前が生きるのは……未来だら。」

その言葉と共に聰介の意識は温かな光の中にゆっくりと溶けでていった。

5025文字です。

ちょっとグロイ部分書いちゃつたかも……。

反省も後悔もしてませんが。自分的にはこれでいいので……

あ、苦情だけじゃなくいつも通りの感想も求めていますので……。

それでは次回をお楽しみに♪。（次話こそ王都に！）

020 移動と王都

> 112649 — 1401 <

「ん・・・・・ふわああ・・・・・朝・・・・・か・・・・・」

目を開けて飛び込んできた朝日が眩しさに目を細めつつ、体を起こそうと力を入れる。

「アイタタタ・・・・・」

体を起こそうとして力を入れたが全身が痛くて、眩しさとは別の意味で目を細めることになったが、それも当然の話でいくらクラウが温度を調整してくれたとはいえ、堅い岩の上に寝ていたのである程度の痛みは仕方ない。

上半身だけ起こして正面を向くと、ちょうど朝日が昇ってきているところだった。

確かに体は痛かったが、心の方はと言えば軽やかな気分だった。

新たな覚悟を決めて迎えた朝日の人と綺麗なことだひつ。

昨日までと何ら変わらない風景すらキラキラと朝日を反射してとても美しいし、川辺の朝のスッキリと澄んだ空気もまた格別だ。

深呼吸をして爽やかな空気をいっぱい吸い込んだ後は、川の水を両手で掬い顔を洗う。

ヒヤリと冷たい水で眼鏡もすっかりと吹き飛んだ聰介は体を伸ばすと馬車の方へとゆっくりと歩いていく。

途中で小さな子供の狐が目の前を駆けていったと思うと、その後ろから更に小さな子供の狐が転がる様に追いかけていた。

かわいいな・・・・・と小さな癒しを貰った聰介の顔には自然に笑みがこぼれる。

馬車を停めてある場所まで行くと、既に起きだして朝食　　といつても水とサンドウイッチだが　　の準備をしていたジョージ達と田があつた。

ジョージ達は一瞬固まつたが、聰介の顔を見ると何かあったことを悟つて、心配は杞憂だつたと分かり、いつも通りに接しようと決めた。

「おまよへ、皆。今日さじこまで進む予定だつけ？」

「えへつと・・・・・ああ、毎週、毎週王都へと遊びに

聰介が聞くと、丁度地図を傍らに置いてサンドウイッチをつまんでいたジャックが返事をする。

地図を見ようとジャックの隣に腰かけると、ジャックが見やすいよう少しずりしてくれたので地図を覗きこむ。

「今がこの三の曲がつていいだから、ここのから真っ直ぐ街道沿いに進むと王都だよ」

ジャックが道程を指でなぞりながら教えてくれる先を辿ると、確かに指の先に城らしきマークが見えた。

地図を確認し終えた後は、ヒミコーに勧められるままにサンドウイッチを頬張り、しばらく休憩した後に馬車の荷台の中に乗り込んだ。その後は何事も無く、鳥の囀りを聞きながら王都への道を辿ついた。

「なんか縁が減つてきたけど、本当に道あつていいの?」

王都に近づくにつれて縁が段々と減つていってこのことに気付いた聰介は少し不安そうに尋ねた。

「知らないのかい？」こは土の国だからね、基本的には縁が少ないんだよ。あの街は水の国と直ぐ近くだからそのおかげで縁があるんだ。あそこは本当に例外だね。でも道はちゃんと合ってるから大丈夫だよ。」

「なるほど……。じゃあ王都の近くだと作物があまり育たないんじゃない？」

現実世界で日本と言う国が外国からの輸入に頼る国だといつこを思い出した聰介はそのことについて聞いてみる。

すると、御者からはすぐにそのことに対する答えが返つてくれる。

「ん~まあ そうなんだけど、この国は鉱物資源が豊富だからね。それを使って他国……まあ水の国が主だね、野菜とか果実とかを仕入れていいんだよ。」

「そなんだ。……あつ、でもそれだと水の国が野菜とかの輸出を止めたら、食糧が少なくなつて簡単に国を乗っ取られない？」

「いや、この国は鉱物資源が豊富なだけじゃなくて、それらを扱う鍛冶師自体のレベルが高いから質の良い武器を色々な国に輸出しているんだ。向こうにとつてもそれらを戦争で失つて輸入できなくな

つたら軍の質が落ちるからそれはしないだろうし、それこそ止められたらこの荒野で鍛えられた強靭な踏破力を持つ軍が動くだろう。まあ、持ちつ持たれつでバランスが取れてるから戦争はないよ」

技術を持つことで、手出しをさせないといつのは日本と同じだなあと聰介は感じる。

「ふむふむ……なるほど。どこの国もそんな感じなの？」

「ああそうだな。それこそ大昔は全部の国を巻き込んだ大戦があつたらしいけど、今は大体のとこが平和だなあ……。そういえば、闇の国は政治が上手くいっていらないらしくて内乱寸前だそうだよ。もし商売で行くことがあるなら気を付けた方がいいかもよ」

「ありがとうございます。」

御者の忠告に感謝の言葉を返した聰介は考える。

土の国でなら自分の知識と鍊金術を使って元の世界の物を再現したり、想像上の物を創ればそれが認められるかもしれない。

そうすれば安定した収入を得ることに繋がるし、有る程度の地位を築くことが出来るだろう。

それを使って国と繋がるようになれば、エドガーの時のよつなことは起こらないかもしない。

そう考えた聰介は、土の国で成功できるよつと頑張りつと決意した。

しかし、聰介はすっかり失念していた。

その頼るべき国 자체が自分の技術を利用しようと企むかもしれないといふことに……。

「おーい、王都が見えてきたぞー！」

荷台で昼寝を　昼食前だが　していた4人を起こすよつに声を張り上げた御者の声が聞こえてくる。

その声に反応して荷台の床に敷いた布の上から体を起こし、前方を御者の横から覗きこむと確かに王都が見えた。

聰介の目に最初に飛び込んできたのは巨大な鉄製の門だ。

コンスタンティヌスの凱旋門　高さ25m　を一回りほど小さくしたぐらいの大きさの門は、流石に鉄鉱物を主な資源とする国に相応しく、要所要所にあしらわれた鉄の装飾が重厚な雰囲気を放っている。

その巨大な門の扉は25?程の分厚さの鉄で出来ており、たとえ軍

隊が攻城兵器を持ってきて突破しようとしたところで徒労に終わるだろう。

かといってその門を避けて通りうとしたところで、街全体を環状に取り巻く長大で分厚い石の壁がその行く手を遮っている上に、その壁の上では兵士が弓を構えて巡回しているので超えることすらできそうにない。

さすが、首都というだけはあると言つた感じのある種の感動？
上京した時にスゲエ！と感じる時と同じ　のようなものを感じつつ、馬車はどんどんと進んでいき、門での審査を受ける。

門をくぐると巨大な門に邪魔されて見えなかつた城や街並みが見えてくる。

すぐ目の前に広がる市場は、多くの露店でじつた返していく、砂が舞い上がりつつも活気よく商売をしている。

目につく人々は強い日光を避けるためかゆつたりとした長袖をつけ、アフガンストールのような布地を首に巻いているのが特徴的だ。

それらの奥へと田線を送ると中世の城とはまた違つた高さがあまり無く、実用性を重視した城が見えてくる。

こちらも門と同じで重厚な造りの城で、とても頑丈そのものでひとつやそつとの攻撃などではびくともしそうにない。

それらに見惚れていると審査を終えた御者が声をかける。

「ここのあとはどこに行けばいいんだい？もしまだ決まって無いなら、商工ギルドへ行って手続きをしてくるといいよ。ギルドカードがあるならそれを見せれば簡単に済むはずだよ」

「わざわざありがとうございます。ちょっと時間がかかるかも知れませんが、ここいら辺で待っていてもらえますか？その分の料金は出しますので」

御者の親切に素直に従うことにして、荷物番をしてもらつ代わりにある程度のお金渡すと、聰介は教えてもらつた右斜め前方にある商工ギルドへと向かおつとする。

「おーい、ソースケ。俺たちはその間どうしておけばいい？」

「あつ、『めん』めん。ちょっと時間かかるかも知れないから自由に行動していくいいよ。今からだいたい2時間後にまたここでね」

「

ジョージ達のことをすっかり忘れていた聰介は内心あわてつつ、表面上は平静を装つて返事をする。

自由行動をもらつた3人はちょっと話していたが、直ぐにそれぞれのしたいことをやりに散り散りになつていった。

商工ギルドへと入つて行つた聰介は手続きを済ませようとするが、登録をしようにも店舗が決まって無いことを受付で手続き中に指摘され、氣付いた聰介は、受付のおじさんに苦笑されつつ店舗を紹介

しても「うし」とになった。

受付のおじさんから紹介された不動産屋に案内されたのは、表通り沿いの物件と表通りから一本入ったところの物件、郊外に建てられた物件の3つだった。

表通り沿いの物件は、もちろん表通りと「う」ともあり、集客率が多く見込めて売り上げも伸びるだろうが、賃金が高いのが難点である。

表通りから一本入ったところの物件は、表通りから一本外れているということで、集客率はまずまずにはなるが、賃金も普通の値段でバランスの取れた店舗なので名が売れているわけでないならオススメらしい。

最後の郊外の物件は、集客率はほとんど見込めないが、賃金がとても安いので、作って武器屋に収めるだけなら最適な場所かもしれないとは不動産屋の言葉だ。

3件の候補があるということで少し悩んだ聰介だが、エドガーの時のようにまた面倒事に巻き込まれるのは勘弁してもらいたいので表通りの店舗は一番に候補から外す。

とすると、残るのは自然と表通りから一本入った通りの店舗と郊外の店舗の2つになるが、作るだけ作って武器屋に卸して終わりでは、相手の反応を見る楽しみが無いため郊外の店舗も却下する。

バランスが取れているし、場所的にもそこまで面倒なことに巻き込まれないだろうと考えた聰介は、消去法で決まってしまった残る1つを新しい自分の店とすることにした。

一緒に回っていた不動産屋に話をつけ、家賃を1000ギルほど払つて契約完了とする。

元の世界で引つ越しといえば、電力会社やガス会社、水道局、郵便局、電話回線etc.などの煩雜な手続きがたくさんあつて大変だが、この世界はそこまで文明が発達していないのでそれらの手続きはほとんどしなくてもいい。

することと言えば、店舗兼住所も決ましたことなので商業をする場所の登録と住所の登録ぐらいだろう。

その残つた二つを早く終わらせてしまつために聰介は数十分前に訪れたばかりの商工ギルドへと再度入つていく。

中ではこれまた數十分前にいた受付のおじさんが座つていて、手続きの準備をしていてくれた。

手続きを終わらせた聰介は一軒隣りの役所に入り、住所の登録をさつさと済ませて外に出た。

腕を持ち上げて腕時計　元の世界と時間の進み方はほぼ同じを見ると、約束していた時間を5分ほど過ぎていたので、慌てて集合場所へと向かう。

5分という僅かな遅れさえも気にしてしまつのは元の世界でも日本人ぐらいなものなので、この世界の人々も気にしてはいないだろうがそれでも焦るのは日本人の性だらう。

聰介が集合場所へと向かうとそこには既にジョージ達3人が既に揃

つていた。

3人はそれぞれに自由行動をした成果をその手に握りで持つていて、ジョージは街の通りで開かれていた力自慢達による賭け腕相撲での時のチャンピオンに勝つたらしく、賞金がたくさん入った袋を持ち、満足そうな顔だ。

ジャックの手には寂れた街の古書店で買ったという古書が2冊おさまっていて、その顔はジョージと同じで満足そうなものだ。

エミリーは「……」といふか両手には屋台で買つたらしいケバブやタコスのような食べ物や、チユロスやドーナツなどの甘い食べ物が握られている。

冒険者ということをしていると色気よりも食い気の方が勝つてくるのだろうか、食べている顔は幸せそのもので一向に構わないが……。

ともあれ満足そうな3人に新しい店が決まつたことを伝えると、荷物をそこに移しにいくことになった。

街の入り口付近で待機していた御者のところまで戻り、店が決まつたので荷物を持っていく顔を伝えると4人は馬車に乗り込んで店の前まで進んでいく。

店の外観は少々砂埃で汚れてしまつてはいたが、洗い流せば問題なさそうな程度で、内装も備え付けの物が比較的キレイな状態で残つていた。

構造もガーランドの街の店とほぼ同じで、違いといえば倉庫がもう

「ついたぐらいだらうかとこつべらこだ。

新しく出来た倉庫のおかげで、今度からは武器などの重要な品物を入れておく金庫と、材料などを入れておく倉庫とで分けておくことが出来るようになるだらう。

更に店の中を見ていくと蜘蛛の巣などもなく一見綺麗に見えるものの、床には隙間から入ってきた砂がうつすらと積もつてるので掃き出してしまわなければいけない。

4人で協力して店の中に荷物を運び終え、ジョージ達から見えないよに鍊金術で一つの倉庫の中を金庫仕様にしあげると、『安全守る君』を店の扉に取り付けて鍵をしてから外に出る。

数日間とはいへ王都への旅を共にしてきた御者を見送るためだ。

御者はこれからガーランドへ向けて帰るらしく、既に冒険者風のお客を数人乗せている。

「初めは大変だとは思うが、この街でもしつかり商売していくんだぞ！」

と、励ましの言葉を聰介へと掛けた御者は、ピシッという音を立て馬の尻を叩いて北門を通りて出て行つた。

随分あつさりとした別れ方だが御者とそのお客とこつ関係はこつうものなのだらう。

御者と別れ、振り返った聰介の視界に広がるのは砂埃舞う土の国
首都『荒野地帯』^{デザートラン}の街並みとその城塞。

今度こそは……と決意を新たにする聰介はこれから予定を立て始める。

「そうだ、まずはあこせつ回りからしよう」

聰介の新たな日常は、近所をんへのあこせつ回りから始まるのであつた。

5420文字です。

今テスト期間中つてか明日もテストです。

マジ死ぬ。しかし、進路は決まつてるのでござなりだつたり。

乙。つてかなんかテンションおかしいです。ハイ。

さて、今回は満足いく話にならなかつたので、ちょっと批判覚悟。
それでは、次回もお楽しみに。

P . S . 745-977アクセスと、ユニーク114-603

人ありがとうございます

売上金に対し王都が3割、マフィアが1割、店側が6割と変更しました

021 挨拶回りとマフィア

門から店へと戻ってきた聰介は、ジョージ達にあいさつ回りに行つてくるから好きにしていいよと言葉を残して工房の中へ入ついく。

この工房の扉は元の持ち主の防犯意識が高かつたためか、少し薄いがしつかりとした鉄製の扉で、外に南京錠が、内側に門がかけられる作りになつていたので特に弄らなくても良さそうだ。

店の扉にも『安全守る君』を取りつけておいたので侵入される心配については大丈夫だう。

もつとも、相手が周囲にお構いなしで扉をぶつ飛ばしたり、ガラスをブチ破らなければ……の話だが……。

扉の話はさておき、工房に入った聰介は金庫 元は倉庫だがの中の木箱から鉄のインゴットを5本ほど取りだすと、その中の一本をアダマンタイトへと練成していく。

魔鉱石はほとんど残つて無かつたので、なけなしの魔鉱石と己の内に在る魔力だけを使って練成をする。

クラウに頼んでも良さそつな気もしたが、あまり魔力を使わせてまた倒れる 力が抜けて浮かばなくなるだけだが ようなことをするのも忍びないため、今回は我慢。

体力だつて魔鉱石も使うからちょっと疲れるだけだらうし許容範囲内だらう。

よしつと体に喝を入れた聰介は、手を重ね合わせて鉄からアダマンタイトへと連金していく。

以前創つた時の魔力の通る道を思い出しながら腕から魔力を放出していくと、聰介の体は薄いヴェールを纏うように柔らかく光を放っている。

最初の練成の時の噴き出すように体から溢れていた余剰魔力とは違つて、薄く纏うように漏れ出ているだけといつことば「コントロールが上手くいってる」とのなによりの証だらう。

それから出来あがつたアダマンタイトと鉄を1：4の比率で混ぜ、多少質を落としてから何本もの包丁の形に仕上げていく。

包丁の形に仕上げた理由は、料理で包丁を使う際にその切れ味を実際に体感してもらうことと評価を得よつといつ考えによるものだ。

一人暮らしの男性に配つても料理をするなら『づくだらうし、奥さん』がいる家庭ならその奥さんが『那に包丁のことを話すことも一応は期待できる。

一応アダマンタイトを入れてはいるが、鉄の比率が大きいので研ぐことが必要になるだらうからその辺も商売に組み込めるだらう。

しかし、冒険者に関してはタダで配るわけにもいかないのでそこら辺は開店してからのこととこうことでとりあえずはコレで良いだらう。

あの作業は持ち手をつけること、それを入れる箱を創ることだが、これは薪を使ってササッと仕上げてしまつ。

持ち手をつけた包丁を箱の中に収めて蓋を閉じた後に、その蓋に漢字で『聰介』と名前をいれたらコレで出来上がりだ。

もちろん、『聰介』という文字が分かるはずはないのでコレはただの製作者の印というだけのものである。

全部仕上げた聰介はそれらをバッグに入れると工房の扉を開けて外に出た。

店の中はシーンと静まり返つていて人の気配がしないのでジョージ達はきっと外にでかけていってるのだろう。

工房の扉に鍵を掛けた聰介は外に出て『安全守る君』でしつかりと戸締り ジョージ達には合いカギを持たせている をしたのを確認して歩き出す。

挨拶の回り方などをくわしく知らない聰介はとりあえず左隣りの魔法具を扱う店に向かった。

(……黒魔術でも扱っているんだろうか……。)

店の中に入った聰介の最初の感想はそんなものだつた。

店の中には干からびた手のようなもの 人間の手そっくりである
や、まだ神経や血管が付いたまま田玉がホルマリン漬けのよう
に置かれていたし、極めつけには骸骨 どう見ても人間のモノ
や、血液が置かれていた。

そのほかにもなんらかの内臓らしきものなどの非常に田じよじく
ない代物が置かれていたが、これは翻覆をせてもうつ。

床などに直接おかれているナーナー力をひつくり返さないよう気につけながら進んでいくと、奥には妙齢のお姉さんが黒い皮表紙の本を片手にカウンター横の本棚に寄りかかる様にして立つてゐる。

恰好はというと、モデル並の八頭身の持ち主で、背中と胸元が大きく開いたホルター・ネックタイプの黒のロングドレスからは瑞々しく張りのある豊かな胸と引き締まつたウエストが見て取れる。

ロングドレスに阻まれて直接見ることは叶わないが、その下にある足もスラッシュした美しい脚であろうことは間違いない。

肌の色はというと、普段口の光を浴びてないのではないだろうかと思つほど雪のように真つ白で、黒のロングドレスがよく生える。

「あら？ 珍しいわねえ、お客様かしら？」

「こちらの気配に反応して本を下げる」と、その奥には本に隠れて見え

なかつた顔が現れる。

鶲の濡れ羽色のようすに真っ黒でサラサラと零れ落ちそつたほど柔らかな髪は、後頭部でひとつくじにむれて、いわゆるボーネールについて、側頭部からの遅れ毛は先が軽くウーブが掛けられている。

髪をあげることによつて見えるつなじからはなんとも言えない大人の色香が漂つて来て、思わずドキリとしてしまつ。

「あつ、いえ。隣に越してきたので、挨拶にきたのですが」

「あら、わあ。良い子なのねえ君。いらっしゃだとあいをつ回りなんてするような殊勝な商人は少ないから……お姉さん、君の事気にいつちやつたわあ。しまつたことがあつたらお姉さんといいなさいね？」

キリッとした目を少し細め、流し眼を送るお姉さんは筆舌に尽くしがたいほどに色っぽい。

健全な青年男子としては反応に困るところの上無いが、これがお姉さんの素なのか、止める気配はない。

つい赤面してしまつのはじみが無いことにつきのだった。

「ふふふ、初心な反応ねえ。そういうかわいいのって好きよ、食べちゃこないくらいに……。うふふふ

ふつくりとした唇から放たれた言葉に更に顔をあからめつゝ、このままではいけないと思い立ち、包丁を渡すことで話題転換を図る聰介。

「あ、あのーこれウチで創つた包丁なんですが良かつたらお使いください」

「あら、ありがとう。創つたつてことは鍛冶屋のかしりっ？」

「あ、はい。鍛冶屋兼武器屋……といつよつは創つたものを売るつていう感じですかね、そういう店を開いてます」

「ふうん。お姉さんも何か必要になつたら頼むわねえ」

「ありがとうございます。まだ他の人のところが残つてゐるのでそろそろ失礼しますね」

軽く一礼した聰介は回れ右をすると、不自然にならなによつに氣をつけながら足早にお姉さんのお店から出て行つた。

「なんか、すつごい色っぽい人だつたなあ……。まだじきじきしてゐよ……」

未だに赤い顔のままをしている聰介はそつまきながらあこせつ回つ

を再開するのだった。

（鍛冶屋にしては魔力を使って何かしていたみたいだし、ただの鍛冶屋の坊やつて感じじゃなさそつね。……ふふふ、おもしろい子……。）

それを見ていたお姉さんは、聰介が来る数分前に聰介の店から感じた魔力を思い出して楽しそうに笑っていた。

「あつ、ちよつと待ちなー。」

近隣の店や民家へのあいさつ回りを終えて聰介が最後に挨拶をした店を出ると、思い出した様に後ろから引きとめる声が掛かった。

「なんでしょうか？」

「いや、この街にはあまりくわしくなさそだからちよつとね。こ
こら辺を繩張りにしてるTempest^{テンペスト}って知ってるかい？」

繩張りにしているという単語に嫌な予想が浮かんでくるが、その名前自体にはなじみがないので首を傾げる。

「あ～やつぱり知らなかつたか。まあ一口に言えどもマフィアだな。んで、こりゃ一帯の店なんかはチンピラや賊とかから守つてもひつ代わりにみかじめ料を收めてるつてわけだ。マフィアと言つても「*empesta*」は無法者の集まりじゃなくてしつかりとした力ボを頭に据えている組織だから安心していいだ。まあもちろん、マフィアってだけあつて麻薬取引、暗殺、密輸、密造、共謀、恐喝つて具合に法に触れることははしていがな。これらは口には出すなよ？」

「はい、氣をつけます」

「それと売春と賭博のことは間違つても口に出しちゃダメだぞ。向こうこわく『名誉ある男』がするビジネスじゃないそうだからな。良くて半殺し、最悪殺されかねないから注意しりよ」

「殺し……ですか。穩やかじやないですね」

殺されるといつことを聞いて聰介の背中に冷たい汗が流れるが、目の前で注意をしてくれるのはお構いなしに話を続ける。

「言わなければ大丈夫だよ。んで、こりゃで商売するんなら挨拶とかを先に済ませとかないと厄介なことになるから、早く会いにいくといい。

今的时间帯なら、この通りを真っ直ぐ行つて突き当たりのところの右手の酒場に行くと、酒場の隅でポーカーをしている黒服の男がいるからそいつらに話しかける。その後はそいつらが案内するはずだから、何も逆らわずにしていれば連れて行つてもうかるぞ」

「わざわざありがとうございます。あとで行つてみますね」

また面倒に巻き込まれなければいいけど……と内心思つ聰介だが、一方では、街の人があれほど恐れていらない様子を見て大丈夫だろうと楽観視する自分もいる。

前回のことを思い出してそんな自分に呆れるが、こればかりは時間をかけて矯正していくしかないだろう。

一旦家 正確には工房の中 に戻った聰介はあいさつ回り用に用意していく余った包丁をしまって、急遽練成した小さなナイフを服の内側に忍ばせてから、また通りに出た。

挨拶に行つて帰るだけなのでトラブルに巻き込まれるとは思ひがたいが、それも今までのことから考へると怪しいため、用心するほうがいいだろうと思つてのナイフである。

そして通りに再び出てきた聰介は、先ほどのおじさんに聞いた通りの道を進んでいき、突き当たりに位置する酒場の前に立つた。

つきあたりの店にしては割と小奇麗な一階建ての酒場は、マフィアがいるというわりには意外に盛況しているらしく活気がある。

店内からは軽やかな音楽が響いてくるし、酒によつた人の笑い声や話し声などがガヤガヤと聞こえる。

店内に入るためには、建つけの良い扉を押し開けると、その騒音が一層大きくなつた。

聰介は気付かないが、実は聰介が入った瞬間に店主やテーブルについている何人かの客、従業員達から一瞬だけ鋭い視線が飛んだ。

もちろんそれはただの客や従業員ではなく、れっきとしたマフィアの構成員である『ソルジャー』達だ。

彼らはこの酒場にくる客を『役人（警備隊など）』『客（酒場として）』『密客』の3つに見分けるのが仕事である。

もちろん『客』は酒場側であれ、マフィア側であれ、どちらにしても利益を得ることが出来るので彼らにしてみれば歓迎すべき対象だが、もしそれが『役人』だとすればすぐに帰りいたぐための準備もしてある。

しかし、マフィア側もそれをするのはまずいことだと分かっているので、普段から高齢にお金を渡して黙らせているのだが……。

マフィア達の話はさておき、話を聰介にもどすと聰介は今、言われたとおりに酒場の隅でポーカーに興じている黒服の男達のテーブルへ着いたところだった。

「あの、すいません。ちょっと話があるのですが、いいでしょうか？」

「ん？ ああそういうえば商談の約束だったな。奥に部屋を用意してあるからそこで話そうぜ。じゃちだ

まさかこんな酒場で、『マフィアの頭と会わせて下さい』というわ

けにはいかないので、なんとか話をぼかしながら尋ねると3人の男達は立ちあがつて、聰介を連れて酒場の奥の部屋に入つて行つた。

酒場の奥の部屋に入ると、最後に扉をくぐつた一人が扉に頑丈そうな鉄製の鍵をしめる。

「んで?俺らに用つてなんだ?」

「この街に越してきたのでその挨拶をしにきました」

「ああそんなどこだらうな。この麻袋をかぶつてろ。俺らがその場所まで案内する」

質の悪い麻袋を渡された聰介はそれに逆らつことなく頭からすっぽりと被つた。

被つてからしばらくすると何か重い物を動かす振動音が聞こえて、それから体を引っ張られた。

鉄製の鍵を外す硬質な音は聞こえなかつたので、恐らくは隠し通路でも進んでいるだらうと考へる聰介を連れて、男達は折れまがつた通路を歩いていく。

何分か経ち、まだかな?と思つ始めたころ、扉の開く力チャリといふ音が聞こえ、再度力チャリという扉の閉まる音が聞こえてから麻袋を取られた。

急に取られたために麻袋で擦られた鼻を押さえながら正面を見ると、

高級そうな机で手を組んで座っている男が目に映る。

「あなたがTempestの力ポの方ですか？」

「いや、俺は力ポ・レジーム 幹部 だ。俺がここいら辺の管理を任せている。君は確か鍛冶屋を始めるそうだな? ちっそく挨拶に来るとは良い心がけだ。それと料金の相談といったところかな?」

「ん、ああ不思議そつな顔をするな。部下に情報を集めさせただけだよ」

既に話が回っているとは思わなかつた聰介が目を丸くしているのに気付いたらしくソレを簡単に言つてのけるが、文化レベル的に情報伝達手段があまり整つていないはずのこの世界では驚くべき速度だ。

「そうですか。いや、まさかもつ情報が回っているとは思つていなかつたのでびっくりしました。では改めまして……。ソウスケ・カミオと申します。このたびこの『^{デザートラン}荒野地帯』で鍛冶屋を始めることになりました。今後ともよろしくお願いします」

「ああよろしく。で、金のことだが、王都の税が3だから、売上金に対してお前の取り分が6、俺らが1だ。だが、まだ開店すらしてないのに最初は何かと必要だらうから、土の月の前半までは〇・5ぐらいでいい。それでいいな?」

「はー、ありがとうござります」

土の月と出てきたが、これはこの世界での暦の表し方の一つだ。

この世界では、もとの世界での2カ月を1カ月とするらしい、月の初めから月の中盤までを『前半』とし、月の中盤から終わりまでを『後半』としている。

もとの世界と比較して考えるなら、1月と2月を併せて『光の月』、3月と4月を『風の月』、5月と6月を『水の月』、7月と8月を『炎の月』、9月と10月を『土の月』、11月と12月を『闇の月』とできる。

この『光・風・水・炎・土・闇の月』というのは6柱の大精靈がそれぞれ支配するという意味があり、月ごとにそれに該当する属性の力は大きくなる。

例えば、炎の月では同じ呪文、同じ魔力量を込めたとしても、他の月で弱火だったのが、中火レベルになつたりといった具合にだ。

他にも月ごとにその精靈を表す特徴があり、『風の月』では強い風が吹いたり 春一番など 、『水の月』では、長く雨が降つたり 梅雨など と分かりやすい。

ちなみに、今は『土の月（前半）』の1日目なので、もとの世界でいえば夏休みがちょうどおわったぐらいだろう。

「よし。金はその時が来たら部下に取りに行かせる。……おい、酒もつてこい！」

田の前の男が後ろに控えていた男の方に振り向くと酒をもつてくる
よつて言つた。

「酒……ですか？」

意味が良く分からぬ聴介はなにをするのだろうと興味を引かれて
聞いてみる。

「あ……まあ儀式の様なもんだな。これから仲良くしていこうや
つて意味で酒を酌み交わすのがここでの習わしなんだよ。俺は酒が
苦手なんだがな……。こればっかりは昔からの決めことだから仕方
ない。俺に次ぐのは少なくしろよ」

少しして部課らしき男が持つてきたのはウォッカとショットグラス
だった。

他には氷も水もなく、このことから繋るに『ストレート』。

量が少ないと云は、ウォッカなどとこうアルコール度数が40も
あるキツイ酒をストレートで飲むにはいささか抵抗がある聴介だが、
相手はマフィア……そつもいってられない。

覚悟を決めて、ウォッカが注がれたショットグラスを右手に持ち、
胸の高さまで持ち上げる。

一気に口の中に流し込み、飲み干すとキュッと喉が焼けつく感じがした。

なんとか我慢して飲み干した後、正面を見るとそこには眉間にしわをよせて俯きながら低く唸る男がいた。

“ひっから本當に苦手ひりじー。

それにもしても、自分が酒に耐性があると知らなかつた聰介は、未成年なので飲んだことは無い、直ぐに酔つだらうと思つていたので意外と拍子抜けしていた。

再度正面を見ると額に手をやり、俯きながら手を振る様子が見て取れる。

つまづはもう行つてもいいぞとこひつひつ。

最後に一礼をして踵を返して後ろの扉の前まで歩いていくと、麻袋を持つた男が傍に立つ。

そういうば麻袋をかぶらなければいけないんだつたと思つた聰介は、男から麻袋を受け取るとスッポリと被つた。

そして男達に案内されるままに歩いた聰介は、ようやく酒場の奥の部屋へと戻ってきた。

そして、麻袋を取られる際にまたもや鼻頭を擦つて赤くしたのは言うまでも無い。

6703文字です。

更新遅くなつて申し訳ないvv;

高校3年生だもの！忙しいんだもの！

テストや勉強や恋（片思い）や遊びや……

あつ、受験はAO入試でうかりましたので問題なし！

なるべく1-2週間で更新するように心がけますので許してくださいな……。

では、次回もお楽しみに～

022 夕田と採掘場

聰介が酒場から店へと帰つてくると既に太陽は西方へと沈み掛かり、今日といつ命を終えようとしているところだった。

今日といつ命の燃えるような赤に照らされた積雲はまるで炎で創られた津波の様に空を覆いつくしてくる。

もといた世界となんら変わりの無い空だが、この空は元の世界の空とは繋がっていない。

『ビルにいたつて空は繋がっている』と誰かが言つたが、この空とは繋がっていない。

その事実が、無性に悲しくて聰介の望郷の気持ちをかきたてるが、聰介はビルしようもないことだと首を振り忘れ去る。

結局のところ慣れるしかないので、この世界に。

店の扉のノブを回すと、ゆっくりとドアが開いて聰介を迎えるれる。ビルから先にジョージ達が帰つてきるようだ。

そして聰介は夕田に背を向けて、店の中に入つていった。

「ああ、聰介か。俺らも今さっき帰つて来たばかりなんだ。まだ灯りも付けて無くてわりいな」

「いいよいよ。今灯りつけるね〜」

本当に帰つて来たばかりらしく、市場がどこかで買つてきたものが入つてゐるだらう袋の横を通り抜けて工房の中の灯油をいれた甕の倉庫まで歩いていく。

倉庫の扉を開け、甕の蓋をずらして、横に置いておいた灯油式ランプの中に灯油を零れないようにゆっくりと注いでから、蓋を閉めて火をつける。

もちろん、火をつけたのは倉庫から出てからであるのはいつまでもないことである。

それから火のついたランプを部屋の中に置くと、流石に昼間ほどの明るさはないが店内は明るくなつた。

「で、3人は今日何を買ったの？」

カウンター 剣等を置くので4人掛けのテーブル並に広い の前の椅子に座つた聰介は、3人が傍に置いている袋を見て言つ。

「ん、まあとりあえずジュースでも飲もうぜ。本當なら俺は酒の方がいいんだが、安い酒店に行つたせいか良いのが無くてな。それでイフアナのジュースにしたんだ。そそそこ人気があるみたいだぜ」

イフアナというのは桃の形をしたブドウ味の果物で、ソウル一帯で重宝されている果物だ。

水も無い様な砂漠地帯にジュースにできるほどの水分をもつた植物ができるのかと思う人も多いのだが、実はこのイフアナは地中深くに根を伸ばして地下水を大量に吸い上げることで成長する種類のものなので瑞々しく、ここでは水代わりに飲むことも多いほどらしい。

ジョージがイフアナのジュースを取り出して全員分のカップに注ぎ終わると、それぞれが飲んで『おいしい』『飲みやすい』など感想を呟く。

それから一呼吸分置いてジョージが真剣な眼差しで聰介と向かい合つた。

「ソウスケ、今回の王都までの護衛では守りきれなくてすまなかつた。俺達のミスだ。許してほしい」

「あ、いや、まあ結局無事だったんだしもつ氣にしてないよ。だから3人共顔をあげてよ」

いきなり謝罪の言葉と共に頭を下げた3人に驚いて、焦りつつ顔をあげてと言つ聰介。

「ありがとう。それでな、ソウスケ。今からいふことは自分たちのことを棚にあげるようで気が進まないんだが・・・・。ソウスケ、お前は相手の命を奪うことに憶病になりすぎだ。これから先、いざとなつた時にそれじゃあ絶対に自分の命を守れない。なぜだか分かるか？・・・・それは迷いのある剣ではどんな相手も倒せないからだ」

聰介が横に首を振つたのを目で確認したジョージは更に話を続けていく。

「迷えば迷つた分だけ剣はぶれる。そうなれば急所は外すし、最悪の場合は反撃を受けて殺されるかもしねりない。戦う場において迷うこと死に繋がるんだ。俺達だってそうだ。俺が冒険者をしていて初めて人を斬ることになったとき、俺は一瞬迷つたんだ。本当に殺してもいいのかと。その結果俺はここに大怪我を負わされた。出血が酷くて死ぬかと思つたよ」

そういつたジョージは服をたくし上げて、腹を見せた。

そこには鍛え上がられた腹筋の上を一筋の傷が痕になつてハツキリと分かるほどに残つていた。

「相手がその隙を見て、剣を振るつたんだ。その結果がこれだ。幸いP.T.に腕のいい治癒術師がいたから助かつたが、放つておいたら間違いなく死んでいただろうな。ソウスケ、俺はお前にそうなつてほしいとは思わない。この物騒な世の中だ、商人だからつて何があるかわかつたもんじやない。だから、ソウスケが望むなら俺達に手伝いをさせてほしいんだ」

終始黙つて聞いていた聴介だつたが、実は聴介もそれは思つてのことだつた。

向ひで死んでいたから來た以上、この世界に慣れることは必須の事であり、そうしなければ、今までの常識を変えていかなければ、生きていいくことは難しいとは思つていた。

しかし、その機会も無くずるるといひまで引つ張つてしまい、そのせいであの盗賊を殺した時に落ち込んだ聴介はこの申し出を受けたこととする。

「やうだよね、やつぱり慣れなきや生きていけないよね……。
うん、わかつた。お願ひするよ」

「やうか。よしー少し辛い経験になるが頑張れよー口にしだが、いつなら空いている?」

「うーん……。店もまだ開店していないし、別に明日からでもいいかな……?」

「やうかそーかー善は急げとこつこ、せつやく明日こぐぞー」

「あつそりいえば、相手は何なの？」

肝心な相手のこと聞くのを忘れていた聰介は、ジョージに気軽に聞いてみた。

「ああゾンビだ」

瞬間、聰介の顔から血の気が引いた。

あれから数時間たつて翌日。

聰介は3人にこれも慣れるためだといつ説得を受けてなんとか復帰していた。

聰介を含めた4人は、道中で猛スピードで走つていく馬車とすれ違いつつもデザートランドから馬車を飛ばして2時間ほどいった所の採掘場にきていた。

採掘場といつても今は機能しておらず、人一人いないので元がつく採掘場である。

ここは土の国でも有数の大鉱山だったが、数年前に地震によつて大きな崩落事故が突然起こり、それによつて地下深くで働いていた工

夫が百数十人生き埋めにされたままになり、その無念が負の感情となることで多くの魔物を生み出すことになった場所だ。

怨念などの強い負の感情ではなかつたので、出没する魔物は比較的弱い部類の物ばかりだが、地下にいくほど段々と魔物が強くなり、さらに無念の元となつている工夫達が死んだ場所は崩落によつて塞がれているままなので浄化することも出来ず、魔物が途絶えることは無い。

昔、土の国有数の鉱山だったここを取り戻そうと思った国王が軍を派遣したが、崩落した区間が長く、掘つていく間もまるで命を求める様に次々と魔物が現れるのであえなく撤退した。

それ以来、この鉱山は閉山となつてゐるが、鉱物が未だに多く取れるので、ギルドに採掘の依頼がされることもしばしばある。

ギルドの方も初心者が通いやすく、小遣い稼ぎが楽に出来るといふなので、この魔物は初心者にとっても人気がある。

出没する魔物はスケルトン・グール・ゾンビ・リツチ・運悪くリツチに捕まつて操り人形になつた冒険者などが主だ。

リツチは比較的下層にいる強力な魔物で滅多に表に出でくることは無いが、たまに出てきたところで初心者が被害にあうことがあるらしい。

それ以外はどれも楽な魔物なので、ここが聰介を鍛える場所と選ばれたというわけだ。

ちなみに今の装備は武器に『クラウ・ソラス』、鎧に『オールキヤ

リク『といった具合なので、初心者が通りダンジョンにしては過剰すぎるほどやるぐらいの装備である。

ゲームの終盤で使うような装備をこんな初心者用のダンジョンで使うとまさにチート装備と呼ばれることだらけ。

そして、今立っているのは採掘した鉱石などを荷馬車などに積み込むために設けられていた広場で、まわりには採掘終了とともに打ち捨てられた道具がちらほらと見える。

そこから視線をあげると田の前には坑道の入口がぽつかりと黒々とした闇を見せて生者が入るのを手をこまねいでいる。

これから自分はあそこに入つていき中の魔物と戦うのだと思つと聴介は、ふるりと振るえた。

興奮や恐怖、興味、不安がないまぜになつた微妙な感情が駆け抜けているのだ。

新たに気を引き締めた聴介はギュッとクラウ・ソラスの柄を握り締めて気持ちを切り替える。

それでも、切り替えるといつても戦士のソレではないので、「よし、やるぞ！」といった気合の入れ方ぐらいいのものではあるが……。

「よーし、入るぞ。最初のうちは俺らが相手をして手本を見せるが、そのあとは俺達はお前のサポートに回る。危険な時は間にはいるがそれ以外はよっぽどのことが起きない限りは手を出さないからその

つもりでこらよ?」

「分かつた」

返事を返した聰介に満足そうに頷いたジョージはジャック達を伴つて先にダンジョンの中に入つて行つた。

見失わぬようこと少し駆け足で追う聰介もダンジョンの中に入つた。

残つたのは黒々とした闇を渦巻く坑道の入口だけになつたのだった。

坑道を黙々と進んでいると前方の曲がり角からザリッザリッといつ音が聞こえてきた。

曲がり角が邪魔して敵がどの程度の距離にいるのかがわからぬいため、先頭を行くジョージの指示に従つて一旦立ち止まる。

実力的にいえばジョージ達なら飛び出していつて即座に殲滅することもできるはずなので、この行動はひとえに聰介の為のものなのだろつ。

「まず何か音が聞こえたら立ち止まってその音を確かめる。音つてのは、こう先が見えないダンジョンだと敵をみつけるのに重要なフ

アクターだ。地面をするザリッという音が断続的に聞こえたら地上を歩くタイプ、バサツという音が聞こえたら飛行タイプ、ズルズルという音なら地面を這うタイプって感じで分かる。それに加えて聞こえる方向から相手の場所を察知できるし、音の数で相手の数も、聞こえる速さで行動スピードも推測できる。慣れてくると聞いただけ魔物の特徴と照合して対策が打てるようになるから絶対に聞くんだ。慎重すぎるくらいが生き残るには一番いい

背中を坑道の埃っぽい壁に付けて曲がり角の向こうから響く音を聞いているジョージが小声で聴介にダンジョンでの注意点を話す。

「…………うん、これはたぶんスケルトンだろうね。数は1体。骨だから軽い音つてことと、緩慢だけど規則的に響く足音が特徴だね」

こちらは口を開ざして音を聞いていたジャックの言葉だ。

「スケルトンはゆつくりとした動きで、特殊な能力もないから普通に出ていくだけで大丈夫だ。まあ魔物の特徴についてはおいおい覚えていけばいいさ。…………さて、講義も終了したことだしさつさと倒すか！コイツは俺が倒すから見とくんだぞ」

そういつたジョージは曲がり角から姿を現すと、ちょうど引き返そと向きを変えたところのスケルトンに向かって、壁に引っかかっていた小石を投げ付けた。

頭蓋骨にカツンという音と共に小石をぶつけられたスケルトンはこちらへと戻してくる。

眼窩の奥に赤い炎を滾らせたスケルトンが片手を振り上げつっこちらへ向かってるのはなんとも言えない迫力がある。

惜しむべきは、その振り上げた手に何も握られていないこと。その姿が一瞬間抜けな姿に見えたことだらうか・・・・・。

そう考えつつも見ていると、スケルトンはジョージの目の前まで来ていて振り上げた手をジョージの脳天に振り下ろしたが、それを見きつていたジョージが軽くバックステップを踏みながらデュランダルを横一閃に振りぬいたので、スケルトンの頭蓋骨はあつさりと首から切り落とされた。

「つとまあこんな感じだ。本来は小石なんて投げなくとも後ろから奇襲かけてさつさとぶつ倒せばいいんだが、まあ奇襲なんかを見せるよりはこっちを見せた方がタメになるからな。さて、これも潰さなきやなッ！」

そして、ジョージは足を振り上げ、足元に転がっていた頭蓋骨をガシャッという音を立てて勢いよく踏み碎く。

そうすると眼窓の奥に宿っていた赤く燃える炎は、風に揺られた口ウソクの火が消える様に焼き消えた。

「こいつらは頭の中に魂が込められていてね。これを破壊しないとこいつらは何度でも骨を吸い寄せて起き上がるんだ。だからめんどくさくてもしつかり潰そうね。いくら弱いからって無視して先に行つてたら後ろから大量のスケルトンに襲われたって話も聞くしね」

「たまにあるわね～、そういうドジを踏んじゃう初心者の話も。アハハ。まあ笑い事じゃないんだけどね～。極稀に何体か合体して巨大スケルトンになるって噂もあるみたいだしね～」

ジャックが聴介に気を付ける様に忠告をいうと、エミリーがギルドでたまに笑い話にされている初心者のことと噂話のことを思い出しておかしそうに笑う。

実際にそんなことになつたら笑い話にならないような気がするが、こつして笑つていると言つことはめったに起きないこと何だらう。

エミリーが笑うことで少し緊張感が薄れた聴介はもう少しリラックスして肩の力をぬいてみようと思うのだった。

聴介達が坑道に入ったころ、別のルートを通りて鉱山を脱出した初心者冒険者PTの4人組がデザートランドの冒険者ギルドに駆けこんでいた。

ボロボロの装備で駆けこんできた4人組に何事かとギルドの人々が様子を見にでてくる。

「あんたら確かあの鉱山に潜りに行つてたんじやなかつたのか？」

ギルドの人に聞かれた4人組の内の一人が荒い息をさせたまま語り始めたが、最後の方になるとほとんど怒声に近い様な感じのものになつた。

しかし、何かに気付いたギルドの人はその初心者の方を掴んで揺さぶりながら聞き始める。

「おいー！ せーはどんな場所だつたー？ どんなことでもいいから覚えてこることを話せー！」

「ああ！？木造の小さな小屋とレールが敷かれていたぐらいしかおぼえてねえよ！」

「おいおいおい・・・・・なんていひた・・・・・。そりや避難シェルターのある場所じゃねえか・・・・・。あの崩落事故の場所がさらなる崩落で出てきたつてことかよ・・・・・。クソツ

！被害が大きくならないうちに聖水持つて浄化しにいくぞー今まで
塞がれてたんだ、でかいスケルトンだけとは思えん！」

広場の特徴を初心者から聞いたギルドの人は思わず額に手をやつて
上に顔を向けるが、すぐに我に返るとテキパキとギルドの人に指示
を出し始める。

大急ぎで用意を始めた一行は聖水や騎士団の人達を伴つて、數十分
後にデザートランドを出発した。

5984文字です。

ふうやつと書かれていた……。

お疲れですw

タイトル変えましたー。やつぱつじのじとも内容と合わないと判断したので……。

では、次回もお楽しみに~

023 聰介とスケルトン 一部改定（前書き）

聖水を500mlで50ギル 500ギルに修正しました

023 聰介とスケルトン

あれから緊張がほどよくほぐれた一行は、スケルトン以外の魔物に会つことも無く順調に坑道を下つているところだ。

あれからしばらくして1体のスケルトンにまたもや出会つた一行だつたが、今度はそれを聰介がきつちりと葬つた。

人間の骨格ではあるが生の人間では無かつたから普通に躊躇せずに切れたのかな? というのが聰介の内心である。

一方ジョージ達はとくに、骨だけとはいえ人間と姿が似ているスケルトンは少し躊躇するんじゃないかな?と思つていただけに、聰介が簡単に斬つたのを見ると拍子抜けした。

そして、実はそれ以外にも驚いたことがある……というよりもこちらの方の驚きが強いぐらいなのだが……。

それはなんと聰介の剣がスケルトンの首を斬り飛ばした時に起つたものだつた。

通常ならば斬り飛ばしたならばそのまま頭蓋骨が地面に叩きつけられるのだが、聰介がクラウ・ソラスで斬り飛ばして頭蓋骨が宙に舞つた瞬間、頭蓋骨は灰色の霧となつてそのまま空中に霧散した。

今まで見たことが無い突然の光景に目を見張る3人が聰介の剣を見たが、黄金色に輝く以外は呪文を彫つた跡も何もない。

『私は不浄を浄化する力があるんです。アンデッド系などの敵ならば、剣先が触れる程度で相手は触れられた箇所が吹き飛ぶくらいの威力ですよ。直撃すれば言わずもがな……ですね まあ正確にいってならば、触れた場所を起点に私の光の精霊としての力を爆発させて吹き飛ばしているって感じですね』

剣に視線を落とした聰介に、聰介だけに分かるような小声で教えてくれたのはクラウだつた。

一人この現象がなぜ起きたのか理解して、なるほどと言わんばかりに納得の表情をつかべた聰介に、後ろから近づいた3人が声をかける。

「ソウスケ、今何やつたの！？」

真っ先に口を開いたのは、はたして好奇心旺盛なエミリーである。

といつても、その横に並ぶジョージもジャックもいかにも興味津々と言つたかんじに剣を見つめている。

「……えへつと、この剣に浄化作用があるのを忘れてた……

「「「浄化作用ですってー？（だとー？）（だつてー？）」「

クラウに今教えてもらつたことを簡潔にまとめていうと3人は予想以上に驚いて返事を返してきた。

狭い坑道に響いたほどだったので聰介も少々驚いた。

そんなに大声だしてもいいのだろうか?とは思ったが場の空氣的にも聰介はその疑問はスルーした。

「……おいおい、浄化作用なんていつたら超一級品じゃねえか」

ふ……所詮俺達には手の届かない武器さ……などと言いつつ、この狭い坑道で明後日を見るような遠い日をするジニアージの日には一体何が映つているのだろう。

冒険者とは本当にトップレベルにならないと贅沢な暮しはできない意外と世知辛い職業なのだ。

その分、財宝や高額懸賞金などの一攫千金、夢一杯、希望一杯などが売りなので冒険者に憧れる若者は後を絶たない。

話を戻して、その背中に本格的に哀愁が漂い始めたといひでジャックが話を変えようと聰介に話しかける。

「あ~、でもそれだとソウスケの訓練にならないなあ……。う~ん、
ヒミコー。ヒミコーの剣を聰介に貸してあげれる?」

」のアソビでひしめくダンジョンではあまりに反則装備なので訓練にならぬことないと判断したジャックは、聰介にその剣を貸すようHミコーに言つたが、そこに聰介の爆弾が落とされた。

「あ。Hミコーの剣にもその効果あるかも……」

.....
.....
.....

「謀つたなあああ……Hミコーイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ……」

「し、知らないわよ、そんなことお……」

血涙を流しながら、Hミコーの方に振り返るジョージはもう少しきつそ哀れにしか見えない。

Hミコーはそんなジョージにたじろいでいて、ジャックはといえば、あちや～……といいながら呆れた表情をしている。

数分後、ジャックになぐさめられたジョージは見事に復帰して先頭を歩いて坑道を進んでいく。

だがしかし、その背中からは次に出来た魔物に憂き晴らしをしてやるといわんばかりの気迫がゆらゆらと揺らめいている。

しかし哀れにも敵は後方からやつてきて、それはエリマーが早々に退治してしまった。

斬り飛ばしたスケルトンが灰色の霧に変わつて霧散するのを見たエリマーは、本当に自分の剣に淨化作用があると知つて大喜びだ。

対するジョージは敵を視界に捉えて憂き晴らしをしてやると意気込んでにもかかわらず、剣を抜く間もなく戦闘は終了してしまったので沈んでいる。

そして、口を尖らせて更に拗ねてしまつたジョージを先頭に進んでいくと今度は前方の曲がり角からスケルトンが出てきたが、もうヤル気が無くなつたのか無造作に剣を振るつて倒してしまつた。

無造作といつても、スッパリと頭蓋骨を一刀両断にしたのは流石といつたところだろうか。

その後も、何度かスケルトンが出てきたが、あとは聰介の訓練といふことで、聰介が全部倒していった。

無論ジャックと剣を一時的に交換してやつてるので、ちゃんと聰介の力にはなつてゐる。

そうして進んでいくと、一行はそこそこ広い大きさの部屋にたどり着いた。

そこには既にリッチと云う先客が部屋の中央付近に陣取つていて、

その脇には操られてしまったのだろう元冒険者が2人立っている。

何故ゾンビではなく直ぐに操られている冒険者だと分かったのか。

それは皮膚表面が全く腐敗していないのと、向かって右側のリッチの脇に立つ元冒険者の口元から漏れる『助けて』という小さな声がかすかに聞こえてきたからだ。

リッチのほうも4人が部屋に入ってきたのが分かったのか、ゆっくりと右腕を胸の高さまであげると元冒険者を操って突っ込ませてきた。

死ぬこともできず僅かに残った精神が、人を襲う化け物になってしまったことを嘆いているのだろうか、名前も知らぬ冒険者の類には一筋の涙が流れている。

リッチの魔力で強化された元冒険者達の動きはさきほどまでのスケルトン達と比べると何倍も速く、操られていてもう助からなければまだ命がある存在なんだと思って動きがとまっていた聰介の目の前に現れる。

敵が目の前まで来て剣を振り上げようとしていることにハッとして我に返った聰介は、水平に剣を掲げて、剣の腹に手を添えることで相手の剣を受けきった。

「ボーッとするな、ソウスケ！ リッチともう一体はこっちで相手してやるから、お前はそいつを自力で倒せ！」

ジョージの叱咤を受けた聰介は、目の前で再度剣を振る敵を正面に見据えた。

操られている関係で細かな動きの出来ない敵の動きは直線的で単純なものだが、魔力で強化されているので一撃は重い。

今度は胴体に薙ぎに来た一撃をバックステップで後ろに避ける。

今までに剣を使った実戦経験がほとんど無いのにここまでできるのは、一重に身体能力が大幅に向上したからだろう。

追撃を掛けてくる敵を横にかわして、すれ違つ際に斬りつけるが…浅い。

これはやはり命を持つ者に對して剣を振るということに抵抗があるためだ。

その証拠に今の聰介は敵の顔を見ないようにしながら戦っている。

おそらくは表情を見ないことで平静をたもとつと、う無意識の行動によるものだろう。

しかし、聰介もこのまま倒してしまっても『殺人』という罪の意識を克服することはできないと決意を決めたのか、顔をあげて文字通り正面を見た。

敵の顔は無表情でありながら、その頬には涙が何度も流れで乾いた痕が残っていて、口からは『助けて』というか細く枯れた声が聞こえてくる。

「ハメン！」

これ以上聞いて怖くなつてしまわないうちにと聰介の振つた剣は、剣を振り上げていた相手の腕を斬り落として、その下にあつた右肩を捉える。

そのまま進む剣は僧帽筋を断ち、鎖骨や胸骨、肋骨を次々と切断して、心臓や肺などの様々な臓器を裂いて左脇腹から姿を現す。

現れた剣には、様々な内臓を傷つけたからだろうか、大量の血と様々な体液が混ざり合つててらと光を反射している。

斬られた体は切斷面からずるりという音と共に、固い土の地面に滑り落ちて夥しい量の血と臓物を晒している。

それをハッキリと見てしまい、吐き気がこみ上げてくるが、今は戦闘中だと自分に言い聞かせて、せり上がつてきていた胃液などを飲み下す。

前方から聞こえた声に反応して聰介が目をあげると、もうひとりの元冒険者はちょうどジョージが相手の剣ごと首を切り落としたところだった。

残つたリツチの方はジャックが動きまわつて魔術を交わしながら翻

弄していたところを、後ろから忍び寄ったHミリーが斬りつけて灰色の霧に変えたところだった。

「ふう、それにしても久しぶりにリッチとやつたら意外と緊張したなあ。目標地点を指しながら魔術を唱えるから避けるのは簡単だけど、その分魔術が強力だから厄介だよ」

「そうよね。おまけに呪いや毒とかのバッドステータスなんかついちやうから回復薬を持っていないと自然に治るのをまつことになるし……。まあ薬はあるから問題ないんだけどね」

リッチを倒した一人が明るく雑談しているのを見ると、さっきまで命がけの戦闘を 聰介以外は楽勝だが していたのが嘘だつたかのように思えるが、背後からは血の匂いが漂つて来てその存在を主張している。

「それにしてもこの冒険者達も運がなかつたなあ。……まあこのまま放つておいても魔物の餌になるし、せめて供養してやるか」

自分が倒した元冒険者と聰介が倒した元冒険者を見たジョージは、腰につけていた袋から白色の陶器の瓶にいれられた『聖水』を取り出して死体に振りかけた。

聖水を掛けられた死体は、まるで雪が解けて地面に染み込むようにして消えていった。

ちなみに『聖水』とは、教会が水を清めて作られるもので、死んだ人に振りかけた場合、死体は母なる大地に還るとされ、アンデッドなどに振りかけると、量によるが浄化作用が働いて灰色の霧に変えるという作用がある。

そして、500mlで500ギル 50000円相当 と非常に高いので大量に購入することは個人では難しく、P.T内で死んだ者が出た時用に少し持つておくのが冒険者の間でのマナーである。

聖水をかけたおかげで、血の匂いを振りまいていた元冒険者の一人の死体はすっかり綺麗に消えてしまい、リッチが浄化されて灰になつて消えたこともあって、この場に残っているのは聰介達4人だけだ。

「さて、ソウスケ。操られているとはいえ生きている人間を斬つたわけだが、今はどんな気分だ？」

「……気持ちのいいものじゃないけど、前みたいに塞ぎこむほどじやないよ。一度乗り越えたからかな、死体をみて吐きそうにはなつたけど、今はもう落ちついてる……。ありふれた言葉だけど、その人の分まで精いっぱい生きようって思つてる……かな」

「そうか……よし……多少の戸惑いはあるだろうが、あとは慣れるしかないだろう。これぐらいで聰介の特訓も終わりにしよう」

さあ帰るぞー」と言つたジョージが、剣を背中に掛けるためのベルトを取るために、手に持つていた大剣を地面に突き刺した途端

ପାତାଳପାତାଳପାତାଳପାତାଳପାତାଳ

という音と共に広場に入ってきた方の通路が崩落して通れなくなってしまった。

どうやらリッチの魔術によつて限界ギリギリで保たれていた均衡が、ジョージにアドメを指されたことで傾いてしまつたらしい。

じとつとした視線を送る3人に、いや、俺のせいいか!? 俺のせいなのか!? と必死に弁明するジョージに、さきほどまでのリーダーシップはない。

仕方なく、少し進んでから地上へ戻るルートを探すことになつた4人は、埃っぽい坑道を再び進んでいく。

雑談をし、時に襲いかかってくるスケルトンや、グールなどを蹴散らして進んで15分たつたぐらいだろうか、聰介達はY字になつた場所にでた。

「ああ、これで地上へ戻れるな、などと呟いた4人は、Y字の丶のところを鋭角に曲がって地上を目指して歩いていく。

しばらく進んでいると、さきほどリッチが出現した場所よりもかなり広い広場にたどり着いた。

右手に木造の小屋らしきものがあるという」ことは元は工夫達の休憩所兼避難所といったところだろう。

他にもトロッコやスコップ、ツルハシがそのまま放置されたままなので採掘が行われていたことを想像しながら広場を進んでいった。

放置されてボロボロになったその小屋をちゅうじ通り過ぎた時、ドズンッという音が後ろから響いてきた。

ゆっくりと振り返った聰介の目に映るのは巨大なスケルトン。

巨大なスケルトンといつても単体が大きくなつたわけではなく、大量のスケルトンがひつつきあうことで一つのスケルトンを構成しているので、形は所々ボコボコとして歪だが、間違いなくスケルトンではある。

そんな単体として存在する群生するスケルトンを見ていた時だつた。

「……ねえジョージ。アレ……勝てる?」

「あれだけくついてたら一つ一つの力が弱くても相乗効果でかなり強いだろうなあ……。ランクでいうとじランクぐらいのレベルなんじやないか?」

話し合ひジョージもジャックもお互いに冷や汗を浮かべているが、目の前の巨大スケルトンはそれから動かない。

「…………つまり……どうするのよ……?」

巨大スケルトンに視線が固定されたままのヒミリーがジョージに答えるを求める。

見上げる聰介の視線の先で、合体したスケルトンの目が何もないが
らんどうの闇から真っ赤な炎にかわって全身を彩り始める。

「迷子の」決まりにしたんだが、おまえがおまえのやつだよ。おまえがおまえのやつだよ。」

最後に巨大な眼窩に燃えあがる炎が灯つた瞬間、ジョージの叫びで全員はありつたけの力を込めて全速力で走り始めた。

後ろからはドズンドズンと言う音が広場に断続して響いてきていた。

5546文字です。

たぶん次で採掘場編は終わります。

それにしても最初に下書きした時は**巨大スケルトン**なんて出ない予定だったのに書いてる内になぜか登場。

自分は もれけ カれから ない ()

レーベンハーフ
ルーベンハーフ

そういうのは、
「シンキングだんだんと上かってきているよ」と嬉しい
限りです。

さあ監さんがあんまりで評価点をつけるのです！

次回も…お楽しみにッ！

024 脱出と銭湯

024 脱出と銭湯

聰介達はあの広場で巨大スケルトンと出会いながら10分弱、薄暗い坑道を全速力で地上を目指して走っていた。

地上を目指すというだけあって、坑道内は緩やかな傾斜がずっと続いている。

しかも坑道と言う特性上、通路は何本も分かれていて暗闇で先が見えにくいので更に性質が悪い。

それでも、地上を目指していけるのは全速力で走りながらも、僅かな傾斜を感じ取りつつ先導するジャックがいるからこそだろう。

ちなみに、なぜドラゴンゾンビを倒せたのに逃げているのかというと、巨大スケルトンは単体としての群体なので、倒そうとするならば巨大スケルトンを構成する全てのスケルトンを倒さなければならないからだ。

当然、狭い地下空間では逃げ回りつつちまちまと倒すなんて出来ない上、数が多くだったので逃げているというわけだ

そして、走り続けること凡そ20分。

暗闇のせいで先の見えない道が無限に続くように思える絶望感と、後ろから追いかけてくる『巨大スケルトンだったもの』の存在という生命の危機に晒され続けて極度のプレッシャー状態が何分間も続

いたためか、ついにエミリーの足の回転が落ちてきた。

冒険者として鍛えているとはいえ、男性と比べて体力に差がつくのは仕方ないことだし、これほどの緊張下に置かなければ体力の消耗も激しいことだろう。

その証拠に広場ではジャックに続いて2番目に走り出していたエミリーが、今では最後尾を走っていた聰介の後ろまで下がってきてしまっている上に、呼吸も乱れてあらくなっている。

その更に後ろでは巨大スケルトンだったものが、狭い坑道内で溢れだした水のように無数の骨の濁流となつて追いかけてきている。

巨大な人型だったスケルトンがなぜそうなつてているかというと実に単純なことで、広い広場から狭い坑道へと場面が映つた際に巨大スケルトンが自らの体を構成する無数のスケルトン達をバラバラに分解させて骨の濁流として追いかけてきたのだ。

当然追いかける側としてはたまつたものではない。

あの中はスケルトンが持つていた様々な武器等も混ざつていて、これに加え、骨と言う硬質な物質が高速でかきまわされる巨大なミキサー状態となつている。

あんなところに人体が放り込まれれば正視に堪えない人肉ミンチが早々に出来あがつてしまうだろう。

今だとエミリーがその最有力候補だ。

助けると言つても、ジャックは先導するという立場上身軽に動けて

速度を維持しなければならないし、ジョージは軽くなつたとはいえた動きの邪魔になる大剣を背負つての全力疾走に加えてエネルギーを大量に消費する大柄な体型だ。

いくら鍛えていると言つても流石に、これほどの長さの全力疾走は体に堪えるらしく汗が噴出している。

その一人の様子を後ろから見ることが出来ていた聰介はエミリーを助けるのは自分しかないと決断したところだつた。

幸いにも聰介は身体能力が大幅に強化されていたおかげで、すこし汗がでているぐらいで体力はまだかなり余裕がある。

刻一刻とペースが落ちるエミリーの様子を振り返つて確かめてからの聰介の行動は早かつた。

「エミリーー！ 今から抱えあげるからしっかりと捕まつてくれ！！！」

直ぐ後ろでガラガラガラガラと轟音をたてる骨の濁流の音に負けないように声を張り上げた聰介はエミリーの返事をまたずにその体を抱えあげる。

「ハアハア……ありが……と……」

「ええええと荒い息を吐き出しながらありがとうと呟いたエミリーをお姫様だつこで抱えあげた聰介は、すぐにペースをあげてジョージ

の横に並ぶ。

ジョージもしゃべるのが億劫なのだろう、目線で大丈夫なのか?と聞いてきたので聰介は力強い眼差しでそれにこたえた。

それから5分間走り続けた時、先頭を走っていたジャックが灯りを見つけた。

「おいおい、ウソだろ?……こんなときに他の冒険者なんて!…クソ、あんたらさつさと逃げろ!後ろから亡者の大群が押し寄せてくるんだ!今すぐに引き返せ!」

「我々はデザートランドの騎士団である!それを討伐しにやつてきたところだ!聖水も持つてきている安心しろ!」

ジャックの警告に反応して返ってきた声に希望を見出した4人だったが、騎士団達を直視できる距離に近づいて、その持ってきたという聖水の量を見て絶句した。

それは騎士が小さな台車に乗っているたつた樽2つ分ほどの量の聖水だった。

確かに初心者レベルのダンジョンなら普通はそれぐらいで足りると無意識に思ってしまうのも無理はないが、とてもじゃないが後ろの亡者共の大群をまとめて浄化するには量が足りなすぎる。

騎士団の連中も後ろから追いかけてくるの亡者の大群がよつやく視界に入ったのか、目に見えて顔が青褪めていった。

「て、撤退！」

先頭に立っていた指揮官らしき人物が発した言葉を聞いた他の騎士たちは、撤退するために邪魔になる荷物などを捨て置き迅速に全力で後退していった。

そして後退する時に、まだ騎士団に入りたてで練度が低い騎士のひとりがこちらの様子を伺おうと後ろを振り向いてしまった。

眼に映るのは坑道を埋め尽くす大量の骨と暗い眼窩に真つ赤な炎を宿した髑髏の…負の感情で彩られた亡者の群れ。

それからがひどかつた。

パニックを起こしたその騎士が叫びながら、逃げようと必死に他の騎士を押しのけて進もうとして他の騎士の誰かが坑道の固い地面に押し倒された。

一人の騎士が起こしたパニックは感染爆発のよう瞬く間に騎士たちに広がり、誰かが倒れたことでまた他の誰かが倒れ、悲鳴が坑道内に響きわたる。

もちろん、そんな惨劇を目の当たりにしても聰介達はとまることは出来ない、いくら助けたくても立ち止まつたら最後、亡者の群れに呑みこまれて一巻の終わりだ。

「エミリー、ちょっと揺れるけど我慢してよーあと舌齒まなこようになちやんと口閉じてー！」

聰介の言葉に何か返事をしようとしたエミリーだが、すぐそこに倒れた騎士が転がっていたのを見た聰介は飛び越える時に舌をかまないよう注意する。

「ジヨーヌ、まだ生きてるー!？」

「ゼエゼエ……あつたりまえだろッ……勝手に……殺すなーー！」

ジヨーヌがずっと黙っていたので、声をかけると荒い息ながらも威勢のいい返事が返ってきたので、反論するだけの元気はあると分かつて一安心する聰介。

それからは倒れて呻き、助けを求めている騎士達の頭上を飛び越え、必死に走つて走つて亡者共に呑みこまれないように逃げる。

後ろから迫る亡者の群れに呑まれる騎士達の断末魔が絶え間なく追いかけは聰介の耳に飛び込んでくることが更に恐怖心を煽るがそれでも走る。

「外だッ！－！」

戦闘を走っていた騎士団のうちの一人が指さした方向には確かに四角く切り取られたような形の、太陽の明りがあった。

ラストスパートとばかりに速度をあげた騎士団は、出口が見えたことで余裕がでたのか、お互いに声を掛けつつ速度を合わせて走り出した。

聰介達もやつと長かつた逃走劇のゴールが見えたことで緊張が少しばかりやわらぎ、それで生まれた心の余裕が更に速度をあげた。

「みんな！ついてきてるー？」

「「「もひりん！－！」」

先を気にしなくてもよくなつたジャックが振り返つて心配そうに叫ぶが、それに向かつて揃つて答えるのは聰介、エミリー、ジョージの全員だ。

そして、騎士団に続いて外に飛び出した聰介達はそのままの勢いを保つて坑道入口から距離をとつてから振り返つた。

坑道の入口からはずつと追いかけてきた勢いに押された大量の骨がガラガラガラという音と共に空中に骨のアーチを築くかのごとく飛び出してきている。

まだついてくるのか！？と一瞬身構えた聰介達と騎士団だが、髑髏と骨が創りだすアーチは地面につくまえに太陽の光によつてじごとくが灰となつて風に攫われて消え去つていつた。

しかし、追いかけてきていた全部が飛び出たというわけではないらしく、残つた骨はゾゾゾゾゾと音を伴つて坑道の闇に引き返して行つた。

その様子を見届けた聰介は大きくふう……と息を吐いて、太陽がまぶしい空を見上げた。

聰介も流石に人間一人を抱えて走るのはきつかったらしく息もけつこう乱れている。

「えへつと……そろそろ降ろしてもらえる……？」

自分の胸元から聞こえてきた声で、やつと聰介は未だにエミリーをお姫様だつこしていることに気がついて、慌ててエミリーを地面に降ろした。

「ありがとう、聰介。本当に助かったわ。あのままだと流石に飲み込まれていたわ……。無理させてごめんね」

「気にしないで。それと大丈夫？かなり辛そうだったけど……」

「体が熱くて喉が渴いているぐらいでもう大丈夫よ。とりあえず皆

全力疾走したんだし、ちょっと休憩しましょ」

そういうてその場に腰を下ろしたエミリーに水筒を渡した聰介は、ありがとという言葉を聞きながらジョージ達と共に地面に座り込んだ。

「あ……死ぬかと思った……。まさかあんなのがいるとはな……。この鉱山はもうほとんど調べられていてあんな奴が出るっていうことは聞いたことなかつたんだが……」

水筒を持つて中の水を一気にガブガブと飲み干したジョージは、額に浮かんだ大粒の汗を手の甲でぬぐいながら愚痴る。

「……そうだよねえ。今回は運がよかつたから逃げられたけど、退路が分かっていない状況であれだけの全力疾走してたら判断間違えて行き止まりに行つてたかもしれないし……。……今思うと奇跡だよ……こわつ……」

ハンカチを取り出して汗を拭き取つているジャックも、先ほどの逃走劇がいかに危険なものだったかを再確認して改めて恐怖を覚えたようだ。

そつこりしていると、まだ坑道から魔物が出てくるかどうか警戒していた騎士団の中から一人の騎士が近寄ってきた。

「土の国首都デザートランド防衛騎士団所属のスタンリー・マッケイだ。この隊の指揮官をしている。少し話を聞いていいかね？」

それからは、巨大スケルトンが出現した場所の特徴や、だいたいの位置、気付いたことなどを話してほしいとのことで、しばらくの間話しつづけていたが、聖水の補給のために一日もどるとのことで騎士団は街に引き返して行つた。

聰介達もまさかもう一度鉱山に入つていいくようなことはせず、鉱山入口の札が掛かっている木のところに繋げていた馬にのつて、街へと帰つて行つた。

帰りの馬上で、ヒミリーを抱えるときに口調が変わつていたぞと、ジョージにからかわれて顔を赤くしたのは實にどうでもいい話である。

街に帰つた聰介は、埃っぽい坑道内を歩き回つて汗や土などで汚れた体を洗うために近くで開かれている銭湯にきていた。

銭湯と言つても、日本のように桶が置かれていたり、富士山の絵が描かれていたりするわけではなく、シャワーと風呂が設置されているだけなのでそれほど銭湯らしさは感じない。

前の街なら裏庭のところに簡単なシャワー　といつても温水では

ない ようなものがあつたが、この都会にそんなスペースがあるはずもなく、困っていたところでエミリーがこの銭湯を紹介してくれたのである。

入口でバスタオルとボディソープ 安物だが を買つた聰介は、番台らしき場所に座つて頬杖をついて暇そうにしているお姉さんに料金5ギルを渡して、ロツカーカのカギを貰う。

脱衣場にはいると、奇妙なことに縦に細長いロツカーカがかなり並んでいる。

もちろん、普通のサイズのロツカーカもあるのだが、それでも細長いロツカーカの方が多い。

不思議に思つていると、後ろから来た冒険者らしき2人組がそのままカーテンを開けて、その中に自分の武器と服を仕舞つて風呂場に入つて行つた。

つまり、あのロツカーカは自分たちの武器を仕舞つておくために細長くなつているのだ。

武器と言つものが總じて高価な物であることは、自分の商売からして分かつて聰介は、なるほどなあと一人頷いた。

自分の武器や鎧は、既に店に帰つた時にちゃんと金庫に仕舞つておいた聰介は、小さなロツカーカの方に脱いだ服と替えの服を放り込んでタオルを片手に風呂場に入つて行つた。

中はとてつもなく広いというものでは無かつたが、そこそこ広く、天井も高かつたので解放感があり、中々にリラックスできそうな感

じだつた。

そして、体に付着した砂や埃などの汚れを落として、ゆっくりと時間を利用して体を温めた聰介は、体に火照りを感じ始めたので風呂から上がった。

サツと替えた服に着替えた聰介は、番台の横で売っていた牛乳を一つ1ギルで買い、その場で腰に手を当て勢いよく飲む……ということはせず、近くに置かれていた長椅子に座つてゴクゴクと牛乳を飲んだ。

牛乳を飲み終わった聰介は空きビンを番台に返し、建物の外へと出て行つた。

日が沈みかけた空は夕焼けに染まり、それに照らされてオレンジ色に染まる建物にとまっている真っ黒な鳥が、カアーッと鳴く通りの下を歩く聰介の姿は、建物と同じ様に夕焼けに照らされてオレンジ色に染まつていた。

5257文字です。

うーん、これ続けていいのかなあ……。
自信無くなってきた。

プロットも一応完成して、完結させるための道筋もあらかた書いた
んですが、やはり批判が多くて、この作品は支持されないんじゃ
ないかと……。

このまま終わらせるに何のひねりも無いただの無意味な作品になる
のは分かってますが、どうも……。

このまま続けるべきか……それとも一旦凍結して他のを進めつつ、
また気が向きしだい書くか……。
色々考えさせてもらいます。

ああちなみに他人の反応がどうどうというよりも、自分自身の色々
な事情も含めて考えてますので、批判が嫌なら書くなという感想は
おやめ下さい><：
では、また次話で……。

025 パーフェクト営業スマイルと開店準備

025 パーフェクト営業スマイルと開店準備

チュンチュンという小鳥のさえずりを聞きつつ口の出と共に朝早く起きた聰介は、まだ一階で寝ているであろうジョージ達を起こさないように極力気をつけながら、自分の家である店を出た。

早朝特有のスゥッと澄んだ空気を胸一杯に吸いこんだあとは、聰介はこの街にある冒険者ギルドの方へ歩みを進めていった。

ちなみに冒険者ギルドや、商業ギルド、役所などの生活に必要となつてくる場所は、自分の店を決める案内の時に聞いておいたから問題はない。

砂漠地帯特有の朝の温度の低さを肌に感じながらもテクテクと通りを歩いていくと、視界に入ってきた冒険者ギルドには既に何人かの冒険者が出入りしているのが見えた。

屈強な冒険者達に混じつて冒険者ギルド内へと入っていくと、中のテーブルでは温かい飲み物を片手に魔道書を読んでいる人や、暖炉の前でギルド印の付いた貸出用毛布を被つて椅子で眠りこけている人たちがいた。

寝ている人を起こしてしまつにはまだ少しばかり早い時間帯なので、聰介はその人たちを起さないようにしてゆっくりとギルドのカウンターまで歩いていく。

「すいません、ちょっと採取の依頼をしに来たんですが、今大丈夫ですか？」

「はい、少々お待ちを……」

周りに配慮したのと、後ろを向いて書類整理をしている女性職員が忙しそうだったために聰介が少々声を落として話しかけると、その女性職員はいつたん手を止めてコチラへ振り返った。

「「…あ」

その女性職員はガーランドの冒険者ギルドにいた例の完璧営業スマイルのお姉さんだった。

ただし、驚いたために営業スマイルが崩れて一瞬素の表情が現われたので、聰介は一瞬とはいえ初めて営業スマイル以外の表情を見ることが出来た。

「ソウスケさんおはようございます。こちらへは材料の仕入れにきたのですか？」

それから0・5秒以下の早さで営業スマイルを完全に取り戻したお姉さんは何事も無かつたかのように聰介に話しかけた。

「いえ、ちょっと所用でこちらへ店を移すことになったんです。材料はこれから依頼するところです」

「そうですか。大変ですね。私もこちらへ異動することになったのでまたよろしくお願ひしますね」

「あつ、じゅうじゅうよろしくお願ひします」

お姉さんにお辞儀をされた聰介は、慌ててお辞儀を返した。

その後はお姉さんに依頼用の用紙を渡された聰介は、それに必要事項を記入していく、書きあげたソレをお姉さんに渡した。

お姉さんに用紙を渡して、ギルドから出た後は、聰介は市場の準備をしている人達の前を通り過ぎて店へと戻っていく。

朝の陽光を受けてキラキラと輝く店に対しわざかばかりの期待を感じずにはいられなかつた聰介は、少しばかり良くなつた気分のまま店の扉を開けた。

すると本来なら来客を告げるベルが、カラソロロソと店内に軽やかに響き渡つた。

ついやつてしまつた……と思つた聰介だが、時すでに遅しとはこのことで、階上からはゴトッといつ物音が響いてきた。

ちょうど音が聞こえた位置が入口の所の真上だつたことからして、おそれくはジョージかジャックのどちらかが起きたのだろう。

朝早くに起にしてしまったなあ……と後悔する聰介は、せめて気分良く起きてこれるようにしてお茶を入れ始めた。

結論から言えればジョージ達は一度寝という怠惰な方向へ向かったので、聰介がせつかく用意したお茶は冷めてしまったのだが……。

あれからしばらくして起きてきたジョージ達に温めなおしたお茶を渡した後、聰介は3人に断りを入れてからすぐに工房の中に入つて鍵を閉めた。

色々とバタバタしていて出来なかつた新装開店の準備をするためである。

まずは、新装開店の田玉商品として安く売り出す包丁を大量に造る必要があるので、今日一日は工房にこもらなければならぬ。

とはいへ、実際は鍊金術を使って一瞬で大量に造ることが出来るのだが、これもカモフラージュのためである。

最近では、包丁は鍛造よりも铸造で大量に造られているらしいので、一日で大量に出来ていてもそこまで不自然ということにはならない。

もちろん聰介が鍊金術で創つた物ならば、性能は鍛造となんら引けを取らないし、耐久性があるので、铸造のモノとは比べ物にはならないのは明白なのでなかなか良い広告の材料となってくれるだろう。

刀剣などの武器は冒険者でもたまに手入れにくることはあっても、そう頻繁に買いに来るようなものではないので、こいつた地味ながらもコンスタントに続けられる商売も必要である。

鍊金術という自由度の高い能力があるのでそれを使えば更に幅も広がるので、地元に根付いた商売というのもこれから次第だらう。今回創る包丁は商売として長く続けていくことが目的なので、下手に『折れず・錆びず・切れ味が落ちない』といつものにすることはできない。

よつて今回のコンセプトは『ある程度の性能』となつてくるので、そのあたりのさじ加減を上手くしていかなければならないのが難しいところだらう。

使用用途に合わせて、いくつかの種類の包丁に創ることを既に決めている聰介は、まずは見本となる型を鉄のインゴットから創りだす。まずは、主に魚などを捌く時に使われる、刃渡り20?程の出刃包丁。

これは元々が魚の骨を切るための物なので、他の包丁よりも重くなつており、最近では小骨程度のものが入つていて肉などを切る時にも使われている意外に使う機会がある包丁だ。

次は、野菜を切る時に使われる、刃渡り17?程の菜切り包丁。

まさに『名は体を表す』とはこのことで、野菜を切るためとして造られているこの包丁は、地包丁の幅が薄くなつており、固体の野菜も砕くことなく切れる反面、肉を切ることにはまったく向い

ていない包丁だ。

そして、メインとなるのが肉や、野菜などのほとんどの材料を切れる万能包丁として使われる、刃渡り20?程の牛刀。

元々は塊の肉を小さく切るのに都合がいいように設計されており、反りが大きいため押して切ることで、硬い物を切るのに便利で、筋などの切りにくい物を切ることによりすぐれている包丁だ。

他にもセツトとしても売られるよう、ペティナイフ、パン切り包丁などを加えて5点セツトというのも考えているし、1本あれば万能で何にでも使える三徳包丁も単品で売らうかとも考えている。

この街ではまだ広まつていらないが聰介の剣の評判が広まれば、良作を創る店の一品というブランド的な価値に加え、包丁自体の値段の安さも加わるとじわじわと広まつていいくことだらう。

肝心の創り方だが、この包丁は魔力を使わずに聰介が前の世界にいた時に見たことがある特殊な合金を使ったもので作り上げる予定だ。それは『V金10号』と呼ばれるもので、炭素1.0%、クローム15.0%、モリブデン1.0%、バナジウム0.2%、コバルト1.5%を高純度の鉄に加えたもので、これを使うと研ぎやすく、切れ味がとてもいい刃物が出来上がる。

高純度の鉄は鍊金術を使用して不純物が全くないよう出来ることで、他の材料はイメージさえすれば創ることも可能なので問題は無い。

そして、包丁の見通しが立つた聰介はそのほかに補充しておかなければならぬ商品を考えるが、それは持ってきた分の武器を店頭に

並べれば十分なので、今日は包丁を創ることだけにする。

そうと決まった聰介は、初めての試みとして必要な各種金属を『空中』から生み出すことにした。

目をつむって心を落ち着かせ、目の前の空中で細かな塵が集まつて出来ていくイメージで金属を作り上げていく。

イメージが出来上ると同時に「ゴツ」という音が目の前から響いてきたので目を開けると、そこには1?角程の大きさのクロームが銀白色の光を放ちながら工房の固い床に転がっていた。

その出来を見た聰介の顔は、成功であるはずなのにどこか不満げなものになつてゐる。

そもそものはずで、聰介が想像したのは3?角程の大きさのクロームだったのだ。

「うへん……やっぱり出来なくはないけどイメージするのが難しいなあ。無から有を生み出せないっていう固定観念が邪魔してるのかな……？」

「うう……と唸つた聰介はしゃがみ込んで、床に転がったクロームの塊を拾い上げた。

鉄よりもいくらか軽いクロームは銀白色に輝いていてとてもキレイだが、今は見惚れているよりも材料を作り上げてしまうことの方が重要だ。

失敗作記念といつことで、トランプのダイヤの形に簡単に整えた聰介は、それをネックレスに通して首にかけると、今度は目を開いたまま練成する体制に入った。

イメージの仕方 자체はさつきのでも問題無かったので、その方法で練成をしていくと、どこからともなくキラキラとした光の粒子が集まつていき、立方体の形に固まり始める。

凝縮していくイメージを加速させるとその分だけ、目の前の光の粒子の動きも加速していくのを見ていると、この練成方法は目視しながらの方が簡単にできるといつことも分かる。

そして、それと同時に思いついたのが、この練成方法を使っての攻撃方法だ。

それは、標的の真上に巨大な物質を創りだして、落下させて押しつぶすと言つ至極単純な方法で、この攻撃方法はある程度開けた空間でなければいけないという欠点もあるがかなり有用な攻撃方法かも知れない。

この練成方法の技術が上がつて一瞬で練成できるほどになれば、応用技として空から流星のごとく降り注ぐ槍のシャワーも、空から巨大な島を落とすことも理論上は可能となる。

そのようなことをしなければならない事態に陥るはずは無いのだが、つい考えてしまうのは男のロマンなかもしれないと思つた聰介は一人クスリと笑つた。

あれからしばらくして全ての材料を創り終えた聰介は、練成する速さが最初と比べ格段に早くなつたことに満足そうしていた。

良い機嫌のままに起つたその後の練成もつまざくことなく、しっかりと描いた通りに出来あがり、今聰介の田の前には『「金10号』がデンツと鎮座している。

完璧にできたその仕上がりにペタペタと表面を触る聰介は楽しそうだ。

そして残る工程はそれぞれの種類の包丁の型に成型していく作業だ。

しかし、ただ成形するだけでは芸が無いので、持ち手に滑り止めを兼ねた溝を掘つていき、刃には刀と同じ様な波紋をかざりと/or>れておく。

これでデザイン性も上がり少しばかりよくなつたと自画自賛した聰介は、次々と包丁を創つていき、出来あがつたそれらを単体で飾るか、セットとしてキレイな木の箱に入れて店内の一角に飾つた。これらと、挨拶回りで配つた包丁では性能が違うが、挨拶回りで配つたのはオープン前の前評判を上げるためなので、もしアレと同じものをくれと言われても非売品ということでかわせばなんとなるだろう。

店内に飾られた包丁が光を返すのを見て満足そうに頷いた聰介だが、次の瞬間固まつた。

包丁が光を反射しているところは、外はまだかなり明るいといふことで。

聰介は包丁作りのために今日は一田ほととぎすと工房にこもっていないと不味くて。

今の自分を見られたら疑いが湧くと言つかなりマズイ身体になると いづことだった。

幸い店内部分にはジョージ達の姿は無く、聰介は大慌てで全ての包丁を工房の中に戻していき、自分も工房の中に飛び込んだ。

包丁を工房に運ぶ際に最後の一本を取り落としてしまい、腕をスパツと切つてしまつた聰介は、その後クラウに回復魔法を掛けてもらうのだった。

『ソウスケって結構ドジなんですねえ』

「……返す言葉もござりません……」

4637文字です。

皆さんお久しぶりです。感想を見て気付かされました。もつこの物語は自分だけのものではないのですね……。読まれた以上はこの物語だつて、その人の中で息づいていくわけですし、それを私の身勝手な理由で閉ざしてしまってはいけませんよね。

本当に申し訳ございませんでした。

しかし、これからはやはり不定期更新になりそうです。

というのも、今年の春に進学予定で住所を変更したり、卒業式をむかえたりなどで色々とすることが山積みなのです。

また落ちついたらゆっくりと進めていきたいと思います。

そして、最後になりましたが、qweap様……すごく嬉しかったです。

ここまで思われるというのは想定外でしたので、本当に涙が出るかと……。

他にも、

バツカス様、リトラ様、皇翠輝様、akito様、DDG-173様、苑怜様、ruru05様、針山様、ゆう様、弘人様、男爵様、安積様、和樹様、なんでもやさん様、(@。@ノ)ノ様。感想は書いていませんが感謝しています。これからもよろしくお願ひいたします。

それでは皆様、次回でまた

026 商品作りと新装開店

大慌てで再び工房に戻つて、次の朝までなにをするともなくゆるむとひきこもり生活をして過ごしていた聰介は工房の中で目を覚ました。

前日にやることが無も過ぎて昼寝をしていた聰介はその分だけ目覚めが早くなつてしまい、工房の裏路地に通じるドアの鍵を開けて出ると、家と家とで挟まれた狭い空はまだ白み始めたばかりだった。

デザートラングの裏路地はその言葉のイメージ通りにジメジメしているところではなく、乾いた砂埃が積もつていて埃っぽいような場所だ。

しかし、やはり建物に挟まれた狭い通路なので暗いし、稀にどこかの食堂がすてた残飯のすえた様な匂いもただよつてくる。

砂漠という暑い環境なので普通は捨てた物が腐つて匂いを放たないよう気にキツチリ処理をするはずなのだが、どこかのだれかがそれを忘れたようで今日はその匂いが裏路地に漂つていた。

外の明るさがわかつた聰介は、腐つた匂いに顔をしかめながら早くドアを締め切つた。

さて、話は変わるが聰介の本田の予定としては、この店の新装開店である。

そのための準備をしなくてはいけないと思つた聰介は、動きまわるには多少早い時間ではあるが、時間ギリギリになるよりはましだと判断して店の準備を始めたことにした。

まずは商品の代金のお釣りの用意のために売上金を入れるためのボックスの中の硬貨を取り出しやすいように並べ替えておき、そのボックスの横に売れた商品を書いておくためのメモ用紙 ロレは元々聰介のバッグにあつたもの を置く。

それが終わつた後はメインの商品となる武器を倉庫の中から取り出していく。

店内の棚にかざるとゴトゴトと音が鳴るので店内には出せないが、工房の壁は厚く音を通さない造りなので工房の床にどんどんと並べていく。

刀8本、片手剣25本、両手剣20本、短剣10本、ナイフ15本、盾5個、鎧4個

数だけ見れば小さな武器屋としては一見十分そつと見えるが、これでは少し客層が限られてしまつ。

ところの、これでは飛び道具、主に弓矢などの遠距離から攻撃出来る武器がなく、槍などのリーチが長い武器がないのだ。

他にも武器の種類をあげていけばきりがないのだが、これでは少し心もとないといつのは事実である。

そこで考えた聰介は、あまり複雑な成型などをしなくとも済む打撃系の武器をレパートリーにいれることにした。

まずは棒の形にするだけのことたりる棒の制作に取り掛かる」とこ
した聰介は、炉の傍に積んでおいた木を取ると、鍊金術で黒檀ほど
の重さと硬さになるまで圧縮をし、そこに炉の中に残っていた炭
必要なのは黒色となる炭素　を加えて見た目も黒檀と同じに仕
上げる。

圧縮したおかげでかなり小さくなつた物をそこから圧縮率を変えな
いまま180？ほど縦に細長く引き伸ばしていき、打撃部に鋼を口
一ティングして完成させた。

黒檀を意識して造つたため表面は重厚感溢れる黒一色で染まつてい
てとてもきれいな仕上がりとなり、いかにも高級ですといった感じ
だ。

だが、これは品数を増やして売るための物なのであまり値段をつけ
られないため、普通の鉄剣よりちょっと安い500ギルほどの値段
設定にするつもりだ。

それと同時に、聰介もあまりにもネタに走りすぎていって誰も買わな
いだろ？と思つたのだが、アダマンタイト製金属バットにアダマ
ンタイト製の釘を張り付けた所謂『釘バット』。

通常の釘バットと違い、アダマンタイト製のため錆びず、折れない
ため半永久的に使い回せる逸品ではあるが、流石にこんなものに値
段は付けられないため、聰介はアダマンタイトの色を隠すために黒
色を混ぜて誤魔化して店の隅の棚にでも飾つておくことにした。

そのほかにもハンマー部分に鉛を入れた鉄製のハンマー、大きさ
がバラバラの偽黒檀製の棒を創つた聰介が、工房の床にそれらを並

べる少しは見栄えが良くなつた。

槍や、弓矢などの武器はこの街に来る時に馬車に積んでいなかつたので、今度創ることに決めた聰介はとりあえずそれらのワインナップで満足することにした。

そのほかにも開店の為にする準備などで聰介が悩んだり動きまわつていると、太陽がようやく地平線の彼方からゆっくりと眩く輝くやの身を現し始めた。

「おはよー、ソウスケ。今日からお店開店だつけ?」

「うそ、そろそろ店を開けなきや支出ばっかりで赤字になつちやつからね。今日開店するつもりだよ」

既に着替えをして髪を整えてから下りてきたHIIコーは、慌ただしく開店の準備で商品を棚に陳列していく聰介を見ると、簡易に造られているキッチンスペースに立つた。

HIIコーは冒険で役に立つよつこと覚えた簡単な火の呪文を唱えて、火をおこすと近くに置いてあつたフライパンをその上に載せて温め始める。

その間にパンをその横で焦げない程度に温めつつ、ザクザクと野菜

のシャキシャキ感を損なわない程度に切つていぐ。

温まつたフライパンにアリーバと呼ばれる実からとれる油を引いて、長めのソーセージを2本並べて焼いていく。

そしてパンが温まつたところでパンの真ん中にナイフを入れて切り開き、そこに先ほど切つた野菜を詰めておく。

最後に、ソーセージを直火にあててバツツと皮を弾けさせてから、肉汁溢れるソーセージをパンの中の野菜の上に載せてピリ辛のソースを掛けると出来上がりだ。

パンはほんのり温かく、ジューシーなソーセージからは肉汁が溢れて光輝き、野菜は瑞々しそうで、そしてそれらの上では赤色のソースが鮮やかな彩りとなつてパンの上で存在感を放つていて。

出来たてのホットドッグは簡素なカウンターの上で、窓から差し込む太陽の光を受けてまさに宝石のような輝きを放ち、市場で安く売られているクタツとしたモノとは一線を画している。

そしてそれは冒険者でありますながらもキレイに手入れされた滑らかな指先でソツと優しく包み込まれ、フルンとした瑞々しい唇の上を滑り口の中へと迎え入れられた。

「ソウスケの分もつくつたからいつたん休憩して食べなよ~

「ありがとう! わあ、すごくおいしそうだね~」

「ふふふ、簡単だけ出来たてつてすごくおいしいのよねえ~。さ

「うひ、早く食べちゃいなよー。」

「いただきまーすー。」

作業を一時中断して、Hミリーから出来たてのホットドッグを受け取った聰介はガブリと大きく口を開けて食べた。

「うん、やっぱ出来たてはおいしいなー。わざわざありがとね、Hミリー。」

「やつら言つてもうるさいとつづつたほうとしては嬉しい限りだわー。」

そしてホットドッグを食べ終えた一人は、聰介がお礼にと用意したコーヒーを飲んで雑談をしてしばらく朝食のあとに優雅な一時を楽しんでいた。

「「え~っと、俺らの朝食は……？」」

それから少しして起きてきたジョージとジャックは朝食を買いに一人で寂しく市場の方へ出かけていった。

聰介が開店をすると、まず最初に入ってきたのは明らかに冒険者らしくない主婦といった感じの3人ほどのグループだった。

その奥様3人組は、剣や防具等があちこちに飾られて光を放つている店内を物珍しそうに見回しながらカウンターまでやつてきた。

「すいません。包丁を買いにきたのですがありますか？」

「はい、いらっしゃりです」

「……えっと、これら以外の包丁ってないんですか？」

聰介が包丁の置いてある棚の場所まで案内すると、お客の女性の口から出た言葉はお皿並のモノが無いことにに対する落胆だった。

「私達、斜向かいの食堂のアイラさんがここのお店でもらった包丁がすごくいいって聞いてきたんだけど、もうそれはないの？」

「えっと、すいませんが。あれは非売品でして、どうしてもつていう方には特注という形でお売りするつもりなんです。ここにある包丁も流石にあれほどではないのですが、これもモノはいいのでどうでしょうか？」

「ん~、どうする~？」

「私は切れ味を見てみないと何ともいえないかな~」

「あの～すいませんけど、ちょっと試し切りしてもいいですかー？」

3人は少しだけ話しあうと、ざつやら切れ味を見てるために試しきりをすることに決めたようだ。

「ちりとして、切れ味を直接見てもらってそれで納得してもらつて買つてもらうのがベストなので、ざつやとこう感じで聰介はそれを承諾した。

その3人組はざつやら市場からの帰りだつたらしく、一番後ろにいた人が袋の中から玉葱 オー＝ニオンと呼ばれているが、玉葱を取りだしたので、聰介は店のキッチンスペースからまな板を持つてきた。

まな板をうけとつた人はカウンターの上にまな板を置き、その上に玉葱を置くと、聰介が棚から出した包丁を受け取つて薄くスライスし始めた。

トントントンと軽快でリズミカルな音が皿さがりの店内に響いていく。

「……？あれ？マリー、これつていつもと同じ玉葱？全然涙でないんだけど……？」

「えー、本当？このあと、マリネのサラダにするつもりだったから普通の玉葱のはずだよ？」

「……実は玉葱は、切れ味が良いと目が痛くならないんです。これ

あまり知られていないのですが……。おそらくその玉葱は普通のものだと思いますので、かじってみると辛いと思いますよ」

その言葉に半信半疑といった感じながらも、切りかけの玉葱をちゅうとかじってみた3人は辛そうな表情を浮かべた。

そんな3人にお茶を入れて持ってきた聰介は、飲んでいる途中で説明した。

「自分もなんでそうなのかは詳しくはしらないのですが、切れ味がいい包丁だと玉葱を切っても目が痛くならないようなんですね」

成分などの話をするわけにもいかないので誤魔化していった聰介の言葉を身を持つてしめた3人はそれぞれ、へえ～といった感じに頷いた。

「じゃあそれをもらおうかしら。いくらくらいですか？」

「この包丁は60ギルになります。ちなみに、この小さいナイフ等のセットになりますと、5本で200ギルになります」

「それじゃあ1本もらつわ」

「私も1本お願ひ」

「ん~……私はセットで買わせてもらつわ~」

铸造の技術があるとはいって、まだ大量生産が出来ないこの世界ではまだ包丁は長く使い続けるものという考え方があるために少し高めのこの値段設定でも奥様3人組は快く受け入れたようだ。

元の世界なら100円均一ショッピングのせいで売れなかつただろう値段設定なので、聰介は内心でこの値段が適切なのだろうかと、僅かに不安を持っていたがそれは杞憂に終わったようだ。

カウンターで3人からそれぞれ合わせて320ギルを受け取つた聰介は、それを売上金を入れる箱にいれつつ、包丁単品×2包丁セット×1とサッとメモ用紙に書きつけた。

それからカウンターの下から包装用の黒の無地の布を取り出し、包丁をとりに棚までいった聰介は2本の包丁にそれを巻きつけ、セットの包丁の方は置いてあつた箱ごと抱えてカウンターに戻つた。

ちなみに、黒の無地の布は市場で安く買ったもので、なぜ布かというと、木の箱は一般的にそこそこ造るのに値段が掛かるので安く済む布にしたというわけだ。

3人にそれぞれの商品を渡した聰介は、お取り扱いに気を付けてください、切れが悪くなれば持つてきて下さればお安く研ぎますと言つて、3人を店の外に送り出した。

それからもしばらく冒険者風の人達や、包丁の噂を聞いた奥様方や料理人といった方が来て包丁や鉄剣などを買っていったが、さすがに高額の商品が開店当日に売れるということは無く、その日の売り上げは、包丁単品×5=300、包丁セット×2=400、鉄剣×

5本＝3000、ナイフ×3＝900の計4600ギルとなつた。

もとの世界の値段に換算するとおよそ460000円。

一日の売り上げが46万円。

武器屋の商人が死の商人と呼ばれて蔑まれていても無くならない訳が聰介はようやく分かつた。

特にこの世界では恒常に魔物という敵対存在がいるおかげで需要は無くならないために廃れるということも無く、安定した職業となつていてる。

もちろん技術がともなつていない、または工房に武器を注文してソレを売るタイプの武器屋は、買われなかつたり、工房に渡す代金がいるために利益がでにくいだらうが、聰介のよつた全て自分でするタイプの武器屋は大きな利益が出やすい。

とはいえるもちろんデメリットはあり、無名の武器屋なので人が入りにくいつのがある。

それはこれから聰介の創る武器の優秀さが有名になれば解決されるので、そこまで気にしなくていいことかもしれない。

これから自分の創るものが認められれば更に多くの売り上げが期待できると分かつた聰介は、そんな期待に胸を膨らますのであつた。

5019文字です。

今回は気分がよかつたので、調子に乗つて今までより早い更新をしてみました。

……くれぐれも次もこのペースでの更新だと期待はされないよつてお願いします（汗

それではまた次回でお会いしましょう

027 ランチと報酬

「ふう……それにしても、こんな創造れるなんてソウスケは本当に何ものだ？鍛冶の事はよくしらんが、剣を3本つくるにしても制作スピードが速すぎる氣もするし……」

「案外普通じゃないのかも……。これだけ早いことはもしかしたら魔法を使って何かをしてるのかもしないわね。あまり気にしてなかつたから言わなかつたけど、前の街にいたときにうつすら魔力っぽいのが漂つっていたようなこともあつたし」

田の前から迫ってきた全長4mほどの芋虫のようなサンドワームを横に避けながら、相手の突つ込む勢いに任せて剣を水平に構えるとサンドワームは、竹を縦に割つたようにきれいに真つ一つになつた。これでジョージが倒したサンドワームの数は5体で、ジャックはサンドワームとジャイアントスコープオンを2体ずつ、Hミコーはマミーを8体倒していく。

「おこおこ、Hミコーちや本町かよー？」

「本当のことよ。多少習得するのが難しいけど、才能があるなら魔法は使えないことも無いし、魔法使いにならずに生活の足しにするだけの人もいるから、聰介もそういうタイプのかな～ってなんと思わなかつたんだけど……。もしかしたら新しい魔術でも自分で

開発してそれを使って鍛冶をしてるのかもね。ほら、工房なんて前の街にいたときだつて、引っ越す時に扉の隙間から中がちょっと見えただけで、後は全部見えないよつとしてたし」

「そりかあ……ん? 自分で魔術創れるくらい才能があるのなら、魔法使いとして大成できるんじやないかな? なんでわざわざそんな回りくどいことをしてるんだろ?」

エミリーの言葉を聞いて、少し引っかかつたジャックはその疑問をエミリーに尋ねてみた。

「そりいえばそうだけど……。まあ、何か理由があるのかもね」

「そうだな。けど、あんまり詮索しない方がいいぞ。秘密なんて知られて気持ちのいいもんじやないからな」

そういつたジョージは、切られてからもじばらく暴れていたサンドワームが大人しくなるのを確認すると、サンドワームの腹の真ん中あたりにズブリと剣を差し込むと、テコ梃子の要領で腹の中から一つの臓器を取り出した。

剣の腹からズルリと滑り落ちたその臓器を剣で切り開くと、太陽に照らされてテラテラと光る胃酸と共に、今回受けた依頼達成のための鉱石が入っていた。

ガランダイトと呼ばれるその鉱石は、サンドワームに飲み込まれた魔物の体の一部が長い時間をかけて、魔物を食べて魔力を帶びた酸

と結びつけて「よしやく」で使われる代物だ。

大抵の場合はそのまま溶けて無くなってしまうので、非常に珍しく、通常2mほどのサンドワームが4m級に育つてよしやくみつかるといつたぐらいのものだ。

使用方法としては、魔法で不純物を無くして創りだした純水で丸一日煮込むことで強力な溶解剤として精製し、通常の溶解剤では溶けない魔法用の触媒を溶かす時に用いられるのが一般的で、魔法を研究する人達の間では結構な値段で取引されている。

4m級のサンドワームが5体目で出て、そこからガランダイトが一発で見つかったジョージは、こりや運がいいなと思いつつ、砂の上でガランダイトを転がして胃酸を十分に落としてから、腰元のぶら下げた袋にそれを入れた。

「よし！ 依頼物もこれでゲット出来たことだし、帰るとするか！」

ジョージが上機嫌でクルッと後ろを振り返ると、そこではエミリーとジャックが美味しいそうなサンドイッチを頬張っていた。

「……え？ ちよ……。俺の分は？」

「鉱石取りに夢中で、呼んでも返事なかつたからいらないのかと思つて食べたよ、ジョージ」

「とりあえず死ね！ ジャック！」

「ちょ！？まつてまつて！冗談だから！…」

ジョージはうがああああああと叫びながら剣を振りまわしてしばらくの間、ジャックを追いかけていた。

「……まあいいか。お腹減ってるし食べりやおつ」

そんな時Hリーはとこうと、ジョージとジャックの追いかけっこを座り込んで観戦しながら、ジャックがジョージのために本当は残して置いたサンドイッチに齧りついていた。

「……俺……朝あまり食べてないんだけど……」「

朝のホットドッグも昼のサンドイッチも食べ損ねてしまつたジヨージは、街まで帰ると空腹でふらふらしながら市場の屋台の方へと歩いていった。

「すいません。ギルドの依頼書を見てきたんですけど今いいですか？」

聰介がちょうどお皿「ほんのカルボナーラを作っていると、軽やかな音を立てて扉があく音と同時にそんな声が聞こえてきた。

聰介はちょうど出来あがったソースにサツと絡めてブラックペッパーをふりかけると皿に移してから、近くにあつた鍋の蓋を上から被せて冷めないようにしてカウンターに向かつた。

カウンターの向こうでは小奇麗な鎧に身を包んだ人の良さそうな青年風の冒険者が薄く頬笑みを携えている。

「うーん、いい匂いですね。これからランチといったところですか？」

「ええ、ちょうどカルボナーラを作っていたところなんですよー」

ただの世間話に聰介がちょうど作っていた料理名を挙げてにこやかに応えると、そこでその好青年は眉をひそめた。

「うん……？カルボナーラなんて料理あつたかな……？」

「えへっと……実は私は最近王都にやつてきた者でして、カルボナーラって言つのは私の住んでいた場所の料理なんです。牛乳や生クリーム、チーズを使った濃厚でおいしいパスタ料理なんですよー」

あつやは……と思った聰介は内心焦りながらも、表面上はうるたえ

ずになんとかスムーズに話を進める。

ちなみに食材自体の名前は、前の世界のモノと同じモノはそのままの名前で、前の世界に存在していなかつたモノは、当然この世界での名前が付けられている。

料理名も一致するのがほとんどだが、カルボナーラはたまたま「ちらにそういう文化が無かつたからなのかもしれない。

とはいって世間に広く知られていないだけで、実は地方料理として存在している可能性もあるので、聰介はソコを利用して地方料理としてありふれた料理だと説明したのだった。

「なるほど。これは美味しいそうだ。ふむ……チーズの良い香りが食欲をそそりますね」

相手の好青年もそれで納得すると、店内に漂つていたチーズの良い香りをかぐと顔をほころばせた。

「私もお腹が減つてきましたね。早く話を済ませてランチを取るとしましょう。……さて、話が大分それましたが確かに依頼内容は金属鉱物などの採集でしたね？」

「はい、間違いありません。」

「実は既に依頼の品物を持つてきているのですが、もしよろしければ買い取つていただけないでしょうか？たまたま安くいただくこと

が出来たのですが、かさ張るものですから困ります……」

「もちろん大丈夫ですよ。では、それらを見させてもらつてもいいでしょうか?」

「ああ良かつた。これで重い荷物ともオサラバできます」

話していた好青年は聰介の返答を聞くと、困ったという表情を一転させてホッとした表情を作ると、店の外に待機させていた馬車の荷台に向かつ。

聰介がその後ろについていき、馬車の荷台に入るとそこには大量の鉄鉱石や、魔鉱石などが入った木箱が合わせて4つほど置いてあった。

これほどの量があるならば、しばらくは依頼の心配をしなくてよさそうだと思った聰介は、一応木箱の蓋を一つずつ開けていき中身の確認をしていく。

当然木箱の中には黒光りする鉄鉱石や、魔鉱石がギッシリと詰まつており、試しに持ち上げてみるとその重さから底上げをしてないことが分かるぐらいの手ごたえがあった。

想定していた量を大幅に超えていたために依頼報酬の額で悩んだ聰介は、最初に話しかけてきた好青年と話し合った後、報酬の額を当初の倍にすることと交渉を終えた。

満足そうな笑顔を浮かべた好青年は聰介に対し、気持ちの良い交渉をありがとうございましたと感謝の意を示して仲間を引き連れて

店を出ていった。

それを見送った聰介はとりあえず馬車から降ろして店先に置いていた木箱を店内奥の工房へと運び始めるのだった。

「くへつ、ニールちゃんよ。おめえも大した詐欺師だよな？いやら俺達に脅迫されているといつてもあんな笑顔を浮かべて、人の良さそうな新米店主に俺らの盗品を押し付けるんだもんなあ。え？おめえは生まれついての詐欺師だぜ、全くよお」

「…………つるわい、黙れ…………」

ニールと呼ばれた青年は、先ほど聰介に依頼の鉱石を渡していた好青年だが、今はその表情は悔しさに歪みきついて先ほどまでの朗らかな雰囲気の面影は全くと言つていいほどにない。

「おおこええこええ。でもいいのかあ？大事なだいじな妹が怪我しちゃうかもしれないぜえ？」

「つー妹には手を出さない約束だろつー」

「そつだなあ、そついう約束だなあ。でもよ、事故ばっかりはびつ

しうつもないんだよなあ？事故つてこわいよなあ？」

「うぐ……」

ニールは物心ついた時には既に両親はおらず、自分が捨てられていた町はずれの場所の近くに住んでいたお爺さんによつて拾わされて育てられていた。

そこにはもう一人サーチャーといつ2つ年下の女の子が育てられて、一緒に暮らしていくうちに一人は次第に仲良くなり、すぐに兄妹と呼べるほどに仲良くなつた。

ニール達三人は何年間も町はずれで自給自足の生活をしてゆつくりと過ごしていたが、おじいさんはついに寿命を迎えてしまい、あとにはおじいさんの持つていた土地と家、そしてニールとサーチャーだけが残つた。

それでも一人は協力し合つて仲良く暮らしていたが、1ヶ月前に突然やつてきた盗賊達にそれは跡かたも無いほどに壊されてしまった。

家は焼き払われ、畑は走り回る馬によつてメチャクチャにあらされてしまい、果てには妹を攫われてしまった。

妹だけは取り返そうと思ったニールは馬で走り去る盗賊達に、途中で何度もこけてボロボロになつても必死でついていき、盗賊達のアジトまでたどり着くことができた。

ボロボロで辿りついたニールに山賊のアジトから妹を助け出す体力は既に無く、それでも無謀にも向かつていったニールはあつさりと

捕らえられてしまつが、盗賊団の頭にその根性と整つた顔立ちを気にいられ、妹の安全と引き換えにニールは盗賊団に引き入れられることになった。

それからは盗品を捌く時などに街での交渉役として使われるようになり、何度も笑顔を浮かべては商人達を騙して盗品を売りつけた。

当然のことくニールは生来の人の良さから、今の仕事に嫌悪感を示してはいるが、妹を人質に取られていてはどうしようもなく、仕方なく仕事をこなしているという具合だ。

そうした背景を持つニールは、街の外に出ると仕事仲間兼見張りのための盗賊団の数人に小突かれたり、なじられたりしながらいつものように盗賊団のアジトまで帰つていった。

4333文字です。

いやあ今日は大分待たせてしまったのに短くて申し訳ないです（汗
キリのいいところで切つたらこれだけになってしましました。

それと前回の朝食ネタを引きずったのも人によつては不快に感じた
かもしませんね……

自分としてはこの作品にあまり無いギャグ成分をちょっと入れたか
つただけなんです、すみません。m（ーーー；）m

今回はちょっと話が大きく動きそうな流れで終わってしまいました
が、次は番外編として、聰介の過去話でも書こうかと思っています。
これまでにリクエスト……というよりも、不自然だから書いた方が
いいとのご指摘があつたので書いてみようと思います。

ぶつちやけると、ストーリーを考えるのに手いっぱい過去とかそ
ういうのが未だに確定していない現状です。

ちょっと自分でも書き上げられるのかが不安ですが、がんばってみ
ますね。

それでは次話（予定：番外編）でお会いしましょう

番外前編　学校とカフH

ある夜、聰介はいつもどおりに店を閉めてしつかりと戸締りを確認した後に自らのベッドの中へと潜り込んでいた。

元の世界にいたころなら未だにネットゲームをしたり、友人たちとしゃべっていたりするような時間帯だが、この世界にそれほど夢中になれるような娯楽は無く、聰介は最近では早寝をするようになっていた。

その日もなんら変わりなく、ベッドにもべつこじんでからじぱらぐ田を瞑つていると次第に眠気がやってきて、聰介をまどろみの淵へと誘つていった。

ただ今日だけはいつもと違い、心地いい黒い闇に包まれて眠る聰介の姿には一筋の涙が流れていた。

理学部化学科

「おーい、神尾くーん！ちょっとそこの機材あとで実験で使うから第一実験室に運んでおいてよー。それ運んでくれたら休憩してくれればいいからさー」

「わかりました～、灰村教授～。……って重いッ！この機材重すぎですよ教授！？」

「え？ ああうん。 それ高いからね～。 壊したら弁償だねつ！」

茶目つ氣たつふりに笑顔を浮かべてビシッと親指を立てる教授に、聰介はヒイツ！といいながら機材をゆっくりと持ち上げて、近くに置いておいた業務用の台車に乗せた。

そして教授の笑いながらの、落とすなよ～という声を聞きながら聰介はゆっくりと慎重に台車を押しながら実験室の中から出てきた。

理学部化学科に所属している聰介は今、教授の手伝いといふことで学校に来て機材運びなどの雑用をしている。

聰介は中学に入つてからの科学の授業で、実験を重視する先生と出会つたことで科学の楽しさを知り、科学部に所属してその先生の下でなんども実験を重ねていくうちに科学といつ分野が好きになつた。

その好きが高じて聰介は進学した高校でも理系を選び、夜遅くまで勉強を毎夜して国立の有名大学の理学部化学科に見事合格することができた。

進学ということで不安だった一人暮らしもすぐに友人ができたことで色々と助けてもらつことも出来たので、快適な生活を送っている。もちろんバイトもしているので帰りが夜遅くなることもあるが、今の生活が充実している聰介にはさほど苦にはならない。

大学から帰つてからは最近趣味となつてきたネットゲームを数時間ほどしたり、課題をこなしたり、趣味の科学分野について調べ者をしたりしている。

大学に早く着いたときなどは教授が暇だと話をしたり、簡単な実験をしてみたり、教授がいないと趣味の実験をこつそりとしてみたりしている。

本当は機材を私用で使うのはあまりよろしくないが、教授はその辺りは寛容で、好きに使わせてもらつていて。

教授曰く『若者は若いうちに好きなことを何でもしなさい。それが後悔しない生き方だよ』らしく、時には教授の知り合いも紹介してくれるほどで聰介は教授に頭が上がらない。

とこうことで、聰介は教授が何かの実験で困っているときや、人手が足りないときなどは進んで手伝うようにしている。

今回は教授がこれから急用で出かけるらしいので、代わりに実験で使う機材を実験室へと運んでおいてほしいということで手伝いにきている。

一つ一つがとても高価な機材なので落として故障させないようには慎重に運ぶ作業を、廊下を何往復もしてこなしていくのは疲れる筈なのだが、聰介はいやな顔一つせずにこなしていく。

というのも、先日教授の知り合いの一人の刀匠のもとへ連れて行つてもらい、教授の科学的な解説付きで刀をうつ工程を見学させてもらつたからだ。

通常は刀を打つているところを間近で見ることなど出来ない上に、科学的な解説を聞けることなどまず無いので、聰介はとても上機嫌なのだ。

「ふう、終わった終わった。……ん、もつこんな時間か。まだ時間に余裕はあるけどそろそろ行くかな」

作業がおわった聰介は、叔父に卒業祝いで買つてもらつた腕時計を見て時間を確認すると、荷物をもって実験室に鍵をかけ、その鍵を教授の机の引き出しに入れて講義室へと歩を進めた。

しかし、途中の購買所で見かけた女友達と雑談をしそうにせず、時間ぎりぎりとなつた聰介は急いで講義室へと向かつた。

開始時間1分前に、ギリギリ間に合つた聰介が扉を開けて中に入るとちょうど真ん中の列の中段辺りで手を振る友人の姿がみえたのでそこへと歩いていく。

「よつーおそかつたなあ。けど席はとつておいたぞ」

「サンキュー悠斗。でも、まわりはそこまで埋まつてないからあまり意味がないけどな！」

「つるせーバカ！ちょっとぐらい感謝しろ！」

と軽いやり取りをしていると講義の担当の教授が現れたので、二人

はすぐに静かにしておく。

間もなくその教授による講義が開始され、その数分後、聰介の友人は机に撃沈した。

「おいおい、直ぐに寝るなよなあ。あとで授業内容聞いてきても教えないぞ」

講義がようやく終わって一息ついて聰介が横を見ると、友人がちょうど起きたところだったので泣きつかれないように聰介は先に釘をさした。

「ご心配なく。俺は毒系のことは得意だから問題ないもんね。あれぐらいの講義ならだいたい分かるさ。そんなにいうなら聰介は知っているのか？ 地球で最強の毒を持つ生物って」

「えー？ ん~……なんだつたつけなあ……。……フグ？」

いつだつたかのテレビ番組の特集で聞いたことがあるような問題に聰介は悩んだが、結局それらしい答えは出ず、一般的に有名な毒を持つ生き物の名前を挙げてみた。

「はつずれ～。正解は『キロネックス』クラゲの一種だ。立方クラゲの一種で、刺されると運が悪いと3分で死ぬほど強力な毒の持ち主。血清はあるけど、刺されたらほぼ死亡確定だな。なんせ3分で死んじやうほどだからな、こわいこわい」「

「へえ～。そんなのがいるんだ～。それじゃあ安心して海も泳げないじゃないか」

「ああ心配すんな。日本の近くにはいないし、海外でもいるなら看板が出てるはずだから」

「ふーん……。それじゃあさ、構造式が判明している最大の天然有機化合物で、非タンパク質の天然物として最強の毒は知っている?」

今度はさきほどのお返しとばかりに、聰介は友人が分からないよう細かい条件をつけてさきほどと同じような問題を出す。

「あ?あ?え?と?なんだ?け?ん?」

「はい、時間切れー。正解は『マイトイキシン』。毒性はフグ毒として有名な『テトロドキシン』の約200倍の強さで、サザナミハギから単離されたもの。構造が巨大でまだ全合成した人がいないから、今だとそれをを目指してる人たちが多いよね。あんなに構造が巨大なのによくやると思うよ」

「あ～マイトイキシンか。全然分からなかつたわ。つてか、そんな条件つけて難しくするなんて卑怯だぞ!」

俺のはかなり優しい問題だつただろ？がー！とウガー！といいながら怒る友人を尻目に聰介は涼しい顔でやり過ごしている。

やり返したという少しばかりの優越感を感じて少し気分がよくなつた聰介は、今日のカリキュラムを思い出して他に講義が無いことを確認するとまだ講義が有る友人とは別れて、知り合いの経営する力フェへと向かつた。

洋風の家が立ち並ぶ通りを抜けるとまず目に飛び込んでくるのが、地中海から吹く風を感じさせる手入れの行き届いた真っ白な白壁で、そこにはおしゃれなスカイブルーの小窓と、同じくスカイブルーの軽いゴシック調の扉がある。

周りに植えられている手入れの行き届いた観葉植物の縁も、白壁の美しさを際立たせるのに一役買つている。

扉の直ぐ脇には、草書体のような細い文字で『Cafe』と書かれた板が白壁に立てかけられていて、それがまた一層おしゃれに見える。

『Cafe』と書かれている以外には無粋なメニューや値段の表示などが無いのも好印象である。

それだけで一枚の絵のようになる扉を開けて店内に入ると、白壁に反射した光が店内を明るく照らして落ち着いた空間を演出している。店内の各所には小窓や扉にあわせる様にスカイブルーの小物が配置されているので、落ち着いた空間だけではなく、安らげるような優しい空間ともなっている。

聰介は小窓の近くの日の光の当たる明るいテーブルにつくと、かばんの中から愛読書を取り出した。

「いらっしゃい聰介さん。今日もいつもと同じコーヒーでいいのかな？」

「ん~、いや、今日は紅茶をお願いします」

「あら、珍しいですね。今日はなにがあつたんですか？」

いつも頼んでいるコーヒーとは別の選択をしたことを珍しく思ったのか、このカフュの店長の妻である霧崎響香が聰介に尋ねる。

「いえ、今日は特に晴れていて気持ちがいいので香りがいいそちらにしようかと思って」

「なるほど、確かに今日は雲ひとつ無い快晴で気持ちがいいですかね。分かりました、少々お待ちください」

白のシャツに黒のパンツといつシンプルな服装を身に着けた響香がカウンターへ戻ると、腰元につけた白地に青いチェックが爽やかなカフュプロンがゆれる。

響香がカウンターに戻ると、そこには聰介の知り合いである霧崎洋介がコーヒーや紅茶をいれるための準備をしていた。

響香が洋介に聰介のオーダーを伝えると、コーヒー ミルを引く手を一旦止めてこちらに軽く頭をさげる。

響香はスッと整った顔立ちでクールな印象を与える美人だが、洋介は見るからに優しそうな顔立ちで柔軟な印象を与える好青年といった感じだ。

この二人と聰介が出会ったのにはありきたりではあるが、あまり遭遇しないだろうとさつがある。

というのも、20代前半で若くしてこの店を立ち上げようとしていた時、洋介と響香が運転する車がたまたま見通しの悪い交差点で左方からきた車にぶつかられてしまつたのが始まりである。

ぶつかつた車はいわゆるチンピラが数人で乗つてているような性質の悪い車で、見通しが悪いんだから止まらなかつたソッチが悪いと、一方的に言いがかりをつけて全額賠償どころか、そのうえで法外な慰謝料をふんだくろうとしたのだ。

当然、すぐに警察を呼んで解決をしようとした一人だが、洋介が携帯を出した瞬間に洋介は突き飛ばされ、そのすぐ傍にいた響香が人質同然につかまえられてしまつた。

洋介はどうしようもなく、ちかくの銀行で引き出せるだけの現金をもつてこいと言われ、店の開店資金を苦渋の決断で手放すところだつたのだが、たまたま近くを通つた聰介が近くの交番に駆け込み、すぐに警官を連れて行つたおかげでそれを回避できたのだ。

そんな引き受けがあり、とても感謝をされた聰介は店を開いた時に招待してもらい、それ以来このカフェが気に入つて何度も来ている

常連となつてゐる。

恩人といふことでいつでもタダにしてくれるような勢いではあつたが、聰介は流石にそれは悪いということで、妥協点として「コーヒー や紅茶を頼むと一つテザートをタダでつけてもらつとこいつをおさまたた。

これは自称スイーツ男子を語る聰介としては非常にうれしい事態で、このことも聰介がこの店の常連になつた理由の一つでもある。

そしてしばらしくしてから、洋介が厳選した茶葉で作られた出来立て紅茶が運ばれてくれる、聰介は本を読む手を止めて葉を挟み、カップを手に取つた。

香りをかげば、ダージリン特有のマスカットフレーバーと呼ばれる強く甘い香りが心地よく、紅茶を口に含むと、強めの渋みが口の中にひろがり、味に深みを与える。

「洋介さん、このダージリンすくべ香りがいいですね。とっても美味しいですよ！」

「たまたま知り合いでいい茶葉をわけてもらえてまして。気に入つてもらえたのならなによりです。」

紅茶を持ってきてくれた洋介に聰介がそういうと、洋介は笑みを浮かべる。

「それでは」ゆっくりしていってください。本日のデザートは響香が焼いたフォンダンショコラです。たしか聰介さんはチョコレートがお好きでしたよね？ 美味しく焼けているみたいなので楽しみに待つていてください」

「フォンダンショコラですか。美味しいですね。あのチョコのところけていく美味しさといったらもう……。楽しみに待たせていただきますね！」

聰介がそう返すと、洋介は微笑んだまま頭を下げ、カウンターのほうへと戻つていった。

それからすぐに響香が聰介のもとにデコレーションされた綺麗なフォンダンショコラを持っていき、聰介はとろける甘いチョコの味と、ダージリンの芳醇な香り、開かれた小窓から時折入り込んでくる風を感じながら午後のひと時を過ごした。

4996文字です。まさかの一部！？
書いてるときに前編後編に分かれるなんて想像もしてなかつた……。
調子にのつてあれこれ書いた結果がこれだよ！

さて、実は何を隠そ^レう聰介は実はスイーツ男子だつたのです！
スイーツ（笑）男子でもいいじゃない。美味しいんだもの……
作者も実はスイーツ男子だつたり。だつて美味しいんだもの。週2
でスイーツ食べてゐるよ。だつて美味しいんだもの。

まあそれはさておき、次回ももちろん番外です。

いらねえよ、バカ！本編進める、ノロマ！なんて言わないで……。

ちなみに作者3月1日に学校卒業です！進学で東京にいくよ！専門
だけど！

ちなみにすむのは川崎多摩区あたり。そこら辺りに私は転がつてい
ます。

一人暮らしでも皆がいるから寂しくなんてないんだからああ！

ちょっとグロイ表現あり・w・

番外後編　夢の終わりと疑問

体にあたる暖かな日光と髪をサラサラと揺らす風が吹く気持ちのいい午後を霧崎夫妻のカフェで過ごした聰介は、気分を切り替えて課題をこなすために自宅のPCの前でインスタントコーヒーを片手に画面に向かっていた。

眠くなるのを防ぐために買った安っぽいインスタントコーヒーをブラックで入れ、安っぽい苦味を感じながら聰介は片手でキーボードを打つしていく。

しばらくしてコーヒーの入った白いマグカップをダークブラウンの机の隅に置くと、それからは両手の指を使ってキーボードをたたき、本格的に文字を打ちこんでいく。

ただただひたすらに打つしていくのだけではなく、時々内容を確認するように見返したり、ネットから参考となる様々な画像や論文を引つ張つてきながら課題を黙々と進めていく聰介。

カタツカタカタツカタタツカタツと、指がキーボードを叩く小気味いい音が6畳ほどの静かな部屋の壁に一小時間ほど響いては消える。

「ふあ……あああ……やっと終わった……」

あぐいをしつつ、背もたれに体重を預けて大きく体を伸ばした聰介は、ギイツというイスのきしむ音を聞きながら、あぐいのついでに出了涙を指先で軽くふき取つて、マウスを動かして課題のウィンドウを閉じ、動画サイトのTOPページを開く。

右上に設置された検索ウィンドウにカーソルを持つていき、そこでクリックした聰介は最近ハマっている洋楽のアーティストの曲をスピーカーから流す。

マンショングリーンの隣や上トの階の迷惑にならないように音量を絞つたテンポの速い音楽が室内を満たすと、聰介はキッキンに向かつた。スピーカーから流れてくる音楽とあわせるように歌のサビの部分を口ずさみながら、IHのコンロの上にフライパンや鍋を用意し、他にも包丁やまな板を出していく。

冷蔵庫を開けて、玉ねぎや、ジャガイモ、ニンジン、ニンニク、牛めを取り出して、玉ねぎを薄切りにして、ジャガイモとニンジンを一口大に、ニンニクを摩り下ろす。

フライパンにバターを溶かし、ニンニクを入れて香りが出てきたら玉ねぎを入れてキャラメル色になるまで炒めつつ、鍋に油を引いて牛肉を塩コショウをかけて炒め、ニンジンやジャガイモ、炒めた玉ねぎを入れて更に炒める。

ちょうど良くなってきたタイミングで鍋の中に水を投入し煮立たせ、アグをとつてからローリエの葉を入れて30分ほど煮込む。

30分ほど煮込んだ後、一旦火をとめてカレールーを溶かして更に30分以上グツグツと煮込む。

おいしそうなカレーの匂いを嗅いで、早く食べたいといわんばわかれりグルルルル……と唸りを上げるお腹をおさえつつ、更においしくさせるために空腹を我慢して30分近く煮込んでいく。

出来上がったばかりで、カレー独特的のスペイシーな香りと湯気がゆらゆらと立ち上がる美味しそうなカレーに合わせるのは、このためのために買ったおいたカレーライス用のお米『華麗舞』。

とある食品会社がカレーライスを更に美味しく食べるためと開発したカレー用のお米で、表面はインド型品種の用に硬めで粘り気が少なく、内側は普通の日本型品種の柔らかさと弾力性を持ち、カレルウをかけると一粒一粒がルウと綺麗に絡み合いカレーが更に美味しく感じると言われている。

その『華麗舞』を大きめのカレー用のお皿に盛り付け、さきほど出来たばかりで未だに湯気を立ち上らせる美味しそうなカレーを『華麗舞』のそばにトロツと流し込む。

様々な食材の島が浮かぶ深い褐色のカレーの湖と、白銀に輝く飯の丘の境界で混ざり合うカレーご飯は、まるで恋人同士のようにしつとりと絡みつき、カレーの湖に浮かぶ。

白銀の丘の向こうにそっと彩られた福神漬けも、単調な褐色と白の世界に鮮やかな赤色となつて彩を添えていて素晴らしい。

改心の出来に満足した聰介は、折りたたみ式の小さなガラステーブルの上にカレーの入った皿とスプーン、簡単なサラダ、それとレモン汁を少量加えて爽やかさを演出した水を乗せる。

テーブルの前に座り、このカレーのレシピを考えてくれた方や、この「ご飯を開発してくれた方々、食材を作ってくれた方々に感謝の意を示して手を合わせて「いただきます」と、聰介は声に出して言ひつ。

「……うまい……」

ほろほろと解けてルウと絡み合つ「ご飯をすぐつて口に入れた聰介は十分に味わつた後、ため息をつくかのようにぼうと息をついて、一言だけ口にした。

口の中で解けて完全にルウと絡まつた「ご飯はしっかりとカレー本来の味を引き立てつつも、ちゃんと柔らかさと弾力があり、「ご飯の存在を主張している。

カレーのために作られた『華麗舞』は、その名に恥じぬほどの役割をしつかりと果たしていた。

その後、夢中になつて食べた聰介はおかわりに一杯目をつぎに行き、それを「ご飯の一粒も残さずに綺麗に完食した。

「ご飯を完食した聰介は、直ぐにカレーの入つていた食器などを洗い、そのついでというわけではないが、シャワーを浴びて自分の体もすっかり綺麗に洗つて、スウェット姿でPCの前に座つていた。

最近ハマってきたFPS First Person shooter 系のゲームを立ち上げ、數十分間ほどゲームの中で出会った友人とともに熱中する。

しばらくして、ふと喉が渴いたことに気がついた聰介は、ハンドルネーム以外年齢も性別も知らぬ友人に敬語で飲み物を買いに出かける旨を伝えると近くのコンビニへ向かうために家を出た。

少し大きな交差点を信号機に従つて渡り、入ったコンビニでたまたま見かけた車や、バイク、ファッショソ、ミリタリー関連の雑誌を適当に流し読み、風呂に入つてしたことも考えてスポーツドリンクと、小腹を満たすためにスナック菓子を掴んで会計を済ませる。

聰介は、歩くたびにカサカサと音を立てる白いコンビニ袋をぶら下げる、来た道を帰るために青になつたばかりの横断歩道を渡り始める。そして、横断歩道の半分ほどまでにきた時に甲高いエンジンの音が聞こえてきた。

すぐに曲がり角から白煙を巻きながら慣性ドリフトをしてきた車は、カウンターを当てたままの凶暴なまでのスピードで、そのメタリックライトグリーンのボディを夜の闇に躍らせる。

カウンターを当てたままで減速も出来ずに交差点へ侵入した車は、横断歩道を3分の2ほど渡つていた聰介に逃げる余裕さえ与えずに体重62kg 年齢21歳の肉体を、軽々と上空へと吹き飛ばした。衝突した衝撃でバキバキになつた体中の何十本の骨はいくつもの銃い槍となつて、柔らかな様々な内臓をその先端で抉り、切り裂き、貫いた。

その時点では上空に吹き飛ばされた自分の聰介の意識はブリックアウトしていたのだが、それでも容赦なく重力は聰介の体をその手に絡め取つて地上へと引っ張り、ゴシヤツという鈍い音を立てて不時着し、更に体から骨が飛び出したり、脳を損傷させるなどして生命活動にトドメをさした。

聰介を跳ね飛ばした車は聰介を撥ね飛ばしたということからつまぐ曲がりきれず、歩道近くに植えられている植え込みや木、電話ボックスに衝突してようやく動きを止めた。

それからしばらくし、衝突の物音を聞いて住民が外に出てみて通報したのだろう警察が現場にやってきた。

「…………こりやあ…………ひでえ…………。おい、もっと応援呼んでこい。こいつは即死だわ」

現場に駆けつけた二人組み警察官のうち、中年と呼んでいいぐらい年を重ねた警官のほうは苦い顔をし、もう一人の若い警官はすぐにその場から離れて近くの植え込みで膝を突いて胃の中の物を吐き出した。

それから聰介の死体はパトカーの中に積まれていたブルーシートで野次馬達の目から隠され、現場検証が始められた。

警察からの電話で聰介が事故に遭い、即死したと聞かされた両親はそんなことあるはずがないと、寝る寸前だつたのにも関わらず、高速道路の制限速度を大幅に上回る勢いで聰介が担ぎ込まれた病院へと駆け込んだ。

見ないほうがいいですよといつ言葉も聞かずに、ところどころ血のシミがついた白い布を取ると、そこには聰介の顔は無かつた。

聰介の顔は完全に潰れてしまい、もとの輪郭すらも崩れてすでに人の顔らしいものとはかけ離れていた。

それを見た瞬間に母親は悲鳴を上げ、あまりの光景に耐え切れなかつたのかガクツと氣を失つた。

氣を失つた母親を支え、部屋の外の長いすに自分の上着をかけて横にさせた父親は、すぐに来た警察官からくわしい事情を聞いた。

警察官からの説明が終わり、どうしようもなく呆然とする父親の前に、加害者の父親が現れた。

加害者の父親が名乗りをあげる途中から煮えたぎるマグマのようになりが噴出した聰介の父親は、胸倉を掴んで相手を殴り飛ばし、倒れた上に馬乗りになつて怒鳴りながら殴り始めた。

相手の被害者も先に聰介の状態を聞いていたために殴られるのを覚悟していたのか、殴られて血が出ようと底う素振りを全く見せなかつた。

さきほどの呆然とした様子から一気に変わった聰介の父親の様子に

警察官は少しの間動けなかつたが、すぐに我をとりもどすと聰介の父親に飛びついた。

警察官一人がかりで後ろから羽交い絞めにして、なおも相手を殴ろうと暴れる父親だったが、警察官が加害者の父親を急いで別の場所に連れて行くと、ようやく暴れるのを収めた。

警察も聰介の父親が氣の毒に思えて何も言わないでいると、父親がふらふらつと立ち上がりつたので身構えたが、加害者の父親が連れて行かれたほうとは別の方向に歩いていった。

「聰介……今頃お前は天国にでもいって、好きな化学の勉強でもしているのかな……？天国なら幸せな環境で何不自由なくできそうでいいなあ。そういうば聰介が死んでから色々な人が来たよ。たしか南原悠斗君だつたかな？あの子は色々な薬草だつたかな……？とにかく色々な種類の薬草を持ってくれたよ。なんでも、天国で怪我したらこれで治せばいいんだつてさ。今でもたまに線香をあげにきてくれるよ。いい友達を持つたな、聰介。」

聰介の父親が示す目線の先には少し日数がたつてしなつとしている様々な薬草がおいてあつた。

「次に来たのはどこだつたかのカフェの夫婦だつたよ。聞いたぞ、聰介。交通事故で困つてたその夫婦を助けたんだつて？……その夫

婦が泣きながら言つてくれたよ。私たちは交通事故で聰介君に助けてもらつたのに、聰介君が交通事故で殺されるなんて神様はひどすぎる。なんで聰介が……グツ……ッ……殺されなきやいけなかつたんだつて……な……。本当に……そう思つよ……。聰介が死ぬ必要なんて無かつたんだ……。父さんが……。父さんができれば……代わつてやりたかつたのに……！」

霧崎夫妻の言葉を思い出している途中から溢れ出した涙はついに決壊して流れ出し、机に落ちた涙が弾けて飛び散り、霧崎夫妻が持つてきてくれた高級な紅茶と珈琲豆の箱にかかつた。

しばらく涙が止まらなかつた聰介の父親だつたのか、ひとしきり涙を流すと落ち着いたのか、近くに置いておいたタオルで涙を拭いた。そのタオルは、聰介の遺影の前で泣いてしまつてもすぐに涙を拭けるようにと聰介の母親が用意したものだつた。

「ああ……みつともないとこをまた見せてしまつたな……。聰介の前にきてから、父さんは最近泣いてばかりだ。親を泣かせやがつて仕方の無い奴だな……。ああそりいえば聰介のとこの教授だつたかな？灰村さんつて方が刀を持ってきてくださいってなあ。魔除けとしてちゃんとお払いしてもらつたものらしいぞ。本当はいれていいのか分からぬけど、骨壺と一緒に墓の中に入れおいたよ。わざわざ急ぎで作つてもらつたものらしいから大事にするんだぞ」

そういつた聰介の父親は、遺影の前に写真に写した小刀をかざして、聰介によく見えるようになのか何枚かの写真を順番に持ち替えてい

く。

「それでな。あれから暫くたってなあ。ようやく母さんも元の調子が戻ってきたよ。お前が死んでからしばらく母さんは何をやってもぼうつとしてて危なつかしかったんだけど……ようやく元気になつてきたよ。でも、夜中にお前の遺影の前で酒を飲んで泣きながら語りかけているのを見るとまだもう少しかかるみたいだ。そういうえば、なんで元気になつたのか聞いたんだけどな。お前の夢を見たんだつてさ、なんだかどこかの田舎で鍛冶屋の真似事をしてたつていつてたよ。化学が好きな聰介がやるもんかなあ？って思ったけど、刀をもつてこられたぐらいだし、意外にそういうことも面白がつてやつてそうだと思つて母さんと久しぶりに笑えたかな」

「なあ聰介……。いつたいお前はどうをしているんだ？元気になつているか？辛かつたら帰つてこい、靈だろ？と何だろ？と話をきこてやるうじやないか」

砂漠の向こうから昇つてきた太陽の日差しで窓から差し込み目覚めた聰介は、自分の目元に違和感を覚えて指先を当ててみた。

「涙……？」

不思議そうにつづぶやくと、やれやれ今まで見ていた夢の内容が一気に

鮮明に脳裏に蘇った。

最後のシーンを思い出した聰介の目からはまた新たな涙が頬を伝つて落ち、落ちた涙は工房の硬い床の染みとなつた。

締め切つた工房の中の薄暗さに、聰介はまるで冷たく暗い監獄のようないい印象を覚え、自分がこの世界に閉じ込められてしまつたように感じてふいに不安になつた。

しかし、そんなことはない！と強く思つて頭を横に振つて目を開けようと、そこは普通の、鍛冶で使う工房の面影を残している部屋だつた。

不安が消えて安心した聰介だが、ふと違和感を感じてベッドの上で動きを止める。

違和感がなんだつたか。

それをじつと考へてゐるとふとあることに思いついた。

「なんで死んだあとのことを見えているんだろう？」

それは聰介が死んだあとのことにも関わらず、聰介の中で夢としてハッキリとした映像として残つていたからだ。

普通に考えれば死んだ時に記憶は途切れ、そのあと自分が死んでからの周りの反応などが分かるわけはないのだ。

それなのになぜそれが分かるのか？

無理やりに考えれば聰介が作り出した本当の意味で夢と考えられなくも無いが、それだと聰介の知らない警察官や加害者の父親が出てきたことに説明がつかない。

夢とは基本的に過去の記憶や体験などをもとにして構成される自分に都合のいいものとののがほとんどだからだ。

父親を泣かせるところ、や、悲しませるところが都合のいいものかと問われれば断じて否である。

聰介は何か変なものに触れたかのようだと思いながらも、自分の想像が何かなだと納得してベッドから身を起こした。

5863文字です。今回は前後編といつも早く更新してみました。

この後編では夢が覚めるまでとさめてからのちょっとですね。はい、つなげました。1話目の話とリンクさせましたよー。ちょっと意外でしたよねー？意外じゃなかつたら「みんなさいー！」でも書いたつた！

んで、親父さんパートですん。これね。監はそつじやなかつたかもされませんが、書き手として思い入れがあるぶん、号泣しながら書いてました。

自分の作品で泣くなんて自意識過剰みたいですが、泣にちゃつた；

w;
(、・・・) ブワッじやなくてドバッて感じで……。家族物よわいのよ……。

んで、最後になりましたが、カレーの話です。
このカレーですがね。つくったことがあります、すつじつ美味しいです。

乗せていいのか分からないので削除依頼がきたら消しますが、URLをば……。

<http://cookpad.com/recipe/5072>

99

んで、『J飯のほうは実際に『華麗舞』でググれば出てきます。これ本当にカレーに合つて美味しいです、カレーマニア必見。

もうね。感想じゃなくてもカレーの話でもかまいません。

カレー談義しようぜー！！！！

では、また次回で会えることを祈つて。

P.S 無事卒業しました。皆様のおかげです。

028 騎士団と再開

「ソウスケ！ おい、起きろ！ すぐに出てくるんだ！ 王都警備隊の騎士がえらい剣幕で店を開けようと走ってきてるぞ！ 一体何したんだ？」

この日のソウスケの朝は太陽が昇るよりも少々早く、まだ空に薄暗さが残っている間に、工房の扉をジョージが何度も強くドンドンと叩く音で飛び起きた。

飛び起きたといつても、体はまだうまく動かず、意識だけが先行してしまい、ベッドから降りた時にふらついて工房の壁に肩を数回ぶつけるが、それでも聰介は何事かと焦つて工房の扉を急いで開ける。

「ああソウスケ、良かつた、起きたか！ さつき俺たちも下で扉を叩く音と声を聞いて二階から飛び降りてきたんだが、警備隊の騎士が何か急ぎの用事らしい。早く出たほうがいいぞ」

ジョージの言葉を聞いて店の入り口の扉の方を見ると、全身を鈍い鉄の光を放つ鎧の装備で固めた王都警備隊の騎士5人ほどが早く開けるとばかりに店内を見てきていた。

聰介はすぐに、腰のベルト通しにさげたアンティーク調のキーリン

グから店の扉用の鍵を取り出して、店の出入口の扉を開ける。

「早朝に失礼する。私は王都警備隊所属のベルナルド・バルベリー二だ。街外れの峠で襲われた商隊の荷物が、賊によつてこの店に持ち込まれたとの情報があつた。大量の鉱石だそうだ。心当たりはあるか?」

「……はい、鉱石なら確かに昼間に大量に持ち込まれて買い取りました」

「よし、確認をさせてもらおう」

リーダーらしいベルナルドが首だけを後ろに振り向かせて、後ろに控えていた騎士を呼ぶのを見た聰介は、今日片付けようと思い、工房入り口近くに積んでいた鉱石箱4つを店内に並べる。

騎士たちがそれに木箱を開けて中身を確認し始めた様子を見て、聰介が近くの壁に背を預けていると、ジョージがスッと近づいてきた。

「なんだか最近賊絡みの事件ばっかりだなあ。ソウスケもしかしてお前呪われているんじゃないか?」

「……いや、洒落にならないんだけど……」

「悪い悪い、別にそういうつもりじゃねえんだ。ただ最近ソウスケのまわりは厄介なことが少々多すぎる気がするのは確かだ。商売だ

から仕方ないとは思つたが、明らかに歎じい奴とは係わり合つてなるなよ」

ジョージの一言でがつゝと肩を落とした聰介を見たジョージは、その様子に苦笑を顔に浮かべつつ、[冗談だといつ]とを口にする。

「うふ、わかった。気をつけよう」

本当に氣をつけなければ、またガーランドの街のときのよつなことには巻き込まれかねないと思つた聰介は、少し氣を引き締めた。

「店主、間違いないだろ？ 量、内容物、木箱の形状からしてます間違いなく襲われた小隊の物だ。これらを賊から買い取つてしまつた店主には悪いが、盗品は発見され次第元の持ち主に返されることになつてゐる。また、盗品と知つた上での買い取り、及び盗品の使用は禁止されており、厳しい処分が待つてゐる。確認のために聞いておぐが、盗品といつことは一切知らなかつた上での買い取りだつたのだな？」

「はい、盗品といつことは全く知りませんでした。盗品といつことを知らなかつたとはい、申し訳ありませんでした」

「……よし、嘘は無むせうだな。では」これらは我らが持ち主に返還しておるので、今後は氣をつかるよつて」

聰介の返答を聞いて1・2秒じつと聰介の目を覗き込んだベルナル

ドは、聰介の目が揺らがないことを見た上で、嘘は無いと判断を下した。

「ああ、そうだ。すっかり聞き忘れていたな。この店は最近できたばかりらしいじゃないか、今後のためにも名前を教えてくれないか？」

「そうですね、名乗られたのに返さなくて失礼いたしました。私の名前はソウスケ・カミオです。少し変わった名ですが…」

「ま、ソウスケ・カミオ？ もしやガーランドにいたあのソウスケ・カミオか？」

聰介が自分の名前を名乗ると、その先を防ぐよつこベルナルドが言葉を挟んだ。

「はい、確かにガーランドには数日前までいましたが、……」

「ああやはりそうか！ 私だ、ヴィリフィエラを売つてもらつた元ガーランド守備隊長だ！ いや、まさかこちらに移転しているとは思わなかつたな。……ああお前たちは先に行つてくれ、私はもうしばらぐ用事がある」

立ち止まつてベルナルドを待つてゐる4人の他の騎士に気がついたベルナルドは、荷物を持つて先に行くよつこと伝えてこの場に残つた。

そのついでとばかりに、用が済んだと思ったのかジョージ達も話の邪魔をしないようにと配慮したのか、最後にジッと観察して危険が無いのを確認して一階へと引き上げていった。

「君にこの剣を売つてもらつてから運が向いてきてな。ちょうどガーランドの周囲の森で演習をしていた時に、滅多に出ないんだが手負いのオーガが出たことがあつたのだ」

「オーガつて……よく無事でいられましたね」

ちなみに『オーガ（鬼）』とは人間の1・5倍ほどの身長で、強靭な骨格を有し、極めて凶暴で残忍な性格で人の生肉すら食べると言われる危険な魔物だ。

強靭な骨格を持つて人間サイズの獲物であれば、一撃でそれを潰すほどの怪力を持つ反面、知性や賢さといったものがほとんど無く倒すのは注意さえすればなんとか出来るレベルではある。

が、それは装備が揃つていればの話であり、生半可な武器だと突き刺さつてしまえば、筋肉を膨張させられて抜けなくなり、武器事態を折られてしまうこともしばしばだ。

「もちろん手負いと言つても相手は腐つてもオーガだ。けが人はそれほど出なかつたのだが、武器がちょうど演習用で討伐用の物をあまり持つてきていなかつたためにかなり折られてしまつてな。その時にこの剣を使って訓練をしていた私が何とかオーガを倒すことが

出来、その功績のおかげで昇進することが出来たというわけだ

「なるほど、それで王都に異動となつたんですね」

「そうこうつじだ。いや、しかし君には感謝している。この剣が無ければこいつやって「口に今いることも無かつただらうからな。君には感謝してもしきれないぐらいだ、おかげで妻にも良い暮らしをさせることが出来ていい」

「いえいえいえ！それはベルナルドさんの力があつたからですよ。私はただの剣を売つただけに過ぎませんから。結局はその剣を扱う人の技量が優れていたというだけのことです」

感謝の気持ちを真つ直ぐにぶつけられた聰介は少々焦りながら謙遜して言葉を返した。

「そう謙遜するな。君は良い武器をつくつたんだからな。……これはお礼の気持ちだ。盗品だと渡したお金は返つてこないからこれを足しにするといい」

言葉の途中から「パンツ」と鎧の内側を探つていたベルナルドは、言葉を言い終わると同時に紫の布に包まれたモノを鎧の中から取り出して聰介の手の上に乗せてきた。

「こや……流石にここまでしてもいいのは……」

布 자체はそれなりに上等そうなものだが、中に入っている何かが硬くゴツゴツとした感触だったために気になつた聰介は、失礼だとは思いながらも包みを開き、中に入つていたものを見て驚いた。

布の中に入つていたのは、南国の海を思わせる明るく純粋なクリアブルーの輝きを放つ宝石で、研磨面の寸法や角度の絶妙な関係によつて生み出される白色光の内外部の反射・スペクトルカラーの反射・動きによつて生じる反射のどれをとっても、宝石の持つ魅力を最大限に引き出している。

宝石にさほど興味の無かつた聰介にも一目で分かるほどの一品だったので、聰介はこれほどのものを受け取るわけにはいかないと思つて断ろうとした。

「遠慮するな。うちの妻は宝石を着飾るタイプではないし、私も金銭に困つてゐるわけではない。それに昔世話をした古物商がお礼にとくれただけのモノだ。そうとくれば私が世話になつた君に渡すのが正しい騎士道だと思わないか？ここは騎士の私の顔を立てるという意味で受け取つておいてくれ」

流石にそこまで言われて断り続けるというのは逆に失礼にあたると思つた聰介は、今度はありがたくその紫の布に包まれた宝石を受け取ることにした。

その様子を見て満足したのか、ベルナルドはそろそろお暇するよと言つて来た道をゆっくりと引き返していった。

ベルナルドが帰り、聰介が一息ついて宝石をしげしげと見ていると、次第に朝の澄んだ空気と、だんだんと頭を見せ始めた太陽の眩しい光が店内に入ってきた。

まだ少しだけ眠気が残っている聰介だったが、太陽の光を浴びて体を伸ばしていると体内時計が調整されていき、伸ばし終わって深呼吸をしたときにはすっかりと眠気が吹き飛んでいた。

しかし、眠気が吹き飛んだからといってまだまだ早朝であることに変わりは無く、市場も早すぎて開いていない。

よしんば開いていたとしても、買い付けや飲食店などの大口の注文ばかりなので行つてもすることが無いのだ。

外に出たとしてもすることも無く、店内の整理や朝食作りはガチャガチャとなってしまい迷惑になると思った聰介はとりあえず工房の中に戻った。

工房の中もそれほど物が置いてあるわけでもなく、日に付くものといえば炉と墨と鉄屑と雑多な生活用品ぐらいなので自然とやることには決まってしまう。

工房の中なら多少音が響いたとしても外までそういう聞こえないので、聰介は暇つぶしがてらに補充用の鉄剣や、鉄とアダマンタイトを混ぜた『アイアンタイト』の剣、ダマスカス鋼の剣を適当に練成していく。

相変わらず練成時にはバチバチと電気の弾ける大きな音が工房の中に響くが、外にもれてはいない。

ちなみに現時点での店内に置かれている販売可能な剣の性能を比べると

アーダマンタイト→ダマスカス鋼 アイアンタイト→鉄剣となつてゐる。

ダマスカス鋼とアイアンタイトでは性能ではとなつてゐるが、実際に販売する値段としてはかなり大きく差がある。

ダマスカス鋼は性能自体もさることながら、その独特的な模様も価値を持つため、何の装飾も無くただの薄緑色のアイアンタイトよりも値段があがつてゐるのだ。

しかし、アイアンタイトには装飾も何もない剣としての剣のためにコストパフォーマンスに優れるといつ一面もある。

僅差でダマスカス鋼製の剣には負けるものの、性能自体はダマスカス鋼に迫るものなので金銭に余裕のない冒険者達には比較的安価で高パフォーマンスの剣となつてゐる。

それではダマスカス鋼製の剣が売れにくくなるのではと思いかねないが、こちらにもしっかりと狙いはある。

ダマスカス鋼製の剣は、主に中小規模の貴族、または騎士団に所属するものなど身分階級を重視する者達用となつてゐる。

剣に中々に見るような模様でなく、それでいて一つとして同じ模様

の無いダマスカス鋼で、値段も安すぎずそれなりに高級なものとあれば例え使われなくとも一種のステータスという面でも売れる可能性もある。

そうして、アーマンタイトを創る時は時に慎重になりながらも比較的早いペースでそれらの剣を完成させていった。

あまり数を作りすぎてもいけないので適当なところを切り上げた聰介は、工房の扉を開けて店内に戻る。

太陽は完全に顔を出し、まだ本調子ではないものの砂漠にサンサンと日光を降り注がせている。

午後は結構暑くなりそうだと思った聰介は、練成などをしていたために、そろそろ鳴き出すだらだら腹の虫を沈めるために朝食作りに取り掛かった。

4547文字です。

お久しぶりです、皆様。地震大変でしたね……。
私の宮城の友人もあわやというところでなんとか命拾いをしたよう
です。

私はといえば、地震のために神奈川への引越し伸びたぐらいで、
岡山県で何も出来ずにすごしていました。無力さを痛感しました
……。

友人が危険に、いや東北の人たちの命の灯火が次々と消えていく中
で、私は安全な家の中でTV越しにその中継を見るだけでした。
無性に申し訳なくなり、1000円札をサイフに突っ込み、ちかく
の大型百貨店に募金に行きました。

それで、終わりです。自分は何も出来なくてただ他人任せで……。
私にできることといえばこの小説を書いて、呼んでくれる人に一時
の楽しさを覚えてもらいうぐらいです。

この震災でなくなつた方にご冥福を、これからを生きていく人々が
幸せになれるように祈るばかりです。
今見てくれているあなたが無事でなによりです。

029 騎士と賊

朝食の、黄身が半熟でトロトロのベーコンハッシュとふわふわのパンを残さずキレイに畳袋の中に収めた聰介は、オープンに備えて店内の掃除を軽くしておき、武器などに埃が乗っていないことを確認するど、店の出入り口の扉の鍵を開けてopenの札を掲げた。

包丁の件が成功し、中々にいい評価のある聰介の店だが、開店と同時に人が押しかけるようなほどの知名度はなく、結果として開店して1時間近くも聰介カウンターでぼうつとしている。

聰介と武器しかない店の中へと入つてくるのは朝の気持ちの良い日差しと乾いた風と少々の砂埃だけだ。

窓から入り込んできた日光が心地よく、朝サッパリと起きたにも関わらず眠くなつてくるのに耐えていると、不意に扉に付けた鈴が力ランコロンと鳴り響いた。

鈴の軽やかな音で夢うつづから目覚めた聰介は、カウンターに肘を着いて支えていた頭を起こして客の応対をしようとする。

しかし、そのときには既に客の男は聰介の目の前まで歩いて来ており、その客のほうが先に聰介に話しかけてきた。

「よう、ボウズ。店主いるか?」

「店主は私ですよ。店主のソウスケです」

葉巻を口に咥えていかにもハードボイルドっぽい雰囲気を滲ませる男は、店番の小僧か何かと勘違いしたのか聰介のことをボウズと呼び、店主がいるかどうかを聞いてきた。

聰介は、元の世界でも東洋人は童顔に見られることが多いと知つてはいたが、自分はボウズと間違われるほどに童顔なのだろうかと一瞬気落ちするが、そのことは表に出さないようにして返答する。

「おう、アンタがか。すまねえな。俺あ集団犯罪調査部のアルバートだ。よろしく」

そういつたアルバートが差し出して来た手を握り返して握手すると、アルバートの手のひらが硬くゴジゴジとしていて大きいのが良くなかる。

集団犯罪調査部という肩書きらしいが、聰介はアルバートがどうにも一人で直接乗り込んで犯人を殴り飛ばしていくような人物に感じた

「朝早くに騎士団の連中が来ただろうから、不思議に思つてゐるだろう。騎士の連中はいわば、実行部隊。俺は調査専門だ。実際に切りあつたりするわけじゃない。それで、早速だが……。賊の特徴だ。覚えている限り全部話してくれ」

「え、ええ。……直接交渉したのはいかにも好青年といった感じの男性でした。年齢18前後で背は私と同じくらい、髪の色は明るい茶色、やせているわけでも太っているわけでも無くて、普通の体系でしたよ」

「なるほどな……。この辺りの人間の特徴だ。うまく誤魔化す奴だ、新参の賊」ではないだろうな。他に特徴らしい特徴は覚えてないか?例えば表情とか」

特徴らしい特徴と聞かれて直ぐに浮かんでこなかつた聰介は、腕を組んでうーんと思い出せりふとしてあることを思い出した。

「あつ、そういうえば。その人ですけど、最初から最後まで終始二口一口して笑顔を絶やさない人でしたよ」

「やはりな……。また『笑顔』か……。分かった。もういい。……それと一つ、忠告しておぐが……首を突っ込むなよ、まだ死にたくないならな。賊とのやり取りってのは命のやり取りだ」

笑顔という特徴を聞いたアルバートは何かに思い当たったのか、渋い顔をして一人納得するところと身を翻して出口に向かう。

出口に向かう途中でアルバートがふと足を止めたが、アルバートは肩越しに目線だけをやり、忠告の言葉を聰介に伝えると、出入り口の鈴をカラソコロソと鳴らせて外に出て行つた。

アルバートが去つていつた店内には、アルバートの吸つていた葉巻

のスパイシーで複雑な香りと、吐き出した煙が僅かに漂っていた。

アルバートが帰つてからしばらくすると、次第に店の中の客の数が増えていった。

しかし、大半が体格の良さそうな男たちが数人のグループで訪れていたり、冒険者ではなさそうな、街の騎士用の少し上等な服を着ていたりと、明らかに冒険者と違つ装いだつた。

そのわりには意外と買つていく人がそれほどいなかつたので、聰介は悪いことだとは思つたが、気になつて男たちの話に耳を傾けているとその訳がよつやく分かつてきた。

男たちの話を簡単にまとめると『ベルナルドが最近いい実績を出しているのは武器のおかげだ』ということだつた

しかし、それは最近この街に異動してきたベルナルドの存在によつて立場が搖らぎそうになる者達の陰口が大半で、性格のいいベルナルドを慕う下の者達からは、ただ単に『ベルナルドが持つている武器はとてもいいものだ』という風にしかとらえられていない。

現に、階級が高そうな上等な服を着ている者達は少々高めの剣でも惜しまずにおつてしまつて、逆に階級の低そうな者達は、ここで買ったのかという憧れによつて来ただけなのか、買わない、もしくは安目に設定されていて手の出しそうい質の良い鉄剣を買つていくだけだ。

ベルナルドの評価はこちらの魔物討伐などによつて着実に上がつて
いるらしく、いわゆる有望株なのでそういう状態になつてゐるらし
い。

なるほどと納得した聰介は、せっかく多くのお客さんが来ているの
だからと、ガーランドの町でやつたような鉄などを切るといったデ
モンストレーションを披露して見せた。

そのデモンストレーションによる効果は大きく、中にはお金がよほ
ど余つてゐるのか、その場でアダマンタイトで作られた剣を買つて
いくような猛者も、片手で数えられるほどだがいた。

しばらくウインドウショッピングや、真剣に購入を考える人で盛況
していたが、夕方にもなると、夜間の仕事が入つてゐる兵士も多く
いるのか、次第に客足は遠のいていった。

日が暮れ始めて、空の色も紺色に染まつていくと店内に残つてゐる
客もまばらになり、だんだんと店の外へと姿を消していった。

客の最後の一人が出て行くのをカウンターからお疲れ気味の聰介が
見送つていると、その最後の客とすれ違つうようにして一人の男が入
つてきた。

「店主さん、今日は大盛況でしたね。昼間にここを通りがかつてビ
ックリしましたよ。ここで購入したらしい人に聞いてみると切れ味
がものす」く良いと聞きましてね。」

そういうながら、男は風に巻き上げられて服に乗つかつて砂を

落としながら店内に入ってきた。

「あの……すいませんが、どちらまでショウが？」

つい最近賊に騙されたことと、客が居なくなるのを見計らつて現れたようなタイミングの男に聰介は警戒しながら聞く。

「ああ、申し訳ない。名乗りおくれたね。私はここから山を2つ越えた所の街の商人だよ。ほら、これが商業ギルドのカードだ」

くたびれたショルダー バックからカードを取り出した商人の男は、名前も印も押してある正規のギルドカードを見せてきた。

今度は騙されないぞとばかりに聰介はしつかりそのカードを見たが、怪しいところはどこにもなく、とりあえずは信用することにした。

「アツハツハ、そんなに穴が開くほど見なくても本物だよーまあ賊に騙されたなんてことがあつたあとならそれも当然かな？」

「なぜ、そのことを？」

「ん？知らないのかい？そういうことがあると直ぐに商業ギルドの中の掲示板に張り出されるんだ。賊は僕たち商人にとつては天敵だからね」

山を越えてまで仕入れにくるような商人はそういう情報に敏感なんだなあと思った聰介は、商人の男の言葉に耳を傾ける。

「君も商業ギルドにはちょくちょく顔を出したほうが良いよ。こういう注意情報だけじゃなくて、組合ごとの連絡事項みたいなのもたまに張り出されるからね。……おつと、もう日も暮れかけているのに余計に話をしてしまったね。それじゃあ早速本題にはいろいろか！」

「実は僕は明日この街を出発してさつき話した街に戻るつもりなんだけど、あと一品ぐらいがどうにも決まらなくてねえ。それで今日はあてもなく街をぶらぶらと歩いて何か良い品が無いか見ていたんだけど、ちょうどこの店の前を通りがかつたら随分盛況しているのが見えてね。その後も色々見て回ったんだけど、気になつて来たといつわけなんだ。僕も大型とはいえ馬車で移動するからたくさんはもつていけない。そこで、どうだろう？ここにあるアイアンタイトの剣つていうのを15本ほどうつてくれないかな？もちろん、向こうでもちゃんと宣伝とかはする。だから……こっちにも利益が出るよつにもうちよつと安い値段でうつてくれないかな？」

商人の男は聰介が口を挟めないように、流れるように自然にスラスラと言葉をつないでいき、値段交渉まで一気に話をもつていく。

一気に値段交渉までもつていかれた聰介は、商売が専門というわけではないのでその迫力に圧倒されて知らず知らずのうちに首を縊にふっていた。

「ありがとう！助かつたよ、これで馬車もいっぱいになつたし良い商売が出来そうだよ！それで値段のことなんだけど……」

そして、値段交渉は終始商人の男のペースで進んでいき、聰介は流されるままだつた。

「うーん、流されるままだつたけど、どうせ元手もそんなにかかってないし……。まあいつか、商業ギルドのことも教えてもらつたら情報料つてことで……」

腕を組んで、これでよかつたのだろうかと考えている聰介だが、もう済んだことを気にしていても仕方がないとして情報料といふことで納得することにした。

商人の男との取引から四日が立ち、聰介が商業ギルドへと何か情報がないかと確認に訪れてみると、商業用のルートなどの情報をまとめた茶色の簡素な掲示板の中央に、とある街への通行を禁じる旨が書かれた紙が張つてあつた。

それは四日前に聰介が取引をした時に、商人の男が戻ると言つていた街へのルートだつた。

紙自体には『盜賊出没のため討伐までの通行を禁ず』と書かれてい

るだけで詳しい情報などはかかれていない。

「ん？ 君この街へ行きたいのかい？ 今はやめといたほうがいい。なんでもやたら強い賊がでたらしいぞ。ちょっと偵察がてら様子を見に行つた騎士達が瀕死の状態でかえつてきたらしい。今はもつと実力がある部隊を編成しているらしいから数日の我慢さ」

張り紙を見ている聰介に、隣にいた日に焼けた色黒の大柄のお兄さんが親切に教えてくれる。

しかし、そんなことよりも聰介は気にかかることがあり、そのお兄さんに親切ついでにもう少し教えてもらつことにした。

「すいません。その話もつ少し詳しくおしえてもうえませんか？」

「え？ ああ、まあいいが俺も聞いた話だからハツキリとした話じやないぞ。え、と、確か賊が出たつて情報が出たのは3日前だつたが。たまたまその日にこのルートを通る人が居たらしいんだが、その人が街道脇にボロボロになつた馬車と血だるまの商人風の男を発見したらしい。その人は急いでこの街まで戻つて報告して、報告を受けた騎士3人が偵察と殲滅を兼ねて数時間後に出発したんだが、その騎士たちも賊と出くわして返り討ちにされたんだとさ」

「ああそそそそ！ その騎士の中で2人が瀕死の重傷でようやく帰つてきて言つた言葉が、剣が切られた！ だつたんだとさ。変な話だろ？ 『剣が折れた』なら分かるが、『剣が切られた』なんだからな。その報告を受けた他の騎士たちも変に思つて何度も聞き返したらし

いんだが、その一人が言葉を変えないんだ。それでその一人の持つてた荷物を調べていると、なんと鎧がすっぽりと切られていた部分があつたらしいんだ！それで今はその一人の言葉も信じられないことになつて、部隊はその対策に忙しいんだとさ」

3日前とこう言葉を聞き、4日前に取引をした商人の男の顔を思い出した聰介はいやな予感がして、もつと詳しい情報を聞くつとする。

「3日前……。すみませんが、その殺された商人の男の特徴ってわかりますか？」

「いやあ……。俺も聞いただけだから、そこまで詳しいことは知らないなあ。もし何か気になることがあるんだつたら、ここから歩いてすぐのところにある騎士の詰め所にでも行つてきましたほうがいいぞ」

「そうですか……。ありがとうございました！」

お兄さんに軽く頭を下げ、感謝の言葉を伝えた聰介は、早い歩調で騎士の詰め所へと向かつていった。

「？？なんか関係でもあつたのか？」

聰介に賊の情報を教えてあげた親切な色黒のお兄さんはその場で首をかしげるのだった。

4922文字です。入学式にきました。

地震の影響で引越しの日も大幅にずれましたが、なんとか間に合いました。

ようやく落ち着いてきたので、更新です・w・

一人暮らしで大変ですね。毎日やることがあつて、親にどれだけお世話になつていてか痛感いたします。

『大人になつたら親を尊敬するようになる』つて『のは』『う』ことにはづくからなんでしょうね。

これからは一人ですが、がんばっていきます。

さて、学校のほうですが何事も問題無くいっています。先日は10人ほどでラーメンを食べに行つたりゲーセンにいつたりして親睦を深めました。

皆さん思つたよりも気さくで、これからは学校生活が楽しみです。留学生の方とも仲良くなれたので、異文化交流して見識を深めていきたいと思います。

もしかしたら、いつかこの作品も大幅に改良されて、商品化ということも0%ではあります。

そのときには、感想などで私をこれまで支えてくれた皆さんへ感謝の気持ちを示したいと思います。

なぜか完結のような感じのあとがきになりましたが、完結ではありません。

これからも不定期更新ではあります、よろしくお願いいたします。

030 宰相と黒い考え

騎士の詰所へと急ぐ聰介の歩調は早歩きから小走りといえるぐらいに速まつていつていた。

足を高く上げずにザツザツザツと砂の地面を進んでいく聰介の足で、いくらかの砂が中に舞い上がり、近くを歩いていた主婦らしき人が眉を潜めるが聰介はそんなことには気付かずにはひたすら詰所へと急ぐ。

賊に襲われて殺されたという商人の男というのが、数日前に取引したばかりの男かもしないという疑念は、聰介の中でいつのまにか確信へと変わりつつあった

直感的にそう感じたのにも加え、ここ最近賊がらみの事件に巻き込まれることが多いというのもその理由の一つだった。

事実が確定したわけではないが、もし自分の思つてゐる通りだとしたらどうしよう?とふと思つた聰介の足は唐突に止まった。

そうだとしたら、自分はどうするのだ?責任を感じて賊を捕らえに単身賊のアジトに乗り込みに行くのか?それとも、自分には何も関係ないとしてこのまま見過ごすのか?

このまま見過ごしたほうが自分は安全なまま過ごせると一瞬思つた聰介だが、そこで聰介は自分の作った武器によつて罪のない行商人が、討伐に行つた騎士の人人が殺されたということを思い出した。

アダマンタイトの剣を渡したわけではなく、それなりに劣化のしやすいアイアンタイトの方を商人に渡したとはいえ、それでもその性能はただの鉄剣よりも数段上の物で、しっかりととした技を持つていれば、鉄の剣を切ることも不可能ではない。

それに、鉄の剣が切られたという噂が出ているということは、それだけ優れた技量を持つものが賊にいるということだ、恐らく質のいい武器や高度な魔法の技術をそろえている精銳の騎士達といえども苦戦するのは間違いないだろう。

となれば、聰介が作った剣によって更に多くの人達が賊の手で傷つけられるということになりかねない。

そんなことは到底許せるものではないと思い直した聰介は、今まで受け身ばかりで事態が好転しなかつたため、自分から攻めてみようとした決意した。

決意を固めた聰介が急ぎ足で自分の店へと戻り、サイフとバッグを工房の中の自分用のシングルベッドの上に放り投げたところで、店内から来客を知らせるベルの音が軽やかに響いてきた。

ジョージ達3人に早く先ほどのことを伝えて、対策をとるためのアドバイスや協力を仰いだと考えていた聰介は、店の表示を『close』に切り替えてなかつたことでその動きを止められた。

「すいません、ちょっとこれから所用で……」

工房の扉を開けながら言葉を発していた聰介だが、客の姿を見てその動きがまたも止まった。

「われらは騎士団の者だ。宰相閣下が盜賊事件のことでお呼びだ。至急用意してくるのだ。なお、武器の携帯は道中は許可するが、城内での武器の携行は不可のため、その間は我らがあずからせてもらう」

全身を白銀の甲冑で固められた、まさに『騎士』といえる格好の騎士は、聰介に一方的に用件を伝えると、早く用意して来いという日で聰介のことを見てきた。

騎士達が武器も携行していることからして、盜賊の事件で何か疑いを持たれているのだろうと思つた聰介は、分かりましたと短く答えて、変に興味をもたれないようにアイアンタイト製の剣の方を腰に差した。

聰介が出てきたのを見た騎士達2人は、聰介を前後で軽く挟むような位置をとると、案内を始めた。

案内を始めたといつても、町の中心部にそびえる王城へと向かうだけなので、メインストリートに出て後は一直線に進むだけだ。

「剣は我らの方で預かるようと言われている。これが宰相閣下の許可証だ」

数分して王城の門へとたどり着いた聰介は、門のところの警備員に剣を預けて通り過ぎたところで、後ろに付いていた騎士は聰介が離れたのを確認してから許可証らしき模様が入った札を警備員に見て聰介の剣を受け取つた。

やはり、普通の剣を持つてぐるようにして正解だつたなあと思った聰介は、そのやりとりを聞きながら王城の中の宰相が待つ部屋へと案内されていった。

宰相がいる部屋に案内され、部屋の中に入つた聰介の目の前には、執務用の机に座つて数枚の用紙に書き込みをしている宰相の姿だつた。

聰介が入つてきたことに気付いた宰相はキリのいいところまで文章を書きあげてから、その顔を聰介に向ける。

宰相の表情はニコニコとしていて人が好さそうに見えるが、銀で縁取られた眼鏡の奥から聰介を見る細い目だけは笑つているようには見えない。

「さて、まずは自己紹介をするとしようかな。私の名前はクラックス・ドゥガチ・クロスボーン。この国の宰相だ。ああ。君の名前は

よく聞いているよ。ソウスケ・カミオ、最近この街に引っ越してき
たばかりの腕利きの鍛冶氏。私の知り合いや、騎士団の中にも君の
ところの剣がいいといっている者がいるぐらいだからね」

「そこまでいつていただければ光榮です」

一応友好的に自己紹介から入ると宰相は言つたが、聰介にあまりし
やべらせようとしていることは、自分がこの話し合いの主導権
を握るうつところの意思が垣間見える。

予想以上に面倒くさそうな事態になってしまったぞと思い始めた聰介は
宰相の話に注意して耳を傾けることにした。

「しかし、まずいことになつたのだよ。情報源は明かすことは出来
ないが、君がある商人の男に武器を売り、それが盗賊団によつて奪
われてしまつたといふことが分かつてね。ああもちろん故意に売つ
たわけではなく、偶然だと信じてはいるよ。しかし、過程はどうあ
れ、結果として盗賊達に武器を渡つてしまつたというのは非常にま
ずい事態だ。これがただの武器商人が普通の武器を奪われただけで
あれば、騎士団を派遣し、即座に盗賊達を潰して終わりだったのだ
が、盗賊達の持つ武器の質がいいだけに中々そうもいかない。恥ず
かしい話だが、向こうにも相当の腕利きが多数紛れ込んでいるらし
く、騎士団の武器が何度も壊されているのだ。相手の人数も通常の
盗賊団よりも多く、アジトまで作つてるので、このままでは無為
に武器の損失と騎士団の消耗を増やすだけで中々解決にこぎつける
のは難しい。」

「盗賊団は騎士団でも手こするぐらいに大規模なのでしょうか?」

「もちろん、騎士団を本気で投入すればなんとかならないわけではないが、騎士団は他にも様々な案件を抱えているのでそういう簡単に入員を割ける状態ではないのだ。たしか、盗賊団の名前を『荒野の獵犬』といったか。ここ『^{デザートラン}荒野地帯』から奪うということだらつ。不愉快な名前だよ。」

「ああ話がずれてきたね。話を纏めると、君に頼みたいのは『盗賊団に通用する武器をわが騎士団に卸す』ということだ。盗賊団に渡つた剣の更にもうひとつランクの上のアーダマンタイトの剣といつたかな？あれを15本ほど用意してもらいたい。ただし、払う金額は通常の金額の25%。新開発した、または改造した武器などは登録をしなければいけないという法律は知っているね？武器を新開発したわけではないだろうが、鉄の剣をきれるだけの性能を持った剣だからね、改造武器ということでこの法律が当てはまるんだ。ただし、このようなことで良い職人を捕らえるというのも惜しい。だから25%で販売してくれるのならこの件については不問とする。逮捕よりは赤字の方がまだましだと思うけど…どうかな？」

なるほど、宰相の目が笑つていなかつたのはこの条件をのますことが出来ると言えていたからなのだろうと聰介は悟つた。

鉄を切れるほど剣を手に入れることに加え、それを更に通常価格の25%で買えるともなればそれを狙わない手はないだろ？

通常ならばそんな無茶は出来ないが法律という言葉をかざし、逮捕と引き換えに……という強く出られる立場だからこそ出来る手だ。

聰介は、商工ギルドでの契約の時にしっかりと契約に関する法律の

欄に田を通しておくんだったと後悔している。

契約分などをしっかりと確認せずにサインをしてしまうのは日本人の悪い癖だなあと聰介は改めて思つた。

さすがに逮捕されるというのは不味いので、聰介はその条件をそのまま飲むことにした

「フフフ、これで剣を手に入れれば騎士団内の私の評判は上がり、討伐の実績を与えることで今後の政治で影響力を持ちうることができます。それにあの小僧が潰れたら潰れたで城の方に引き込めばいい。城の奴らが同じものを量産できるようになるかどうかは分からんが、うまくいったな。」

「宰相もひどいことを考えるお方だ。まだまだ相手は若い小僧じゃないですか。流石まつりごとを取り仕切るだけはありますね」

聰介が去つて行つたあとの室内で宰相は人と接する時の仮面を脱ぎ棄てて、笑みを深くする。

その様子を傍らで控えていた宰相子飼いの騎士が薄く笑いながらい

「フフフ、今さら何をいうか。そもそもあの小僧に目をつけたのはお前だつただろ？私は友人の頼みをきいただけだよ」

「それはそれは……宰相殿からのプレゼントとは光榮極まりないとですな。これからもどうぞよろしくお願ひしますよ」

騎士は宰相の言葉を聞いて、感謝感激恐悦至極とばかりにわざとらしく大仰に礼を返す。

「これでベルナルド・バルベリーーが率いる部隊も目じゃなくなつたではないか。賊の討伐戦では期待しているぞ。お前の隊が戦果をあげればそれだけお前の地位もあがるだろ。もし、最近なにかと優秀なベルナルドや他の隊が戦果をあげても流れ弾や伏兵にやられてしまつては仕方がないからな。お前も流れ弾や伏兵には気を付けることだ」

「……では、いいのですね？」

「ん？何をいつているのだ？私は流れ弾に気をつけろと注意を促しただけだが？」

宰相がわざとらしく芝居がかつてとぼけるのを見た騎士は、一步下がり軽く礼を返して部屋の外へと出でいった。

「クッククク…。何もかも思い通りに人を動かせるから権力というものは手放せないな。……さて、仕事に戻るとしよう」

口の端を吊り上げて一人わらつた宰相は、表情を元に戻すと机の隅に置いてあつた用紙を手に取つた。

王城に来る時と同じ騎士に連れられて、王城の外へと連れてこられた聰介だが、預けていたはずの剣は、そつくりに似せられている剣とすり替えられて聰介のもとへと返された。

最初に騎士達がわざわざ宰相の許可証まで見せたのはこいつしてすり替えをして技術を盗むためなのだろう、とあたりをつけた聰介は、すり替えを指摘するのは騒ぎを起こすことになると思って黙つてその剣を受け取つた。

ちなみに、聰介が一目ですり替えられていると分かつたのは、持つたときに感じた剣の重さだった。

聰介が預けていた剣は鉄とアダマンタイトの合金だったため、たまたま鉄剣よりも軽いので、普段から店頭に並べるために持つたりしている聰介はすぐに分かつたのだ。

そして剣に加えて、皮の袋に詰められた剣の代金を騎士から手渡された。

これだけ用意が早いということは最初から分かつていて用意していたということになるが、聰介はこれも何も言わずに受け取つた。

剣と代金を受け取った聰介は、なぜか店まで送るのと申し出てきた二人の騎士に、買い出しなどがあるので……と言つて断り、その言葉どおりに夕飯に使う食材などの買い物をして店へと戻った。

さすがに気配まで分かるとはいひ難い聰介だったが、さつきまでのやりとりがあつたので監視程度に人がついているだろ？と思ひ、特に目立つた行動は起こしていない。

店へと戻り、工房の中に入つて鍵を閉めた聰介はそこでようやく大きく息を吐きだした。

「ふはあ……。なんだか厄介なことにまきこまれそうになつてきたぞ……。それにしても25%か……。逮捕と引き換えとはいえ、原価割れ確実、普通なら超大赤字の値段だよね……。でも、騎士団に採用されるつていうのは美味しい話だつたな。騎士団に卸したつていう実績があつたら、お店の評判も上がるし、騎士団の人の信用も得られるし、注文も増える……。それになにより、鍊金術を使つている自分にとつては材料なんて対外的なものだし、実際はそこまで赤字じやないんだよね~。宰相は利用するつもりだったみたいだけど、いっつちにとつては美味しい話だつたし、この話を持ちかけてくれた宰相に感謝しないと。」

実は聰介にとつて、宰相の話というのは悪い話ではなかつたのだ。

本来なら維持費や材料の仕入れにお金をかけていい物を作ることを、聰介は鍊金術でそれをクリアしているので、金銭的な面で圧迫されるということがない。

もちろんあまり疑いを持たれないように材料などを定期的に仕入れているが、それでも通常より少ない量なので気にならないほどだ。

聰介は思わず好展開に嬉しくなるが、宰相が自分をハメようとしたという事実は消えていないのでしつかりと気を引き締める。

そして、聰介は翌日から店の営業を7日間休み、店のストックのアダマンタイトの剣13本に加えて、アダマンタイトの剣を2本を作つた。

当然7日間もかかるような作業では無いのすぐに終わらせたあとは工房の中で本を読んでみたり、なにか面白いアイディアはないものかと考えていたりした。

そして、王城に呼び出されてから8日後の営業の再開の日には、朝のうちに荷運びようの馬車を市場の近くの店から借りてきて、それに注文されていた剣などを運び入れていた。

既に話は通っていたのか、聰介が王城へと到着し、門番に注文をされていた剣を届けに来たというと、騎士団の隊舎がある区画の方へと誘導され、頑丈な鍵のついた倉庫へと案内された。

倉庫の中にはしっかりと整備された武器が整然と並んでいたが、ところどころに傷があつたりするので実際に使われているのだろうと、いつことが直ぐに分かる。

それらの武器を眺めながら、防犯上のために1人の門番から3人の騎士へと増えた騎士の人に誘導されて剣を運び入れていく。

奥の方にある、ちょうど15本の剣が収まるように作られた木製の枠の中に作つた剣を入れ終えた聰介は、入つた時と同じく騎士に誘導されながら倉庫の外に出る

倉庫の外に出た聰介は、その場でまたされていた門番に連れられて門へと戻り、そこから馬車を借りた店へ馬車を返しに行ってから店へと戻つた。

そして、それから3日後。

賊のために通行不能となつっていた通路が再開通された。

5780文字です

修正したものを再投稿になります。

今回は前回ほど無茶ぶりになつていなゝはず…。ただし、何かおかしこと感じた時にはまた感想のところに書いていただきたいです。

あと肝心な日数ですが、調べてもよく分からなかつたのでとりあえず2本を7日間で勘弁してください；w；あまり日数を取り過ぎても物語として成り立たなくなつてしまひうので…。

もうこじら辺は本当にファンタジーの世界という感じでした
かないと厳しいです。

では、また次回で……！

031 盗賊団と討伐

最近商人を襲撃したところで略奪した強力な武器と、同じく最近になつて加わつた傭兵くずれの冒険者を盗賊のグループに引き入れたことで、盗賊団「荒野の獵犬」^{デザートハウンド}は活気づいていた。

傭兵崩れの冒険者の腕前は存外に良く、商人を襲ううちに田潰しや、砂かけといった盗賊団らしい卑怯な技を習得していくうちにどんどんとその腕前が上がつていった。

その腕の良さと、卑怯なことにも躊躇しない様にほれ込んだ盗賊団のリーダーは、その元傭兵達に手に入れたばかりの聰介の武器を数点与えた。

強力な人材を得た盗賊団は以前にもまして勢いづき、山中に構えたアジトから頻繁に街道周辺に出没するようになつていった。

そして、今夜も盗賊団は商人の馬車を襲い、警護のために雇つていたのだろう冒険者達の装備や持ち物もろとも一切合財をアジトに持つて帰つていった。

今回の商人の馬車の積荷は、地方の町の商人の物だったのか食料や、調味料、酒などといったものが多く、それらの全ては今晚の宴のためにとアジトの中の荒削りの木のテーブルの上に並べられていた。

その中でも酒の減りは特に早く、調子にのつて用意された酒をガブ飲みしていた数人は既にその意識をまどろみの中へと落としている。

もちろん、外には見張りのために最低限の人間を配置しているが、その見張りの様子を見ると自分たちも参加したくてたまらないというような様子だった。

盗賊団といつものに属している荒くれ者達が暴れださずにガマンできているのは、あとでしつかりと飲み食い出来ることをリーダーから保証されているのもあるが、一番はリーダーの統率力によるものだ。

リーダーは各々に嫌がる仕事を押しつけることはせず、盗賊団に入る前にしていた仕事などで適材適所に人員を配置し、それでもまわらない時は負担にならないように考えて人を配置したり、襲撃時に的確な指示を出し、被害を最小限にとどめるなどといった面を見せ、盗賊団に属する者たちからの信頼を得ている。

しかし、だからといって誰にでも優しくしているわけではなく、自分勝手な行動ばかりを繰り返す者や、襲撃対象に対しては一切の慈悲も見せず冷たい目をして文字通り斬り捨てるなど冷徹な面も持っているので、リーダーが甘くみられるということはない。

そんなリーダーを擁する盗賊団だが、一人だけ例外がいる。

それがニールだった。

妹のサーチャが盗賊団によつて人質に取られてしまつてゐるためニールは盗賊団に抗つことが出来ないでいるが、心中ではいつかサーチャを助け出してこの場所から逃げてやるという思いがいつもあつた。

そして、その最大のチャンスがこの日やつてきた。

宴の会場の片隅で片膝を抱えて座り込んでいたニールが最初に耳にしたのは見張り役の言葉だつた。

「ふもとの方から何かきやがつた！ きっと騎士団の連中だ！ すげえ数だ！」

宴のために外に出てほどほどにだが酒を飲んでいたリーダーがその言葉に反応して顔を上げ、情報を伝える伝達役としてやつてきた男から詳細を聞く。

「まあ落ち付け。ふむ……そいつらは松明をしつかりと持つていたか？」

「暗闇で人影はあまり見えなかつたが持つていたぜ！ 松明炊いて集団でびつしり固まつて動いてやがつた！」

伝達役の言葉を聞いたリーダーは何か閃いたのか、酒で程よくほぐれていた気分を引き締めて指示を出し始める。

「なるほどな。そいつらは恐らく陽動だ。大方両手に松明を掲げて人数を多く見せているだけだろう。まずは後方と側面に警戒。ただ

し東側は谷だ。最小限でいい。後方からは上から矢を射られないよう開けた高台を警戒しろ。西側では…、そうだな、下手に突っ込まずに様子を見ておけ、そつそつ相手から突っ込んではこないはずだ

「お頭！正面からのはどうすんだ！？」

「焦るな、今言う。正面からの奴らは坂を登つてくるから突破力は薄い。こちらも西側同様構えてまっておくか、こちらから矢でも射つてしまえ。相手が数の差で突破しようとしてきたときは防衛用に積んでおいた木材を転がせ。勢いが落ちたり怪我を負つたところで上から襲つてやればいい」

「了解、お頭あ！まかせてくれや！」

お頭の支持を聞いた盗賊団の男は伝達のためにすぐにその場から飛びようにして去つて行つた。

「さて、今のうちに用意をしておくか……」

慌ただしくなつてきたアジトの中で一人口元を隠してニヤリと笑うリーダーのキース・オルグレンは、周りにいる他の盗賊団に指示を出ししつつ、元傭兵達へさりげなく視線を飛ばしながらアジトの中へと入つて行つた。

「さて、どうしたものか……」

賊討伐のために選抜されたベルナルドは今の状況からどう手を出そうかと悩んでいた。

当初、ベルナルドの立てた作戦として、夜中に松明を両手に抱えて集団で迫るイメージを相手に与えつつ、実際はごまかした人数分を敵の後方に送り込み、上下から挟撃させるといつものがあった。

しかしそれは盗賊団のリーダーによつてすぐに悟られてしまったのか、後方に回り込むつもりで動いていた騎士達は予定外のタイミングで接敵し、足場の悪い山の森の中での戦いを強いられていた。

騎士用の甲冑を着た騎士達は馴染みのない足場の悪い山の斜面で鎧の重さで微妙にバランスを崩したり、森の根っこに足を取られたりと精彩を欠いていたが、その反対に盗賊団は身軽な装備のため、練度で劣つても互角以上の戦いを繰り広げていた。

後方へ回るはずの部隊が接敵したことで挟撃という作戦は使えなくなり、必然的に正面を攻める予定だったベルナルドの部隊は人数的な面でも地理的な面でも突破力が足りなくなり、敵への散発的な攻撃を行いながらのにらみ合いの最中だ。

初めの方こそ、興奮した賊の方から数人が飛びだってきて武器を構えつつ突っ込んできたが、それ以来盗賊達の方からは特にこれといった攻撃らしいものはない。

盗賊側は砦があるのであくまでも守りの姿勢を崩さなかつた。

攻める側としては地理的にもきついので今の何倍かの人数がほしいところだが、砦の後方へと回した部隊は混戦状態のため使えず、西側の部隊はコチラと同じく膠着状態らしく動かせられないので、圧倒的に人数が不足していた。

予想以上の敵の動きを見て、一旦引いて作戦を練り直した方が得策か?と考えるベルナルドだつたが、首を振つてその考えを頭の中から追い払う。

「どうしたものか…。」

部隊を預かる身のベルナルドは戦場にて一人ごちた。

ベルナルドはその日国王へと謁見することが予定に入つていた。

手負いとはいへ、一人でオーガを討伐し訓練部隊を危機から救つたことや、その他にも多くの討伐などの手柄を立てたことで表彰されるとのことだつた。

騎士として、王から表彰されることはとても名誉なことなため、謁見するための最上級の騎士用の礼服へと着替えたベルナルド

は緊張の色を隠せないまま、自らをでした。

表彰式自体は、ベルナルドの声が途中で裏返ったことを除けばスムーズに進み、無事に終了することができた。

しかし、それからがベルナルドにとってまさに寝耳に水の事態だった。

「田代の政務でお疲れでしようから騎士殿の話でも聞いてみるのはいかがですか？ たまには息抜きも必要かと…」

国王のそばに控えていた宰相が国王にそう進言すると、国王もそれもそうだな、たまにはそれでもいいかと、宰相の言葉にうなずき、そのまま部屋を移しての歓談となつたのだ。

もちろん最初はベルナルドの活躍した時の話などを語つてみると言われて、不敬にならない程度に冗談を織り交ぜつつ、楽しい歓談となつていた。

しかし、ベルナルドの話が一区切りしたところを見計らつての宰相の発言が問題だった。

「そういうえば、最近王都から地方の村へと続く街道の近くで賊が出来てね。これがただの賊だと思ついたら存外に強く、少々手を焼いているのですよ。」

この宰相の言葉を聞いた瞬間に、ベルナルドはざわつ…とイヤな予感を覚えていた。

「ベルナルド殿。この賊討伐の件をアナタにまかせようと思います。活躍を聞く限り、今のベルナルド殿なら適任でしょう。もちろん、いきなりの任務なので特別に報酬も用意しておきましょう。どうですか？ 国王も彼が適任だとおもいませんか？」

「そうだな。クラックスもいこうとをいうではないか！ 成功の暁には特別に報酬を君の部隊分送ろう。期待しているぞ、ベルナルド！」

国王の言葉にベルナルドは片膝を立てて跪きながら了解の言葉を返したが、内心では冷や汗ものだった。

もしかしたら王都から精強な騎士を派遣するのがイヤなだけかもしれないが、もし本当に手こずるレベルの賊ならばベルナルドも当然手こずることは間違いないだろう。

それに活躍を語ってしまったばかりなので、下手な成果を上げて戻つてくることも厳しく、特別報酬も出すとのことなので失敗は許されない。

そして、なによりも一番の問題は国王の発した言葉だった。

国王 자체は期待しているぞ！ と軽にいつたつもりなのだろうが、もし成功しても、相討ち寸前のボロボロの状態で勝ちを拾つようなに情けない結果だったならば、期待を裏切ったということで国王から処分があるかもしねり。

流石にそこまで怒るような」とはないだらうが、万が一といふ」とも考へると、国王の気分次第で當倉送り、騎士剥奪、死刑まで罪の重さなど思ひがままだ。

もし、国王の気分を損ねずになんとか許してもらえたとしても、田舎者だつた自分を面白く思わず引きずり降ろそうとする勢力に国王の期待を裏切つたと持ち出されれば、反論は難しく状況は悪くなるだらう。

ベルナルドにとつてもはや負けることも、引き分けることも、ただ勝つことも出来ず、良い結果を出して任務を成功させるだけ、がこの難題における達成条件だつた。

、

「ベルナルド殿――」

敵のアジトを前にしてこれからどう攻めようかと考えていたベルナルドの耳に後方から声が飛び込んできた。

ベルナルドがその声に反応して後方へと首を回すと、そこには50人ほどの人数の小隊が整列している。

「やあ、ベルナルド殿。私はこの小隊を率いるルミナスです。実は

私も宰相閣下から命を受けましてね。本来ならば共同の任務にあたる者として顔合わせをしなければならなかつたのですが、命を受けたのがつい先日で準備の方にかかりきりで時間が取れなかつたのですよ。小々遅れましたがよろしくお願ひします

小隊の先頭からベルナルドの方へと甲冑をガチャつかせながら歩いてきたルミナスは、スラスラと言い切ると、よろしくと言いながら手を差し出してきた。

「ああ、こちらこそヨロシクお願ひします。貴殿が来て下さつたおかげで攻めるのがだいぶ楽になりそうですよ」

思わず増援に内心驚きつつ、ルミナスと握手を交わしたベルナルドは、これで攻め込むのに入手が増えると思つと気が楽になつた気がした。

「そうですか、それはよかつた。では、早速ですが戦況を聞かせていただきますか？」

「そうですね、では……」

ベルナルドは各場所の状況を地面に簡単な図を書きながら説明をしつゝ、ルミナスはその言葉を聞きながらふむふむと頷く。

「なるほど、戦況は膠着していますね。私の隊を散らしてもそうそ

う状況は変わりそうにないでし…。ふうむ、敵のアジトの門はこれから正面に一つだけですか…。となるとこの人数で攻めるにはこの正面から攻めるしかないようですね

「しかし、相手もそのことは分かつているのだろうな。まだまだ丸太を落としてこれるようになら中に丸太が転がっているし、弓もこちら側に向いている」

「そうですね。しかし、いつまでもこいつしているわけにもいかないでしょ。どこかで仕掛けなければただ消耗するだけです。……落ちてくる丸太に注意しつつ一気に攻め込むことにしましょう。数も勝っていますし、鎧も来ているから矢も下手なところに入らなければなんとかなるでしょ」

「やはり、それしかないか。それではなるべく散らばるようにして一斉に攻めるとしますか。固まって1つの丸太で大勢が立ち止まるよりはこの方がいいでしょ」

「そうですね、ではその作戦で5分後に」

ルミナスはそういうと自身の部隊のところへと戻り、自分が連れてきた部下達へと命令を出し始めた。

その様子をチラッとだけ見たベルナルドも、すぐに自身の部下達へとこれからすることへの命令を出し始めた。

5036文字です。とても久々の更新ですね。申し訳ありません。最後の投稿から3ヶ月ほどたちましたね。待つていて下さる方がまだいたのならば、お待たせいたしました。

私は実は今夏休みでゆっくりと時間がとれているのでこうして更新したわけなのですが、夏休みが終わってしまうとまた更新がかなりかかりそうです。

それと理想通りの物語が作れないことへの不満というか、自分への苛立ちというべきもののせいでなかなか机に向かうとこうともできません。

本当に不定期更新になってしまって申し訳ございません。

更新が止まっている現在でも一日に約400件のゴーークがあるのを見ると、少し涙が出そうになります。

これからも不定期になると思いますので、期待せずにお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4244m/>

廻る世界の錬金術師(元:面倒事が嫌いな錬金術師)

2011年7月28日22時41分発行